向二風塵一塵奏レ功。耀々籠レ月倚二墻東一　（黄庭堅）

●梨花淡白柳深青。柳絮飛時花滿レ城。惆悵東風一株雪。人生看得幾清明。（蘇軾）

●濃霧遮入碧聰紗。人靜秋幾影半斜。沙鷗不レ飛金鴨冷。淡雲籠レ月照二梨花一。（同）

〔なつ〕夏

日長。宵短。緑暗。紅稀。炎精。火德。長景。朱明。山果熟。水荷香。

夏ごろも。しげる梢。ながき日影。みじかき宵。日てりはたゝく。やくるあつさ。夏かりの下ぐさ。

●漸く夏にもなれば庭の草木いと閑くなりて、日はこと更暮れ難きに、その事となく物悲しくて、詮術なき時は、程も遠からねば、かの住ひける家に行きて見れど、ありし事どものこと、更に思ひ出づるまゝに、悲しくて出でゆくに、七郎が住むなる門邊を、夕ぐれの人間にまぎれて過ぎこしみれば、人ありとも見えず、打靜まりたる古家の門には蓬生ひ登り、軒には忍草打しげりて、卯月ばかりの若楓のみぞ折る人なければ、所えがほに廣ごりたり。（綾足）

●卯月は例の卯花ぐもりに、蚊屋の香もめづらしく、やぶ蚊も軒にもちつく比は、牡丹餅の花いとむまく、千鳥子ときくもたうとしや。粽はそのまゝに見るいとすゞしく、ときたるほど假の匂ひ又をかし。水無月の朔日は、氷餅とて、やごとなき上つかたにも、もてはやし給ふに、草葉もよらるゝ土用の比、水餅の錫鉢に浮び出でたるぞ、上戸のしらぬすゞしさなりけり。（也有）

●庭は石神川の流を引いて、水清く山高からず、茂樹青葱として瀑布あり、奇石多かり。夏を忘るゝ佳境なれども、心の憂は山水を、うち見て慰むべくもあらず。（馬琴）

●御手洗の、聲も涼しき夏陰や、紅の森の楷より、初音ふり行く時鳥、なほ過ぎがてに行きやらで、今一通り村雨の、雲もかげろふ夕づく日、夏なき水の河隈、汲まずとも影をうとからじ。（謠曲、加茂）

●かくて大原に御幸なつて、寂光院の有樣を見わたせば、露むすぶ庭の夏草しげりあひて、青柳絲をみだしつゝ、池の浮草波にゆられて、錦をさらすかと疑はる。岸の山吹吹き亂れ、八重たつ雲の絶間より、山時鳥の一聲も、君の御幸を待ち顔なり。（謠曲、大原行幸）

●都あたりは敵近しと、小鹽山の山莊に、忍ぶ月日も春過ぎて、夏來にけらし白妙の、卯の花早き山蔭や、またぬに名乘るほとゝぎす、淋しさ凌ぐたよりなり。（浮瑠璃、文武五人男）

●夏はみないづこともなく足引の山べも野べもしげりあひつゝ。（誠人不知）

●なぎのみに風のそゝふく夏しもぞ秋ならなくに哀なりける。（好忠）

●逢ふと見し夢にならひて夏の日のくれがたきをもなげきつる哉。（安國）

●野も山もしげりあひぬる夏なれど人のつらさはことのはもなし。（拾遺）

●夏の日はいとゞ水なき大空にあわだつ雲の嶺ぞあやしき。（長流）

●なつの日にあつきさかりは吹く風もうすき袂をなほへだてけり。（蘆菴）

●日をさふる陰しなければおのづから野べのゆきゝぞ夏はまれなる。（同）

●すゞしさもおくある夏のすみかとはたれみいれずや杉たつる門。（春澤）

●花にいとひもみぢにうとむ風なしもおもふぞ夏の心なりける。（たみ子）

●夏は亦冬がましぢやといはれ燒。（鬼貫）

●ひや水に煎餅二枚樓良が夏。（樓良）

●魚干して病家にゆるす夏日和。（杉風）

●蘿らばや八鹽の里に夏三月。（椎隣）

●夏空や花の名殘の朝蟬。（許六）

●日蹟や夏は坊主になりたさと。（湛志）

●早玉の中から夏の風を取り。（川柳）

●夏ざしき三幅對の軸のおと。（同）

●春三夏六にむすめは難を出し。（同）

●月夜より闇に昼ある宇治の夏。（同）

●虫へんに文ともいはぬ木曾の夏。（同）

●おたがひに御無沙汰をする諏訪の夏。（同）

●天に一つ地にひとつ江戸のなつ。（同）

●夏は時鳥の、卯の花かをる朝ぼらけ、花橘の香をとめて、菖蒲は軒のつま定め、露が誘うて〳〵露の、風に亂るゝ風車。（俗謠）

●夏は垣根の、ほんほのゝく、あやなしや卯の花、しら〳〵あけても、いかに訪ひこぬ時鳥、かたひ夕だつ、あとすゞしき小村雨、こずゑにひぐらし蟬のね、いづれ夕べはたゞならぬ。（同）

●戯くものは夏もお小袖。（俚諺）

●夏畏に火燵俳諧。（同）

●夏は陽をゆけ冬は陰をゆけ。（同）

●故土重磐瓜芋區。便須二閉レ戸學二潛夫一。毎飲蔣詡開二三徑一。不レ淡鴟夷泛二五湖一。一院楓花纔釀レ蜜。半庭黄草雀將レ離。日長只作二消閒計一。細翼神仙九局圖。（星巖）

●別院深々夏漏清。石榴開遍透レ簾明。樹陰滿地日亭午。夢覺流鶯時一聲。（蘇舜欽）

●暴雨初過爽氣清。玉波蕩漾畫橋平。穿レ簾小燕雙雙好。泛レ水閒鷗箇箇輕。（寅宗）

●緩々碧草與階齊。濃綠陰中杜宇啼。花院豐長應正好。帶レ聲飛過粉牆西。（善住）

●義和驂二丹衢一。朱明赫二其猛一。飄風拂二長霄一。陽精一何罔。閑宇靜無レ娛。端坐愁二日永一。（郭璞）

〔なつぐさ〕夏草

離々。青々。萋々。茂草。碧草。迷レ路。遍レ地。青菌展。緑滯長。草のまがき。にはのかよひぢ。えげるまがき。軒の下草。えげるまゝなる。茂き夏野。路も見えず。草のはやま。

●庭の面も見えぬばかりに。殊更に草を茂らせて、人のあやしみとがめたるに、まずらなの心は、天の下を拂はんとこそ思へと、かしこげに誇りて打いひたるは、憎き唐人の、さかしら心にぞありける。茂りたるはいと物むつかしければ、時々拂ふこそよけれ。されど五月雨の頃は、えしも拂ひあへずかし。はれまくに庭に出でゝ、ふぐしだつものして、短かきをも掘りてこに入れて、童して捨てさせなどするを、果には物うがりて、あくびうちして、やうなき事し給ふ物かな。あすあさての程には、又もとのごと茂りぬべしといひて、むつかしげに思ひたるけしきなるも、いとほしくて、拂ひさせば、げに一日二日の程に亦いみじうしげりて、まだきに秋の野のやうになんなりぬる。よし今は拂はで、此草村を秋まつ虫のすみかにせんと思へば、童がいさめも嬉しうなん。（高尚）

●世をへだてたるすみかは、庭の草だにかきはらはぬを、夏きてはいとゞしげりそひて、野べもひとつにふみわけがたくぞ成りにたる。いづら。三のみちはとたどりくる人もなければ、つくづくとながめたるに、なでしこさゆりなどのうゑもせぬが、こゝかしこ咲きまじりたるなかしきを、雨うちふりてこぼるゝ露のいとしげきは、見るめもすゞしく、いぶせき心もなぐさみぬべし。やう〳〵夏ふかくなりゆくまゝに、ゆふつかたなど、ほのかにむしの聲のきこゆるは、秋來たらんのち、いかばかりならんとおもはるゝに、はらはぬ草もかひありてなん。（廣足）

●恋よりもはかなき世の中を歎きわびつゝ、明しくらす程に、はかなくて卯月十餘日にもなりぬれば、木の下暗かりもてゆく。はしの方を泳むれば、築土の上の草の青やかなるも、人は殊に目とめぬを、哀にながむる程に、近き透垣のもとに人のけはひすれば、誰かと思ふほどに、さし出でたるを見れば、故宮に侍ひし小舎人童なりけり。（和泉式部）

●人のかごとゝ御用ゐありて、失ひ給ひし中將姫の、何しに此世にましますべき。如何に御尋ねありとても、今は御身も夏草の、茂みに交る姫百合の、知られぬ御身なり。何をか尋ね給ふらん。（謠曲、雲雀山）

●遠山にかゝる白雲は、散りにし花のかたみかや、夏草の、しげみが原のそことなく、分け入り給ふ道の末、こゝとてや、げに寂光院の靜なる、光の陰を惜しめたゞ。（謠曲、大原行幸）

●降る雨に、里の中路波越えて、通ひ行く、草間の小舟露繁み、夏草もおなじ色なる池水に、分きて菖蒲を刈り持ちて、いざや家路に歸らん。（謠曲、菖蒲）

●我故に殺すか、女房故に死なしやんすか。いとしぞや、いとしいと、墓させぬなげき乾ぬ思ひ、思ひ亂るゝ夏草の、しほれ伏してぞ泣きゐたる。（淨瑠璃、今宮心中）

●父仁あれば子に孝あり、君子の軒に風薰る、夏草繁み民の戸や、賑ふ國とぞ聞えける。（淨瑠璃、忠臣青砥刀）

●夏草はしげりにけりなみかりの〻野守の鏡かげもみぬまで。（久盛）

●つれ〴〵と詠めせしまに夏草の哀やこと（忠岑）

●夏草は結ぶばかりになりにけり野がひし駒やあくがれぬらん。（重之）

●ふみわけてかれる斗になりにけり物思ふ人の宿の夏ぐさ。（忠專）

●分けわびて今もひとめはかれぬべししげる夏野の草のふかきに。（實雄）

●夏草もふみわけがたくなりにけり雪にまよひしさの〻ほそみち。（契沖）

●たをやめの若菜すみれにふみなれし道も殘さずしげる夏草。（枝直）

●朝な〳〵露おもしろき夏草はいぶせしとてもなにかはらはん。（千蔭）

●わけてよも人はとはじな夏ぐさに我さへたどる庭の通ひぢ。（春滿）

●こゝかしこきのふかりつる跡ばかり葉ずゑみぢかき野べの夏草。（宣長）

●夏草や兵共が夢のあと。（芭蕉）

●石の香や夏草赤く露暑し。（同　）

●夏草や橋蘆見えて川通り。（其角）

●夏草や馬に嗅がれて立つ雲雀。（素雪）

●夏草に馴染初たる大野かな。（鬼貫）

●夏草や所々にはなれ駒。（蘭更）

●夏草や物失へる小馳。（嶋山）

●夏草に狩入る犬の見えぬなり。（召波）

●夏草や近江は國にも青い國。（道彦）

〇夏草や最一度刈らば虫の聲。（也有）

〇卯の花もちりにし庭の夏草を雪の下とは誰名づけけん。（多町）

●とりとめて人の通はぬ道のべは只わけもなく茂る夏草。（廣住）

●いつの間に野中はあるきにくい程夏やせもせず肥える草々。（卯波遊）

●しげるよりすべてもえぎにみゆるなり草の軒ばをかやと申せば。（儘也）

●いく里ぞと足をばかりにふみ込めば三里に余る野邊の夏草。（時成）

●夏草は深くもしげりあふ坂の山路はあしをふむせきもなし。（織人）

●のぞくなと野守がしかるかきねよりのびあがりたる夏の草むら。（高吉）

●耳塚を拝るやうな夏の草。（川柳）

●きのふまで眺めし花もいつしかに、けふは我身と夏草の、日にぞしをるゝ憂き思ひ。（俗謠）

●庭の夏草しげらばしげれ、道あればとてとふ人もなし。（同　）

●石樂茅屋在三溪畔一。流水濺濺度三兩陂一。晴日煙風生二參氣一。綠陰幽草勝二花時一。（王安石）

●纖纖碧草與階齊。濃綠陰中杜宇啼。花院晝長漁正好。帶レ聲飛過粉牆西。（善住）

●雨過橫塘水滿レ堤。乳山高下路東西。一番桃李花開後。惟有二青々草色齊一。（曾鞏）

●雨餘庭草綠將レ迷。螢也唯肝何處棲。幽咽一蟬驚出レ樹。殘聲曳過夕陽西。（星巖）

●漾々池塘碧染レ衣。陰陰草樹綠成レ圍。（高菊磵）

●砌草庭柯綠漸新。（張船山）

〔なつのつき〕夏月

皎々。素月。清光。冷生。露下。夏しらぬ。短夜の月。明けやすきかげ。涼しくいづる。はしゐにあくる。入るをしらぬ。光すゞしき。かたふかであくる。中空の雲間にあくる。風こもる木の間の月。

●卯月ばかりに、花ちる里を思ひいで聞え給ひて、忍びて對の上に御いとまきこえていで給ふ。日ごろふりつるなごりの雨、すこしそゝぎて、なかしき程に、月さし出でたり。昔の御ありき思しいでられて、えんなるほどの夕月夜に、道の程、よろづの事おぼし出でおはするに、かたもなく荒れたる家の、木立しげく、杜のやうなるなすぎ給ふ。大きなる松に、藤のさきかゝりて、月影になびきたる、風につきてさと匂ふがなつかしく、そこはかとなき薫なり。橘にはかはりて、なかしければ、さしいで給へるに、柳もいたうしだりて、築地もさはらねば、亂れふしたり。（紫式部）

●かくて宵すぐる程、木高き松にほのめく影は、月出づるならんとて、東の妻戸おし開きて待つ程、とばかりありていと花やかにさし出でたるは、又似るものなく、涼しくおもしろきには、とうろの光も、今ぞむとくにけたれにたる。風さへいと冷かに打ふきたるは、ふる川のべの杉の下陰ならねども、秋やかへりてなど打誦しの〻しる。大方は秋をこそめでたき時にいにしへよりいひおきたれど、此頃の空にかくて待ち出でたる程よ、たとしへなく心もすみて、物むつかしさも、こよなくまぎる〻わざにな

ん。　（宣長）

●月は秋をよしとするは空のすみて光まされる故にて、げに其かたはたぐひなけれど、やゝ夜寒にて、更くるまではしぬに見んこと、かく年老いてはたへがたき折もあるを、夏の月ばかりいみじきはなし。待ちこひわたる風も、其桂の陰ややどりならん。出づればかならず吹き来て、かげのえならぬと、涼しさと、あひにあひぬれば、れいの夕まどひも忘れてぞ。　（富尚）

●庭の面はまだかわかぬに夕立の空さりげなくすめる月かな。　（頼政）

●天の川をあくるもしらず詠めつゝみれどもあかぬ夏の夜の月。　（好忠）

㊀さやかにもみでや明さんこがくれて過ぎがてにする夏のよの月。　（公任）

㊁夏のよはやどれる月のけしきまで同じ清水も涼しかりけり。　（實家）

㊂夕立のまだはれやらぬ雲まより同じ空とし見えぬ月哉。　（俊忠）

●かへるまでしぐれし蟬は聲やみて霜ふりかはる夏のよの月。　（長流）

㊃大空をかすみもきりもへだてねば夏こそ月はみるべかりけれ。　（千蔭）

㊄あつさをもわするゝかげのあやにくにたえて短き夏のよの月。　（廣庵）

●あつさをもわするゝつきとなりにけり軒にまちとる夏のよの月。　（春海）

●まだよひとなにおもひけん夏の夜の昔の月はとくいでにけり。　（枝直）

㊅蟬蛍やはかなき夢を夏の月。　（芭蕉）

㊆市中は物の匂ひや夏の月。　（凡兆）

㊇月の頃は庭に行く夏の川邊哉。　（杉風）

㊈こゝあれば雞あり里は夏の月。　（支考）

㊉殿守のそこらを行くや夏の月。　（蓼村）

㊋片道は乾きて白し夏の月。　（太祇）

㊌神鳴の上りし松や夏の月。　（凡董）

㊍佐保姫の御子も出給へ夏の月。　（一茶）

㊎石川や水を尋ねて夏の月。　（蓼太）

㊏夏の月川の向ひの人は誰。　（樗良）

㊐月涼し蚊やりぞ夢のしるしなる。　（也有）

㊑蚊帳を出て又障子あり夏の月。　（丈草）

㊒てりわれて空やちひさくなりにけんめぐるにあまる夏の夜の月。　（定規）

㊓もちにつくむしあつき日は忘れけりよもふけて見る月の涼しさ。　（桃波）

㊔まだ秋に手のとゞかねど夏川のせ中に月のかげの涼しさ。　（時成）

●夏の夜のあくまでみんと山のはに月のいらざるせはもやくなり。　（起総）

●梓弓矢東みじかき夏の夜の月はいくさのやまにとゞかず。　（繁昌）

●枝まめは今花おちのさやけくもみになるほどはさゝぬ月かげ。　（樗菁）

●魚もまたなどり出でなん涼しさや横に寢てみる月の姿ほ。　（香保留）

●涼しさの餘すぐせし酒よりも翌へもちこす夏の夜の月。　（仲住）

●川童さん仰向いてみん夏の月さらに水けはもたぬすゞしさ。　（眞猿）

●さし出る間もなく西の山のはにはさみ將棊のみじか夜の月。　（安成）

●さすかげに文よまばやと取り出せばそばから明くる月のせはしさ。　（古渡）

●諏訪の海夏わたるは月ばかり。　（川柳）

●腰かけへ櫛のふのすく夏の月。　（同）

●夏の月陰をあるくも豊の癖。　（同）

●夏の月月ざゝぬ御代の高嶋。　（同）

●物干が出來て寢られぬ夏の月。　（同）

●あふことを待乳の山の夏の月、すむほどもなきみじか夜に、しづみはてにし隅田川。　（俗謡）

●夏の夜の、あくる間はやみかりそめに、見る程もなき月かげを、惜むとすれどいれがての、枕にかこつほどをさへ、たえて忍べと音づれぬ。　（同）

●此夜炎蒸不可當。開門高樹月昏々。天河只在三南樓上。不借人間一滴涼。　（俗宗湖）

●明月天中挂。席流。江空五月似清秋。忽聞鐵笛風前起。吹動隔山萬里愁。　（茅坤）

「なつのはじめ」初夏

春歸。暑至。薄暑。孟夏。風已南。春色去。日初長。

夏衣たつ。花はあとなき。わかばの木々。衣をかふる。卯月のすゞめ。

●檜にはつた茂り、蔦には葉片敷きて、心の儘に荒れたる籬は、しげき野邊よりも猶亂る。氷解けぬる谷川の、筧の水も絶々なり。波に漂ふ池の鄙、錦を曝すかと疑はれ、露を含める岸の欵冬、玉を貫くかと誤たる。青葉まじりの遅櫻、椿の花も散り殘り、若紫の藤の花、墻根の松に懸れるも、春の名殘を惜めつゝと、君の御幸をまち貌なり。八東立つ雲の絶間より、初音ゆかしき山郭公をば、此里人のみや、馴れて聞くらんと、思召し知らせ給ひけり。岸の青柳こ深くして、池水みどりの淚に立ちけしば、法皇斯くぞ思召しつゝけさせ給ひける。

池水に岸の青柳散りしきて
淚の花こそさかりなりけれ。　（源平盛衰記）

①雁氷歸を越え侍る。般若石といへる嶮嵒なすぎてより、さのみけはしからねば、歩行にて行く。山谷の桃櫻は、夏としもなく、木のめなど打けぶるやうなるもあり。けふお前に出でたるに、いかにや、山はいまだ衣かふべき時節ともなし。花なども春のこゝちするに、例のくちすさぶ事も有るべし。此心おもひよれるやとの給はするに、いざ、道のくるしう候ひて、むげに申し出づる事も候はずと御いらへ申すに、さりともこゝには、あるべき物をとて笑はせ給ふ。　（也有）

●きる人さへほといひけんやうに、立ちかへしころものめづらしきも、ふりぬる身にはかひなきものから、いとかろらかにすゞしげなるは、ほとゝぎすたづねみん山ぶみにも、つきづきしかるべくおぼえてをかしきを、雨打そゝぎなどしたる日は、なほいと袖濡げなるも又をかし。青やかにしげりたる庭の檜に、藤のさきかゝりたるが、風につきてさとかほれるは、過ぎし春のなごりおぼるゆに、はしのもとなるさうびの、やう〳〵花ひらけゆくは、もたひのほとりの竹葉はとまづうちずせられて、盃とり出づるもいとをかし。　（廣足）

●祭の頃はいみじうをかしき。木々の木のはまだしげうはなくて、若やかに青みたるに、霞も霧も隔てぬ空の景色の、何となくそゞろにをかしきに、すこし曇りたる夕つかた、よるなど、しのびたる杜鵑の、遠うそら耳かと、おぼゆるまで、たど〳〵しきをきゝつけたらん、何心地かはせん。　（清少納言）

②柳櫻をこきまぜて、錦をさらす縦緯の、霞の衣の匂やかに、立ち舞ふ袖も梅が香の、花やかなりし春過ぎて、夏もはや北祭、今日又花の都人、行きかふ袖の色々に、貴賤群集の粧ひも、ひろがへす秋なりけり。　（謡曲、加茂物狂）

●春過ぎ夏もはや、北祭のなりなれば、青葉にまじる夏木立、春の名殘を惜しまるゝ、遠山にかゝる白雲は、散りにし花のかたみかや。（謠曲、大原行幸）

●花鳥も惜ゆさかひてゐば玉のよのまにけふの夏はきにけり。（貫之）

●けふよりはたつ夏衣うすくともあつしとのみや思ひわたらん。（增基）

●なしめどもとまらぬ春もあるものをいはねにきたる夏衣かな。（そせい）

●我宿の梢の夏になるときはいこまの山ぞ見えずなりける。（能因）

●花さかぬま木のとやまに春くれてかはらぬ色に夏はきにけり。（枝直）

●花のいろまだそめざりし白妙のはじめにかへすなつ衣哉。（長流）

●暮れていにし春もしばしは藤波のゝらぬほどこそなぐさまれけれ。（千蔭）

●白妙のたもとふりはへ宮人のあふひかざらんつきは來にけり。（春郷）

●はる霞あけしひとよをへだてにてはれゆく空に夏は來にけり。（宣長）

●みしはるのなごりわすゝ夏衣花のかをりは名のみなりけり。（春海）

●しばらくは瀧にこもるや夏の始。（芭蕉）

●夏空や花の名殘の朝蛍。（許六）

●朝露や大根の根も夏になる。（乙良）

●夏來ぬと人の驚く袷かな。（蓼太）

●初夏や木屋が掃除の行わたり。（道彦）

●夏淺しあさ〳〵代る香のもの。（青牛）

●人心四月わたらし蔵の垣。（溝角）

●夏たつや衣桁にかはる風の色。（也有）

●淀舟や夏の今來る山かづら。（東貫）

●種芋の子をえる中に春過ぎて夏のかしらと今朝はなりにき。（唐丸）

●春ははやうしろをむきしこま犬のしさいも夏に立直るけさ。（三笑）

●つれ〴〵のかなへのあしの三伏や夏のかしらにさし入れてけり。（紐長）

●散り殘るしげみが中に花のかのうすぎとなれる夏の衣手。（藤村松）

●千金の春をのこらず遣ひすて袷ひとつとけふはなりけり。（無錢）

●見わたせばみどりの若葉しげりつゝ、夏きにけらし白妙の、卯の花がさや、むすぶ手すゞし潺水の、風情ありけるさゞれ石、いはほとなりて、苔のむすまでいきのまつ、千枝にさかえて長生殿の、月日もおそくめぐり來て、くめどもつきぬ泉川、波さへたゝぬ御代ぞめでたき。（俗謠）

●淡墨輕颸入二夏初一。一窓新綠鳥相呼。出門易倦常歸臥。著句難工但自娛。花徑蝶間無二墮葉一。酒樓人散有二空壺一。閩川茶籠猶霑及。肺渴朝來頓欲蘇。（陸游）

●筍生遮二狹徑一。溪漲入二疎籬一。漸及二分秧候一。還當二蠶繭時一。雨昏雞共宿。米盡鼠同飢。村巷無二來客一。清齋只自知。（同）

●庭院深沈都不嘩。日長香篆結雪斜。欲呼孤蛇圍棊局。慵聞雙橋賣酒家。一扇微風蕭二午枕一。半簾淺翠透二餘花一。濃鬟眠足無二情思一。閒聽山童碾二綠芽一。（星巖）

●一庭嫩綠雨斜斜。閑客經二春纏更加。迫蝶隨二鶯纔昨日一。小窓欲二枕聽二鳴蛙一。（倉山）

●啼鳥聲中午夢回。篆香重撥已成灰。東風似恨二春歸去一。吹二送棠花一入戸來。（謝五娘）

●妖紫嬌紅昨夢空。誰添二淺綠一抹二林叢一。夢來連日成二癡絮一。斷二送殘花一是此風。（茶山）

●綠樹交陰沙路斜。孤吟緩策岸烏紗。風情略與二懷相似一。一架薔薇落後花。（長齋）

●樂頭竹葉經二春熟一。階底薔薇入二夏開一。（白居易）

●苔生二石面一輕衣想。荷出二池心一小蓋疎。（安興）

〔なつのやま〕夏山

青々。蒼々。綠樹。青巒。碧岫。翠黛。興レ雨。吐レ雲。

青葉の山。みどりのは山。茂るこかげ。雨にみどりさふ。つま木のみちもしげりあふ。

●五月大岡を立ちて遙に行けば、内の白河外の白河といふ所をすぎて、鈴鹿山にかゝる。山よりは伊勢國にうつりぬ。重山雲さがし。越ゆれば千丈の屏風彌しげく群樹煙ながく、裳ぐればまた萬尋の雌嶺ます〳〵あつし。峰には松風かた〳〵に調べて、稽康が琴しきりにまし、林には葉花稀にのこりて、蜀人の錦は纔にちりぼふ。これのみならず、山姫の夏の衣は梢のみどりにそめかけ、樹神の音の響は、谷の鳥にこたふ。（光行）

●さゞ波の水馴棹、漕がれ行く程に、遠かりし向ひの浦波の、粟津の森は近くなりて、跡は遠ささゞ波の、昔ながらの山櫻は青葉にて、面影も夏山のうつり行くや青海の、柴舟のしば〳〵も、暇ぞ惜しきさゞ波の、寄せよ〳〵磯ぎはの、粟津に早く着きにけり。（謠曲、兼平）

●花の名の、白玉椿八千世經て、綠にかへる空なれや、春の後瀨の山續く、青葉の木陰分け過ぎて、雲路の末の程もなく、都に近き丹波路や、氷室山にも着きにけり。（謠曲、氷室）

●殊にげに是はためしも夏山の、下行く水の樂となる、奇瑞を誰か見聞ひし。（謠曲、養老）

●衣手も涼しくなりぬみ山木の末こそ風の夏の夕かげ。（頼資）

●もみぢせば赤くなりなんをぐら山秋まつほどの名にこそ有りけれ。（拾遺）

●夏山の梢の葉そよぐ夕ぐれはことしも秋の心地こそすれ。（頼綱）

●行末はまだ遠けれど夏山の木の下陰はたちうかりけり。（躬恒）

●さみだれはみなふちと見しほどもなく細川山の口ざかりの空。（長流）

●見るまゝにかはりもゆくか夏山に雲のなしたる嶺の姿は。（枝直）

●夏山のしげみは風ももらさねど若葉はそよぐおとぞすゞしき。（同）

●なつ山やきのふの花のゆききえてわか葉ににほふ朝日かげ哉。（春海）

●松杉の脂流れたり夏の山。（闌更）

●夏山やどこを目當に呼子鳥。（一茶）

●夏の山靜に鳥の鳴音哉。（召波）

●夏山に鶯の亜ぶや田うゑ笠。（嵐雪）

●夏山や紫つゝじ遲ざくら。（道彦）

●夏山や通ひなれたる若狹人。（蕪村）

●夏山に足駄を拜む首途かな。（芭蕉）

●細脛の休め所や夏の山。（西堂）

●嘘のゐと靜なり夏の山。（野水）

●傘にあまりてみゆる夏の山。（成美）

●花ゆゑにとはれて跡のさびしさは尙しんとなる夏山の庵。（陸起）

●紅葉するまでに松にもまじはりのあつくなりたる夏の山の端。（泊瀨雄）

●阮籍がよろこぶ眼是なれや見るによねんも夏山の色。（行貞）

●時しらぬとはいはれまじ雪げして山の姿も夏やせの不二。（胡蝶）

●杣人のゆきゝも絶えてこだまさへかよはぬばかりしげる夏山。（清風）

●春はむかし昔はしらず新染のなりひらびしとしげる夏山。（田住）

●しげり合ふ木々のはかまや天てらすひだにはきしとみえぬ夏山。（好秋）

●夕月のさしのぞきても夏山に通ふれど風の音づれはなし。（戯事）

●若葉する木の下かげはまくらぞと杣もまどろむかひの夢山。（綾人）

●文通の中もはからぬ夏木立はゞかりながら申しいろやま。（森氏）

●つゝじ山吹いろ〳〵の、花もいつしか夏山の、此葉をわけて初音めづらし時鳥。（俗謡）

●一林疎竹半池萍。高閣涼多酒易醒。隔浦夕陽孤島外。白雲飛斷亂山青。（謝鯈）

〔なつのよ〕夏夜

炎宵。蚊雷。月白。天涼。短夜。天河。萬籟寂。微風生。みじか夜。はかなくあくる。あけやすき。程なくあくる。

●村雲がちなる空を見るにも、雲井の空といひけん人もことわりにみえて、かきくらさるゝ心地、軒の菖蒲の雫にことならず。山ほとゝぎすも、諸ともに音をうちかたらひて、はかなく明くる夏の夜な〳〵、過もていそのかみ、ふりにし昔の事を思ひ出でられて、泪とゞまらず。（謡岐典侍）

●其夜飯塚に宿る。温泉あれば湯に入りて宿をかるに、土座に莚を敷きてあやしき貧家なり。灯もなければ、ゐろりの火かげに寢所をまうけて臥す。夜に入りて雷鳴雨しきりに降りて臥る上よりもり、蚤蚊にさゝれて眠らず。持病さへおこりて消え入る許になん。短夜の空もやう〳〵あくれば又、旅だちぬ。猶夜のなごり心すゝまず。馬をかりて桑折の驛に出る。（芭蕉）

●明方近き程には、露おきそひて風いとひやゝかに、ふすま懇しう思ひしかど、すべきやうもなくて、笥引きかづきて臥しぬれど、目もあはず。とかうする間に、夏の夜の短き、明けやすきならひなれば、山かづら引き渡し、島の聲花やかなれば、草鞋引きむすびて食もせず、舟よりぞ立ちぬ。（南谿）

●實に有り難き神の代の、昔語りも今の世に、殘る燈蛍りなき、御影の松の木陰かな。短夜の、空も更け行く浦風の、音をしづめて待ち給へ。必ず御燈顯はれん。（謡曲、九世戸）

●花橘の香をとめて、昔の人に尋ぬれば、親疎幾何か去りぬ。かゝる思ひの深見草、妹と我ぬる床夏の、花一時の夏の夜と、知らでや人の迷ふらん。（謡曲、更科）

●元私は中國生れ、樣子有つて上方住居、過ぎし卯月の中空に、都の巽宇治の船、こがれよるべの螢狩に、思ひ染めたる墨人と、語らふ間さへ夏の夜の、短かい契のほいない別れ、所尋ぬる便さへ、思ふに任せぬ國の迎ひ、親々に誘はれ、難波の浦を船出して、身を盡したる憂き思ひ。（淨瑠璃、朝顔話）

●夏の夜はまだよひながらあけぬるを雲のいづこに月宿るらん。（深養父）

●夏の夜のふすかとすれば子規なく一聲にあくるしのゝめ。（貫之）

●夏の夜は浦島が子の箱なれやはかなくあけてくやしかるらん。（中務）

●夏虫の白糸のてぐりまだしきによるは短くなりにける哉。（好忠）

●夏の夜はしのゝ小笹のふしちかみそらや程なくあくるなりけり。（式子内親王）

●すゞしさをひとへにたのむ夏衣うすきをいとふころもありしに。（春滿）

●なつの夜はむすぶあやめの枕だにね長き名なばかるかひもなし。（春海）

●なつの夜はゆふやみもよしやり水のゆくかた見ゆるかゞり火のかげ。（千陰）

●いはと山さしも程なくあくるまをいつとしりてかいさよひの月（長流）

●槇の戸をたゝく水雞のいつはりも誠になりてあくるみじかよ。（契沖）

●夏の夜は山鳥の首に明にけり。（宵水）

●短夜や驛路の鈴の耳につく。（芭蕉）

●夢覚のへらぬに夏の夜明かな。（許六）

●夏の夜は寢ぬに疝氣の起りけり。（其角）

●人音の止む時夏の夜明哉。（蕉太）

●夏の夜を毎日松の朝日哉。（成美）

●夏の夜はせはしき秋の旅寢哉。（杉風）

●夏の夜は鼠が飛んでも明にけり。（椿堂）

●餅首遍其後夏の夜明たり。（蕉太）

●夏の夜の月にうかれて何處までも行かんと思ふ程に涼しき。（三笑）

●ひる寢にはいとふものからのみ蚊より夜ろこそものゝはえはあれかし。（葉々廣）

●十三里乘るふねさへも七里來て明六つとなる夏の淀川。（有人）

●大和人よしねふしども寢かへりをうたて其儘明す夏の夜。（的丸）

●たらちねはかやに入りても世話斗やくや紙屋のみじか夜の頃。（嘉和種）

●このやうにせはしきものか夏のよはねよとのかねにおきよとのかね。（猶道）

●蚊にさゝれのみにさゝれてねぶたさをあすへもちこす盃の影。（讀人不知）

●花の頃子心にまでいとひてし風を親ぞとすゞむ夏の夜。（守明）

●だきねする子は寢つきても盃と蚊のちなる吸ひたがる夏の短夜（穗方）

●夏の夜は野羽織よりも短くて月半天に殘るあけぼの。（影丸）

●あつい事隣にもまだ噺し聲。（川柳）

●夏の夜に打つは足袋やの砧なり。（同）

●あゝわれながら、君をおもへば恨かつわびつ、浦島が子の箱なれや、あけて悔しき、あけてくやしき夏の短夜。（俗謡）

●逢ふときは秋の夜もはや明けやすや、獨ぬる夜の、長の夏の夜。（同）

●永日不可暮。炎蒸奪我腸。安得萬里風。飄飄吹我裳。吳天出華月。茂林延疎光。仲夏苦夜短。開軒納微涼。盡明見纖毫。羽蟲亦飛揚。物情無巨細。自適固其常。念彼荷戈士。窮年守邊疆。何由一洗濯。執熱互相忘。竟夕擊刁斗。喧聲連萬方。寄紫雖被體。不如早還鄉。北城悲笳發。鵲鵲號且翔。況復煩促倦。激烈思時康。（杜甫）

●籐斧植祖炎。玆宵在三伏。馮軒佇涼氣。中庭倦煩燠。寂寞對空窓。清疎隔夜竹。蟲音亂階草。螢光繞庭木。簾月度斜暉。風花起餘馥。一傷年志罷。長嗟逝波速。（蕭子範）

●此夜炎蒸不可當。開門高樹月荒々。天河只在南樓上。不借人間一滴涼。（宗鈔）

●夜熱依然午熱同。開門小立月明中。竹深樹密蟲鳴處。時有微涼不是風。（楊萬里）

●河漢微明星乍稀。碧蓮香濕露人衣。夜涼如水琉璃滑。自起開窓放月歸。（方岳）

●風生竹夜窓間臥。月照松時客上行。（白居易）

●空夜窓閑蛩度後。深更軒白月明初。（長谷雄）

〔なふりやう〕納涼

微風。樹下。柳陰。月暗。星稀。

輕衣。垂簾。清流。

夕すゞみ。門すゞみ。はしゐ。

下すゞみ。清水の下。木の下かげ。夏をよそなる。かよふ秋風。

木かげすゞしき。扇をもわする。夏の外ゆく水。

●いと暑き日、東の釣殿に出で給ひて涼み給ふ。中將の君もさふらひ給ふ。親しき殿上人あまたさぶらひて、西川より奉れる年魚、近き川のいしふしやうの物、御前にて調じてまゐらす。例の大殿のきんだち、中將の御あたり草ねて參り給へり。さうざうしくねぶたかりつるを、よく物し給へるかなとて、大御酒まゐり、ひみづめして、水飯などとりく〳〵にさうどきつゝくふ、風はいとよく吹けども、日のどかに暑なき空の西日になるほど、蟬の聲などもいと苦しげに聞ゆれば、水の上むとくなる今日の暑かはしさかな。無礙の罪はゆるされなんやとてよりふし給へり。いとかゝる頃は、あそびなどもすさまじく、さすがにくらしがたきこそくるしけれ。みやづかへする若き人々、たへがたからんな。帶紐もとかぬほどよ。こゝにてだに打みだれ、この頃世にあらん事の少しめづらしく、ねぶたさ覺めぬべからんこと、語りてきかせ給へ。何となく翁びにたる心地して、世間の事もおぼつかなしやなどのたまへど、珍しき事とて、うちいで聞えん物がたりも覺えねば、かしこまりたるやうにて、皆ぞ涼しき高欄に、背なかおしつゝさぶらひたまふ。（紫式部）

●いみじう暑き頃、夕すゞみといふほど、物のさまなどおぼめかしきに、男車のさきも、あり所あらず。たゞの人も、あり所あらず。たゞの人も乘りて、走らせゆくこそいと涼しげなれ。まして、琵琶ひきなら、笛の音などきこゆるは、過ていぬるも目をしく、さやうなる程に、牛の歩の香の、あやしうかぎ知らぬまなれど、打かゞれたるがをかしきこそ、物狂ほしけれ。（清少納言）

●水無月のいとあつき日は、書見るも物うく、あそびどもすさまじくて、やくとは扇うちつかひて、早日もくれなんと思ひつゝなるに、やうく夕ぐれになれば、湯あみし、汗にぬれぬ衣さかへなどして、宿を立ち出でゝ川の堤をゆく。灯におひたるまこもの、黄き色の涼しげなるに、白き露さへ置きたるいはん方なし。ちひさき舟にわらはべ一人二人のりて、夕すゞみとて、そゞめきつゝ棹さすも、淺き瀬なれば、危ぶげもなくをかしと見ぬるほどに、くれはてぬ。（高尚）

●時は三伏の夏の日の、熱田の宮路浦傳ひ、近く鳴海の磯の波、松風の聲寢覺の里、聞くにも心涼しく、老の身も夏や忘るらん。（謠曲、源太夫）

●賀茂の山並御手洗の影、移りうつろふ緑の袖を、水に浸して涼みとる。（謠曲、加茂）

●山名入道宗全は、御所のお乘りを餘所に見て、御内計りの樂遊び、加茂の松風酒に聞く、飲めや唄への眞最中、娘となせが將軍の、御點氣うけしと告げ來れば、大に驚きふためきて、事の實否をたゞす川、納涼みは結句汗雫、駿馬に跨り逸散駈、家來も後につきかねて。（淨瑠璃、室町合戰）

●はしだてのくらはし河に朔堂の永き日ぐらし涼む比哉。（後鳥羽院）

●岩まもる水を宿にせきとめて外より夏を過しつる哉。（後嵯）

●いづみ川涼むこの夜はあけぬらし遠方濱の岩こゆる見ゆ。（讀人不知）

●風ふけば川邊涼しくよる波の立ちかへるべき心地こそせね。（家隆）

●夏衣立田川原の柳かげすゞみに來つゝならす比哉。（好忠）

●人めこそすゞみがてらに又見ゆれ花よりのちの木がくれのやど。（契沖）

●風さやぐ葉ひろがしはの下すゞみ露ちる袖はぬれわともよし。（春滿）

●柳かげ糸よりかけし春よりもくる人しげき夕納涼哉。（宣長）

●すゞしさの大路のやなぎ陰ごとにうまも車もいこはぬぞなき。（眞淵）

●閑もなほ蟬とびかふよひのまはいとすかかげぬ宿しもぞなき。（千蔭）

●夕涼姉しや湖のあり所。（宵水）

●瓜作る君があれなと夕すゞみ。（芭蕉）

●夕涼痛氣起して歸りけり。（去來）

●牛になる合點ぞ朝寢夕涼。（支考）

●夕涼よくぞ男に生れたる。（其角）

●殿原は細工めさるや夕涼。（蝶村）

●山伏の髮すき立てゝ夕涼。（許六）

●水練を舟の御遊や夕涼。（召波）

●涼まんと月夜になればざれありく。（杉風）

●あら壁や水で字をかく夕涼。（丈草）

●涼しさよ饅頭食うて蓮花。（惟然）

●從元のたばの浦邊はすゞしくて火をたくなはのくろしみもなし。（東作）

●山ひとつあなたの峰の木の間よりまかり出でたる月のすゞしさ。（うとき）

●涼しさはまたもなか洲の涙の花ひろよりよるやさかりなるらん。（春秋）

●われも又涼しさのまゝ事とはんすみだ河原に夏はありやと。（小龜）

●涼しさよむべ兩國は夏ながら橋のたもとに淡雪もあり。（馬馬）

●しつたどし涼しとすゞむ樣さきに知音くゝと風鈴のなる。（めしもり）

●水難かと思ふばかりに水門のひらきどたゝく風の涼しさ。（霜解）

●花の頃子心にまでいとひてし風を親ぞとすゞむ夏の夜。（守明）

●歌合ふて他人同士もそろくとうちはなす風の涼しさ。（津々丸）

●涼さを土産にして歸らばや橋のたもとに餘る川風。（世暮氣）

●さあ陣を引かうとはひる涼み蓙。（川柳）

●夕すゞみずしりと俵落すおと。（同）

●涼み蓙天はどふしたものといふ。（同）

●涼蓙ざしりざしりと人がふえ。（同）

●都人わづかな水で涼んでる。（同）

●涼蓙又はじまつた星の論。（同）

●稻光男ばつかり涼むなり。（同）

●逃げ足で嫁の出て來る門涼み。（同）

●一匹の蟹で扇す門すゞみ。（同）

●瓢くずやにかやりをたいて、綾や錦と夕涼。（俗諺）

●江上名湖號三莫莫一。納涼先報楚紅秋。風從二綠若枾頭一響。雲向二青山缺處一流。倚憶羅襟霑二竹露一。可レ堪清夢隔二沙鷗一。遠憐新月黃昏後。團扇佳人正倚レ樓。（鄭板橋）

●風淌八尺酒彩輕。微雨新晴水畫橫。何處

笛聲吹入レ破。藕花涼月夜三更。（船山）
●東風滿意綠周遭。午著三單衣一脫二敞袍一。最愛晚涼新浴罷。坐看春筍過レ林高。（李部）
●終日懸レ簾對二水鷗一。園林長夏似二深秋一。桃陰細洒靈黃雫。涼意蕭蕭風滿レ樓。（蘭廷瑞）
●簾前洒レ地著二胡床一。浴罷閑來坐晚涼。更取二壁燈一移二暗處一。待他月上二竹邊牆一。（毛翊）
●高々新月上二層城一。舟向二浪華橋下一行。花火迸レ空紅燭閣。游人只借納涼名。（秋村）
●追涼深入レ松。松下橫二沙凋一。沙凋沙如レ雪。纖流伏還見。（茶山）
●班婕妤團雪之扇、代二岸風一兮長忘。燕昭王招涼之珠、當二沙月一兮自得。（匡衡）
●青苔地上消二殘雨一。綠樹陰前逐二晚涼一。（白居易）
●露聲清壁迎レ夜滑。風勢蕭蕭逐レ秋涼。（同　）
●池冷水無二三伏夏一。松高風有二一聲秋一。（英明）

【なみ】波

狂瀾。怒濤。波濤。巨浪。波浪。紅波。白浪。蒼波。浩濤。細波。さゞなみ。ゆふ波。しき波。あだなみ。あら波。なごろ。あらいそ波。いほへの波。よせてはかへる。岩うつ。

●猶岸遠ければ、いかならむと、しばしいきつきをり、同じくはひのりたる人四たり、やう〳〵岸の方に打よするを見るも、たゞ此光りものゝみぞ、たのみなりける。今は十丈にもたらずなりぬるに、岸よりかへる荒浪に連れて、又も沖の方に出ぬべく見ゆれば、更に浪の中に飛びいりぬ。命をかぎりに泳ぐほど、力疲れて危きに、忽大浪打ちきたりて、海の底に沈みぬとおぼゆるに、大きなるいはほに打ちつけぬ。やがて其いはほに固くとりつきたるほどに、浪は引きもて行きければ、いそぎはひあがりぬ。たゞ夢のやうにて。ものも覺えず。之倫をはじめ人々はいかゞならむとおもふに、降りそゝぐ雨、ふきしきる風、立ちきほふしほけぶりに、島もつきあへずたふれまどふ。此方彼方のいはほより、同じくはひあがる人のおちびさけぶ聲、浪の音にもまされり。（廣足）

●岫崎といふ所は風瓢々と颯して砂をまはし、波浪々とみだれて人をしきる。行客之にたづさはりて、ためらくよせひくなみまをうかゞひて急ぎ通る。左は嶮岳の下ゝ岩のはさまをたのぎ行く。右はかすかなる浪のうへなのぞめば眼うけぬべし。はる〳〵と行くほどに、大和田のうちに來りて、小船の沖中にたゞよへるを見る。瓢帆とんで萬里風便をたのみて白煙にいり、驚波うごきて千雲夕陽をあらひて紅藍にそむ。（光行）

●北は片岡田曠うちすぎみて、海の燒けをれ霄葉にまじり、南は滿海蒼波わきあがりて白馬ならびわたる。しかのみならず前汀東西素布を長堤の浪にあらそひ、後園町段綠彩を萬壑の竹にかり、時に暮れゆく日脚は泉を遠景の松にかくし、來宿旅人はちぎりを同驛のむしろにむすぶ。（同　）

●御別にいと人すくなにて、うちやすみわたれるに、ひとりめをさまして、枕をそばだてゝよものあらしをきゝ給ふに、波たゞこゝもとに立ちくる心地して、なみだおつともおぼえぬに、まくらうくばかりになりにけり。（紫式部）

●動もおもしろや此岩船、寶をよする波の鼓、拍子を揃へてえいや〳〵、引けや岩船、あまのさくめが波の腰鼓、ていたうの拍子を、打つなりやさゝら波、へめぐり〳〵て住吉の松の風、吹きよせよえいさ、えいさらとおすや唐櫓の、潮の滿ちくる波に沈んで、八大龍王は海上に飛行し、御舟に綱手を手にからまき、汐にひかれ波に乘つて、長居もめでたき住吉の岸に、寶の御船をつけ納め。（謠曲、岩船）

●面白や松吹く風颯々として、波の聲茫々たり。所に名に負ふ洛陽の、詠めも近き白川の、波の鼓や風のさゝら。打ち連れ行くや橋の上、男女の往來、貴賤上下の、袖を連れて玉衣の、さゞ〳〵沈み浮波の、さゝら八撥打連れて、百千鳥、囀る春は物毎に、あらたまれども我ぞふりゆく、行くは白川、橋を隔て、向ひは東岸、此方は西岸、さゞ波はさゝら、うつ波は鼓、いづれも〳〵樂の、歌舞の菩薩の御法とは、聞き知らずや旅人よ、あら面白や。（謠曲、東岸居士）

●戀ゆゑに八瀨の里とは仇名にて、孀女が隱れ家も、慰めとては玉琴を、彈かばなびけと文月の、文でゆかねばよひ〳〵に、來てはそゝりをかけをどり、いやい踊のいやならぬ、とりなりそろへ聲そろへ、浴衣そろへて長刀、さすがは都近くなり、はあゑい〳〵、戀すてふ我名はまだき立ちにけり、人しら浪と忍びつゝむとど、浦浪にたつなみの、袁はめなみの繁げゝれば、よるは、いとし川浪ゆるかたなみ、あらぬ心は磯打つ波の、戀の淵瀨も淺からざりし、忍ぶをなみも瀨をこす浪の、外にあだ浪立い浪なりと、なんのせい〳〵せいがいの浪、戀は人浪誰がいふ浪も、とかく戀路は身をしらぬさ、興に乘じて玉藻前、扇の外に出玉へば。（淨瑠璃、殺生石）

●立てばたつぬれば又ぬる吹く風と波とはおもふどちにやあるらん。（貫之）

●はつせ女の袖かとぞ思ふ三吉野の瀧のみなわの波のゆふばな。（後鳥羽院）

●住の江の江の峰の松がね打ならしよりくる浪のおとのさやけき。（長皇子）

●住吉の浦かぜいたく吹きぬらし岸打つ波の聲しきるなり。（憲慶）

●あなし川せゝの岩かど立ちこえて浪こそなみの花はおりけれ。（長流）

●風ないたみおきつ島山かつかくれかつあらはれて浪立てる見ゆ。（千蔭）

●わたつみはあやしきものか荒磯に花と雪とをとはに見せつゝ。（同　）

●むらさきの藤江の浦も春ならでたゞ白波の花ぞかゝれる。（宣長）

●入日さすうらなつかしみきて見れば浪ぞにしきの名にはたちける。（蘆庵）

●白くまの荒き箱根路こえくればこよろぎの磯に波のよる見ゆ。（眞淵）

●きよたきや浪におどろき杜鵑。（野坡）

●朝霧に一の鳥居や波のおと。（其角）

●打寄する波や千鳥の横ゐるき。（蕪村）

●鷺に濟瀧の波靜なり。（士朗）

●夕立や市の中行くさゝら波。（召波）

●住の江の波の鼓や松ばやし。（今德）

●月波や金の波をまくら上。（几董）

●陽炎や潜ぬらして歸る波。（雨銘）

●はま千鳥あさゆふ波のしづけからはつと立ち居の見事なりけり。（橘洲）

❍おもかげのかはらでしかも天の川逢ふ瀬に年の寄る涙はなし。（同）
❍風吹第あなたこなたに立さわぎ涙の音さへ千島がけかな。（貞徳）
❍さくら川枝も水のはるまではとぢて開かぬ波のはつ花。（東作）
●居ねぶりの舟こぎ出すうみづらはいく朝早くおきつ白波。（秋足）
●涼しさはまたもなか洲の涙の花ひるより夜やさかりなるらん。（早秋）
●思ふ國へきたは越後のあら海に波のうちわをてうとあげしほ。（芦葉）
●代物のうら見わたせば一もんの新中納言波にたゞよふ。（讀人不知）
●心まち岸うつ涙のおとばかり。（川柳）
●三寸の舌は藤戸の涙のひり。（同）
❍怨靈はきえて源氏の涙になり。（同）
●庖丁がやんでなますの片男涙。（同）
❍男涙より女涙のかちが取りにくい。（同）
●大涙のうつとき船も浮き沈み。（同）
●波の花ふさぶりで汲むおもしろさ。（同）
❍九洲に入りむこらしい波がうち。（同）
❍稻の波芝賀恒都立游ぎ。（同）
●めうもんな涙の打つのは和歌の浦。（同）
●入島の磯の荒波かゝそなたは。よせつ打ちのけ物思はする。（俗謠）
●あだしあだ波、よせてはかへる涙、あさづま舟のあさましや。（同）
●三里へだてし波の上、色となさけを小舟にのせて、くるは誰故ぞさま故。（同）
●來いといはれて行かりよか佐渡へ、佐渡は四十五里波の上。（同）
❍波にも着かず、磯にも着かず。（俚謠）
❍ぽつ〳〵三年波八年。（同）
❍四海波しづか。（同）
❍一波動けば萬波生ず。（同）
●陽侯驅ㇾ涙銀山碎。簸揚舟船供弄戲。忽將上ㇾ天忽陷ㇾ淵。有時盤旋如三磨礎一。滿舟齊唱神佛名。萬死之中祈二一生一。（佛山）
●草到水際雷吼處。樣拆怪石東三奔流一。溪丁徐灑三香魚一坐。不ㇾ怕銀濤躍過ㇾ頭。（竹外）
●一林黃葉夕陽遲。千頃白波秋影淵。何處樓臺不ㇾ堪ㇾ望。依稀風景似三江南一。（星巖）
❍暑雨初過爽氣清。玉波蕩漾畫橋平。穿ㇾ簾小燕雙雙好。泛ㇾ水閒鷗箇箇輕。（宣宗）
●洪濤奔逸勢。駭涙駕三丘山一。留隱振三字宙一。潤蘊津雲通。（蘇彦）
●江間波涙兼ㇾ天湧。塞上風雲接ㇾ地陰。（杜甫）

〔なみだ〕涙

紅涙。血涙。落涙。哀涙。別涙。湧涙。千行。如ㇾ雨。霑ㇾ襟。闌干。

血の涙。たぎつ涙。なく涙。そでしぼる。そでのしぐれ。せきあへぬ。ほしあへぬ。かわくまもなき。

❍大臣殿以下の卿相雲客は、海士の苫屋に日を暮し、舟の中にて夜をあかす。龍頭鷁首を海中に泛べ、波の上の行宮は靜なる時なし。月を浸せる潮の深さ愁に沈み、霜を覆へる蘆の葉の脆き命を危む。洲崎に噪ぐ千鳥の聲は曉うらみをまし、磯間にかゝる櫂の音は、夜半に心をいたましむ。白鷺の遠松に群れ居るを見ては、源氏の旗を揭ぐるかと疑はる。野雁の遼海になくをきいては、兵共の終夜舟をこぐかと驚かる。晴嵐膚を侵して、翠黛紅顏の色やう〳〵衰へ、菁波眼を穿けて、外土望鄉の涙抑へがたし。翠帳紅閨に代れるは、埴生の小屋の藁すだれ、藜燼の燈に異なる。海士の藻鹽火たく暇しきにつきても、女房達はつきせぬ物思ひは紅の涙せきあへ給はねば、綠の黛亂れつゝ、その人とも見え給はず。（平家物語）
❍思ひ出づれば我君に仕ふまつる事、春の花、秋の紅葉を見ても、月の蟇らぬ空をながめ、雪の朝、御供に侍らひて、諸共に八年の春秋、仕うまつりしほど、常はめでたき御事多く、朝の御行、夕の御笛の音、忘れ難きに、慰むやとし出づる事どもかきつゞくれば、常のたちども見えず、霧りふたがりて、硯の水に涙落ち添ひて、水莖のあとも流れあふ心地して、涙ぞいと〻增るやうに書きなどせんに、まぎれなどやすると、かきたる事なれば、破捨山に、慰めかねられて、堪へがたくぞ。（讀岐典侍）
●哀なる事など人のいひてうち泣くに、實にいとあはれとは聞きながら、涙のふつと出でこぬ、いとはしたなし。泣顏つくり、けしきことになせど、いとかひなし。めでたき事をさくには、又すゞろに唯いできにこそ出でくれ。八幡の行幸のかへらせ給ふに、女院御樓敷のあなたに、御輿をとゞめて、御消息申させ給ひしなど、いみじくめでたく、さばかりの御有樣にて、かしこまり申させ給ふが、世にいひしらずいみじきに、誠にこぼるれば、化粧したる顏も皆あらはれて、いかに見苦しかるらん。（清少納言）
❍院源僧都、きのふかゝせ給ひし御願書に、いみじき事どもかき加へて、よみ上げつゞけたる言のはの、哀に尊く頼もしげなること限なきに、殿のうちはへて、佛念じ聞え給ふほどのたのもしく、さりともとは思ひながら、いみじう悲しきに、人々涙を得ほしあへず、ゆゝしう、かうなど互にいひながらぞ、得せきあへざりける。（紫式部）
❍雲路遠山の遙なる粧を見ては、哀涙袖を絞り、或は海岸孤島の幽なる砌に臨んでは、愁烟肝を焦しけり。（馬琴）
❍露を拂つて御跡をたづね奉れば、秋艸泣いて涙をそゝぎ、嵐に向つて君が墓をとへば、老槍悲しんで心を傷ましむ。（同）
❍是までなりやさらばとて、直のお返事たまはり、御暇申し立ち出づるゝ月に訪ふ、宿りは假の露の世に、これや限りの御使思ひ出の名殘ぞと、慕ひて落つるなみだかな。涙もよしや星合の、今は稀なる中なりと、終に逢ふ瀨はほどあらじ。むかへの舟車の、やがてこそ參らめと、いへど名殘の心とて、酒宴をなして糸竹の、聲すみわたる月夜かな。（謠曲、小督）
❍不思議やな是なる女性の神に參り、涙を流し給ふ事、返すゞくも不審にこそ候へ。御僧は自が事を仰せ候ふか。さん候。神に參り涙を流し給ふ事を不審申して候ふ。おろかと不審し給ふや。傳へ聞く、行教和尙は、宇佐八幡に詣で給ひ、一首の歌に曰く、何事のおはしますとは知らねども、奈さに涙こぼるゝと、かやうに詠じ給ひしかば、神もあはれとや思しめされけむ、御衣の袂に御影をうつし、それより都男山に誓ひを示し給ひ、國土安全を守り給ふ。おろかと不審し給ふぞや。（謠曲、巴）
❍都にだにもとゞめぬ、御涙なるをいたは

しや、陸奥の、忍ぶに堪へぬ雨の音、降りすさびたるをりしもは、思の露もちり〳〵に、心の花もしな〳〵と、しなる〻袖の色までも、けふのゆふべのたぐひかな。
（謡曲、千手）

●それ草の露水の泡、はかなき心のたぐひにも、哀をしるは習ひなるに、是は殊更思はずも、人のなげきを身のうへに、かゝる涙の雨とのみ、しなる〻袖の花洩、穂に出すべき言の葉も、泣くばかりなる有様かな。
（謡曲、朝長）

●かく成り行くも先の世の、約束事とあきらめて、こんなゆゝしい子を殺す、其口もかへず父上迄、同じ刃のうき別れ、神も佛もなき世かと、手をとりかはし姉妹か、返らぬ悔宗貞も、加藤が手前恥ちひて、爰にとだにも得もいはぬ、胸の苦しさ目に餘る、涙見せじとくひしばる、心を察し正清も、たもち煩れたる共涙、眞は泣寄り眞實の涙々に暮近き、秋やあはれを添へぬらむ。
（浄瑠璃、名取島蘆）

●兎角の咎も泣き沈み、涙の雨や隅田川、水の水嵩も時るべし。道御歎御理去ながら、親の涙は火熊となり、其子の功德を焼くとかや。
（浄瑠璃、双生隅田川）

●互に駒を引きかへし東西に分れしが、振返り〳〵、親は我子の身の行方、子は父親の最期の末、思ひつゝみて弓取の、泣かぬを今の涙とは、よその袂にせきかくる湊河へぞ寄せにける。
（浄瑠璃、女桶）

●治兵衛眼を押しぬぐひ、悲しい涙は目から出で、無念の涙は耳からなりと出るならば、云はずと心見すべきに、同じ目よりこぼるゝ涙の色の變られば、心の見えぬは尤も〳〵。
（浄瑠璃、天の網島）

●なくなみだ雨とふらなんわたり川水増りなばかへりくるかに。
（墓）

●物をのみ思ひね覚の枕には涙かゝらぬあかつきぞなき。
（信明）

●あけぬとてかへる道にはこきたれて雨も涙もふりそぼちつゝ。
（敏行）

●世と共に絶えずも落つる涙かな人は哀もかけぬ袂に。
（後成）

●もらさじと袖にあまるをつゝまゝし憎をしのぶ涙なりせば。
（西行）

●朝ごとの鏡にのみやしられなんしのぶに猶たへぬ涙か。
（千陰）

●あかつきの露をもともにしぼれとや袖のわかれにふる涙かな。
（春海）

●なるかみのうごけばくだる雨とのみ夕とどろきにふる涙かな。
（長流）

●やまとにはたぐひもあらぬこひすればから紅の涙おちけり。
（たみ子）

●思ひいでゝこふる昔は昔にてなみだは今の涙なりけり。
（土滿）

●毒を盛る親は涙のすもゝ哉。
（野坡）

●埋められたおのが涙やまだら竹。
（其角）

●名月は人の涙の出る夜さか。
（許六）

●出代りの壁に落す涙かな。
（太祇）

●魂棚はつゆも涙も油かな。
（嵐雪）

●天六月氏の涙にくもるべし。
（杪耳）

●忘れ得ぬ空も十夜の泪かな。
（去來）

●老僧の竹の木をかむ涙かな。
（芭蕉）

●賭にして唐がらし喰ふ泪かな。
（几董）

●うしやかく泪にぬれてあらはれぬかくしてかきし明礬の文。
（田鶴丸）

●たのむかひなきつぶす目のほとけにも浮めるものは涙なりけり。
（由躬）

●龍神をいのりてやみん戀ひわぶる涙の雨をふうじこめてと。
（三駄）

●待ちかねてながす泪をその方ももらひなきせよ山郭公。
（一圓）

●心なき身にも涙はこぼれけり鮫道くゆらす宿の夕ぐれ。
（披戸繁）

●泪ほどもろきはあらじうきにつけ嬉しきにつけ袖のぬるれば。
（道雄）

●なみだくむ心を人にとはれぬるその袖だにもかわく間ぞなき。
（峰秀）

●泪川ながれおつともせきとめぬ袖のつゝみやかひなかるらん。
（藍の舎）

●うき涙しのぶに心ありの穴つゝみがきれて袖をもるやと。
（仲塗）

●傾城の涙で藏ゆやがもり。
（川柳）

●耳に入る義より目に入る利の涙。
（同）

●惜いふ聲がくもれば目にしぐれ。
（同）

●こしかたを思ふ涙は耳へ入り。
（同）

●出代りの涙にしてはこぼし過ぎ。
（同）

●地蔵堂泪のたねがあげてある。
（同）

●若後家にすゐきの泪こぼさせる。
（同）

●梓弓下女の涙は土間へ落ち。
（同）

●義に猛き益と鳥居へ御落涙。
（同）

●薫る首怨敵ながら御感涙。
（同）

●捨てに出た鬼も泣かれて眼になみだ。
（同）

●泣く人のないが誠のなみだなり。
（同）

●君を松島小島のあまの、袂ひがたきわが涙、いよえい、わがなみだ。
（俗謡）

●雨の降る夜の一人ねは、いづれ雨とも涙とも。
（同）

●通ひなれにし朱雀の野邊の、露はものかは我涙。
（同）

●思ひそめたよ濃き紫の、袖は干しほの我涙、サユエイわがなみだ。
（同）

●涙ならではうきよはとけぬ、かわくまもなき我袖のいろ。
（同）

●鬼の目にも涙、
（俚諺）

●去来江口守空船。遠船明月江水寒。夜深忽夢少年事。夢啼粧涙紅闌干。
（白居易）

●生別死離腸九轉。假啼真泣涙千行。與君明日重分手。又是人間一劇場。
（船山）

●天寶年中事玉皇。曾將新曲教寧王。鈿蟬金雁皆零落。一曲伊州涙萬行。
（温庭筠）

●朔風吹雪鬢髯髯。人老年殘感更增。想汝獨裁忠義傳。憤餘雙涙灑寒燈。
（青村）

●酒泉太守能劍舞。高堂置酒夜擊鼓。胡笳一曲斷人腸。坐客相看涙如雨。
（岑參）

●渭水東流去。何時到雍州。憑添兩行涙。寄向敦園流。
（同）

●潮水還歸海。流人卻到吳。相逢問愁苦。涙盡日南珠。
（李白）

●海内風塵諸弟隔。天涯涕涙一身遙。
（杜甫）

●泣涕如雨。
（詩經）

〔にくみ〕 憎

愛憎。寃憎。生憎。積憎。私憎。怨憎、憎惡。憎嫉。

にくゞ。にくし。にくしみ。にくてい。にくゝし。にくし。

●急ぐ事あるをりに長言する客人、あなづらはしき人ならば、後になどいひても追ひやりつべけれども、さすがに心はづかしき人いとにくし。現に髮の入りてすられたる。又墨の中に石こもりて、きし〳〵ときしみたる。俄にわづらふ人のあるに、驗者もとむるに、例ある所にはあらで外にある、尋ねありく程に、待遠に久しきを辛うじて待ちつけて、悦びながら加持せさするに、このごろ物祟に困じにけるにや、居るまゝに即ねぶり聲になりたる、いとにくし。何でふことなき人の、すゞろにえがちに物いたういひたる。火桶すびつなどに、

手のうらうちかへし、皺おしのべなどしてあぶり居るもの、いつかは若やかなる人などの、さはしたりし。老ばみうたてあるものこそ、火桶のはたに足をさへもたげて、物いふまゝに、おしすりなどもすらめ。さやうのものは、人のもとに來てゐんとする所を、まづ扇して塵拂ひすてゝ、居も定まらずひろめきて、狩衣の前下ざまに、まくり入れても居るかし。かゝるとは、いひがひなきものゝ際にやと思へど、少しよろしきもの、式部太夫、駿河前司などいひしが、然せしなり。又酒飲みて、赤き口を探り、髭あるものはそれを云ぞ、、盃に取らする程のけしき、いみじくにくしと見ゆ。又飲めなどいふなるべし。身ぶるひをし頭ふり、口わきをさへひきたれて、わらはべのこうどのに登りてなど、諂ふやうにする、それはしも、誠によき人のさし給ひしより、心つきなしと思ふなり。物うらやみし、身のうへなげき、人のうへいひ、露ばかりの事もゆかしがり、聞かまほしがりて、いひ知らぬなば怨じそしり、又わづかに聞きわたる事をば、我もとより知りたる事のやうに、他人にも語りしらべいふも、いとにくし。物聞かんと思ふ程になく兒。鳥の集りてとびちがひ鳴きたる。忍びて來る人見しりて吠ゆる犬は、うちも殺しつべし。さるまじう、あながちなる所に隠れ伏せたる人の、鼾したゝ。又密に忍びてくる所に長烏帽子して、さすがに人に見えじと惑ひ出づる程に、物につきさはりて、そよろといはせたる、いみじうにくし。伊豫簾などかけたるをうちかづきて、さら〳〵とならしたるも、いとにくし。帽額の簾は、ましてこはき物のうちおかるゝ、いとしるし。それもやゝ引きあげて出入するは、更にならず。又遣戸など荒くあくるもいとにくし。少ししたゝるやうにてあくるは、鳴りやはする。あしうあくれば、障子などもたをめかし、こぼめくこそしろけれ。ねぶたしと思ひて臥したるに、蚊のほそ聲になのりて、顔のもとにとびありく、羽風さへ身のほどにあるこそいとにくけれ。きしめく車に乘りて歩くもの、耳も聞かぬにやあらんといとにくし。我乘りたるは、その車のゆしさへにくし。物語などするに、さし出でゝ我ひとり才まくるもの、すべてさし出は、童も大人もいとにくし。昔物語などするに、我知りたりけるは、ふと出でゝいひくたしなどする、いとにくし。鼠の走りありく、いとにくし。あからさまにきたる子ども、童をらうたがりて、なかしき物など取らするにならひて、常に來て居入りて、調度やうち散しぬる、にくし。家にても宮仕所にても、遂はでありなんと思ふ人の來るに、虚嘘をしたるを我許にあるものどもの、起しよりきては、いぎたなしと思ひがほに、ひきゆるがしたるいとにくし。新參のさしこえて、物しり顔になじへやうなる事いひ、うしろみたるいとにくし。わが知る人にてあるほど、はやう見し女の事、譽めいひ出しなどするも、過ぎてほど經にけれど、猶にくし。ましてさしあたりたらんこそ思ひやられ。されどそれはさしもあらぬやうもありかし。はなひて誦文する人、大かた家の男しうならでは、高ぐはなひたるもの、いとにくし。盃もいとにくし。衣の下にをどりありきて、もたぐるやうにする。又犬のもろごゑに、長々となきあげたる、まが〳〵しくにくし。乳母の男こそあれ、女はされど、近くも寄らねばよし。男子なば、唯我物にして、立ちそひ領じて

うしろみ、いさゝかもこの御事に違ふものをば讒し、人をば人とも思ひたらず、怪しけれど、これがとがを心に任せていふ人もなければ、處得、いみじきおもゝちして、事を行ひなどするに。（清少納言）

●齋院に中將君といふ人侍るなり。聞き侍るたよりありて、人のもとに、かきかはしたる文を、ひそかに人とりて見せ侍りし。いとこそ艶に、我のみ世には、物の故しり、心深きたぐひはあらじ。すべて世の人は、心も肝も無きやうに思ひて侍るべかめる。見侍りしに、すゞろに心やましう、おほゆ け腹とか、よからぬ人のいふやうに、憎くこそ思ひ給へられしか。（紫式部）

●憎や、官語道斷、判官殿に假申したる強力めは一期の思出な。腹立や日高くば、能登の國まで差さうずると思ひつるに、わづかの笈負うて、跡に下ればこそ人も怪しむなれ。總じて此程、にっくし〳〵と思ひつるに、いで物見せてくれんとて、金剛杖をおつとつて散々に打擲す。（謠曲、安宅）

●ところにすみながら、御扶持ある方々に、憎まれ申す者ならば、ひとへに盲の杖を失ふに似たるべし。片輪なる身のくせとして、腹あしくよしなきいひごと、唯ゆるをば讒し。（謠曲、景清）

●かまひて世守よ、母うらめしと思ふなよ。櫛子をだにもにくまれば、ましてわが子をば、何しに憎みはつべき。此理を思ひやりて、兄が命に代らんと、おもふも孝子なるものを、母うらめしと思ふなよ。（謠曲、正儀世守）

●エ、何かにつけてじやまな餓鬼ぢやな。コレお妻、わが身はそいつが可愛かい。アイ〳〵え、何んのいな。お前の娘といふでは無しに、すゞろに心やましう、おほゆ け腹とか、よからぬ人のいふやうに、憎くこそ思ひ給へられしか。（紫式部）

●憎や、官語道斷、判官殿に假申したる強力めは一期の思出な。腹立や日高くば、能登の國まで差さうずると思ひつるに、わづかの笈負うて、跡に下ればこそ人も怪しむなれ。總じて此程、にっくし〳〵と思ひつるに、いで物見せてくれんとて、金剛杖をおつとつて散々に打擲す。（謠曲、安宅）

●ところにすみながら、御扶持ある方々に、憎まれ申す者ならば、ひとへに盲の杖を失ふに似たるべし。片輪なる身のくせと見る前で殺した〳〵。（淨瑠璃、忠臣蔵）

●心こそうたてにくけれ染めざらば移らふもなをしからまじや。（古今）

●年はへぬ神もにくまずよしこやしよそふる君がにくからなくに。（萬葉）

●山高み花の色をも見るべきににくゝたちぬる春霞哉。（すけみ）

●われこそは憎くもあらめ我宿の花見にだにも君がきまさぬ。（伊勢）

●にくからぬ人のきせけん濡衣は思ひにおへず今乾きぬる。（中將内侍）

●にくからぬ詞のふしもうけながらみすのへだてもつれなかりける。（蒲蓮）

●兄弟のくすし憎むや河豚汁。（芭蕉）

●憎い蚊と同じ盛のほたるかな。（也有）

●白重憎き背中に物書かん。（蕪太）

●花に舞はで蹈るさ憎し白拍子。（蕪村）

●若葉して又も憎まれ榎かな。（一茶）

●蠅憎し心のさきへたち廻り。（蛾邊）

●歇がるた憎さ人かなほとゝぎす。（智月）

●隣から此水憎むや蟬の聲。（其角）

●血をわけしものと思はず蚊の憎き。（丈草）

●葛水や玉敦を憎む女あり。（几董）

●日比憎き蜘めが軒を逃ぐる日はさて〳〵心よいかぎりなり。（象丸）
●にくまれて世にすむ甲斐はなけれどもかあいがられて死のよりはまし。（貞柳）
●花の木にのぼる坊主の憎ければ落ちて手ふさに怪我してよかし。（浜江）
●留桶を使ひ長屋で憎まれる。（川柳）
●町内〻に生まれ者があつ湯好き。（同）
●碁敵は憎さも憎しなつかしい。（同）
●塗りたて〻佛よばりの憎らしさ。（同）
●上草履殺して歩行く憎らしさ。（同）
●談義場を後家憎い程取り廻し。（同）
●憎さうに盛りやッたのうと姑婆。（同）
●七回の玉には蟻もにくからず。（同）
●御みくじでもらつた嫩もにくがられ。（同）
●花嫁のぶすねでないの憎らしさ。（同）
●かゝるうき身にうき人は、なにをなげくぞ葛の葉の、もつれ〳〵てな、あふ夜はほんに、にくや〳〵はゝ鳥がねばかり、ほかにねたみはなきぞな泣きそ。（俗謡）
●ふられてとけし下心、見るたび〳〵やな、きくたびに、にくてらしいほどかあいさの、わしはかうした流れのつとめ、そのかひなぎさの千鳥やさんさ、なくね夜半のそら。（同）
●懇の止長にかゝりぶれ、この高砂の松こそにくや、つらや軒端にあこがれて、うらみ心の夜もすがら。（同）
●憎まれ子世にはゞかる。（俚諺）
●憎いは可愛の裏。（同）
●七歳八歳の憎まれ盛り。（同）
●可愛さ餘りて憎さ百倍。（同）
●坊主が憎ければ袈裟まで憎い。（同）
●憎い坊主の布施ごのみ。（同）
●其將之用〻兵也、常以二積德一擊二積怨一。（淮南子）
●老夫言語渾無〻味。不二但秋來而可〻哀。（楊萬里）
●人言好事莫〻作〻意。雨妬風憎鬼神忌。（同）
●生憎快馬隨二鞭影一。寧作二癡人一記二劍痕一。（陸游）
●撩二弄春風一耐二寒冷一。到頭蘊得吝花憎。（郊谷）
●鶯也解啼花也愛。不〻關心事最堪〻憎。（司空圖）
●短長肥瘠各有〻態。玉環飛燕誰肯憎。（蘇軾）
●草木有二美惡一。造化無二喜憎一。（梅堯臣）
●我齒豁可〻鄙。君顏老可〻憎。（韓愈）
●世界微塵裡。吾寧愛與〻憎。（李商隱）
●寄〻身愛憎間。得失眞一餉。（張耒）
●不〻知〻親〻己、不〻知〻疏〻物。故無二愛憎一。（列子）
●愛憎不〻棲〻于〻情、憂喜不〻留〻于〻意。（莊子）
●愛而知二其惡一、憎而知二其善一。（禮記）
●衆〻人以二口給一、屢憎〻於人。（論語）
●嗛吝背憎。職競由人。（詩經）
●有皇上帝。伊誰云憎。（同）

【にぐわつ】二月

如月。仲春。令月。夾鐘。仲陽。きさらぎ。梅つ月。うめみ月。ゆきげ月。なかのはる。

●二月の空の氣色はたゞならぬに、殘の雪に咲き交る梅の匂、なつかしう、里にはまだ事ぞともなき曙に、山の櫻は早う花をつけぬれど、霞の深う立ちへだゝりて、外山の空のうらみ少からず。過ぎし氷の樣はさらにて、今日も主水司氷を奉れる。生野の道の遠さ心ばへなど、所につけ國に觸れたることゝ、さ言ひたちふ男どもゝ、春の光に心ひかれて、あらぬ野山に心をやり、ゆかしう見ならはせども、御曹司に籠めたる檻の内の獸、籠の内の鳥は春ともしらず、花に巣くふ妹背のちぎりも物せで、みかきが原の明暮、心苦しう、遠き海山八重たつ雲のよそなも、懸ひ悲しむをなん、あはれと聞き知るべき聖も物せねば、そはんたくをうてうなの聲は、唯言ひ知らず、をかしきふしに聞えなせど、さぞな悲みあまりあるべきを思へば、いみじき御座のあたり、やんごとなき御傍は、忌み憚りもすべきにこそ。（長明）
●二月の頃、空の氣色のどやかにかすみわたりて、ゆるやかにふく春風に、軒の梅なつかしくかほりきて、鶯の聲うら〻かなるも、うれはしき御心ちには、ものうかるれにのみきこしめさる。ことやうなれど、かの上陽人の宮の中思ひよそへらる。長日かげもいとゞくらし難き御なぐさめにとやさこえ給ひけん、中院より御琵琶奉らせ給ふついでに、いさ〻かなる物のはしに、
　思ひやれちりのみつもる四の緒にはらひもあへずかゝるなみだを。
　げにとおぼしやるに、いとかなしくて、玉水のながるゝやうになん。（增鏡）
●項は二月初のことなれば、峰の白雪村消えて、花かと見ゆる所もあり。谷の鶯言づれて、霞に迷ふ處もあり。登れば白雪皓々として聳え、下れば青山哦々として峰高し。松のゆきだにきえやらで、苔の細道幽なり。（平家物語）
●頃は二月の十日あまりなるに、かの見ゆる岡邊の雪は、猶きえのこりながら、うちかすむ森の梢どもは、春の光みち渡りて、そこはかとなく、きこゆる鶯の聲も、人くといふにはあらで、われをよぶなる心地のすめるは、心ゆくゆふべなり。（春海）
●信濃路や、園原しげる木賊色の、狩衣の袂な、冠の帽子にうちかつぎ、忍び出づるや二月の、黄昏月もはや入りて、いとゞ朧夜に、降るは春雨か、落つるは涙かと、袖うち拂ひ裾を取り、しを〳〵すご〳〵と、たどり〳〵も迷ひ行く。（謠曲、雲林院）
●きさらぎや、今日を社日と唐土も、神を祝ひの初詣で、袖引きそへて賑はしく、立商ひの飾り棚、兒童たらしの色々に、小間物召せ〳〵、蓬萊出の鼈甲類、反魂香の炷殘り、小人島の耳掻、文五の鼻毛拔き、猛々の雨合羽、張良が流れ履、と言ひ立つれば、おみやの柑子蜜柑江南の橘、二月の早瓜、靈芝は特に揚貴妃の好物、女中は參つてあやかり物、ござれ〳〵と賣るもあり。（淨瑠璃、蓬萊鶴）
●外は二月の雪空に、つれて寒さもいやまさる、あんどうの灯を提燈に、うつし持つたる綠丸、簑よ笠よと打きせて、さらば參つてさんじましよ。チゝ怪我せぬ樣に綠よ手を引け、あい〳〵〳〵、あいろは見えぬとり目の父、杖は我子を力草、柳が本へとたどり行く。（淨瑠璃、祇園女御）
●はかなくて春一月はすぎにけり花のさかりは過ぎがてにせよ。（みつね）
●わぎも子が衣きさらぎ風寒み有りしにまさる心ちかもする。（好忠）
●ながき日にまたるゝ花はさきやらでくらしかねたるきさらぎのそら。（爲家）
●ながらふる身とやたのまんきさらぎの春の日おくる心ならひに。（行家）
●二月やけふはつ午のしろしとていなりの杉はもとつ葉もなし。（光俊）

●きさらぎや山良のみさきに風たちぬとわたる舟のゐさもちらなん。（家隆）

●雪もけぬ花もにほひぬ春はたゞきさらぎにのみあるべかりけり。（枝直）

●きさらぎのそらにしなれば一年のかくてあれなと思ほゆる哉。（筑波子）

●ともすれば花にまがひてちるゆきに梅が香さむききさらぎのそら。（蘆菴）

●二月やけふみかの原みちたらふ年のさちあれと神まつる哉。（忠邦）

●つばくらに賜ひそむる二月哉。（夔太）

●松梅と暮れて正月二月かな。（同）

●花の咲く木はいそがしき二月哉。（支考）

●如月や松の苗賣る松の下。（惟然）

●元日の醉花に來ろ二月かな。（几董）

●如月や釣瓶に上る井の小鯖。（道彦）

●二月にもなれど春來ぬ榎哉。（舛六）

●如月も十日雀の屋根の霜。（士朗）

●よし死なばその二月の月花に。（杉風）

●野の梅のちり際寒き二月哉。（尚白）

●鶯へりて水の淋しき二月哉。（梧堂）

●稻荷山背かりし杉を月代の綠にたかくかざしてぞゆく。（枝道）

●初午の神酒にや花の色に出て梅のき下戸も香に匂ふ也。（橘洲）

●みな月の雪にはあらで如月のもちにきえたる富士見西行。（眞顏）

●御りんじう二月に虫の壁を開き。（川柳）

●狐の子出來て二月が初幟。（同）

●二月は狐霜月は狸なり。（同）

●二月二日土釜屋根念用事。（同）

●束帶の涙人二月下旬出る。（同）

●二月下旬公家の流が見せを出し。（同）

●三所へ假の皇居を二月立て。（同）

●うたがひの、雲なき空や二月の、夕かげに折りつる袖も、くれなゐに舞ふ梅の花笠、ありとやこゝに鶯の、なくね折しる風にはらり、ほろりとふるは涙か花か、花をちらすは嵐のとがよ。いやあだし野のかねのこゑ。（俗謠）

●かざしゆく道ゆき人の袂まで、櫻に匂ふ二月のそら、あかぬながめは夕ぐれ、つれかへる鐘のね。（同）

●名にしおふ、音羽にちかき地主の春、櫻はまだき梅ちりて、その二月の半すぎ、ひらく御帳の千手の糸。（同）

●二八月思ふ子を船にのすな。（俚謠）

●二月は遁げて走る。（同）

●二八月のあれ右衛門。（同）

●二月の白畑三月降麥。（同）

●二月村園暖。桑間戴勝飛。農夫荅二春穀。蠶妾擔二新衣。牛馬因レ風遠。鷄豚過レ社稀。黃昏林下路。鼓笛賽二神歸。（白居易）

●二月六日春水生。門前小艇運欲平。鶯燕漫囀莫二漫喜。吾與二汝曹一俱眼明。（杜甫）

●滿街楊柳綠絲煙。畫出清明二月天。好是隔簾花影動。女郎撩亂送二鞦韆。（韋莊）

●新年都未レ有二芳華一。二月初驚見二草芽一。白雪卻嫌春色晚。故穿二庭樹一作飛花一。（韓愈）

●北固樓前一笛風。碧雲飛盡建康宮。江南二月多二芳草一。春在二濛濛烟雨中一。（仲殊）

●今年春色可レ勝レ嗟。二月山中未見レ花。長憶去年今夜月。海棠花影到二窗紗一。（程敦厚）

●酒幔高樓一百家。宮前楊柳寺前花。內園分二得溫湯水一。二月中旬已進レ瓜。（王建）

●新林二月孤舟還。水滿二清江一花滿レ山。借問故園隱君子。時々來往住人間。（儲光羲）

●露堤行レ春向二若耶一。野人懷レ惡欲レ移レ家。東風二月淮陰郡。惟見棠梨一樹花。（劉商）

●五原春色舊來遲。二月垂楊未レ掛レ絲。即今河畔冰開日。正是長安花落時。（張敬忠）

【にし】西

西國。西陲。西洋。西山。西海。關西。江西。山西。流レ西。欲レ西。

西ざま。西の方。にしのそら。

西を願ふ。西をまつ。西の御國。

西の山のは。日の入る方。

●三人の弟達にもな歎きたまひそ。父も討たれ給ひぬ。誰か助けおはしまさん。兄達も皆斬られ給ひぬ。情をもかけ給ふべき頭殿は敵なれば、今は定めて一所懸命の領地もよもあらじ。然れば命助りたりとも、乞食流浪の身となりて、此處彼處に迷ひ行かば、あれこそ爲義入道の子どもよと、人々に指をさゝれんは、家の爲にも恥辱なり。父こひしくは只西に向ひて、南無阿彌陀佛と唱へて、西方極樂に往生し、父御前と一つ蓮に生れ合ひ奉らんと思ふべしと、おとなしやかに宣へば、三人の君達、各西に向ひて手を合せ、禮拜しけるぞ哀なる。（保元物語）

●かゝる所に身一つかくすべき庵引結び、左のかたの月輪より、香の煙はそくなびき、空には紫雲の種をまき、念佛の聲閑にして西に聖衆の迎を、待ちておはしましけるが、天水の頃うせ給ひにけり。實にいみじく往生し給ひけるとなん、げに哀にも貴くも覺えて侍る。（西行）

●こよひの月、いづこいみじく面白からん。ありかばやなどいひて、まづたゞ車に乘りなんといひて、廣澤こそおもしろからめ。其方行かんといひていく程に、二條にて西ざまに見やりたる、更にいはん方なし。（定賴）

●なほ見れば、東の對のつまなる紅梅の、いみじう盛にさきたる下に立たせたまひて、滅罪生善往生極樂といふねかな、西にむかひて、あまた度つかせ給ひけり。かへりて御有樣語りければ、いと〳〵あはれにき、奉らぬ人なし。（爲業）

●竹田伏見も外に見て、只後髮ひげそりの、町を弓手にたんぼ道、田毎に星のかげ氷る、身はすてはてゝなきものと、おもへど寒き北風に、追はれて西をたのむかな。（馬琴）

●げに〳〵うれしき仰せかな。死出の山三途の川にては、必追っつき申すべし。さらば自害に及び給へ。承り候ふとて、心づよくも夕日の影の、西に向ひて、手を合はせ、彌陀佛、助け給へと祈念して、心づよくも自害せんと、思ひ定めたる、夫婦の身こそあはれなれ。（謠曲、錦戶）

●げに賴もしや御影山、治まる御代の春の空、さも妙なれや九重の、內外に通ふ花車、轅も西にめぐる日の、影ゆく雲の嵐山、戶無瀨に落つる白波も、散るかと見ゆる花の瀧、盛久しき氣色かな。（謠曲、嵐山）

●住み馴れし、嵯峨野の奥を立ち出でゝ、西より西へ秋の空、月をゆくへのしるべにて、難波の御津の浦づたひ、入りぬる磯は過ぎゆけば、早住の江に着きにけり。（謠曲、雨月）

●思は同じ大判事、子よりも親の四苦八苦、命も散り〳〵、日もちり〳〵、ハアさうぢや、はや西に入る日輪は、娘がお迎彌陀の來迎、西方淨土へ導き給へ。南無阿彌陀佛と目を閉ぢて、おもひ切つたる首諸

共、わつと泣く聲こたふるこだま。（淨瑠璃、妹背山）

●南無阿彌陀佛。南無阿彌陀笠打被り。西へ行く足十萬億土、亡き跡送る親送る、生きての忠義死したる義心、一樹は枯れし無常の櫻、殘る二樹は松王梅王。（淨瑠璃、菅原傳授）

●いとゞいかに西に傾く月かげを常よりもけに君したふらん。（西行）

●西をまつ心にふぢをかけてこそその紫の雲をむもはめ。（同）

●西へゆくしるべと頼む月かげの空だのめこそかひなかりけれ。（堀河局）

●月も日も影をば西にとゞめおきて絶えぬ光ぞみをてらしける。（行能）

●同じ枝をわきて木のはのうつろふは西こそ秋の初なりけれ。（勝臣）

●しぐれにし雲より西に夕月のほのめく影もあきのそらかな。（蕭平）

●いつか我此世のゆめのさめはて〜西のみ空の月をあふがん。（通蓮）

●西をさす心のかたはたがへどもそむかでのりの道あゆむ駒。（秋成）

●ふく風にまかせていにし白くものなごりこひしき西の山のは。（たみ）

●名月や西にもほしき窓ひとつ。（芭蕉）

●稲妻やきのふは東けふは西。（其角）

●西へ行く鴈の行衛や鉢叩。（存義）

●西方の極樂道よ枯野原。（一茶）

●鳥さしは西へ過ぎけり秋の暮。（蕪村）

●月鉾や松原西へ入佐山。（沾德）

●妾が家は江の西にあり菰粽。（太祇）

●東雲や西は月入る夏の海。（來山）

●木枯や西山淺く夕づく日。（闌更）

●落ちぬべき西山遠し朧月。（几董）

●花道と行く蓮性のいかなれば西のさじきにうしろみすらん。（めしもり）

●あはれ世の人の行へも月も日もなごりは西の方にぞありける。（香摘）

●西方の追風寒く冬野ゆく年も笈摺かけた順禮。（有年）

●西方の花の塞を忘れなよみはあづま路の土となるとも。（千丈）

●西の國百萬石もとるならば月のいるべき山はあらせじ。（金埒）

●あなきたな今はみなみのひがしれて西より外ににげ所なし。（來示）

●東路へ詳なのこして旅の空西のみくにの名どころをみん。（廣重）

●西へゆくことのいやさにうしろなば見もせでいそぐ熊谷の土手。（定規）

●雲といふ厄なばさらり拂ふとも西の海へはやるなこの月。（眞萩）

●西山の山のおくばにはさまれど邪氣にもならぬ夕月のかげ。（立吉）

●蕭角力西のかたやへ夕ぐれにかたげてはひる弓はりの月。（眞垣）

●日は西のかたにかたげし花の枝うちしはれても戻る山みち。（空寒）

●晴天に稲妻の出る西の方。（川柳）

●西方と寂光淨土いぢり合ひ。（同）

●外遊めを埋草にする西の海。（同）

●西海の戰場までも木の芽つけ。（同）

●道哲にきけば極樂西の方。（同）

●ねぶの葉も西へ向いては手を合せ。（同）

●月も日も位牌に殘す西の空。（同）

●北面も風雅の道は西へ行き。（同）

●あれ〳〵西方島原へ、さんまいがたでゆく雲の、そら定めなき流れの身。（俗謡）

●西吹く風の夕ぐれに思ひ出でたよ里心。（同）

●西の國で百萬石も取るやうな面。（俚諺）

●西も東もわからぬ。（同）

●席麈高捲枕畳欹。門挹三垂顯一瓢碧溪。閑把二史書一眠一覺。起來山日過三松西一。（慈默）

●歸鴉背上夕陽低。蛙樹陰深屋影迷。幽夢醒來人不レ語。筆聲隔在二數松西一。（茶山）

●東山忽現白虹蜺。如レ帶如レ橋望轉迷。一面亂荷跳雨下。半輪斜月向雲西。（淡窓）

●月落樓前海鹿啼。海天秋思夜潮迷。故人今夜空相憶。夢繞雲濤西又西。（溪琴）

●白頭紅蓼夕陽迷。半日閑遊十日隄。石鼎烹茶雲未レ熟。孤舟流入三石潭西一。（同）

●惆悵人間日又西。（朱機芳）

〔にじ〕虹

虹霓。雲霓。長霓。晴虹。垂虹。殘虹。斷霓。吐霓。望霓。ゆふ虹。たつ虹。虹の橋。廣野にわたる。山より山に入る。

●荊軻彼を語らひて、秦の都の案内者に具して行くに、或片山里に宿したりける夜、其の邊近き里に管絃をするを聞きて、調子を以て本意のことを占ふに、敵の方は水也、我方は火也。白虹日を貫きて進らず。我本意遂げんことかたしとぞ申しける。（平家物語）

●また腥きゝえもいはれぬ氣ふき來り、あるひは蠶のごとくなる雲うづまき來り、同行のものさへも一向にかくるゝこともあり。あるひは前後左右に異形の雲烟あらはれ、鬼神のごとく佛神のごとき事もあり。或は足下より虹たちのぼり、たてよこにたなびきて織りなせるがごとくなることもあり。（南谿）

●是より又下ること數百歩にして石橋あり。長さ七丈餘にして、恰、虹蜺の引けるが如く、苔滑に雲蘿して、その淵底の見えざれば、渡らんとするに眼くるめき、足さへたえてすゝみかねたる。（馬琴）

●漫々たる夕千潟はるかに有りて、磯挹の普通に遠かる涙の上を見れば、昊天に霽れたるゆふ虹のごとく、かゞやく廻樓雲につゞいて、冥迷たるに、百八の燈籠砌にめぐつて、只茫海をやくかとうたがふ。（西鶴）

●蝦蟆の息に虹を起し、蜃はよく楼臺を吐き、腹中の虫氣を吹いて聲を出すも、さらにあやしきわざには有るべからず。（也有）

●それ一念稱名の聲の中には、攝取の光明を待ち、聖衆來迎の雲の上には、九品蓮臺の花散りて、異香みち〳〵て人に薰じ、白虹地に滿ちてつらなれり。（謡曲、柏崎）

●橋のけしきを見渡せば、雲にそびゆる粧の、たとへば夕陽の雨の後に、虹をなせる姿、又弓を引ける形なり。（謡曲、石橋）

●勢田の長橋かげ見えて、長虹波に連れり。浮世の中を秋草の、野路篠原の朝露、おきわかれゆく旅の道。（謡曲、西國下）

●昔を問へば遠き世の、例も吳三桂が、今身の上に白雲の、山より山に身を隱し、太子を育て奉る。移れば變る苦蓮、宮前の楊柳寺前の花、峰の古木に立かはり、夕の霧の間には、我身を以て稱とし、鑑淨屬車の手車も、葛の錦に織りかへて、朝の露のほとりには、谷の猿の肩に駕し、早二歳は昨日今日、暮るゝも山明くるも山、我名も君が顔も、人目を包む雲水に、虹の架け橋途絶えして、深山鳥やぬえこ鳥、梢に來鳴く鶯鶏さへ、昔なまねぶ聲はなし。（淨瑠璃、國姓爺）

●左手に見るは大行山、同青山魏々として、隈角屏風を立つるが如く、梢を廻る點

滴の、聲颯々と吹き落ちて、蕭々然と瀟瀟り、斷雲にさけんでは、旅行の秋りやうしやうと、沒すも何と潯湘の、夜の雨さへ類りなり。あれ御覽ぜよ、時しもあれ、雨を送れる虹の照り、やゝほのめきて海士小舟、海に入日を釣の糸、晶やる振は女とも、見えつ顧をや隱れ笠、花車な漁村の夕照と、語るも言ふも靈さすまじ。

（沖增璃、奚越ノ談）

❶時雨つゝにじたつそらや岩はしをわたしはてたるかつらぎの山。（寂蓮）

❷さらにまたそりはしわたす心地してをふさかゝれるかつらぎの山。（西行）

❸一とほり村雨はるゝ跡よりも夕日のわたすにじのかけ橋。（光圀）

❹村雨のたえ間の日影さす方に虹見えそめてむかふ山のは。（實隆）

❺雨はるゝ此山もとにみえそめて虹をはしなるたき川のすゑ。（實香）

❻虹のたつ麓の松は雲にきえて峯よりはるゝ夕立の雨。（後鳥羽）

❼虹のたつ峯より雨ははれそめて麓の松をのぼる白雲。（親行）

❽村雲のたえまの空に虹たちて時雨すぎゐるなちの山のは。（定家）

❾晴れ殘るにじ一むらの雲にのみわづかにのこるなつの夕虹。（言道）

❿あさくらの夕山こえてよそのせにうつらふ虹の影を見る哉。（同）

⓫朝虹やあがる雲雀の力草。（素堂）

⓬初虹や知らせに來る隣の子。（茶靜）

⓭高輪や初めて虹の消えそむる。（雉鎮）

⓮虹の根に雉鳴く雨の晴間かな。（凡董）

⓯海面の虹をけしたるつばめ哉。（其角）

⓰田の畔や虹を背負ふて啼く蛙。（去來）

⓱陽炎の中より虹の起る日ぞ。（闌更）

⓲今朝虹をかけしともいふ柳哉。（乙二）

⓳雁なくや消えてあとなき朝の虹。（月溪）

⓴虹の輪の眞只中やきじの聲。（梅室）

㉑今消えし虹のはしよりなく蛙。（谷雄）

㉒くもる日もたちまちはれて定めなき虹はみ空の夢の浮橋。（三亞）

㉓雨はれてすゞしきまゝの夕虹は暑をわたす橋にやあるらん。（筑波山人）

㉔夕立のくものきれとの文珠堂はれて涼しき虹のはし立。（絶面入道）

㉕野末からのぞきにかけるゝ虹をつるとみなせるくきの花薄。（集丸）

㉖夕虹のねを尋ねれば野末まで五色にみゆる千草百ぐさ。（仲住）

㉗あやめ引く池のあなたに雨はれて根ざしもあかくみゆる夕虹。（鼎星閣）

㉘なるかみの車とめんとかりそめに虹のかけはしなかばたゆらん。（包守）

㉙虹のはし今かけそめて西山の入日のかげやわたりはじめん。（柳子）

㉚村しぐれ入日の岡にみかりして雲をかけ行く虹のはし驚。（里繁）

㉛うつくしう虹のかたにも立ち並び夕にはれをみする蹄子。（田鶴丸）

㉜雷いけものゝ爪の跡ならんみゝづばれなす遠の夕虹。（龍廼屋）

㉝秋まだき紅葉のはしとみゆる哉天の川邊にかけし夕虹。（道成）

㉞晴れやらで君より先へたつ虹のわかれの袖の雨扈ひから。（遊鶴）

㉟そりや虹がふいたぞと出て引はしより。（川柳）

㊱虹の橋夕日の渡る片時雨。（同）

㊲虹を見て孝子は墓へ暇乞。（同）

㊳三角な蚊屋の中から虹を見る。（同）

㊴橋立のきれとた繋ぐ雨後の虹。（同）

㊵虹の出る頃が狐の色ななし。（同）

㊶絢が撫手綱のやうな虹が吹き。（同）

㊷富士筑波虹天秤に引つかける。（同）

㊸虹の吹く頃御社も色直し。（同）

㊹雲はうす〳〵四をのそらに、入日なほてる虹のさよはし、ういちよろゝ、霜も厳もひつちこないて、嵐につよき相崎。（俚謠）

㊺朝霓はその日の洪水。（同）

㊻夕虹百日の旱。（同）

㊼陰陽變理自多功。氣象裁成望二赤虹一。舉眼悠々宜二雨後一。題頭眇々在二天東一。炎涼有序知二盈縮一。表裏無私辨二始終一。十月取時仙雲絳。三春見處天桃紅。雲衢暴錦星辰織。鳥路成橋造化工。千丈綵幢穿二水底一。一條朱旆掛二空中一。初疑碧落留二飛電一。漸覺炎洲颯二暴風一。遠影嫦娟猶火劍。輕形曲樓便形弓。如今倘是樞星散。宿昔何令貫日忽。問着先爲二黃玉寶一。刻文當レ使孔丘通。（官公）

㊽春暮雨生旱。日落雨飛餘。橫彩分二長漢一。倒色媚二清渠一。梁前朝影出。橋上晚光舒。願逐二旌旗轉一。飄々侍二直盧一。（董思恭）

㊾紆餘帶二星渚一。勢突架二天薄一。空因二壯士見一。還共二美人沉一。遠勢宮二眞玉一。神光藻二瑞金一。獨留長劍影。寧負昔時心。（蘇味道）

㊿不樣輕黃雨後宵。郵籤已報隔林聲。忽聲染色翻成曉。仰見雙虹雨外明。（楊萬里）

(51)浮雲開合晚風輕。白鳥飛邊落照明。一曲彩虹橫界斷。南山雷雨北山晴。（黃庚）

(52)風擁黃雲二龍駕レ海。雷驅二紫電一雨翻レ盆。長虹千尺忽截斷。一片煙波起二市門一。（張弘範）

(53)長虹貫二白日一。易水念二寒風一。（湯縉）

(54)安得二五采虹一。駕レ天作二長橋一。（李白）

(55)晴天度二旅雁一。斜影照二殘虹一。（褚亮）

(56)橫橋落照虹堪レ畫。（杜牧）

(57)文如二日月一。氣如レ虹。（皮日休）

【にしき】錦

錦繡。錦綾。蜀錦。五色。五采。千絲。鮮明。綉段。蜀江。金谷。こまにしき。唐にしき。にしきの衣。しき。花にしき。にしきの錦。とばあか地の錦。もみぢの錦。あやの錦。りの錦。よるの錦。

(58)又賽藤別當錦の直垂をきけるとも、最後の暇申に大臣殿へ參りて、かう申せば實盛が身一つにては候はれども、先年坂東へまかり下り候ひし時、水鳥の羽音に驚き、矢一つをだに射ずして、駿河の蒲原より逃げ上りて候ひし事、その耻辱たゞこの事に候ふ。今度國へまかり下り候はゞ、定めて討死仕り候ふべし。實盛もとは越前の國の者にて候ひしが、近年御領につけられて、武藏國長井に居住仕り候ひき。事のたとへの候ふぞかし、故郷へは錦をきてかへると申すとの候へば、何か苦しう候ふべき。錦の直垂を御免候へかしと申しければ、大臣殿、やさしうも申したりけるものかなとて、錦の直垂を御免ありけるとぞ聞えし。昔の朱實臣は、錦の袂を會稽山にひるがへし、今の齋藤別當實盛は、其名を北國のちまたにあぐとかや。（平家物語）

(59)中將そのたなばたのたちぬふかたをのどめて、ながきちぎりにぞあえまし。げにそのたつた姫の錦には、またしくものあらじ。はかなき花紅葉といふも、なりふしの色あひつきなく、はかゞしからぬは、露のはえなくきえぬるわざ成り。さるによりてかたき世ぞとはさだめかねたるぞやと、いひはやし給ふ。（紫式部）

●又なでしこのたねか、ついひぢの上に、まかせ給へりければ、おもひかけず、四方にいろ〳〵に、から錦をひきかけたるやうに、さきたりしなどをみたまへしは、いかにめでたくはべりし。（爲業）

●其身は累葉の賢枝にうまれ、其宮のたかき階にのぼる。雲の上の月のまへには、冠のひかりをまじへ、仙洞のはなの下には、錦の袖の色をあらそふ身たり。（光行）

●九重に咲けども花の八重櫻、幾世の春を重ぬらん。然るに花の名高きは、まづ初花を急ぐなる、近衛殿の糸櫻、見渡せば、柳櫻をこき交ぜて、都は春の錦爛爛たり。（謠曲、西行櫻）

●おのが身の分限も知らず、一がいに殿がおしわい〳〵と、勿躰ないかげ言、綾錦を召されても御大名、綿服を召されても御大名、齊藤別當實盛が、最期に錦の直垂を着たれども、源氏を捨て〻平家へ返り忠の武士、心は汚れし檜禮同然、又佐々木源蔵は二君にも仕へず、つゞれの肩衣を着に結び、賴朝の御代を待ちしは心の錦、今の武士の美麗を好むは實盛、佐々木が遺風を芳しと思召すは、此殿の御行跡。（淨瑠璃、香庚申）

●柳金閣と申すは、六條院の相國義滿公の山亭、三重の高樓造り、庭には八つの池景を寫し、やはくの石眼下の水、瀧の流も春深く、柳櫻を植ゑ交ぜて、今ぞ都の錦なる。（淨瑠璃、祇園祭禮）

●さくらがた錦の紐をときそけてあまたは（允恭天皇）

●から錦をしき我名は立ちはて〻いかにせよとか今はつれなき。（後撰）

●思へどもあやなしとのみいはるればよるの錦の心地こそすれ。（同）

●からにしきたつた山とは春秋の花もみぢにやいひはじめけん。（爲家）

●おりいづるこまもろこしの品はあれどやまとにしきにしくはたはなし。（春海）

●からをとめ舟こぎよせし住のえのきしかたよりもおる錦かも。（千晴）

●今も猶やまとにおるやから錦あやのてひとのわざなったへて。（同）

●つひにわがきてもかへらぬからにしき立田や何の故郷の山。（長流）

●千代ふとも色はかはらじからにしきおりたちてけり人の心の。（浦野）

●おりかけし都の錦あをやぎのたての糸のみ見えわたるかな。（景樹）

●誰が子ぞ手爐の蒲團の唐錦。（蝶夢）

●あや錦雛にあやかる心かや。（白雄）

●閉帳の錦たれたり春の夕。（蕪村）

●錦着た蘆生が夢も枯野哉。（也有）

●角力とり並ぶや秋のからにしき。（嵐雪）

●しぐれ來て園の錦を踏むかな。（几董）

●錦着てはひ歩行く雛の主かな。（闌更）

●着て歸る錦の夜あり川涼。（蓼太）

●大和路は錦の花野となりにけり。（涼網）

●花桶に桃や柳をさしまぜて雛の都ぞ錦なりける。（米人）

●春秋の花の錦の織どめはいとも殘らぬ年のなだ卷。（走帆）

●戸張なる錦とやみん秋の野の草に藥師も觀音も有り。（雪堂）

●秋の野の錦の中もはぢらはずつゞれさせてふ虫の聲々。（蔵人）

●よせぎれと見ゆるお寺の錦かなどこもかしこも萩だらけにて。（菅江）

●是がまあ折れといふとて折られうか錦を野べの秋萩の花。（加賀丸）

●いろ〳〵の草の錦もいとはやくけふ一日に秋のおりどめ。（仲經）

●にしきなす獻よみ人をもみぢばのちりゆく底にとふ袖時雨。（三天坊）

●鷹の羽のすゝきもみえず錦もて野守のかゞみつゝむ秋萩。（綸之）

●にしきおり龍一疋にロのくれて。（川柳）

●をしげなく錦はやぶる筵さし。（同）

●錦着たやまは裸になる下地。（同）

●さく千草卷の錦の小切なり。（同）

●石地蔵葛の錦のけさをかけ。（同）

●つゞれ着て錦商ふ植木うり。（同）

●山はぬぐ川は錦の小袖なり。（同）

●つゞれから錦にかへる不仕合せ。（同）

●四行と遊行は春のにしきなり。（同）

●露そむる、野邊の錦のいろ〳〵を、ふみわけゆけばかすかなる、あやしの竹のあみ戸のそともに、もれてうつらふ山の井の、水手にむすべば月またやどる。つらき野分にふきさそはれて、墨繪にかきし松風の、おとや砧を添乳のゆめに、なれてながむる人心。（俗謡）

●粧ひかざる錦の袂、かざすかざしの手馴草、その舞扇おほやうに、限なき月の光かや。（同）

●しんぞよいこの〳〵かほばせ、花の姿も錦に飾る、色の姿のうしろ帶。（同）

●故郷には錦を飾れ。（俚諺）

●裂けても錦。（同）

●綻れを着ても心は錦。（同）

●錦の袋に糞をつゝむ。（同）

●紫鳳獻ㇾ濟天吳躍。一大國窠雲五色。織以ニ永蠶一寫ニ海嶽一。正視則赤側視碧。曰蝦夷錦或曰非。北狄所製五市獲。豈無ニ海賈遞鬻來一。親獲夷彊亦大奇。南筑有ㇾ人畢於ㇾ武。裏ㇾ足更究東北夷。"還逢ニ松藩大閱日一。縱觀闕氏孤箭隨ニ旃旗一。揮ㇾ毫幕中邪ニ此贈一。匹如ニ宮袍一被ニ姓李一。璽擢ニ萬里獻尊親一。寧同ニ雲旋諸ニ宮貴一。君不ㇾ見海徼無ニ復警一風魚一。投ㇾ筆誰敢事ニ戎車一。鄙把ニ輸墨博ニ遠物一。較ニ其績藻一果何如。願君成ㇾ才拔ニ常品一。經文緯武兩研精。成ニ其可ㇾ用如ニ布帛一。不ニ唯可ㇾ觀如ニ此錦一。否則能請ニ夷狄情狀一。言ニ邊防一。如ㇾ步錦囊寫ニ氷族怪詭一。無ㇾ遁藏。（山陽）

●漢使市車遠。河陽步隙陳。雲浮仙石日。霞滿蜀江春。機迴廻文功。紳兼ニ東髮一新。若逢ニ楚王貴一。不ㇾ作ニ夜行人一。（李嶠）

●衣ㇾ錦案衣。裳ㇾ錦褧裳。叔兮伯兮。駕予與行。裳ㇾ錦褧裳。衣ㇾ錦案衣。叔兮伯兮。駕予與歸。（詩經）

●衣ㇾ錦尚ㇾ絅。（同）

〔にはとり〕雞

綉頭。花冠。欽喙。五彩。呼伴。報ㇾ午。司ㇾ晨。唱ㇾ曉。

くだかけ。にはつどり。ゆふつけどり。明つげ鳥。八聲のとり。時をたがへぬ。かけのたれをのしだり尾。里より里につげわたる。

●面辨の職にまゐり給ひて、物語などし給ふに、夜いと更けぬ。明日御物忌なるにこもるべければ、丑になりなばあしかりなんとてまゐりぬ。つとめて、蔵人所の紙屋紙ひきかさねて、後のあしたは殘り多かる心地なんする。夜を通して、昔物語も聞えさんとせしを、鶏の聲に催されてと、いといみじう清げに、奥表に事多くかきたまへるいとめでたし。御返事に、いと夜深く侍りける鶏の聲は、孟嘗君のにやときこえたれば、たちかへり、孟嘗君の鶏は、函谷關を開きて、三千の客皆にされりといふは、

逢坂の關の事なりとあれば、
　夜をこめて鶏のそらねははかるとも世
　にあふさかの關はゆるさじ。
心かしこき關守侍ろめりときこゆ。
（清少納言）

●いまより後はさればこそもてなし給はんまゝにあらん。けさはまた聞ゆるにしたがひ給へかしとて、いとすべなしとおぼしたれば、あなくるしや、曉の別や、まだしらぬことにて、げにまどひぬべきをとなげきがちなり。にはとりもいづかたにあらん、ほのかにおとなふに、京がもにいでらる、
　山里のあはれしらるゝ聲々にとりあつめたるあさぼらけかな。
女君、
　鳥のねもきこえぬ山とおもひしをよにうきことはたづねきにけり。
（紫式部）

●折から告る八聲の鶏に、信乃は心おくの間の、兩親目さまし玉はん。疾く〳〵と急がし立つれは、濱路はやうやく立ち上り、夜もあけば狐にはめなんくだかけの、まだきになきてせなな道りつる。それは懇せし草枕、これは旅行く妹背の別れ、鶏も鳴かずば夜もあけじ。曉けずば人の目も覺めじ。恨めしの鶏の音やと、逢坂山の霄にあらで、許さぬ關は我が上に、ありあけの月ぞ果敢なき。
（馬琴）

●馬上に鞭を垂れて數里、いまだ鶏鳴ならず。杜牧が早行の殘夢、小夜の中山に至りて忽ちおどろく。
（芭蕉）

●既に八聲の雞鳴いて、御最後の時節唯今なり、早々御出で候へとよ。待ち設けたる事なれば、左には金泥の御經、右には思ひの珠の緒の、命も今を限なれば、是ぞ此世なる門出の庭に、足よわ〳〵と立ち出つる。武士前後を圍みつゝ、是ぞ別れの雞の聲。鐘も聞ゆる東雲に、籠より籠の輿に乘せ、由比の汀に急ぎけり。夢路を出づる曙や、後の世の門出なるらん。
（謡曲、盛久）

●待たれし月も遠近人に、言葉をかはす法の緣も、隔なき軒端の萩の、露うちはらふ風に亂るゝ、蟬の諸聲ころ〳〵に、雞の音と明け行く空の、月の小淋數妙の、風の手枕袖觸れて、月のさむしろ風の手枕の、夢は覺めてぞ明けにける。
（謡曲、空蟬）

●待ち居たる闘鶏の御遊とて、御殿〳〵に御簾掛け渡し、南面に白洲を構へ、四本柱を裝ひ、綾の水引錦の幔幕、筑紫宵ちの大宮人、袖を連ねて伺候する。早や闘鶏の刻限と、駕籠に入れたる鳥々の、ごいしるり白せう〳〵。あぶら相國はんちやしやむ唐丸、勝負を今やと童共、小腕にしこを入れにけり。縣の鷲貫立ち出で、今日鶏合せの勝負に任せ、都を攻むる君の結構、麒麟大王と文武天皇、運定めの鳥合せ、負け鳥は身が拜領して、歌讃む代りに新公家衆へ、一羽宛賜り付け、三十一文字の唐人料理と、擺頻張る貪欲眼、國石つゞと出で、此方の鶏は毛色も白く名も白藤、天皇の御味方、天狗でも眞鳥でも、羽裂さへあれば嫌はせぬと、鶏を土俵に放し入れ、腕捲りする意氣過者。
（淨瑠璃、大友眞鳥）

●そりやこそ鳴いたは東天紅、ありや又うたふはとうてんこう、八にもならぬ霄鳴の聲さへかへる春の夜や。庭木の塒に羽たゝきして、一鶏鳴けば萬鶏うたふ。函谷關の關の戸も開く心地に親子が悅び、是から急ぐは菅原相、迎の拵氣がせくと、兵衛は出て行く切戸口、直瀰太郎は工みの仕殘し、だめを聞して入りにけり。
（淨瑠璃、菅原傳授）

●たがみそぎゆふつけ鳥かから衣たつたの山になりはてなく。
（古今）

●曉のゆふつけ鳥ぞ哀なる長きねぶりを思ふまくらに。
（式子内親王）

●思ひねの夢だに見えで明けぬればあはでも鳥の音こそつらけれ。
（寂蓮）

●いかにせんゆふつけどりのなりはてなけどもいまだあかぬ別を。
（長綱）

●さと中に夕あさりせし庭鳥のねぐらにいればヨは山のはに。
（長流）

●庭つとりしば〳〵なきぬ旅出せんかりやの軒に月はのこれど。
（蕉蹊）

●我ならでかけのたれなのたれか世にあかつきつぐる聲をまつらん。
（春湍）

●としごとにひなをあまたの家つともかけてや千代のさかえしるしも。
（千蔭）

●あかつきのうきをつげしはむかしにてねざめなぐさむ鳥の聲哉。
（春海）

●つげそめてなほ天の戸のあくるまを長鳴鳥の聲やいくこゑ。
（宣長）

●雞にかげろふもゆる垣根かな。
（也有）

●鳴炎を吸き出す雞の距かな。
（召波）

●雞合目も見えずなりて哀なり。
（曉台）

●畑打つや牌の御坊の雞の聲。
（蕪村）

●鶏のよごれ來にけり春の水。
（闌更）

●雞の聲をうたふや桃の花。
（升六）

●加茂川の砂召されけり雞合。
（旨原）

●三合にして止みねべしとり合。
（五明）

●雞の聲にしぐる〳〵牛屋かな。
（芭蕉）

●雞が塒もあやめふきにけり。
（素堂）

●雞に居かはる除や鍬すゝみ。
（西堂）

●いたゞきの赤きは鶏におとらじとのぼる雲井の庭つ鳥かも。
（栗花園）

●雞のまねしても中々關の戸を明けてもとづる秋の朝霧。
（行就）

●夢もはやなごりの頃はおのがうつ羽のさは〳〵として告ぐる雞。
（立吉）

●目もさめてふた〳〵びねぶけさしぐしの曉方の雞の聲。
（芳則）

●氷年の蕊方もしらで夜のあきをとら卯の間に告ぐる雞。
（津々丸）

●かまの下たきつけぬ間に豆腐やの耳おどろかす雞の聲。
（葉々廣）

●東天は光となけど曉の枕にひゞく雞のこゑ。
（まねく）

●兀かゝる雲から山のはも白く笑ふてみせる明の雞。
（召波）

●庭鳥の空音にあらぬ霄鳴は痢と福をとつけつこしやう。
（白洲）

●婁の綿ぼゝしを取ると鶏の聲。
（川柳）

●には鳥はあさまつりごとおこたらず。
（同）

●にはとりとよみそうな字を時鳥。
（同）

●陸に越す晦日の闘に雞の繪馬。
（同）

●雞はおっつめられて五尺とび。
（同）

●鏡の身ぶりでにはとりの蹴合なり。
（同）

●雞がなくあづまやからの迎ひなり。
（同）

●關守のくつたは雞に似たのなり。
（同）

●只は通さぬはずなれど雞の聲。
（同）

●逢ふときは、かたりつくすと思へども、かず〳〵のこゑ言のはを、思はでつらき鐘のこゑ〳〵きこゆる。それのみなるかくだかけの、まだきになきて夜もあけば、狐にはめなどかこちつゝ、あふさきるさのもの思ひ。
（俗謡）

●涙は道の手向草、空にはあらぬくだかけの、八聲にしらむ東山、あすのうはさはいかならん。
（同）

●こがれ〳〵てある夜もつらや、せめて別の鐘ばかりかや、いまだ名殘もつきせぬ夜

中に、鳥もつらいはつげわたる。（同）

●唄ひ出したよ此方の鶏が、ねむたいこゑで細々と。（同）

●鶏目となるも牛後となるを勿れ。（俚諺）

●鶏寒くして木に登る。（同）

●雄鶏勤めて雌鶏時を告ぐ。（同）

●牝鶏の晨するは家のつくるしるし。（同）

●殺分涙沌見二精神一。風倡鶯儒暫化身。傍世浴沙花徑午。隨群啄粟草堂春。饑猫屋後垂涎久。饒鶏天邊側目頻。羽翼漸成文彩備。不レ隨鉄論亦司晨。（器侑）

●羽族天成五德名。仁文武勇信分明。牛刀大用雖先試。狗盗潛謀或假鳴。振起舜徒爲レ善志。作興文聖問レ安誠。困人未レ悟二乾坤曉一。早向二人間一喚二一聲一。（張隣松）

●風雨凄々。鶏鳴喈々。既見二君子一。云胡不レ夾。風雨瀟々。鶏鳴膠々。既見二君子一。云胡不レ瘳。風雨如レ晦。鶏鳴不レ已。既見二君子一。云胡不レ喜。（詩經）

●禮棠茶羅登二殘經一。竹杖芒鞋借二閑行一。山靈迎人跡絶。竹鶏時作兩三聲。（如璧）

●漏風鶏鳴起二渦煙一。塞礎雞レ借強朝レ天。却思春水江南岸。閑聽二篷聲一臥二釣船一。（高啓）

●金距花冠傍レ舍棲。清晨相叫一聲齊。開レ關自有二鄰生計一。不二必天明待二汝啼一。（汪遵）

●割レ雞焉用二牛刀一。（論語）

〔ぬすびと〕盗人

ぬ ノ 部

盗賊。山賊。鼠賊。偷兒。偷盗。夜盗。強盗。竊盗。綠林。梁上君子。

しらなみ。夜半のしらなみ。

●ゆき〳〵て第三日の未の比に、磨鐵嶺をこえんとす。さらでも折々行き難む、女兒小夏が手をひき扶けて、殊之介を背負うたる、夫婦が辛苦はいふべうもあらず。急ぐとすれどはかどらぬ、山路は人のゆき〳〵稀なる、七つさがりになるまゝに、茅萱小篠原にすだく虫の聲も、高峯に近づく程こそあれ、一叢繁き樹立の間より、顯れ出でたる二人の辯者、身長五尺七八寸、一人は六尺にも及ぶべし。莚頭巾に胴金作の、巨刀腰にいかめしき、そが打扮は問はでもしるき、彼張獗が儔ならずば、關の太郎が子孫ならんと、思ふも僻目にあらざりける。このとき二人の辯者は、先後に立ち塞りて、こだまにひゞく聲をふりたてゝやをれ行客騒ぎなせそ。多寡の知れたる路用のみかは、骨折甲斐のあらじと思へど、うらがれ頭の酒價には、さのみすつべきものにもあらず。とく脱がずやと双方ひとしく一刀を晃りと引きぬけば、あなやと叫ぶ女房女兒と、共に魂銷る木偶介は、齒牙も合はず戰きおそれて、腰うちぬかし手をあげて、あゝ是出のいねざみたち、やよわれらは京師にて、世渡る樂がまはらねば、世帶果せし倉卒廻國、路用というては候はず。ふところ限り進らせん。衣裳は免し給ひねと、わびつゝ腰をかゞぐりて、稍取り出すつるべ錢を、二人の賊は見かへりもせで、眼ない

からす聲高やかに、一文野郎がくど〳〵と、かなはぬ事をたれかはさかん。覺期をせよと諸聲に、罵りも終らずけたふして、起きんとうごめく頭をふまへて、手ばやくもぎとる衣物と、腰にまとひし財嚢も漏さず、聲ふな見るにたへかねし、阿夏小夏はあなやと叫びて、すがりとゞめんとしたれども、にらまへたけつてよせつけぬな、猶まつはりてなきさけぶ、小夏が頭上かいつかむ、一人の山賊胴聲たけく、この女の子奴がこりずまに、妨すなといきまきて、宙に引きあげ手玉にとりて、矢聲をかけて投げとばせば、憎むべし、是この小夏は、底はるかなる深谷の中に、身を翻しおち入りて、骸も得見えずなりにけり。（馬琴）

●曉夜深く出てえとまらねば、奈良坂のこなたなる家を尋れて宿りぬ。これもいみじげなる小家なり。そは氣色ある所なめり。ゆめいねな。れうがいの事あらんにあなかしこ。おびえ騒がせ給ふな。息もせでふさせ給へといふをきくにも、いといみじう怪しく、恐ろしうて、夜を明す程、千年を過す心地す。からうじて明けたつ程に見れば、盗人の家なり。あるじの女、けしきある事をしてなんありけるといふ。（道綱母）

●八月野分あらかりしとし、廬どもゝたふれふし、しものやどもの、はかなきいたぶきなりしなどは、ほねのみわづかにのこりて、立とまるげすだになし。けぶりたえて哀にいみじきことおほかり。盗人などいふひたぶる心あるものも、おもひやりのさびしければにや、此六日をば不用の者にふみすぎてよりこざりければ、かくいみじきのらやふなれども、さすがに寢殿の内ばかりは、ありし御しつらひかはらず。（紫式部）

●密盗人のさるべき隈にかくれゐて、いかに見るらんを誰かはしらん。暗きまぎれに、懷に物引き入るゝ人もあらんかし。それは同じ心に、をかしとや思ふらん。（清少納言）

●御覽候ふ如くこのあたりは、重井青墓赤坂とて、其里々は多けれども、間々の道すがら、青野が原の草たかく、青蓐こやすの森しげれば、靈ともいはず雨の内には、山賊夜盗のぬす人ら、高嶺をおどし里通ひの、下女やはしたの者までも、打ち剝ぎとられ泣さ叫ぶ。（謠曲、熊坂）

●汝の身の上しるや猿冠者、春永甲州退治の折から、快川國師を燒殺し、種々の惡政見るに忍びず、主人光秀數度の諫言、用ゐぬのみか、鐵骨の扇に額を打たれし恨、本能寺にて亡せしは、武に逞しき弓矢の本懷、汝却て春永の大恩を蒙れ共、其主の子を蔑下につけ、小田の天下を横取する、國賊とはおのれが事、其下に働く大名めら、手下とや言はん同類とやいふべき。おのれ〳〵が分に應じ、國郡の分取り、盗人原の大將久吉、人を稱へて賊となし、盗賊の成敗せば、うぬが首から先づ刎ねよ。ハ……偃鼠能く水飲めども滿腹に止まる。小さき目にさこそ思はん。先君不慮の落命より、時日を移さず仇を討ち、弓を安んじ主位を守護す。春雄春信其德なければ、是非なく國家を治する久吉、汝如きが知ることならず。（淨瑠璃、彦山權現）

●暫へて申さば盗賊は國の鼠、捕り盡すに盡されうや。僅手下の五十七十、狩捕らしたとて、さのみ天下の助にも成らず。萬民の爲ならば、只用心に如くはなし。取らるゝ油斷有ればこそ、取る盗賊も出來申す。五右衛門が最期の一句は斯くばかり、石川や濱の眞砂は盡くるとも、世に盗人の種は

つきまじ。重ねて御尋御無用と、何の膠なく云い投ぐる。（淨瑠璃、盜淵双紋巴）
●門たて〻戸はさしたれど盜人の忍れる穴より入りて見えけん。（萬葉）
●盜人のたつたの山にいりにけりおなにかざしの名にやけがれん。（爲賴）
●われが名は花ぬす人とたゝばたてたゞ一枝を折りてかへらん。（和泉式部）
●もみぢばのせきはすゞかのいせの山にしきをぬすむ風を通すな。（慈鎭）
●雪のいろをぬすみてさける卯花はさらでや人にうたがはるらん。（俊頼）
●むな手にてたきゞもこらぬ山賊のさてやみどりの林わくらん。（資元）
●盜人といふもことわりさ夜中に人の心を取りにきたれば。（金葉）
●あしき山かげをばよきて盜人のたつ田の川は水もむすばず。（長流）
●盜人のうべき罪をも教ふとてけさ衣をやとりかへしけん。（夢宅）
●ぬすまずばとらせじものと思はれしわが心こそまづうかりけれ。（魚貫）
●盜人に逢ふた夜もあり年の暮。（芭蕉）
●盜人は此頃何をほとゝぎす。（旨原）
●かしこくも盜人に來て水鶏哉。（几董）
●蠅は名乘けり蚤は盜人の由緣。（其角）
●盜人のかへして行きぬ涅槃像。（士朗）
●山の月花盜人をてらし給ふ。（一茶）
●盜人に鐘撞く寺や冬木立。（太祇）
●花盜人とてもの事に宿かさん。（西月）
●湯あがりや鬼灯盜む爪鍬。（東來）
●盜人の屋根に消え行く夜寒哉。（燕村）
●梅さきぬ盜んだ人の垣根にも。（也有）
●ねるゝだにおこたるべしや盜人の忍びたる壁のあなうむの中。（素堂箋）
●しら涙のたちよりくとも玉もたぬ蛍が磯やは心やすしも。（綾明）
●いかばかりくるしき淵にしづみてかみをしら涙のうき名立つらん。（寂々）
●手折らんとねらふ心を小垣内によせてはかへる花のしら涙。（便々館）
●盜人と誰もさぞかし岩躑躅もちとさけよと思ふ此頃。（鼻成）
●折りかけし花盜人は言譯のぬけ道もなき關の櫻戸。（古吉）
●鏡山いざ捕まへて見てやらん花盜人を追ひやしつると。（水盛）
●狀でせめ酒でしばるも面白や花盜人ないけどりにして。（樋洲）
●盜人にみとがめられてはづかしやしのびてはこぶ戀の重荷を。（同）
●道入りしとさわぐ隣にうまいせる人のかべをで破る盜人。（貞固）
●桀上の君子の德は垣なやぶり扉をはなつ野分なるらん。（茂樹）
●おのが身にかゝるべしとも白涙の繩もて物を背負ふうしろ手。（秀作舍）
●ぬす人の糞を見てゐるたちのまゝ。（川柳）
●ぬす人のしんるゐも有り十三日。（同）
●くれの市毎年ぬすむりちぎもの。（同）
●よくしめて賊ろといひ〳〵盜みに出。（同）
●瓜ひとつ盜めば畑の中うごき。（同）
●盜人にすてられてゐるねびすさま。（同）
●探し出す度のびあがる袋蟇。（同）
●盜人に法螺貝をふく在郷寺。（同）
●泥捧に見せてもといふ柳原。（同）
●大喝一聲竹の子をすてゝにげ。（同）
●守人に隙があるも盜人に隙なし。（俚諺）
●家に盜人を養ふ。（同）

●盜人にも三つの道理あり。（同）
●盜人を見て縄をなふ。（同）
●盜人たけ〻し。（同）
●耳を押へて鈴をぬすむ。（同）
●國に盜人家に風。（同）
●盜人に縄。（同）
●時鶏鳴月落、星光照二曠野一、百步見一人。客驚下、吹二螢藥一數聲。頃、之賊二十餘騎四面集。步行負二弓矢一、從者百許人。一賊提二刀繩一馬奔一客曰、奈何殺之吾兄。言未畢、客呼曰、椎。賊應一聲落一馬、馬首盡裂。衆賊環而進、客從容彈一椎、人馬四面仆二地上一、殺二三十許人一。宋將軍屏息觀之、股栗欲一墮。忽聞客大呼曰、吾去矣。地陥且起、黑烟滾々、東向馳去、後遂不二復至一。（魏水叔）
●故曰、昏暗則淘突、營酒薄而邯鄲圍、聖人生而大盜起。掊二擊聖人一、縱二舍盜賊一而天下始治矣。夫川竭而谷虛、丘夷而淵實。聖人已死則大盜不一起、天下平而無一故矣。聖人不一死、大盜不一止。雖一重二聖人一而治一天下一、則是重利二盜跖一也。（莊子）
●盜、名不一如一盜、貨。田仲史鰌、不一如一盜也。（荀子）
●盜山中賊易、破二心中賊一難。（王守仁）
●絕一巧棄一利、盜賊無一有。（老子）
●民之未一厭。職盜爲一寇。（詩經）

〔ぬの〕布

布帛。布市。布衣。晒布。麻布。葛布。曝布。綿布。

ほそぬの。あさぬの。ひき布。うちぬの。てづくり。けふのせばぬの。きそのあさ布。にぎたへの布。てづくりの布。

●物をくふ〳〵ありつる柑子何にかならんずらん。觀音計はせ給ふ事なれば、よも空しくてはとやまじと思ひ居たる程に、白く善き布を三反取り出で、これあの男に取らせよ。この柑子のよろこびは、盲ひつくすべき方もなけれども、かゝる旅の道にては嬉しと思ふばかりの事はいかゞせん。これは唯志のはじめを見するなり。京のおはしまし所は、そこ〳〵になん必參れ。この柑子のよろこびをばせんずるぞといひて、布三反取らせたれば、喜びて布をとりて、藁筋一筋が布三反になりぬる事と思ひて、脇に夾みて罷る程に、その日はくれにけり。（慶國）
●南は滿海堂波わきあがりて、白馬ならびわたる。しかのみならず、前汀東西、素布を長巻の涙にあらそひ、後園町段、綠衫を萬至の竹にかり、時にくれゆく日脚は、昇を遠島の松にかへし、來宿疎き人は、ちぎりを同驛のむしろに結ぶ。（光行）
盲下總の國に、眞野といふ人住みけり。引布を千むら萬むら織らせ、さらさせけるが家のあとゝして、深き川を船にてわたる。（孝標女）
●不思議やな、是なる市人を見れば、夫婦と思しくて、女性の持ち給ひたるは、鳥の羽にて織りたる布と見えたり。又男の持ちたるは、美しく色どり飾りたる木なり。何れも〳〵不思議なる寶物かな。是は何と申したる物にて候ふぞ。是は細布とて機ばり狹き布なり。是は錦木とて色とり飾れる木なり。いづれも〳〵當所の名物なり。（謠曲、錦木）
●見來れば世を捨人の、戀墓の道の色に染む、此の錦木や細布の、知るしめさぬは理なり。あら面白の返答やな。さて〳〵錦木

細布とは、經路によりたる謂よのう。中々の事三年まで、立て置く數の錦木を、日毎に立て、千束とも讀み、又細布は機はりせばくて、さながら身をも隱されば、胸合ひ難き戀とも讀みて、恨みにも寄せ、名をも立てゝ、逢はぬを種と、讀む歌の、錦木は、立てながら朽ちにけり、けふの細布胸合はじとや。さしも讀みし細布の、機ばりもなき身にて、歌物語聽づかしや。

（同）

●げによく御覽じとがめて候ふ。是は人間の織る衣にあらず。或る歌に、裁ち縫はぬ衣きし人もなき物を、何山姫の布さらすらんと、かやうによみしも此衣なり。

（謠曲、佐保山）

●取り出し渡す以前の箱、心濟まねどめいく〳〵が、あたふた明けて取り出す。樣子は何か白布に、ムヤけふの細布胸合はずと、古歌の下の句、手跡は夫正清殿、わたしが方はコレ此扇、ドレ〳〵秋來月を見て歸思多し。自ら籠をひらいて白羽を放つ。ムヽコリヤコレ古郷を思ふ詩の心、嬢共とくと工夫を仕れ。アイとはいへどおとゝいが、夫の心白布と、かけし扇のはんじ物、とけぬ色目を見て取る音近、眞柴が招きに從はざる、鳧も聖も心々、けふの細布胸合はずと、一家の緣もこの如く、斷ち切る布は離緣の印。ヱヽそんなら私は正清殿に。ヤヽそち計りで無い妹も、古郷をしたふ詩を、扇面に書き送りし右衛門、要をはづせし其扇、親骨子骨ばら〳〵に、因を切つたる扇の去狀。

（淨瑠璃、蝶花形）

●我こひは逢ひそめてこそ增りけれしかまのかちの色ならねども。

（道經）

●玉河にさらす布にもあらなくになぞ我こひのこゝら悲しき。

（讀人不知）

●陸奥のけふのさ布の稷せばみまだむねあはぬこひもする哉。

（同）

●うらにあふとをみのあさ布とぢかへし背あかつきもその神のごと。

（爲家）

●神わざの麻ぎぬのころも神の世のてぶりおぼゆるよそひなりけり。

（千載）

●いにしへに其名きこえししづはたやおるはたものゝはじめなるらん。

（同）

●玉河に玉ちるばかりたつ涙を妹が手づくりさらすとぞ見る。

（魚彦）

●みちのくのけふの細布はたはりのなど其國にあはでおるらん。

（長流）

●火にいりてけふの細布やけずばと君もたのめよむねあはぬため。

（契沖）

●たが爲にさらせる布ぞ賤の女がわれとは更に身にもまとはで。

（春海）

●いでや我よき布着たり蟬の聲。

（芭蕉）

●御身拭淨土や北の越後布。

（言水）

●細布の胸あはせてや紙雛。

（金兎）

●木末までまつはれ登る仙人の衣にはよき木菅の蔓布。

（俵々館）

●妻こふる鹿の鳴ねは細布にむねわけてくる萩の錦木。

（眞垣）

●細布のけふばかりなる今年とてかねの工面にむねあはぬなり。

（華産）

●すゞしさは秋のきぬたに引かへて布めの光るかごの夏むし。

（賤丸）

●扇より布めもよしと廣げてはたゝみてみするかやの商人。

（時輔）

●賤の女が手おりし布やさらしなの山に眞白く咲ける卯の花。

（丸女）

●のどかさに盤の如くみづうみのやりにひさげる高宮の布。

（綾浪）

●細布の衣したつる業にしも胸あひがたき嫁と姑。

（綾成）

●ぬのきせて無い用人はよわく見え。

●念佛を布ごしにするむごい事。

（同）

●細布もそめ木も提の胸あはず。

（同）

●戸板をば布きせにする能い天氣。

（同）

●白布の脚半で選い國へ行き。

（同）

●細布はあはぬ高尾の廣い胸。

（同）

●結構な御代の頁は太平布。

（同）

●布目打つてる扇やの小夜砧。

（同）

●亂れたる麻をまとめて太平布。

（同）

●地も荒く見にくい布を細みとは。

（同）

●檳の島には洒す麻布、晩がしわざは宇治川の、波か雪かと白妙に、いざたちいでゝ布晒す、かさゝぎの渡せる橋の霜よりも。

（俗謠）

晒せる布にしろみあり候ふ。

●淺間山よりかん原見れば、晒しかけたるあさ布や。

（同）

●檳の島にはよき布さらす、我は君ゆゑ名をさらす。

（同）

●此川の流れの末のどこまで、布を流さば海まで。

（同）

●布は緯から男は女から。

（俚諺）

●木綿布子にもみの裏。

（同）

●周穆王大征西戎。西戎獻二錦語之組、火浣之布。其組切レ玉如レ泥、其布浣レ之必投二於火一。布則火色、出レ火而振レ之、皓然疑二乎雪一也。

（列子）

●布之新不レ如レ紵、々敝而不レ如レ布、或善爲レ新、或善爲レ故。

（淮南子）

○裂蕉之甘。絺布之濕。名教之樂。德裕之尊。求レ之孔易。享レ之常安。

（范純仁）

●與レ人善言。美若二布帛一。與レ人惡言。深二於矛戟一。

（孫卿子）

●寸裂之錦敝、未レ若二堅完之章布一。

（抱朴子）

●高帝曰吾奮布衣取二天下一。

（漢書）

〔ぬま〕沼

沼地。沼湖。沼澤。沼氣。靈沼。池沼。碧沼。幽沼。

岩ぬぬま。みぬま。うきぬ。みどりぬ。かくれぬ。ぬま水。みこもり。草にかゝる沼水。

●かくて日はくれ雨ふりそゝぎて、夜は丑三とおぼしき比、疾風颯とおとし來て、阿蘇沼に集る水鳥の、群れ立ちさわぐ汀渚の陣に、雜兵等が燒き捨てたる、篝火はみな滅え果てたり。寄手の軍兵、この物音に、驚き覺めて罵りどよめき、さては夜討の入るにやあらん、出でよふせげとよばはりつゝ、騎馬武者は繫げる馬に鞭をあげていらつたり。士卒は箭をたづね弓を爭ひ、或は槍長刀を河さまに挾みみなおくれじと陣門を走り出であたりを見るに、敵にはあらで浸々たる、阿蘇沼の水逆立ちて、岸にあふれ陸を浸す。沼水にはかに突衝して、人馬の足を拂ひたる、勢あたるべうもあらざれば、諸陣ひとしく避易して、矢庭に溺死するもの、いくばくなることをしらず。辛うじて脫るゝものも、弓箭を流しうちものを失ひ、岡をたづねて登らんとするに、如法暗夜の事にしあれば、東西だにも辨へず。主は溺るれども家來はこれを拯ふに由なく、父と兄は流されても、とり留めんとする子弟もあらず。瞬くひまに水かさの、常にもあらずなりしかば、ありし阿蘇沼はそこともわかたず、吉田檜木野の是方より阿蘇山の麓まで、はや大湖になりにけり。（馬琴）

●等窮が宅を出て五里計檜皮の宿をはなれてあさか山有り、路より近し。此あたり沼多し。かつみ刈る頃もやゝ近うなれば、いづれの草を花かつみとは云ふぞと、人々に得侍れども、更に知る人なし。沼を尋ね

人にとひ、かつみ〳〵と尋ねありきて日は山の端にかゝりぬ。〻　（芭蕉）

●陸奥の淺香の沼の花がつみ、且つ見し人を想草の、忍ぶもじずり誰故ぞ。亂れ心は君のため、こゝに來てだに聞てある、月の都な名のみして、釉にもうつされず、又手にも取られず。唯いたづらに水の月を、望む猿の如くにて、叫び伏して泣き居たり。（謠曲、花筐）

●矢將も軍兵も、一つになつて逃ぐれども、堤は一筋四方は沼、七八丁が其中を追ひ詰められては追ひ戻され、此處に隱れ彼處に風み、小鮎早走る川淵に、鵜を放ちたる如くなり。（淨瑠璃、國性爺）

●水草生ひて有りとも見えぬ沼水の下の心なしる人のなき。（讀人不知）

●菅山の岩がき沼のみごもりに戀やわたらんあふよしをなみ。（萬葉）

●いかほ野やいかほの沼のいかにして戀しき人を今ひとめ見ん。（拾遺）

●あはねまの釉にながるゝ涙こそ我身のうきといふべかりけれ。（師綱女）

●東路のかほやかぬさのかほよ花時ぞ共なくせなぞ戀しき。（仲實）

●かくれぬの下はふ蘆のみごもりに我ぞ物思ふ行へしらねば。（實朝）

●たえねたゞ身はかくれぬの浮きぬなはうきに茂きも人は知らずて。（春滿）

●おとにのみ聞きてみぬまの心こそよにうきぐさのたねとなりなめ。（武房）

●とはぬまのうきになれたる草なればかつみながらも猶ぞ露けき。（蘆庵）

●かつみしもうしやあさかの沼水にねを絶えてこね人の心は。（宣長）

●廣沼の一むら雨や夏げしき。（多代女）

●湯に名たついかほの沼に住みなれて蛙のうたも病氣はなし。（耳賴）

●ろもさほもきかぬ深沼のかいつばたさらば根こぎにしてかへらばや。（近住）

●いでゆあるいかほの根呂の沼水に妻をつれたる鳥もみえけり。（信人）

●あやめぐさ、ひかるゝころをえてしがな。たれが爲にと人問はゞ、のきのつまなるあさねがみ、あさかの沼はにごるとも、ひとりすめりひきやする。（俗謠）

●以ㇾ魚爲ㇾ沼、以石爲ㇾ島、魚環三游之、不ㇾ知二其千萬里一、而不ㇾ窮也。（關尹子）

●文王以二民力一、爲ㇾ臺爲ㇾ沼、而民歡樂之。（孟子）

●鴨綠未三全生二曲沼一、鶯黃先已上三桑柯一。（韓駒）

●青袍白簡風流極。碧沼紅蓮傾倒間。（李商隱）

●孔雀錦寒窺ㇾ沼見。石榴紅重墮ㇾ階聞。（皮日休）

●深々池沼輕々雨。獨倚二欄干一看二水紋一。（楊萬里）

●前有二方丈沼一、凝碧融二人情一。（同）

●雨餘幽沼淨。霞散遠峰巉。（陸龜蒙）

●引ㇾ泉聊漲ㇾ沼。鑿ㇾ磴且通ㇾ谿。（李嶠）

●王在二靈沼一、於物魚躍。（詩經）

ね ノ 部

〔ねがひ〕願（望、祈の部參照）願望。願意。歎願。懇願。請願。祈願。志願。宿願。

ねぎごと。ねがはし。後の世のがねひ。

●いでやこの世に生れては頗はしかるべきことこそ多かめれ。帝の御位はいともかしこし。竹の園生の末葉まで人間の種ならぬぞやんごとなき。一の人の御有樣はさらなり、たゞ人も舍人などたまはるきはゝゆゝしと見ゆ。その子孫までは零落にたれど猶なまめかし。それより下つ方はほどにつけつゝ時にあひ、したり顏なるも、自はいみじと思ふらめどいと口惜し。法師ばかり淺しからぬものはあらじ。人には木のはしのやうにおもはるゝよと、清少納言がかけるも、實にさることぞかし。勢益にのゝしりたるにつけて、いみじとは見えず。增賀聖のいひけんやうに、名聞ぐるしく佛の御敎にたがふらんとぞ覺ゆる。一向の世すて人はなか〳〵あらまほしき方もありなん。人は容貌有樣の勝れたらんこそあらまほしかるべけれ。ものうちいひたる、きゝにくからず、愛敬ありて調多からぬこそ飽かず向はまほしけれ。めでたしと見る人の、心劣せらるゝ本性見えんこそ、口惜しかるべけれ。人品容貌こそ生れつきたらめ、心はなどか賢きより賢にも、うつさば轉らざらん。かたち心ざまよき人も、才なくなりぬれば人品下り、顏にくさげなる人にも立ちまじりてかけずけおさるゝこそ、本意なきわざなれ。ありたきことはまことしき文の道、作文和歌管絃の道、また有職に公事のかた、人の鑑ならんこそいみじかるべけれ。手などつたなからずはしりがき、聲をかしうて拍子取り、いたましうする物から、下戸ならぬこそ男はよけれ。（兼好）

●などてかともかくも人のきゝつたへばこそあらめゝ。あだごのひじりだに、時にあたりを破りて、人のねがひをみて給はんこそ、たふとからめとの給へば、人われたすこともなく、きゝにくきこともいでまうでくれと、くるしげに思ひたれど。（紫式部）

●入道もえたへで、くやうほふたゆみていそぎ登れり。さらにそむきにし世の中も、とりかへし思ひ出でぬべく侍る。後の世にねがひ侍る所のありさまも、思ひたまへやらるゝよのさまかなと、なく〳〵めできこゆ。（同）

●十一月九日、播磨の中將ともあれなくなりぬ。雲の上に心をかけて、今一たびと願どもたてなにかしけれども、限ある世のならひなりければかなはず。忘念のみ哀に、かはゆきことも、今はのきは、思ひ定めてといひしにと悲し。（中務內侍）

●扨又滿珠を汐干に置けば、音吹きかへて沖つ風、汐なも涙をも吹き立てゝ、平地に波瀾を立て寄せ〳〵、山も入海海なも山に、成す事やすき滿干の珠、かはせど涙なる寶なれども、唯願はしきは聖人の、直なる心の眞如の玉を、授け給へや授け給へと、願も深き海となつて、其まゝ涙にぞ入りにける。（謠曲、鵜羽）

●不思議やな、是なる杉の木陰より、妙なる御聲の聞えさせ給ふぞや。願はくは末世の衆生の願をかなへ、御姿をまみえおはしませと、念願深き感涙に墨の衣を濡らすぞや。（謠曲、三輪）

●ハテしんどいとて大事の願、身をこらすといでよいものが。ムゝ身をこらすとは變である。いえ〳〵そんな事ぢやない。それなればよい者物が、欲しいといふ願ではない

か。何をわつけもない事ばかり、そうおしやんすお前の願はへ、おれが願は南賣の四つぼ、この間くさりつゞけ、さしばかりになつたから、思ひ付の百度參り、いかさまおれ樣の足の輕さは、よく〳〵の願と見えた。コリヤ連立たるゝものぢやない。（浮瑠璃、二十四孝）

●神を祈れば戀めきて、佛祈れば無情めく。二つの外に何時迄か、身を繋がるゝ牛若君、藤王一人御供にて、天下太平國土安全の爲なれば、げきどを四海に追ひ拂ひ、願を叶へたび給へと、洛外の寺社殘り無く、祈み巡らせ給ひける。（浮瑠璃、末廣鉄十二段）

●深山木をあさなゆふなにこりつみてさむさなねがふなのゝすみやき。（好忠）

●ねがはくば花の下にて春しなんそのきさらぎのもち月の比。（西行）

●我いのる願の糸のとしをへてあはでしもやは秋のたなばた。（土御門院）

●ねがはくば暫し閑路にやすらひてかゝげやせまし法の燈火。（慈圓）

●ねがふことみちくるごとや玉くしげ二見の浦にかひもよすらん。（相模）

●人なみのねがひはかけぬみなせ川ながらふべくもおもほえぬ世に。（春海）

●身のほどをおもひもわかで何とわが心にたえねねがひなるらん。（廬庵）

●ねぎとをあだにたすくな埋木の身の名におふを奚にはして。（同）

●わが願片岡山の椎柴のみのなりゆきたいかゞとぞ思ふ。（澄月）

●草の葉に願通のあつさ哉。（一茶）

●つねゞ〳〵は後世願なり相撲取。（史邦）

●戀さまゞ〳〵願の絲も白きより。（蕪村）

●冬瓜汁空也の痩な願けり。（白雄）

●出代りや在所願は母の事。（蓼太）

●此たびは母の願の身延山。（許六）

●絶えめや金の蚕。（風雪）

●誰願ぞ地藏縛りし藤の花。（凡董）

●箱根山しぐれなき日を願けり。（由之）

●一すぢの願はやすし麻の糸。（一片）

●月はなの願はやさし星佛。（道彦）

●文字なきは何を願ひに常陸帶。（風眠）

●願から牛天神にきく藤の花にこよりをかへす程さく。（寒吉）

●おもかげのかはらで年の積りけり雛の小町の願通りに。（細道）

●たむけぬる願の糸に引きそへて一筋白きほし合の川。（中住）

●おしなべて願の的もうけひかん弓矢を守る神ぞこの神。（淺桑閑）

●里人の祭るかひこの七夕に願の絲も古例をやひく。（季屋）

●あづさ弓やちほこの神にいのる也ねがひの的は武運長久。（金雞）

●千積さく天の河原はうつくしき願の糸もおよばざりけり。（百雄）

●みだの名の歌をかたみにのこしおく君が齡も四十八願。（杜影）

●そなへたる神酒に願ふば春にて人の願もきこしめすらん。（清澄）

●散つたともしらぬが佛蓮の花に先乘らぬやうに願ひこそすれ。（貞堂）

●河東ぶし内では後生ねがひなり。（川柳）

●斷食の腹に滿ちてる我が願。（同）

●五條坂御慈悲願ひに毎日出。（同）

●芝居をばやめて内裏の願なり。（同）

●一生の願を母はきゝあきる。（同）

●とらに逢ひ度いが末期の願なり。（同）

●兄嫁も芝居願はぐろになり。（同）

●むだ骨の夫婦ある時願をかけ。（同）

●びんづるのなで所なき戀の願。（同）

●思ふ願は神奈川の、沖にたゞよふ海士小舟、苦もるしづくもろともに、涙にあかす舟のうち、これやまことに潮湘の、夜の雨ともいひつべ、。（俗謠）

●瀧の岩壺なさけもふかき、心の底と汲んだが無理か、それにそなたが浮かれてゐては、わしが願も背水の泡。（同）

●わしが思ひくま筵や、すぐな操をたつてこそ、ふたまた付に、むすぶえにしの願もかなひ、いつか根びきの色まさる。（同）

●わけて逢はねばならぬ夜と、神にあこぎの願ひごと、たび重なれば岩かどに、せかれてたへん流れの浮身。（同）

●しのぶ逢瀬はひしがきを、願の心見沙門に、歩を運ぶつゞらおり。（同）

●棒ほど願ひ針ほどかなふ。（俚諺）

●戀と願はよくせよ。（同）

●願つたり叶つたり。（同）

●野有蔓草。零露漙兮。有二美一人一。清揚婉兮。邂逅相遇。適二我願一兮。（詩經）

●羅レ兵休レ卒、收二養昆弟一、共祭二先祖一。此聖人才士之行、而天下之願也。（莊子）

●等推二江湖心一、適二我魚雁願一。（韓愈）

●昨來逢二清裳一。宿願忻始副。（同）

●丈夫志二四海一。我願不レ知レ老。（陶潛）

●若非二沿淚子一。安得レ從レ所レ願。（王昌齡）

●丈夫有二志願一。誰謂我無レ成。（許謙）

●孤走豈吾願。詔書促二南征一。（揚萬里）

●宿有二青霞願一。惟應二白鷺知一。（同）

〔ねこ〕猫

快捷。噂窺。捷牙。利爪。斑文。鈎爪。眼活。毛柔。側睨。閑眠。捕レ鼠。啣レ蟬。

からねこ。のらねこ。ねこま。てがひのとら。なつけがたぎ。なくねほそき。

●花の咲きぢる折毎に、乳母なくなりしたりぞかしとのみ哀なるに、同じをりなくなり給ひし、侍從の大納言の御娘の文を見つゝ、すゞろに哀なるに、五月ばかり、夜ふくるまで物語をよみて起き居たれば、來つらん方も見えぬに、猫のいと長うないたるを驚きて見れば、いみじうをかしげなる猫あり。何處より來つる猫ぞとみるに、姉なる人、あなかま、人にきかすな。いとをかしげなる猫なり。倘はんとあるに、いみじう人なれつゝ、傍に臥したり。尋ぬる人やあるとこれを隱してかふに、すべて下衆のあたりにもよらず、つと前にのみありて、物も稜げなるは、外樣に顏をむけてくゝはず、あねおとゝの中に、つきまとはれて、さかしがりらうたげたる程に、姉の憎むことのあるに、物騷しくて、この猫を北面にのみおらせて呼ばれば、かしがましくなきのゝしれども、猶さるにてこそはと思ひてあるに、わづらふ姉おどろきて、いづら猫は、こち率てことあるを、など〳〵問へば、夢に此猫の傍に來て、おのれは侍從の大納言殿の御娘の、かくなりたるなり。さるべき緣の聊ありて、この中の君の、すゞろにあはれと思ひいで給へば、たゞしばしこゝにあるを、此頃下衆の中にありて、いみじう侘しき事といひて、いみじうなく樣は、あてにをかしげなる人と見えて、打齧きたれば、此猫の聲にてありつるが、いみじく哀なり。其後は此猫を北面にも出さず、思ひかしづく。唯獨居たる所に、此猫が對ひ居たれば、かい撫でつゝ、侍從大納言の姫君のおはするな。大納言殿に知らせ奉らばやと

いひかくれば、顔をうちまもりつゝ、長うなくし心のおもひなし、目のうちつけに例の猫にはあらず、聞き知りがほに哀なり。そのかへる年、四月の夜中ばかりに、火のことありて、大納言殿の姫君と思ひかしづき、猫も焼けぬ。大納言殿の姫君とよびしかば、聞き知りがほになきて、あゆみ来などせしかば、てゝなりし人も、めづらかに哀なる事なり。大納言に申さんなどありし程に、いみじう哀に口惜しう覚ゆ。（孝標女）

❸こゝに一の小説あり。その伺ふや彼をもてす。鈴貝一つ、鰹節一連にて、一年の儲に事足りぬ。鼠に逸物の毛をかくし、眼に六の時を刻む。新玉の年の始は、若水に手水使ひて、七種爪を研き侍るも、妻恋ふ北の心まちにや。たま〳〵涅槃会にもれたるは、風原が梅を忘れたる類にやと覚束なし。夏は牡丹のかげに眠りて、蝴蝶の夢にたはぶるゝも、終に垣根に埋まれて、隣の藪の筒をや肥しぬらんとあはれなり。秋はまたゝびの葉に触れて、己が薬を求め、冬来れば薪に入りて、灰色の名に負ふしをかし。こまと呼び、からと名づけ、とらは斑に、からすは黒し。白かねの猫の貌は四行が手に触れ、首玉の綱は女三の宮に引かる。八蜡の祭にあづかりては、孔子の喫を戒し、五の德をかぞへては、彬師のたはぶれを傳ふ。昔より國に盗あれば、將を選びてうたしめ、家に鼠あれば、彼を養ひて捕らしむ。（蜀山人）

❹上に候ふ御猫は、かうぶり玉はりて、命婦のおもとゝていとをかしければ、かしづかせ玉ふが、端に出でたるを、めのとのうまの命婦、あなまさなや、入り玉へよと呼ぶに、聞かで、日のさしあたりたる内に、うち眠り居たるを威すとて、翁丸いづく、命婦のおもと食へといふに、実にとて、しれもの走りかゝりたれば、おびえまどひて、みゞ簾の内に入りぬ。（清少納言）

❺其比相木衛門の督と申し人、折りしも春の暮つ方、風吹かず、かしこき日影を興じつゝ、故ある木立の花盛り、はつかなる萌黄の陰に亂れつゝ、挑み爭ふ鶯の數、暮れ行く庭に思はずも、手飼の猫のまとはりし、小簾の外もれし面影の、身に添ふ絆となりたるぞや。（藤曲、陀羅尼落葉）

❻去歳の秋四行法師、鎌倉へ下られしに、歌道は云ふに及ばず、弓馬のたしなみ頼朝感じ、白銀にて作れる猫、其座の引出物に給ひければ、法師の身に益なきものと、門前の童にとらせ帰られたり。此猫も武士の身には益なきたまものと、人々は思ぼされん。あつぱれ明君に備り給ふ天骨自然、此猫を給はりしは深き御心、其仔細は、猫は眼の中の瞳に刻限を現はし、時を正に知るもの故、時政に聞き及ぶ分たず、守護致せとの御事ならん。國に盗人家に満、道を背くは鼠の輩、一疋も殘らず時政に捕らせんとの御發明、勅諚の有難き水とはなさじ。此雪の解けざる内に都を鎮め、萬歳を唱へ奉らん。御心安く思召せと、猫を抱きて退出ある。（浄瑠璃、鎌倉實記）

❼あづまやのまやの軒ばに聲するは手がひのとらのつまやこふらん。（魚彦）

❽から猫のこゑうらがなしきしまのやまとにはあらぬ妻やこふらん。（蘆庵）

❾春ごひによるはうかれて咲く花のあたら春日にねぶるからねこ。（蓄蹊）

❿あひおもふをすのうちとの使ともしらでやねこのしたゝゞりけん。（沙子）

⓫手ならせばなれてたはるゝ猫の子もかくせるつめのある世なりけり。（富枝）

⓬あさ日さすいとすのつまなふすまにてねぶれる猫の安げなる哉。（宏年）

⓭よそにだによどこもしらぬのらねこのなくねは誰に契りおきけん。（寂蓮）

⓮袁さへいとおもげなる老の身のねるが上にもねるねこま哉。（盲道）

⓯なれぬるも今は中々うかりけりねこのかしづき暇なくして。（有功）

⓰猫の子やいづく筏の水馴棹。（盲水）

⓱春雨や猫に踊を教へる子。（一茶）

⓲一つ家に猫も鳴き居る春邊哉。（闌更）

⓳あら猫のかけ出す軒や冬の月。（丈草）

⓴柏木の柳もそれかあがり猫。（其角）

㉑黒猫の留守を覗くや田うゑ時。（許六）

㉒ぐわら〳〵と猫の上るや梅の花。（同）

㉓線香に眠るも猫の牡丹かな。（支考）

㉔猫の訛きく目も涼し梅の花。（野坡）

㉕日向にも尻のすわらぬ猫の妻。（東貫）

㉖飼猫のこまなでしこも見ゆるなり朕の上までのびる夏草。（和樽）

㉗人の想季はいつなりと猫問はゞ面目もなし何と答へん。（也有）

㉘たのみつるけさの目元の早變り短き猫のつらき心や。（宣秀）

㉙まよひ来てなく音もあはれから猫のなづるに爪のとぎ心なく。（綾尚）

㉚いたづらに月日の鼠はむならんねて春秋をおくるのら猫。（緑）

㉛たはれ猫命がけともみゆる迄軒のつまをぞ恋ひわたりぬる。（好文）

㉜猫はまだ鼠もとらずいもぬしては一瀬の寺に恋いのるかも。（打麻）

㉝うらめしや明け暮れ草の根をかふる月日の鼠とる猫もかな。（資之）

㉞孝行に逢うて古猫五年生き。（川柳）

㉟おびたゞし猫がくやみにこぬばかり。（同）

㊱次郎左工門とり手は猫のくそをふみ。（同）

㊲くどかれて娘は猫ともものを云ひ。（同）

㊳口上を半分猫にしてやられ。（同）

㊴此猫で俗の時なら銀煙管。（同）

㊵ぶち殺しても金になる猫をくれ。（同）

㊶猫のこわいろで道つてる無性者。（同）

㊷引越しのあとから娘猫を抱き。（同）

㊸笛を吹くやうににげゆく負けた猫。（同）

㊹せはしない猫は背中へ腹をたち。（同）

㊺見しや玉簾うちぞゆかしき思ひづま、引くな唐猫、綱にまかせて追風、くゆる心を、誰にかこちて夕ぐれ、あだにはきかぬ浮名を。（俗謡）

㊻波のよるさへ夢さへうつゝさへ、よしなの猫の身をそぼぬれて、なれよにようとは又うそばかり、それはじやうなら浮世にかゝる露のあだもの、しばしもへ。（同）

㊼ひとりまるねの手枕に、しなだれかゝる猫のつま、もしこひ死なば三味線の、かはいやこれも時のまの、あだなる色にひかれなん。（同）

㊽鼠捕る猫瓜藏す。（伊諺）

㊾犬は人に附き猫は家に附く。（同）

㊿猫も糸子も。（同）

(51)猫に小判。（同）

(52)啼き猫鼠とらず。（同）

(53)嗷嗷有レ聲爛則無。一嚢十起欲二何如一。殷勤懇レ君索二狸奴一。送二致後物一喜有レ餘。遍體斑文好牙鬚。命レ名當レ喚小於菟。必辨二我賊一隨二指呼一。已聞群黠絶二睢盱一。戒レ兒勿二輕狎一玩渠。渠能先レ汝護二籍書一。（山陽）

(54)皮毛班駁爪牙堅。食有二鮮鱗一臥有レ毡。海客徒能知二黒暗一。舟人自愛畜二烏圓一。（磨磬）

製帯非二同品一。捕鼠卿蟬是獨憐。却笑老狸
誇二玉面一。竟遭二鼎鑊一得二盤延一。（狸存齋）

●裏レ鹽迎得小狸奴。盡護山房萬卷書。慚
愧家貧資俸薄。爽無二琵琶一食無レ魚。（歐陽脩）

●緡鈎時得小鯰魚。飽臥二花陰一興有レ餘。
自是鼠嫌貧不レ到。莫レ嫌戸葉在二吾廬一。（林逋）

〔ねずみ〕鼠

鼠族。窮鼠。假鼠。狡檜。竊鼠。
盜鼠。穿レ穴。穿レ壁。

こねずみ。日のねずみ。月の鼠。
はつかねずみ。ねずなき。

●我此年まで錢一文おとさずに暮せしに、今年の大晦日は此銀の見えぬ故、胸算用違ひて、心かゝりの正月をいたせば、萬の事面白からずと、世の外聞も構はず、大聲あげて泣かれければ、家内の者ども興をさまし、我を疑はるゝ事の迷惑と、心々に諸神に祈誓をかけゝる。大方煤もはき仕舞ひて、屋根裏まで檢めける時、棟木の間より、杉原紙の一包を探し出し、よく〳〵見れば、隠居の寮ねらるゝ年玉銀に紛れなし。人の盗まぬ物は出まするぞ。さる程に悪い鼠めといへば、お祖母中々合點せられず。是程遠歩する鼠を見た事なし。頭の黒い鼠の業、是からは油斷のならぬ事と、疊たゝきて喚かれければ、藥師水風呂より上り、かゝる事には古代にも例あり。人皇三十七代孝德天皇の御時、大化元年十二月晦日に、大和國岡本の都を、難波長柄の豐崎に移させ給へば、和洲の鼠もつれて宿替しけるに、それ〳〵の世帯道具をば運ぶこそ可笑けれ。穴をくろめし古錦蔫に隠るゝ紙襖、猫の見つけぬ守袋、[illegible]の道切るとがり杭、桝落しのかいづめ、油火を消す枝切、鰹節引くてこまくら、其外嫁入の時の駕斗、鬘の頭、熊野參の小米苞まで、二日路ある所をくはへて運びければ、まして隠居と母屋、わづかの所引きまじき事にあらずと、年代記を引いて申せど、中々同心いたさず。日賢しくは仰せらるれども、目前に見ぬ事は實にならぬと申されければ、何とも詮方なく、やう〳〵案じ出し、鼠使の藤兵衛を雇ひ門が仕入れられたる、鼠使といふ言を聞きに遣はし、只今あの鼠が人のいふ言を聞き入れて、樣々の藝盡し、若衆に頼まれ戀の文使といへば、封したる文くはへて後前を見廻し、人の袖口より文を入れける。又錢一文投げて、これで餅かうて來いといへば錢をおいて餅くはへて戻る。何と〳〵我を折り給へといへば、是を見れば鼠も包金を引かまじき物にあらず。さては疑晴れました。さりながらかゝる盗心ある鼠を宿し、知られたる不祥に、滿圓一年此銀をあそばしておきたる利銀を、屹度提屋から濟し給へといひかゝり、一割半の算用にして十二月晦日の夜請取、眞の正月をするとて、此祖母ひとりねをせられける。（西鶴）

●安貞の頃、伊豫國矢野保の中に黑島といふ島あり。人里より一里ばかり離れたる所なり。かしこにかつらはざまの大工といふあみ人あり。魚をひかんとて、うかゝひありきけるに、魚のある所より光りて見ゆるに、かの島のほとりの磯ごとにおびたゞしく光りければ、怪びて網をおろし引きたりけるに、つや〳〵となくて、そこばくの鼠を引きあげて侍りけり。その鼠引き上げられて、皆々ちり〳〵に逃げ失せにけり。大工あきれてぞありける。ふしぎの事なり。すべてかの島は鼠みち〳〵て、島の物などぼつふゆの野ねずみ。（言道）

●姑女の手かひの猫のゆめのまをしばしわが世のよめの子ねずみ。（治堅）

●ねざめしてきけば雨さへふるかべのあなかしがましよはのねずみは。（秋秀）

●あれにけり西の御寺の春ねずみ佛なさへにはみにける哉。（御卿）

●菜原のしこない神の殿居すと軒ゆきかひて鼠なくなり。（正樹）

●うつばりをはしるねずみのあながちにかくれすむべき世とな思ひそ。（春陵）

●あづさ弓やねみうがちて小鼠の何さとすとかすふ〳〵となく。（繁雄）

●花に鶯ぬ是もたぐひか鼠の巣。（芭蕉）

●厠なる屑も食ふ鼠かな。（几董）

●元朝や鼠貌出すもの〻愛。（太祇）

●狗が鼠とるなり春の風。（一茶）

●鼠にもやがてなじまん冬籠。（其角）

●地鼠の食ひ折る茶子の雷かな。（闌更）

●落椿引く野鼠や雨の暮。（志竹）

●鼠追ふや椿活けたる枕上。（田福）

●白鼠はしり出でけり蕊開き。（西李）

●たが魂の家に巣くふ鼠かな。（文桃）

●もち花の火に落ち散りて匂へるはよべの鼠のはみあらしかも。（起廸）

●より合ひてこそり〳〵と寶引をひくや鼠の廿日正月。（木綱）

●大黑の棚にかざれる餅花も尙つきてくふ白ねずみ哉。（相宥）

●逃ぐるまにぬれ鼠とはなりにけり大黑傘のほしき夕立。（蟹子丸）

●喰ふにもぼさつを拜む手つきせん地ごくおとしをいとふ鼠は。（參二）

●盗人のぬの字なりにも遣ひ出で、物をかすむる夜半の鼠は。（耳類）

●染紙をはみし鼠は君が代にそむきし法の身もそこねけん。（琴音）

●秋の野に落ほを拾ふ野鼠は冬ごもりする心がまへか。（萬久住）

●ち〻つくわいちい〳〵くわいとなくならん田鼠鶉になりか〻る時。（卯寮）

●大黑は鼠のやうに里へひき。（川柳）

●見世もの〻太夫といふは鼠なり。（同）

●二代目の蕎鼠がへつて猫をとり。（同）

●置ぬしのそんとはむごい鼠喰。（同）

●水瓶へ鼠がおちて忠左衛門。（同）

●狐つき鼠とまでは望みかね。（同）

●雛棚のひよ鳥ごえを鼠來る。（同）

なも皆くひうしなひて、當時までもえ作らぬとかや。隣にこそあらめ、海のそこまで鼠の侍らんこと誠にふしぎにこそ侍れ。（成季）

●總じて世間の諺に、虎狼は防ぎ易く、鼠は防ぎ難しとは、馴れ侮って害を爲す。先其の如く、近年は出頭の荒鼠、稍ともすれば將軍の、箱の内をば窺ふ故、來源といふ逸物猫、お傍を離れてならうかと、勢こうだる詞の下、竹原堪へず立ち上り、猫と鼠の睨み合ひ、べん〳〵だらりと見て居られぬ。是非將軍を渡さずは、升落して拷問と、飛んで掛れば勝元も、しや推參と身構へし。（淨瑠璃、室町合戰）

●まづ御先へと跡につき、金で頬張る算用に、主人の命も買うて取る。二一天作ぼ盤の桁を遠へぬ白鼠、忠義忠臣忠孝の、道は一筋眞直に、打連れ御門に入りにける。（淨瑠璃、忠臣藏）

●よめの子のこねずみいかになりぬらんあなうつくしとおもほゆる哉。（法性寺入道）

●世をしのぶ心のうちのあなねずみやすくいづべきみちもあるらし。（土御門院）

●さ夜中の鼠のおとにまざれ入りて臥庵こ

❸手勢すぐつて四五人鼠持り。（同）
❹飯櫃へ鼠まんまとしのび込み。（同）
❺ねこどのといはれて公家鼠まひ。（同）
❻羅迦に提婆や蘇に鯱、月に村雲花に風、國にねずびと家には鼠、宵は天井ぐわら〳〵と、仲間ねずみをよびあつめ、相撲とるやらなどるやら、ちゅうちゅうでせい、五百七十七まがり、猫びねの字はいやでそろ。まづはうつばり越えたへ。中にも鼠の大將は、板天井の透間より、下のやうすをうかゞへば、夜もしん〳〵とふけわたり、人も靜まる行燈もしめる、さらばこれから座敷へおりやう、みな來い〳〵と打ちつれて、柱際すはごと〳〵〳〵、ごつそりごそりとおりそろへば、大將耳をよぢふつて、こりや〳〵手下のねずみども、十四五匹は茶の間料理場雜所、山葵おろしに近よるな、走りのもとに水壺あり、絲をつたふとすべりこむ。かならず〳〵わすれても、棚な道具をひきくづし、飯たき婆々をおこすなよ。さてまた燕ぶし逢者なものどもは、納戸へはいり、鞘筒長持かぢるべし。尾長のはげは行燈部屋、油徳利に尾入れて、ずるぶん油をねずるべし。扨豆ねずみのやつばらは、格子の上に釣つた唐辛子かぢるべし。廿日鼠は化粧の間、いつもの殼莖かぢるべし。われはこれにて休らはんと、遣棚へぞあがりける。爰にごり〳〵、かしこに〳〵、ぐわつたり〳〵、こゝにごり〳〵、ごとく〳〵、ぐわつたり〳〵、ぐわつたり〳〵、かゝる所に　三匹、息を切つてかけきたり、さあ〳〵大事がおこりそろわたくしどもが料理場の、着戸棚をかぢるうち、塞所に大騒動、ちよつとのぞいて候へば、赤まだらの大猫が、尾長が首すぢ引くはへ、きゆつと一こゑないたばかり、あとはごり〳〵おそろしや、片時もはやく落ちたまへと、申し上ぐれば大將驚きわぎして、ようこそはやく知らせたれ。まことのちう〳〵と、いひすて二階へあがりけり。（俗謠）

❼鼠に投るに器を忌む。（俚諺）
❽窮鼠却て猫を噛む。（同）
❾袋の中の鼠。（同）
❿鼠の狸取無師道夜。（同）
⓫時に過へば鼠も虎と爲る。（同）
⓬猫のものを鼠が狙ふ。（同）
⓭鼠類固其繁。家有二偏狹槍一厥賞亦隨微。朋案工造レ怪、舞レ庭欲レ晝レ妖。濕レ社期レ免レ敗。饑同二善飯頗一。暴比二積行噂一。倉倫自詑レ肥。穴氣寧辭レ陰。唯思淮南舉。不レ悟河東戒。嗟余守二窮僻一、有レ屋如二敝廨一。公然肆相欺。遠告來二別界一。嘐嘐鳴二鼠類一。噬々緣レ幾快。伺レ暗忌二燈然一。唱レ腥喜二餐餉一。空牀印二凝塵一。高壁蹤二隨塊一。核遺盤果亡。汁覆鼎鑊壞。齒遺駭二怒齒一。急雨疑二流噬一。書殘費二補裝一。裀滴煩二烘曬一。入レ厠客驚吁。守レ倉奴憂議。豈無二老烏圓一。昔壯今何懼。不レ修二司捕職一。乖レ頭象二猪耶一。難レ求二許遇符一。莫レ具二張湯機一。草蹊漫設機。蕩レ隧徒吹レ纊。遂令二不レ眠人一。中夜長抑鬱。君家産二銜蟬一。許贈不二以寶一。願得縱二驅撿一。淨者レ刈二潛蒯一。盡殺豈匪レ仁。去害容少レ懈。高枕幸無レ著。君惠當二再拜一。（高啓）

❽永有二某氏者一、畏レ日拘二忌異一甚。以爲己生歲直レ子、鼠子神也。因愛レ鼠不レ畜二猫犬一、禁レ僮勿レ擊レ鼠、倉廩庖厨、悉以恣レ鼠不レ問。由レ是鼠相告、皆來二某氏一、飽食而無レ禍。某氏室無二完器一、裸無二完衣一、飲食大率鼠之餘也。晝累々與人兼行、夜則竊齧鬬暴。其聲萬狀、不レ可二以寐一、終不レ厭。數歲、某氏徙二居他州一、後人來居、鼠爲レ驚如レ故。其人曰、是陰類惡物也。盜殺尤甚、且何以至レ是乎哉。假二五六貓一、閉門撤レ瓦漏レ穴、購レ僮羅捕レ之、殺レ鼠如レ丘、棄二之隙處一、纔數月乃已。嗚呼彼以二其飽食無レ禍、爲レ可レ恒也哉。（柳子厚）

❾誰謂鼠無レ牙。何以穿二我墉一。誰謂女無レ家。何以速二我訟一。雖レ速二我訟一。亦不二女從一。（詩經）

❿四壁荒寒燈不レ紅。近人飢鼠太匆々。中宵起坐啞然笑。此席須レ甘鄰鼎同。（竹外）

⓫偃鼠飲レ河。不過二滿腹一。（莊子）

〔ねたみ〕妒

嫉妒。妒婦。嫉妒。讒妒。妒視。憎妒。怨恨。

ものゑんじ。ねたまし。

●はやうまだいとげらうに侍りし時、あはれと思ふ人侍りき。きこえさせつるやうに、かたちなどいとまほにも侍らざりしかば、わかきほどのすき心ちには、此人をとまりにとも思ひとゞめ侍らず。よるべとは思ひながら、さう〳〵しくてとかくまぎれありきはべりしを、ものゑんじをいたくし侍りしかば、心づきなう、いとかゝらでおひらかならぬしかばと思ひつゝ、あまりいとゆるしなく、うたがひ侍りしもうるさくて、かくかずならぬ身をみもはなたで、などかくしも思ふらんと、心ぐるしきをり〳〵も侍りて、自然に心をさめらるゝやうになん侍りし。この女のあるやう（中略）心もけしうはあらず侍りしかど、たゞこのにくきかた一つなん、心をさめず侍りし。そのかみ思ひ侍りしやう、かゝるあながちにしたがひおぢたるひとなめり。いかでころばかりのわざして、おどしてこのかたもすこしよろしくもなり、さかなさもやめんと思ひて、まことにうしなども思ひて、たえぬべきけしきならば、かばかり我にしたがふ心ならば、おもひこりなんとおもひたまへと、ことさらになさけなくつれなきさまをみせて、れいのはらだちゑんずるに、かくおぞましくば、いみじきちぎりふかくとも、たえて又見じ、かぎりと思はゞ、かくわりなき物うたがひはせよ。行さきながく見えんと思はゞ、つらきことありとも、念じてなのめに思ひなりて、かゝる心だにうせなば、いと哀となん思ふべき。人なみ〳〵にもなり、すこしおとなびんにそへて、またならぶ人なくあるべきなど、かしこくをしへたつるかなと思ひ給へて、我たけくいひそし侍るに、すこしうちわらひて、よろづにみだてなく、物げなきほどをみすぐして、人かずなる世もやとまつかたは、いとのどかに思ひなされて、心やましくもあらず。つらき心を忍びて思ひなほらんなりをみつけんと、年月をかさねんあひなだのみは、いとくるしくなんあるべければ、かたみにそむきぬべきさまになんあると、ねたげにいふ時に、女もえをさめぬすぢにて、およびひとつをひきよせつゝ、くいて侍りしを、おどろ〳〵しくかこちて、かゝるきずさへつきぬれば、いよ〳〵まじらひをすべきにもあらず。はづかしめ給ふめる、つかさ位、いとゞしくなにゝつけてかは人めかん。世を亡むきぬべき身なめりなどいひおどして、さらばけふこそかぎりなめれと、此およびをかゝめてまかでぬ。（紫式部）

❷見すまじき人に、外へやりたる文、取り遣へて持てゆきたるねたし。實に過ちてけりとはいはで、口かたうあらがひたる、人目をだに思はず走りもうちつゞし。おも

しろゝ萩、薄、などを植ゑて見る程に、長櫃もたるもの、鋤など提げて、たゞほりに堀りていねるこそ、わびしうねたかりけれ。よろしき人などのあるをりは、さもせぬものを、いみじう制すれど、唯すこしなどいひていねる、言ふかひなくねたし。受領などの來て無禮に物いひ、さりとて我をばいかゞとおもひたるけはひに、言ひ出でたるいとねたげなり。見すまじき人の、文か引きとりて、庭におりて見たてる、いとわびしうねたく、追ひてゆけど、簾の許にとまりて見るこそ、とびも出でぬべき心地すれ。すゞろなる事腹立ちて、同じ所にも寢ず、身じくり出づるを、しのびてひきよすれど、理なく心異なれば、あまりになりて、人もさばよかんなりと怨じて、かいくゞみて臥しぬる後、いと寒き折などに、唯ひとへぎぬばかりにて、あやにくがりて、大かた皆人もねたるに、さすがに起き居らん怪しくて、夜のふくるまゝに、ねたく起きてぞいねべかりけゝなど、思ひ臥したるに、奥にも外にも、物うちなりなどして恐ろしければ、やをらまろび寄りて、きぬ引きあぐるに、虚寢したるこそいとねたけれ。

猶こそこほがりたまはめなどいひたるよ。（清少納言）

●頃は、彌生に、又花のさくぞや。見ればよそめもねたましき、花のうはなり打たんとて、桂の立枝を折りもちて、みゝなしの山風、松風春風も、吹きよせて〳〵、雪と散れ櫻子、雲となれ櫻子、花は根にかへれ、われも人しれず、ねたさもねたし後妻を、打ち散らし打ち散らす、中に打てども、去らぬは家の犬ざくら、花に伏して吠えさけび、なやみ亂るゝ花心、うねみの山ふとなりし、因果のほのほの緋ざくら子、さて懲りやさて懲りや。（謠曲、三山）

●胸に燃えたつほむらの煩惱、月小夜が懷胎とはねたましや恨めしや。人はそれぞといざ白絹、鬼女の面をかくし持ち、あたり見廻はし首尾よしと、姿なかへる邪鬼の形、庭のたまりの泉水に、うつす姿に我身から、ぞつと身の毛も怒に、穗にあらはるゝ糸薄、菊のしげみを傳ひ行く、つもる恨の數々をいつかはらさん。今宵の中に、思ひしらせん思ひしれ。持ちたる鍬は無明の利鎌、しんゐのほむらは猛火のねつたう、湯玉となつてどろ〳〵、どつと吹いたる風につれ、庭の木草のざは〳〵と、さは立つ中をわけまよふ、逢ひ見し時はわれならで、枕は外にかはさじと、いひしも今はあだ涙の、水にうつらふ月小夜が、なじみはるか遥咲の、薬の實ばへの種殘すは、腹立や恨めしや。我一念のつきそひて、あんのんならじやどり木を、突きつらぬいてきりやぶり、此世をさらば我獨、思ひ思はれ思ひのかづら、亂れ髪はら〳〵〳〵、彼橋姫の怨念も是には過ぎじと恐しゝ。恐れ恐るゝ小車の、回る因果はくるりくるり〳〵、くるしき此身は誰故ぞ。あの女故なすわざと、思へばいとゞつらにくや。にくや〳〵の肉おほひ、かづきし面は其儘に、生れ付いたる二つの角、おのれと動く如くにて、我身もあきれこはいかに、取るにとられず、ぬけど放れぬ執念の、鳴動するぞ淺ましき。（淨瑠璃、時頼記）

●おもふてふことをねたくぞふるしける君にのみこそいふべかりけれ。（忠岑）

●みわたせばもみぢしにけり山里はねたくぞけふはひとりきにける。（道濟）

●ねたきこと歸るさならばかりがねをかつきゝつゝもわれはゆかまし。（貫之）

●いつかはとこたへんことのねたきかなおもひもしらずうらみきかせよ。（四行）

●のせてやるわが心さへちゞめおきてねたくもかへすむな車哉。（頼政）

●年へてもあひ見ん事はかたしきの松のねたくもみなれそなれて。（たみ子）

●まつ人をさそはぬ月の山のはにねたくもはれて出でにけるかな。（契沖）

●ふえ竹のいかなるふしをかごとにてねたくも人の遠ざかるらん。（枝直）

●ながめつゝ月をねたしとみる人の心やうける雲となりけん。（千陰）

●月清し風なたゆみそかゝるよはかならず雲のねたしとぞたつ。（蘆庵）

●夕涼姤しや湖のあり所。（言水）

●姤まるゝ人の園生の牡丹哉。（几董）

●姤文字貞とよみたし松浦潟。（川柳）

●秀歌の姤みにも出る角だらひ。（同）

●鏡から出たといふ面で女房やき。（同）

●神木へかすがいコイツ極嫉姤。（同）

●身は捨草のすてられて、ながれしこの身は淀川の、なにをたよりに浮草の、波にゆらゝうたかたの、あはぬは君がなさけなや。ねたましや。これは若草身をうらみぐさ、あきもあかれもせぬなかなれど、後にのこりてつたなきこの身、せめてあはれと思へかし。（俗謡）

●遠山おろし磯千鳥、今日のうき身に物すごく、心揺厚路たちいで、難波をあとによしあしを、恨みねたみて春秋を、おもひかさねておなつは今を旅はじめ。（同）

●あれあれを見や。蝶は榮種に榮種は蝶の、つがひになれぬ妹脊の中を、見るにねたましゝうらやまし。（同）

●さまがわるいかわがあしかろか、姤む心は菅の根か。（同）

●叔向之母、姤二叔虎之母美一而不レ使。其子皆諫二其母一。其母曰、深山大澤實生二龍蛇一。彼美余懼レ其生二龍蛇一以禍レ汝、余何愛焉。使二往視一レ嬢、生二叔虎一。（左傳）

●人之嫉姤蓋起二於脾臟一也。士無二正形一、故姤レ之無レ準也。婦人則姤劇者、乘二陰氣一也。（雲笈）

●二八能歌得レ進レ名。人言選入便光榮。豈知后多嫉姤。不レ許君前唱二一聲一。（段成式）

●拂レ檻柳添吟鬚綠。壓レ闌花妬舞衣紅。（黄庚）

●多情翻却似二無情一。贏得百花無限姤。（歐陽修）

●蛾眉積二讒姤一。魚目嗤二璵璠一。（李白）

●適秀應レ無レ姤。奇香擯レ有レ仙。（薛能）

●知二衆嫉之嫉姤一兮、何必揚二衆々之蛾眉一。（楊雄）

●僭高者人姤レ之、官大者主惡レ之。（列子）

●麗色何相姤。嘉名偶自同。（韓愈）

〔ねのひ〕子の日

小松原。いはね松。玉すゝき。ひめ小松。野邊の諸人。はつねをいはふ。松のわか葉。さしそふ千代。千とせをひく。春のまどゐ。

●日うら〳〵と照りて清ぎゆく。爪のいと長くなりにたるを見て、日を數ふれば、けふは子の日なりければきらず。睦月なれば、京の子の日の事いひいでゝ、小松もがなといへど、海の中なれば難しかし。ある人のかきて出せる歌、

見つかな今日は子の日か蓋ならばうみ松をだに引かましものを、

とぞいへる。海にて子の日の歌にてはいが

ゝあらん。またある人のよめる歌、

今日なれど若菜もつまず春日野の我淵ぎ渡る浦になければ。　（貞之）

●けふしも雪のたえまあれば、例の小松原にものせんとて、友だち打つれてゆくに、鶯も千代のはつねを調ぶるにやあらん、小松のうれに、なきて木傳ふなんなかしかりける。いかでもゝよろこびの聲ながらひかばやと、何がしの立さまよふに、かたへの木になきうつるを見て、鶯なのべにと打ずして、鳴きつる松をひけるさま、いうにめでたし。かくてかはらけ傾けつゝ、手毎にものせる松を、とりゝ〳〵に千代八千代など、ことほぎ云ひあへるに、かの某の松の上に鳴く鶯のといへるはいみじうなん。夕日の傾きなんとすれば、いざ歸りなんとて、山話にかゝりたるに、又なければ賴基朝臣の、野邊に小松を引さつれてといふ古歌のおもひいでられて。　（尊澄）

❷今日は子の日なりけり。げに千年の春をかけて祝はんに、理なる日なり。姫君の御方に渡り給へれば、童下仕など、御前の山の小松ひき遊ぶ。若き人々の心地ども、おき所なく見ゆ。北の方とゞよい、わざとがましくもあつめたる、鬢籠ども愉破子なども、思ふこゝろあらんかし。　（紫式部）

●實に我ながら身の業の、浮世の數に有りながら、御調にも取り分きて、猶天照す氷の物や、他にも異なる捧物、寂感以て甚しき、玉體を拜するも、深雪を運ぶ故とか や。然れば年立つ初春の、初子の今日の玉帚、手に取るからにゆらぐ玉の、翁さびたる山陰の、去年のまゝにて降り續く、雪のしづりをかき集めて、木の下水にかき入れて、氷を重ね雪を積みて、待ち居れば春過ぎて、はや夏山になりぬれば、いとゞ氷室の構して、立ち去る事も夏蔭の、水にも住める氷室守、夏衣なれども、袖さゆる氣色なりけり。　（謠曲、氷室）

❸長草の原さ原かず家の風、吹き傳へたる將軍職、頼業公の御威光、旭耀く東山、今日の子の日の御遊は、昔のためし新玉の、春に引替へ弓取の、諸大名の臾方へ、名にし負ふてふ姫小松、取りはやせとの仰をうけ、思ひ〳〵の晴小袖、お日の正月御壽命は、いさの松原末廣の、扇を顔に格子窓、或は鼠鳴き猫撫聲、晴々しくぞ見えにける。　（淨瑠璃、傾城無間鐘）

❹人の情に夕霧が、思ひもよらぬ此春の、子の日を根から根引の松に、かゝる藤屋の伊左衛門、我子の顔の見まほしく、ならはぬ鶯の片はなを、隱れて忍ぶ頬冠り。　（淨瑠璃、夕霧）

❺初春のはつねのけふの玉帚手に取るからにゆらぐ玉のを。　（家持）

❻引きて見る子の日の松はほどなきをいかで籠れる千代にかあるらん。　（惠慶）

❼子の日するのべの小松のなかりせばちよの例に何をひかまし。　（忠岑）

❽淺緑のべのかすみのたなびくにけふの小松をまかせつる哉。　（經信）

●松ならば引く人けふはありなまし袖のみどりはかひなかりける。　（能宣）

❾初春のはつねのけふののどけさにおほ宮人の野べの遊する。　（土御）

❿船岡や松とみゆきのあとをこそ千代の子の日のためしにはひけ。　（春海）

⓫門松の今一しほの春の色も子の日にあへるけふやまさらむ。　（契沖）

⓬いざゝらば鶯きかん松ひかん春くるけふぞはつねなりける。　（枝直）

●む月たつけふのはつねの小松原霞こそ先たなびきにけれ。　（千隆）

●子の日しに都へ行かん友もがな。　（芭蕉）

⓭磯若て芝にごろりと子の日哉。　（一茶）

⓮君が手の松脂くさき子の日哉。　（闌更）

●掛り舟岬のまつに子の日せよ。　（白雄）

●豆畑のあとに兎の子の日かな。　（道彦）

●手を添へて引かせ參らす小松哉。　（几董）

⓯老が身や枝に結びし小松曳。　（樓良）

⓰兵のひかへてふたり子の日哉。　（其角）

⓱獨寢もよき宿とらん初子の日。　（去來）

⓲此君とけふはひかるゝ小松かな。　（蓼太）

●子の日する野べに小松の大臣は今も貴者のためしにぞ引く。　（赤良）

●けふはまた引手あまたの姫小松たれとねの日の春ののべ紙。　（常江）

●いく千代をへたと上手もいらぬなりよはひを野邊の小松引くふね。　（蟹方）

●千とせをものべの子の日の夢にさへれこと引くなりはるの若松。　（水益）

●せちくうてすぐに子の日の松引かん年ふる後はうしに成るとも。　（保留）

⓳けふ引かん松に上手はいらぬなり千とせをへたの手宮しだい。　（立門）

⓴大内の位高きも子の日にはひくきにならん野べの小松を。　（里繁）

●子の日とてふく大黒の袋ほどふまへて引かん千代の小松を。　（兎丸）

㉑躍り出でゝいざや引きなん鹿しま松千とせのことをふれるためしに。　（綾人）

㉒人なみに小松引かばや引く道のあながち千代をへやうではなし。　（古渡）

㉓初子の日かざ翼をする御遊なり。（川柳）

●千代のためしに植うべきを引きこめき。　（同）

㉔身を逝さまに小松引く初子の日。（同）

㉕こはめうが抱いて子の日の姫小松。　（同）

㉖子の日ほど花や晦日に松の散り。（同）

㉗彈き初に杵屋子の日に松盡し。　（同）

㉘初子の日茶腹で語る後覓場。　（同）

●平家の代子の日遊びは小松引き。（同）

●小松屋で子の日は金の有る大臣。（同）

●初子の日衣冠にまれな力わざ。　（同）

●子の日から君にひかれて若松や。（同）

㉙子の日せし松によりにし寄生木の、とみしかつらも露にぬれ、しぐれの雲にあふと見し、あらしの木のは塵塚に、ちりもとまらぬ三瀬川。　（俗謠）

●いろかへぬ松にみどりと子の日して、千世とかけなば八千世とうたへ、嬉しがつたり、かくれし袖に、つゝむはむかし今は身に、あまりて深き瀧つせの、玉ちる水ともろともに、のぼりやすらん濱の魚。（同）

●子の日爪きらず。　（俚諺）

㉚倚二松樹一以醒レ腰習二風霜之難一犯。和二藥蕊一而吸レ日期二氣味之克調一。　（菅公）

●倚二松根一而攀レ腰千年之翠滿一手。折二梅花一而插レ頭二月之雪落一衣。　（尊敬）

【ねはん】 涅槃

佛滅。鶴林。白樹。寂滅。眞如。彼岸。常住。沙羅双樹。

わかれのには。つるの林。薪つく。けぶりたゆ。

●行々おもへば、すぎ來ぬるこのあひだの山河は夢に見つるかうつゝに見つるか。きのふとやいはんけふとやいはん、昔を今とおもへば我身老いたり。今み昔とおもへば我心わかし。古今をへだつるものは我心の

中懶なり。生死涅槃猶如昨夢といへるもあはれにこそおぼゆれ。きのふ過ぎにしあとはけふの夢となり、今日此處なすぐる、あすいづれの所にして、今は昨日といはん。誠にこれ過ぎゐるかたの歳月を、夢よりゆめにうつりぬ。きのふけふの山路は雲より雲にいる。（光行）

●この故に諸佛悪趣に出現して、濟度に暇なしといへども、凡夫は無邊無數なり。佛縁なきものは無佛世界に生じ、佛性なきものは苦性道中におつ。縁度あまねからざるが爲に、世尊涅槃の室に入りて、寂滅爲樂と教へ給へり。げに生あるものは必死あり。形あるもの滅びざるなし。機圓熟に滿つるときは、太陽いるが如く、積氷の消ゆるが如し。誰か一人のとどまるものあらんや。（馬琴）

●有情非情皆共成佛道、願むべし、願むべしや。五十二類も我同性の、涅槃に引かれて、眞如の月の、夜汐に浮びつゝ是まで來れり、有り難や。（謠曲、鵜）

●あら殊勝なり。實にも大師は、生有りながら、生死涅槃に入り、定まれる高野の奥、今此山にまのあたり、昔薩埵の因明を授かり、慈氏の下生を待ち給ふ事、人佛不生の妙體なり。（謠曲、高野物狂）

●それ金谷の春の花は、一衰の色を見せ、姑蘇臺の秋の月は、涅槃の雲に隱れぬ。（謠曲、祇王）

●それ乾坤の間に生をうけ、形あるものは天命あり。始めあれば終りあり。三界の教主大覺世尊、耆闍が良藥適はずして、跋提河の涅槃に入り給ふ。病者は佛體、醫師は耆闍、定業の天命、藥によらば釋尊入滅あるべきか。秦の始皇は不老不死の藥を得んと、上は碧落、下黄泉を探せども求めず。但天竺の外道の法は億萬劫を保ち、中華の仙術形を離れて、氣を食ひ風を飲み、千歳を延ぶれども、生死の悟りを得ざる故、道の苦輪を廻つて地獄に陷ると承る。（淨瑠璃、孕常盤）

●こひし〳〵と濱邊の小石、一重積んでは　二世と契りし妻兒の爲め、二重積んでは、裳の河原に迷ふ子の爲め、三重積んでは、菩提の爲めに塔を積み、哀れ果敢なきの、菩提の爲めに塔を積み、哀れ果敢なき我々まで、導き給へ涅槃の岸、吊ふ法の聲迄も、涙に連れて出で舟の、ともに名殘や惜むらん。（淨瑠璃、大友眞鳥）

●いにしへの別のにはにあへりともけふのなみだぞなみだならまし。（光源）

●わかれけん昔にあはぬ涙こそなほざりならず悲しかりけれ。（赤染衛門）

●世をさらす月かくれにしさよ中はあはれやみにやみなまどひけん。（伊勢大輔）

●末の世をてらしてこそは二月の半の月はくもがくれけれ。（澄世）

●二月の半の空の夜半の月入りにしあとのやみぞかなしき。（西音）

●古への鶴の林のもみぢ葉はちるぞめでたきいはれなりける。（有功）

●二月や黄金花ちる木のもとに現ともなくゐるはたが子ぞ。（名歪）

●薪つきげぶりたえずは五十あまりときおくのりのかひやなからん。（蕉蹊）

●ゑにかけるこのしたぶしのみほとけも同じところにおどろかすらん。（奥沖）

●佛だになほかりがねの雲がくれ北をとこよとけふぞかへれる。（同）

●鼠とる涅槃の猫と跳めけり。（青水）

●涅槃會や鑊手合はする珠數の音。（芭蕉）

●如月の日和もよしや十五日。（鬼貫）

●紅梅や今日は涅槃に香をさゝげ。（杉風）

●かゝる世に出でゝも説かずねはん像。（關東）

●今は三とせぼさつの中のねはん哉。（大江丸）

●珠數かけて山鳩並ぶ涅槃哉。（一茶）

●涅槃會や雲下り來る音羽山。（曉臺）

●一休は何とおよるぞ涅槃の日。（凡董）

●藏寺や蜃が上げたる涅槃像。（士朗）

●ねはん會や往來の人をひまの駒。（白雄）

●ねはん會や留守する人も肘枕。（蕉太）

●かけものゝねはんの像にいみじくもほろりと落ちし鹿の角軸。（唐丸）

●四行も同じ日とてやかたへにも猫はおかざるねはん會の像。（梅員）

●草や木に藥とふれる春雨も楢へかへるねはん會のこゝろ。（泉　）

●伏しながむ老のめがねの曇物に涙のしみも見えぬ涅槃繪。（方すみ）

●嘲るも吼ゆるも泣くも夢の世と獏もしをるゝねはん像かな。（由めみ）

●つい假にころりとうたゝ涅槃像こや手枕のはじめなるらん。（豆人）

●春の夜の夢斗なる手枕にほとけも今はねはん像哉。（千卷）

●暦なき山田の賤は涅槃會の後もぼさつの種おろすらん。（仲貫）

●いける物はもれじなとてや突けさにけものゝ炭も出づるねはんゑ。（右大臣）

●いろ〳〵な啼聲を聞く涅槃像。（川柳）

●御涅槃に仁王始めてかしこまり。（同）

●同向院ばかり涅槃に猫が見え。（同）

●子供の目には面白いねはん像。（同）

●虫けらと一座に二王泣いてゐる。（同）

●ねはん會もかまはず猫は妻を戀ひ。（同）

●あれさもう涅槃に入るとやしゆだら女。（同）

●涅槃の掛地道具屋の寢かし物。（同）

●釋迦さまイのうと泣てる涅槃像。（同）

●和の無二佛は御涅槃が卯月也。（同）

●佛ももとはおもはくに、こひぢのきつなを結んでは、ともに涅槃の長まくら、かはさんしたときくものを、ましていはんやわれ〳〵が、夢のうき世の假橋に、おくや霜夜の鉢叩。（俗謡）

●一佛出世二佛涅槃。（俚諺）

●雪のはては涅槃。（同）

●讖云、歸去來。窺鄉不可停。曠劫來流轉六道、盡皆遲。到處無餘樂、唯聞悲嘆聲。舉此生平、後入彼涅槃城。（善導）

●說到涅槃能事畢。苦空哀獸尚依々。不知揮手去何處。三界萬靈同一歸。（星巖）

●當知生死之家以疑爲所止、涅槃之城以信爲能入。（源空）

〔ねんぶつ〕念佛

易行。清淨。信仰。歸依。往生。信樂。淨土。求道。稱名。讀經。おこなひ。みのり。み名をとなふる。十たびのみな。ふかきちかひ。あみだ佛。

●十七日の月さし出でゝ、かはらのほど、御さきの火もほのかなるに、鳥邊野のかたなどみやりたる程など、物むつかしきもなにとも覺え給はず、かきみだる心地し給ひておはしつきぬ。あたりさへすごきに、いた屋のかたはらに堂たてゝ、おこなへるあまのすまひいと哀なり。みあかしのかげほのかにすきてみゆ。その屋には女ひとりなくこゑのみして、との方に法師ばらの二三人物語しつゝ、わざとのこゑたてぬ念佛ぞ

する。寺々のみやもみなおこなひはてゝ、いとしめやかなり。清水のかたぞ光おほく見えて、人のけはひしげかりける。このあまぎみのこなる大とこの、こゑたふとくて、經うちよみたるに涙のこりなくおぼさる。（紫式部）

●かくて女院は、空しく年月を送らせ給ふ程に、例ならぬ御心地出て來させ給ひて、打ち臥させ給ひしが、日比より思し召し設けたる御事なれば、佛の御手にかけられたりける、五色の糸をひかへつゝ、南無西方極樂世界の教主彌陀如來、本願過ち給はずば、必引き上げ給へとて、御念佛ありしかば、大納言の佐の局、阿波の内侍、左右に候ひて、今を限の御名殘惜しさに、聲々におめき叫び給ひけり。御念佛の御聲、漸々弱らせまし〳〵ければ、西に紫雲棚引き、異香室にみちて、音樂空にきこゆ。限ある御事なれば延久二年二月中旬に、一期終らせ給ひけり。（平家物語）

❷世に一念十念にて往生すといへばとて、念佛を簡相に申すは、信が行をさまたぐるなり。念々捨てざるものといへばとて、一念十念を不定と思ふは、行が信をさまたぐるなり。信ぜば一念に生となりて、行せば一か たはげむべし。一念を不足と思ふは念々の念佛、ことに不信の念佛になるなり。其故は阿彌陀佛は一念に一度の往生をあておき給へば念々に往生の業となるなり。（法然）

❸今は何と御嘆き候ひてもかひなき事、たゞ念佛を御申し候ひて、後世を御吊ひ候へ。すでに月出で河風も、はや更け過ぐる夜念佛の、時節なればと面々に、鉦鼓を鳴らしすゝむれば、世は餘りの悲しさに、念佛をさへ申さずして、唯ひれふして泣き居たり。（謠曲、隅田川）

❹あれ〳〵明星樣も高々と、明方に程はない。此文日に街へて未來まで 持ちまする。最期の苦患に離れたら、含ませて下さんせ。念佛も心で申す。こな樣日で高々と、勸めて殺して下さんせと、文ひん捻いてしつかとくはへ、兩手は合掌心に念佛、顏で髮剃教へつゝ、早うと急ぐ目元にも、可愛男を見をさめの、涙は玉を列ねたり。（淨瑠璃、心中刄）

❺ちはやふる花のすだれを卷きあげてねぶつの聲をきくぞうれしき。（玉葉）

❻夢さむる鐘のひゞきに打そへて十度の御名をとなへつる哉。（西行）

❼嬉しくぞ名をたもつだにあだならぬ御法の花に身を結びける。（快修）

❽ちかひなばちひろの海にたとふなり露もたのまば數に入りなん。（崇德院）

❾たらちねのなむあみだぶといふ聲は嬉しきものゝ悲しかりけり。（蘆菴）

❿あみだ佛と十聲となへてまどろまんながき眠になりもこそすれ。（法然）

⓫あみだ佛といふより外はつの國のなにはの事もあしかりぬべし。（同）

⓬あみだ佛と心は西にうつせみのもぬけはてたる聲ぞ涼しき。（同）

⓭後の世に我を忘れぬ人もあらば彌陀たのむ心おこせよ、（蓮如）

⓮世をすてゝあみだ佛を頼む身はなほり思ふぞうれしかりける。（永觀）

⓯世にさかる花にも念佛申しけり。（芭蕉）

⓰潅佛やとりあげ婆々の御念佛。（許六）

⓱あの世より先春ちかし寒念佛。（也有）

⓲氣にむかば念佛申せよ御忌の場。（凡董）

⓳永さ日を言はで暮るゝや壬生念佛。（蕪村）

⓴溫飩屋へ行く念佛なり夜の雪。（其角）

●一夜でも寒念佛のつもり哉。（一茶）

●旗食ひし人の寢言の念佛哉。（太祇）

●橋の月寒乞食の念佛かな。（召波）

●ありがたやりんきの角をもぎりなす一口々の念佛の德。（下住）

●極樂も地獄も往生あらばこそ何國をあてに鬼の念佛。（大江）

●念佛より數つまれたることの葉の花のうてなにのりておはさん。（天地根）

●明けくれにつみかさねたる車引身をうしとてや願ふ念佛。（左武喜）

●鉦の音もしばし閉ぢの寒念佛搖なき人や鐘木とりけん。（千秋庵）

●うぐひすの朝題目や夕ぐれに鳴くは蛙のうたねぶつかも。（香保留）

●たましひのごたつく上に常念佛。（川柳）

●直が出來て念佛申すはや桶や。（同）

●寒念佛いつも朝湯の閉閤し。（同）

●念佛を十人ほどで引きのばし。（同）

●寒念佛みりゝみりゝとあるくなり。（同）

●あかね戸を外で手傳ふ寒念佛。（同）

●寒念佛蕎麥湯の禮にちやんと打ち。（同）

●念佛も四五へん入れるどぜう汁。（同）

●子ども〳〵よ髮結てとらしよ。いろはにちりぬるをわか我世、たれぞつねならむ、うゐの奥山な、今朝こえて、あさきゆめみじ、ゑひもせず京、宵にや和讃夜中にや法華經、曉おきては融通の念佛、紙子々々、安倍川紙子へ。（俗謠）

●ときしめす佛のちかひ跡たえず、寒き夜道に修行者の、法の案内も世につれて、はでな念佛のこゑ〳〵や、稱名してぞ通りける。（同）

❶鬼のそら念佛。（俚諺）

❷そら念佛も三合とまり。（同）

❸馬の耳に念佛。（同）

●朝題目に夕念佛。（同）

❹念佛と食物は一日が大事。（同）

●諸行非機生時、念佛往生當機得時、惑障豈唐捐哉。當知隨他之前、暫雖開定散門、隨自之後、還閉定散門。一開以後永不閉者、唯是念佛一門、彌陀本願釋尊附屬意在斯矣。（源空）

❺彌陀身光如金山。相好光明照十方。唯有念佛蒙光攝。當知本願最爲強。六方如來舒舌記。專稱名號至西方。到彼蓮開妙法。十地願行自然彰。（善導）

●念々稱名常懺悔。人能念佛々還憶。凡聖相知境相照。卽是衆生增上緣。（同）

〔ねむり〕眠

睡眠。醉眠。惰眠。春眠。熟眠。安眠。快眠。晏眠。

うたゝね。あさね。ひるね。まどろむ。

●御賀茂詣の日は、社頭にて、三度の御かはらけ定りてまゐらするわざなるを、その時には彌宣神主も心えて大かはらけをぞまゐらせしに、三度はさらなる事にて、七八度などめして、上の社に參り給ふ道にては、やがてのけざまにしりの方を御枕にて、不覺におほとのごもりぬ。一の大納言にては、この御堂ぞおはしましゝかば、御簾ずるに夜に入りぬれば、御前の松のひかりにとほりて、御すきかげのおはしまさぬは、あやしと思し召しけるに、參りつかせ給ひて、御車かきおろしたれど、えしらせ給はず。いかにと思へど、御前どもゝえおどろかし申さで、只候ふなめるに、入道殿おりさ

せ給へるに、さてあるべき事ならねば、軟の外ながら高やかに、やゝと御扇をならしなどせさせ給へど、おどろき給はねば、近くゐよりて、我の御袴の裾を、荒らかにひかせ給ふをりぞ、おどろかせ給ひて、さて御用意はならはせ給へれば、御櫛笄かくし給へりけろ、とり出でゝ、つくろひなどして、おりさせ給ひけるに、いさゝかさりげなく済げにおはしましければ、さばかり酔ひなん人の、その夜は起きあがるべきかは、それぞこの殿の御上戸はよくおはしましける。（為業）

●そも〳〵、我門の風雅には眠るべきもの五つあり。天にねむり、地に眠り、人にねむり、月花にねむり、さて俳諧にねむる事なり。それ天地人に眠る時は、天地人のあはれみにまかせて、おのが理風を用ゐざるの謂なり。次に月花にねむる時は、月花はさのみ目にて見れど、心の風雅を忘れざらんには、四時の愛におくれじとの謂なり。まして俳諧にねむる時は、世間の是非に心をとめず、蘆所の枕の音に耳をそばだてず、目のさめたらん時、目にあそびなば、雑行の念怖にはまさらんとの謂なり。此五つのものを眠り得て、なら茶に三石の意味はしろべし。さればとて朝ね宵まどひの、無下にうき名はとるべからずと、此一鞭を加ふ。（東花坊）

●ふた親ながらなき身ぞと、しろやしらず や稚兒は、母を墓はでで大人しく、或は外に出で、門に立ちて、獨遊に餘念なき、鳩の車に竹馬に、走りつかれしうたゝねの、袖に衣おくものもなき、ねがほを見れば親に似て、逞しげなる生育も、今年も末は遊なろ、土用なかばにたつといふ、秋の風より悲しきは、殘れる老の身にこそと、ひとりごちつゝ抱き揚ぐれば、ゆめか現か懐へ手をさし入れて蕊みたる、乳房を探ぐるも哀なり。（馬琴）

●七月ばかりに、風のいとう吹き、雨などのさわがしき日、大かたいと涼しければ、扇もうち忘れたるに、汗の香少しかゝへたる衣の薄さ引きかつぎて、疲れしたるこそなかしけれ。（清少納言）

●遥々たる春の日も、所作足らねば時を失ひ、秋の夜長し夜長けれども、漁火白うして眠る事なし。（謡曲、善知鳥）

●かくとは知らず、高武蔵守師直は、由良之助が放埒に、心も緩む油断酒、藝子遊女に舞ひ歌はせ、薬師寺を上客にて、身の程知らぬ大騒、果はざこ寝の不行儀に、前後も知らぬ寝入りばな、非常を守る番人の、拍子木のみぞ殘りけろ。（浄瑠璃、忠臣蔵）

●逢坂の嵐の風は寒けれど行へしらねばわびつゝぞぬる。（古今）

●なき人もあるをおもふも世の中はねぶりのうちのゆめとこそ見れ。（西行）

●入日さしひぐらしのねをきくからにまだきねぶたき夏の夕くれ。（好忠）

●まどろみてさてもやみなばいかゞせんね覚ぞあらぬ命なりけろ。（西住）

●ねねる夜のゆめをはかなみまどろめばいやはかなにもなりまさる哉。（業平）

●みゆきふりさえゆく夜半にかしのみのひとりしねるをあはれともしれ。（諸鳥）

●室の海渡にうきねの枕にもこゝろのとまるふしはありけり。（千載）

●ぬるが内はわすれんものを海山のうきを又みるゆめぞわりなき。（春海）

●いもが背にねぶるわらはのうつゝなき手にさへめぐる風車哉。（言道）

●曉の八聲のとりのいくたびか老のねぶりなおどろかすらん。（蘆花）

●電馬なく猫の窟に眠るかな。（鬼貫）

●月か花かとへど四睡の眠り哉。（芭蕉）

●毛を立てゝ驚く鷺が眠哉。（召波）

●短夜を眠らで守るや翁丸。（無村）

●唐猫の牡丹まばゆく眠るなり。（旨原）

●より添うて眠るでもなき蝴蝶哉。（太祇）

●體を押すも眠たそう也海月取。（雨銘）

●昔柳にいよ〳〵眠るこてふかな。（風圃）

●喪眠る梅のあるじか年の暮。（樗良）

●木苑の世にあはで喪を眠り蟲。（長翠）

●人目には座ぜんとみせて木魚さへ春のほく〳〵いねぶりはすな。（時成）

●行春をしばしとゞめてねむらせよはたごやもなき海棠の花。（楠洲）

●いとまなき蟻の通ひ路よそに見て心ゆたかに眠る海棠。（梅門）

●もろこしの夢見南なる海棠は眠る小蝶を友になすらん。（蹴左堂）

●蹴守も眠るやすまのさし汐に舟漕ぎながら流ちどりきく。（益人）

●夢の世に夢をみるのはことわざの船で船こぐやうに眠りね。（魚丸）

●竹杖にすがりて眠る白菊ものびをして目なあきの夜の霜。（安見）

●磯山の眠れる影を動かして波のまくらをよする海づら。（五十瀬屋）

●かゝり人一つ巴のやうに寝て。（川柳）

●ねそびれていつその事に飯を喰ひ。（同）

●女房の夜なべは夏の晝寝なり。（同）

●うたゝねをくまどるやうに掃て行く。（同）

●居眠を不地にして居る座頭の坊。（同）

●いそがしいものはぬねぶりあたまなり。（同）

●うたゝねの腰より下は女なり。（同）

●もッと寝て御座れに嫁は消えたがり。（同）

●目がさとくなれば浴衣地眠くなり。（同）

●翌日は機に居眠る女たなばた。（同）

●頬杖で居眠る和歌の旅疲れ。（同）

●眠る子の手から這ひ出て蚤逃げ。（同）

●思ひつゞけて足引の、牡鹿の鳴く聲に夢さめて、我をば誰かとひこんと、いとゞねられぬ秋の夜に、ものを思ひの眠をさます。（俗謡）

●君ゆゑならば雪の野にねよゝ、よしや此身は消ゆるとも。（同）

●まどろまば、ゆめにも見るべきに、うつゝなや、こひには目もあはぬものか。（同）

●眠るも泰公。（俚諺）

●寝た間が極楽。（同）

●蒲岡盤二兩膝一、竹几閣二鱠肘一、此間道路熟。徑到二無何有一、身心兩不レ見、息々安且久。嗤蛇本亦無。何用鈎與レ手。神凝疑二夜禪一。體適劇二卯酒一。我生有二定數一。祿盡空餘齋。枯腸不レ飛レ花。奇澤回二衰朽一。謂我此爲レ覺。物至了不レ受。謂我今方夢。此心初不レ垢。非夢亦非レ覺。請問希夷叟。（蘇東坡）

●新浴肢體暢。獨寝神魂安。況因二夜深一坐。遂成二日高眠一。春被薄亦暖。朝聰深更閑。却忘人間事。似レ得二枕上仙一。至適無二夢想一。大和難二名言一。全勝二彭澤醉一。欲レ敵二曹溪禪一。何物呼レ我覺。伯勞聲關々。起來妻子笑。生計春茫然。（白居易）

●午枕花前寂欲レ流。日催二紅影一上二簾鈎一。窺レ人鳥喚悠颺夢。隔レ水山供宛轉愁。（王安石）

●少壯喘息人莫レ聽。中年鼻鼾尤惡聲。（疑

兒掩耳謂作雷。（歐陽修）

●身在三雲房一夢亦閒。松頭鶴影枕屏間。一聲隔レ谷鳴三華雄一信レ手推レ窓滿眼山。（祝允明）

●秋酷雪中熱。（寒窗落葉中。幽人本多レ睡、更酌一杯空。（杜牧）

●寧予責疑。予曰朽木不レ可レ雕也、糞土之牆不レ可レ杇也、於レ予與何誅。（論語）

のノ部

〔の〕野

野望。野色。野路。野情。曠野。荒野。極レ目。無レ涯。野ら。のべ。野みち。野がみ。する野。遠方のべ。野路の一筋。ひなのあら野。野中の草。

●とく目覺めて、起き出でゝ見るに、まだ殘る夜の雲のけはひいと寒げなるに、馬の音聞ゆ。そゝやとて、いそぎ狩衣きて巻る。松の火あまたともしたり。宮は狩の御よそほひいと花やかに、驚侗の摺衣も世に目馴ぬさまなり。明けぬれば霜枯の野原の氣色、絵にかけるやうに面白くて、

踏みたつる鳥にきほひて朝狩の霜の花野にゆくこゝろかな、（高尚）

とぞ思ゆる。

●今とても猶、端々には、其廣き野の迹、のこれりと聞きて見にまかりけゝ。案内するなとこの野なるも、時鳥きくゐるべならねばと其日の興にして、桑が谷下宮などいへる村々を過ぎて、かの野には出でぬ。誠に四方に木竹もなく、草さへも今は霜がれはてゝ、哀に物すごき原のさまなり。（也有）

●野上の景色、誠におもしろし。寛の水の氣色、はかなき木草までも見所あり。廣き野にわれもかうな、まじるものなく植ゑわたしたるに、若き女房だち、山際まで分け入りて見れど、道なくて歸りぬ。（中務内侍）

●田向の方ことに草深く分け入りたるに、名に負ふもげに覺たて、はてはいづくと見えぬまで遙々と廣きに、稻葉におき渡す露の光は、玉を並べたらんやうなり。とり〳〵さま〳〵なる所々のけしき、いひつくすべうもあらず。（同）

●名殘な思ふ心の末、山路幾野に行きかふ色の、こや九重の情なる、立ち入る雲も遠近の、はや秋深き夕時雨、濡れつゝも、鶉なくなる深草や、誰を忍ぶの淺茅原げに住みなれし故郷の、野となりてしも露しげき、草の臥つかに暮れ殘る、伏見の田澤水白く、薄霧迷ふ夕べかな。（謠曲、花軍）

●山は三笠に陰さすや、春日そなたに顯はれて、晴ゆる四方に春日野の、宮路も末あるや蛍りなき、西の大寺月澄みて、光ぞまさる七大寺、御法の花も八重櫻の、都とて春日野の、春こそ長閑けかりけれ。（謠曲、春日龍神）

●せめて慰む方もやと、池の庄司を御供にと、外面の野邊に立ち出でゝ、都に知らぬ山畑や、一叢薬の鳥威し、鳴子になるゝ友鶉、妹背兎の子むてふ、桔梗が露に戯むるゝ、野菊紫蘭の亂れとは、袖も宛ながら花摺衣、裾野に靡く草刈笛、なほ目がれせず見給へば、十二三なる草刈共、牛迄立てゝ鎌振上げ、花な刈ぞ女郎花、押分け〳〵來りける。（淨瑠璃、小栗判官）

●つくしにも紫おふる野べはあれどなさ名悲しむ人ぞ聞えぬ。（道眞）

●あふとのかた野へとてぞ我はゆく身を同じ名に思ひなしつゝ。（伊勢）

●忘らるゝ時しなければ春日野のとぶひ有りやと待つぞわびしき。（讀人不知）

●印南野や山本遠く見渡せば尾花にまじる松の村立。（土御門院）

●月清みあけの、原の夕露にさゝめ分けつる衣さぬれぬ。（仲實）

●ひろしとてたれかまよはんむさしのやさしてゆくての道しある代は。（春滿）

●船岡のふもとにたちてみわたせばむらさきの野ぞなかばくれゆく。（成章）

●君が代はたれかもろべき雨露の野なる草木をわかぬ惠に。（同）

●春秋の色とりかへてめかれぬはさがさの野邊の夕あけぼの。（蘆庵）

●神風のいせ野の草のなびくにもみよかしみよの民の心は。（宣長）

●人待つて野中の柳風くらし。（曉台）

●野を横に馬引き向けよ杜宇。（芭蕉）

●僧の撞く鐘も時雨ゐゝ礒城野哉。（一茶）

●春草の姿もちたる裾野かな。（鬼貫）

●夏草に馴染初めたる大野かな。（素堂）

●やすらひや鬼も籠れる若草野。（凡亜）

●あれこれを思ひはつれる花野かな。（丈草）

●かつて此の月のさはりの物なく、落がらも武藏野の原。（貞鶴）

●戎殿もし野に出でゝ遊びやらばたひぐさ摘みて日をくらしやらん。（教二）

●草も木に替る朱雀野紫野。（川柳）

●筑摩の野邊に鍋鶴も羽を重ね。（同）

●高嵐野はからくりの竹田道。（同）

●村の戀もろくも落ちた露の野邊。（同）

●むさし野へ澄みさつて出る月と玉。（同）

●床の野に富士の裾野に福壽草。（同）

●御ぞうし嵐わか野で軍をし。（同）

●ひろい野を夏までこされ水は逃げ。（同）

●有りそうで江戸には見えぬ紫野。（同）

●傘をさそなら春日野はきつい事。（同）

●茶で立つた家は青野で泡と消え。（同）

●淺ゆに霧なし野には草もなし。（同）

●ところから、星花が露にてりまさる、かげもほてなさ武藏野の、うき名のみなにたちそひて。（俗謠）

●ふりさけ見ればまん〳〵と、月も宿かる武藏野の、空もひとつに契りてし、眺めにあかぬけしき哉。（同）

●武藏野はなに限あり、君を思のはてもなし。（同）

●道ひなれにし朱雀の野邊の、露はものかは我涙。（同）

●跡は野となれ山となれ。（俚謠）

●緑陰時節氣清和。野逕横斜行且哦。早稻抽齊鋤幾寸。微風過處綠成レ波。（南梁）

●梅花多處舍レ輿行。平野無風午暖生。呼レ傘一張還一弛。溪陰成レ雨午成レ晴。（訥堂）

●積二禮義於朝一。播二仁風於野一。（任蝦）

〔のう〕能（田樂）

能樂。猿樂。歌舞。音樂。狂言。輕袖。綉幕。妙技。綿繡。

さるがふ。うたひ。薪の能。しゆら能。祝言能。神事能。

●今年多くの不思議打續く中に、洛中に田

樂を聞ぶ事法にすぎたり。大樹是を興ぜらるゝ事又類なし。されば萬人手足を空にして、朝夕是が爲に疲弊す。關東亡びんとて、高時禪門好み翫びしが、先代一流斷絶しぬ。よからぬ事なりとぞ申しける。同年六月十一日、抖藪の沙門ありけるが、四條橋を渡さんとて、新座本座の田樂を合せ、老若に分けて、能くらべをぞさせける。四條川原に棧敷を打つ。希代の見物なるべしとゝ、貴賤の男女擧る事斜ならず。公家には摂祿大臣家、門跡は當座主梶井二品法親王、武家は大樹是を興ぜられしかば、其以下の人々は申すに及ばず、卿相雲客諸家の侍、神社寺堂の神官僧侶に至るまで、我劣らじと棧敷をうち、五六八九寸の安の都などを鏘りぬさて、圍八十三間に三重四重に組上物も夥しく要へたり。已に時剋になりしかば、輕幇香車地を爭ひ、輕裘肥馬繫ぐに所なし。慢幕風に飛揚して、童香天に散滿す。新本の老若、東西に幔を打ちて、兩方に樁懸をかけたりける。樂屋の幕には錦繡を張り、天蓋の幕は金欄なれば、片々と風に散滿して、炎を揚ぐるに異ならず。舞臺に曲彔繩床を立て双べ、紅綠の氈を展べ布さて、豹虎の皮をかけたれば、見るに眼を照らされて、心も空になりぬるに、律雅調冷しく、瓠聲耳を清す處に、兩方の樂屋より中門口の鼓を鳴らし、音取の笛を吹きたてたれば、匂薫闌を庭し、粧紅紛を盡したる美麗の童八人、一樽に金襴の水干を着して、東の樂屋よりれり出でたれば、白く清らかなる法師八人、薄化粧の金襴にて、色々の花鳥を織りつくし、染め狂はしたる水干に、銀の亂紋うちたる下濃の袴に下結して、拍子を打ち、あやぬ笠を傾け、西の樂屋よりきらめき渡りて出でたるは、誠に由々敷ぞ見えたりける。一の竹彫は本座の阿古、亂拍子は新座の彦夜叉、刀玉は道一、各神變の堪能なれば、見物五目を驚かす。斯くて立ち合ひ終りしかば、日吉山王の示現、利生の新なる猿樂を、肝に染みてぞ出したる。斯る處に新座の樂屋より八九歳の小童に、猿の面をきせ、御幣をさし上げて、赤地の金襴の打懸に、虎の皮の連貫をふみ開き、小拍子にかけて、紅綠のそり橋を斜にふみて出でたりけるが、高欄に飛び上り、左へ廻り右へ曲り、拋返りては上りたる有樣、誠に此世のものとは見えず。忽に山王神託して、此奇瑞を示さるゝかと、感興身にぞあまりける。されば百餘間の棧敷ども、怪へかねて座にも蹈らず、あら面白や墻へがたやと、喚き叫びける間、感聲席にあまりつゝ、且しばしづまりもやらず。

（太平記）

●暫く是にて御詠めと宇佐美が詞に近習の武士、御腰掛を奉れば、遙後より能太夫源之進御傍近く手をつかへ、今日殿樣のお能、恐れ乍ら鶴さ奉ります。いつ〳〵よりも出來させ給ひ、納受しましまさん。扨一家中どなた樣もきついお上手、殿樣の御機嫌の程、御覧ひ奉ると申し上ぐれば打笑ひ給ひ、ナニ源之進、是といふも其方が指南の德と宣へば、ハアコハ冥加な御詞、時の面目有がたしと、ちざつて一禮のべければ、重れて仰せ出さるゝは、アヽ浦山しいは源之進が身の上、我望は外になし。能太夫に成つて、猩々の亂れ一世一代が仕て見たいわい。取分け今日の奉納も、我一人の力にあらず。一家中の者迄も、滿足せねば奉納とは云ひがたし。殊に天氣も宜しければ、我悦此りなし。太義〳〵と有りければ、若一統に頭を下げ、ハット計に平伏す。

（淨瑠璃、伊賀越）

●萬の戒こともなごやかに、弓は袋の内つ國、榮花に餘る御身の上、歌舞遊宴を事として、男色女色に夜晝の、境も知らず時知らぬ、心の春や早咲の、室町の花の御所、今日七夕の能舞臺、綾の水引錦の幕、數多の棧敷堂々と、召に應ずる大名小名、一色大内島山、大館六角斯波武田、京極後藤伊勢の一党、天晴々の見物に、新座本座は秘曲をのべ、恒例の式三番、高砂田村松風と、思ひ〳〵に舞ひ納め、はや四番目の紅葉狩、管領細川勝元の總領に、立つ齋之助、同山名宗全が獨姫のとなせの前、兩人共に寵愛の、もろ羽を伸すや舞の袖、既に次第の序も過ぎて、すは將軍の御自身にお腦の出場と諸大名、雛子方迄首を下げ、屑嚔を飲んで見る所に、幕を揭ぐるはし掛り、立出で給ふ義政公、御足下も定まらず山路を待たぬ樂屋酒、御顏の色は紅葉狩、上燗に酒を暖めて急用を欠く其風情。

（淨瑠璃、室町合戰）

㊀かつらぎの嶺めされつ能の夜。（巢兆）
㊁あらし野や路の嶺の能舞臺。（蓑太）
㊂ことゝはんけふの御能は隅田川拜見場所の有りやなしやを。（軸丸）
●何事かはつはさつはといふうちに代る念なうはやし方哉。（盤丸）
●老松に三輪の山杉組み合すあひのくさびをうつぼ猿かな。（眞鄰）
●養老の滝のいづみの能舞臺はしがゝりよりわき出でにけり。（鬼貫）
●猩々を舞へる舞臺の下にしも酒をたゝふる瓶はふせけり。（至清堂）
●民の身に御能舞臺のかゞみ板松の大樹を仰ぐかしこさ。（閑丸）
●よくみたる御能に民は悦びぬ手の舞ひ足の踏む所まで。（絹丸）
●あめが下惠みの御能拜見に傘給ふだに洩らし給はず。（紫丸）
●爪かくす能とのうとをくらぶれば蟹にもまさる鶴の舞の手。（眞丸）
●四宮神の烏帽子の紐の觀世より舞ひはじめたる御代の千歳。（面堂）
●網おろす阿漕の能の裝束は紙の四つ手をかけてつゝめり。（比良の屋）
●大一座木辻は能の歸りなり。（川柳）
●鹿の糞よけて地謠かしこまり。（同）
●ヲキ僧は煙草盆でもほしく見え。（同）
●ヲキ僧は引込ざはのてれたもの。（同）
●灰だらけになつて奈良の能を見る。（同）
●薪の御能飛火野の近處なり。（同）
●亂びやうし聞えぬ程のつよいふり。（同）
●釣鐘は無銘面には名があり。（同）
●袖口と扇をもちて急ぎ候。（同）
●袖口ばかりひつぱつて能を舞ひ。（同）
●板橋の木皮の能は醫書にもれ。（同）
●舞はずして舞ふ能。（俚諺）
●傳曰、神某尊爲二俳優一、記載皇極帝四年中臣鎌連教二俳優某解一蘇我臣佩刀一事、俳優名亦舊矣。後曰二散更一、曰二猿樂一、而田樂者、由二猿樂一出、盛行二於北條氏時一。至二足利氏一、鹿園慈昭二公、皆好二猿樂一、伶工觀世氏、於是乎出、而猿樂復盛、田樂遂衰。寛正中觀世氏、舞二猿樂于二紀河原一、是爲二勸進能之權輿一。爾來纔行、不二絶之於千載之今一、且今而三綱五常外、無而無者、除レ此天下無二復有一焉。亦清世餘事、繁華一具。天保元年秋、觀世氏設二勸進樂場于二幸橋外一、演戲百曲、限以二旬日一、鼓笛龍曲、以鳴二太平一。予來觀値二第十一日一。樂名、一

曰二邯鄲一、二曰二土蜘一、三曰二雲雀山一、四曰二鉄輪一、五曰レ鵬。鵬不レ鵬、士不レ士　南不レ南、儒不レ儒、世皆然矣。而千古一日、墜二古於不古之中一者、不二亦妙一乎。然既已古矣。不レ復上二今人眼一、觀者多倦。因知儒而儒者、亦不レ上二今人眼一。　（江戸繁昌記）

〔のうふ〕農夫

田夫。野人。耕耘。桑柘。開墾。稼穡。鋤犂。荷レ鋤。播レ種。

たづ。田子。おりたつ田子。たがへす。畑うつ。田わざ。山田のいほ。賤のふせや。

㊙民ぐさのことしげき、見るもなかくむつかし。かやが軒ばに雨も風もふせぎかね、ぬがこもだれのうち、煙にふすぼり、うちねるも牛馬に床をならべ、妻などは、よしぎのかしらかきみだせる、たゞ聲のみぞなのこならぬ兒の、おほきなるちひさき、うたりさむしなどいふこゑ、いとかしまし。おほしたてたるたなつものも、おほやけにいたしつくせば、その味をしることなし。きぬおるところも、いとのいろいやうるはしくおりなしても、あたひいやしくして上へめされ、あき人へうるも、其幾分をか上へさゝぐれば、殘るものいくばくぞ。さておのれはつゞれをさたり。さるうへにこゝえたり。こゝのゑだち、かしこの公事といふ事さへくはゝれば、つひにかしらの露をのみわがものとして、おもひ出もなき世をわたるめり。かうやうのいたましきかざりなば、國しろしめすやんごとなきが、あはれとしろしめすべきを、大やうはしろしめさず。しろしめすもつかふる人のへつらへるか。さらば民の常なり、つとめおこたりてしかる、あるは僞もて、上をしゆることいふめれば、にくしとこそ見たまはめ。かなしび人なしとはいかでおぼさん。この民は三代のなをきなり。道しあるこのかみにたれかはた僞をかまへん。上の道ゆがめばこそゆがむなれば、上をしへていつはらしむとぞいふべき。

㊙鎌の土割手づからに畑うち、女は麻布を織り延べ、足引の大和機を立て、東あかりの朝日の里に、川ばたの九助とて小百姓あり。しが、牛さへ持たずして、角屋作りの淺ましく住みなし、幾秋が一石二斗の御年貢、なはかり、五十餘まで同じ貌にて年越の夜に入りて、ちひさき窓も、世間並に鶏の首枕をさして、目に見えぬ鬼に恐れて、心祓ひの豆うちはやしける。夜明けて是をひろひ集め、其中の一粒を野に埋みて、もし煮豆に花の咲く事もやと待ちしに、物は爭ふまじき事ぞかし。其夏あを〳〵と枝茂りて、秋は自ら實入りて手一合にあまるを、清川に蒔き捨て、毎年かり時を忘れず。次第にかさみて十年も過ぎて八十八石になりぬ。是にて大きなる灯籠を作らせ、初瀬街道の闇を照し、今に豆灯籠とて光を殘せり。諸事の物つもれば大願も成就するなり。此九助此心から次第に家榮え、田畠を買ひ求め、程なく大百姓となれり。折ふしの作り物に肥汁を仕掛け、間の草取水をかさければ、白稻に實のりの房振よく、木綿に蝶の數見えて、人より德を取る事、是天性にはあらず、朝暮油斷なく、鋤鍬の禿る程はたらくが故ぞかし。　（西鶴）

㊙いかほどちゑかしこき人も、たわざの事は、いくとせともなくその事を手なれて、父母妻子をやしなふものには及ばざる事もあり。またはいにしへいまのちがひもあり。かの國のつちにはかくしてよろしけれど、此國にてはさはなりがたしといふ事もあるゆゑにこそ、ひじりのことばにも老農老圃にとへとはいひ給ひけめ。ある國しろしめす御かたの、はじめて國たまはりし時、御國の民どもにをしへ給ふ文、いかゞ。たゞゝめはべらんと、したべの人のとひたてまつりしに、ぶしやうなかまへ、農業におこたるべからず。庄屋組頭のまうすを違背すべからず。右は百姓中一百姓どもゆだんせざるやうに下知すべし。わたくしすべからず。右は庄屋中へとのみ、おほせいだされ、そのほかは年々たなつものゝ豐凶を見て、年貢運上、あるひはかろめ、或はゆるし、こればかりにてやみ給へりとかたれる人あり。これもひとみちなるべし。

（芳洲）

●春さきは在々の勝徹迄が樂々と、遊びがちなる一ものづくり、一番村では年古き、人にとられし四郎九郎、律義一べん取りえにて、當年相の御領分、佐太に手輕き下屋敷、お庭の掃除承り、松梅櫻御愛樹に、土かひ水の養ひも、根が農の鍬仕事、我身の老木厭ひなく、幹をこやしの百姓わざ、畑のぜわより氣樂なり。（淨瑠璃、菅原傳授

●秋田かるかりの庵に時雨ふり我袖ぬれぬほす人なしに。　（萬葉）

●足引の山田をうゑていなづまのともに秋には あはんとぞ思ふ。　（貫之）

●身はかくて山田の庵のさゝれ水あるかなきかによにや住むらん。　（有光）

●稻妻の光のまにもまどろまで山田守るやによをあかす哉。　（匡房）

●いなしきの臥屋を見れば庭もせに門田のいねをかりほしてけり。　（肥後）

●春田のみ人はいへどもいな莚うつ手もさやは安けかるべき。　（諸平）

●小山田のかりほさびしき雨のよもたへでや賤が袖ぬらすらん。　（涌蓮）

●時きぬとさなへとりぐいではてゝ田中の里は夏ぞさびしき。　（蘆庵）

●いとまある年のあまりと賤のをがまたなりかくる小田の竹垣。　（春海）

●垣津田のそしろのをしねかりつみてうしろやすげに見ゆる賤哉。　（千陸）

●今年より穀はじめぬ小百姓。　（蕪村）

●橋守の火を力なり山田守。　（一茶）

●己が身の老松唄へ山田守。　（柿麿）

●秋の夜をあはれ田守が鼓哉。　（召波）

●八朔や扇さしたる小百姓。　（蓼太）

●百姓のゆるりとみたる師走哉。（古友尼）

●早稻刈つて落ちつき貌や小百姓。（乃龍）

●百姓のたばこはくさし梅の花。　（嵐山）

●牛引きし農夫も舌をたがやしの穿つた噺もすきに任せて。　（有山）

●守らする案山子の笠もあみだにてみのりを願ふ秋の小田主。　（道成）

●みのりよき小田はぼさつに守らせて庵は戸かきもしめぬ氣樂さ。　（唐琴）

●耕の業に流せる汗はこれ青びと草はおける白露。　（龜雄）

●世の人にかずまへられぬ身をだにもおほん寶と呼ぶぞめでたき。　（花垣）

●いつか身に小袖も着ずてたる事をしりからげしてかせぐ賤の男。　（員益）

●鍬の柄を握る手ぶさに種まかぬ豆はいくつも生ふる賤の男。　（員盛）

●生田川水せき入るゝ小田守はかゞしの弓を二張からべつ。　（綾濃）

●農民の骨萬民の肉となり。　（川柳）

●農人も樂しむ和歌の落穗集。　（同）

●農民の手に豆が出來米が出來。　（同）

●百姓は金でせがせるものでなし。（同）
●百姓の花見は二百十日なり。（同）
●稲の穂が出ると百姓高まくら。（同）
●尻に手を組んで見回す稲の花。（同）
●作物の中で目貫は稲の花。（同）
●貫草に百姓鎌を一寸借り。（同）
●農人の手へ満作の豆が出来。（同）
●雨がふつても焼く日がてるも、青田の中でしよぼ〳〵と。（俗諺）
●今年世がようて穂に穂がさいて、殿も百姓も嬉しかろ。（同）
●耳農惜二地力一。幸此十年荒。桑柘未レ及レ成。一麥庶可レ望。投レ種未レ踰レ月。覆塊已荒々。農父告レ我言。勿レ使二苗葉昌一。君欲レ富二餅餌一。要須縱二牛羊一。再拜謝二苦言一。得レ飽不二敢忘一。（蘇東坡）
●鋤光照二墟落一。窮老半羊躋。野老念二牧童一。倚レ杖候二荊扉一。雉雊麥苗秀。蠶眠桑葉稀。田夫荷レ鋤至。相見話依々。即此淡二閑逸一。悵然吟二式微一。（王維）
●老翁家貧在レ山住。耕種山田三四畝。苗疎稅多不レ得レ食。輸入二官倉一化爲レ土。歲暮鋤荒倚二空室一。呼レ兒登レ山收二稼實一。西江賈客珠百斛。船中養レ犬長食レ肉。（張籍）

●熙々令音。猗々原陸。卉木繁榮。和風清穆。純々士女。趨時競逐。桑婦宵征。農夫野宿。（陶淵明）
●錦里煙塵外。江村八九家。四荷浮二小葉一。細麥落二輕花一。卜レ宅從二茲老一。爲レ農去レ國賒。遠慚勾漏令。不レ得レ問二丹砂一。（杜甫）
●樊遲請レ學レ稼。子曰、吾不レ如二老農一。請レ學レ圃。曰吾不レ如二老圃一。（論語）
●耳農不レ爲二水旱不一レ耕。（荀子）

〔のぞみ〕望

願望。希望。懇望。大望。本望。宿望。志望。

のぞまし。望の光。望かく。望たゆ。

●あなかま、皆きてはべり。ないしのかみになるべかなり。宮つかへにと、いそぎいでたち侍りしことは、さやうの御かへり見もやとてこそ、なべての女房達だに、つかうまつらぬことまで、おりたちつかうまつれ。御前のつらくおはしますなりと、恨みかゝれば、みなほゝゑみて、ないしのかみあらば、なにがしらこなのぞまんと思ふを、ひどうにもおぼしかけゝるかなとの給ふに、はらだちて、めでたき御中に、かずならぬ人はまじるまじかりける。中將の君ぞつらくおはする。さかしらにむかへ給ひて、かろめあざけり給ふ。せう〳〵の人はえたてるまじきとのゝうちかな。あなかしこ〳〵と、しりへざまにねざりしぞきて、みおこせ給ふにくげもなけれなど、いとはらあしげに、まじりひきあげたり。中將はかくいふにつけても、げに仕あやまりたることゝ思へば、まめやかにて物し給ふ。少將はかゝるかたにても、たぐひなき御有樣をおろかにはよもおぼさじ、御心なしづめ給うてこそは、かたきいはほも、あはゆきになし給ふべき、御けしきなれば、いまより思ひかなひ給ふ時もあらんと、ほゝゑみていひゐたまへり。中將もあまのいは戸さしこもり給ひなんや。めやすくとて、たち給ひめれば、ほろ〳〵となきて、この君だちさへ、みなすげなうし給ふに、たゞ御前の御こゝろの哀におはしませば、さふらふなりとて、いとかやすくいそしく、下らうわらはべなどの、つかうまつりたへねざうやくをも、たちはしりやすくまどひありきつゝ、こゝろざしをつくして、みやづかへしありきて、内侍のかみにおのれを申しなしたまへとせめきこゆれば、あさましういかに思ひていふことならんとおぼすに、ものもいはれ給はず。おとゞ此望をきゝ給ひて、いとはなやかに打わらひ給ひて、女御の御かたにまゐりたまへるついでに、いづらこのあふみの君、こなたにとめせば、をといとけざやかにきこえて出できたり。（紫式部）

●われは月頃君父の讎、屬谷定正に忻りよつて、一刀に怨をかへさんと思ふ物から、その便を得ざりしに、不思議に手に入るこの名刀、これをもて讎に近づき、宿望とげて餘命あらば、その時にこそそなたの夫、犬塚信乃とやらんが安否をとひ、悲もなくてめぐりあはゞ、村雨丸をかへすべけれ。こは愚まれぬ事にしあれば、定かにはうけ引きがたし。われもし讎の手に死なば。この太刀も亦分捕されなん。君父の爲にはこの身を忘る、豈妹背の事をおもはんや。貞操節義は婦人の道也。忠信孝義は男子の道なり。勇士の本意かくの如しと、理せめてさとすになん。濱路は望を失ひて、しからば何とまうすとも、讎を討ちての後ならでは、うけひきがたしと、心つよきいらへに、侍のかみにおのれを申しなしたまへとせめきこゆれば、あさましういかに思ひていふことならんとおぼすに、ものもいはれ給はず。おとゞ此望をきゝ給ひて、いとはなやかに打わらひ給ひて、女御の御かたにまゐりたまへるついでに、いづらこのあふみの君、こなたにとめせば、をといとけざやかにきこえて出できたり。（紫式部）

●われは月頃君父の讎、屬谷定正に忻りよつて、一刀に怨をかへさんと思ふ物から、その便を得ざりしに、不思議に手に入るこの名刀、これをもて讎に近づき、宿望とげて餘命あらば、その時にこそそなたの夫、犬塚信乃とやらんが安否をとひ、悲もなくてめぐりあはゞ、村雨丸をかへすべけれ。こは愚まれぬ事にしあれば、定かにはうけ引きがたし。われもし讎の手に死なば。この太刀も亦分捕されなん。君父の爲にはこの身を忘る、豈妹背の事をおもはんや。貞操節義は婦人の道也。忠信孝義は男子の道なり。勇士の本意かくの如しと、理せめてさとすになん。濱路は望を失ひて、しからば何とまうすとも、讎を討ちての後ならでは、うけひきがたしと、心つよきいらへに、忽、胸塞がりて、一聲あつと叫びつゝ、そが中に息はたえてけり。（馬琴）

●窓にうたふ君女は客をとゞめて夫とす。あはれむべし、千とせのちぎりを旅宿の一夜のゆめにむすび、生涯のたのみを往還の諸人の望にかく。（光行）

●此報恩に何事にてもあれ、御望みの事候はゞ、刹那に叶へ申すべし。げにさる事のありしなり。又望をかなへ給はん事、此世の以更になし。たゞし釋尊靈鷲山にての御說法の有樣、まのあたりに拜み申したくこそ候へ。それこそ易き御望なれ。まことと左樣に思しめさば、すなはち拜ませ申すべし。（謠曲、大會）

●そも王法を尊むとは、如何なる望のあるやらん。そもかゝる身の望とは、そら恐しや此年まで、命すなほに愁もなく、上直なれば下までも、豐に治まる此國の、千代をこめたる竹の枝、伏見は是が宮所、參りて拜むこそ、朝恩を知る心なれ。（謠曲、金札）

●月も折しも春の夜の、霞の光花の影、何か今宵の思ひ出ならねさりながら、あはれ一枝を花の袖に手折りて、月をも共に詠めばやの、望みは殘れり、此春の望み殘れり。（謠曲、泰山府君）

●只今御暇めのお詞に預つたが扨、此勘忍をせねば、大望成就がなりにくいの。ムゝ左こそ〳〵。シテ〳〵主計の大望とは。サア他言は御無用。拙者が望と申しゝは、彼奴を受け出して、この祇園町で、茶屋を致す了簡ぢやと、どうぢやろう〳〵、アノ武士を捨てゝや。アゝ武士はとうから捨てゝ有るわいの。（淨瑠璃、躾方武士鑑）

●八重の潮路の鬼界が島、雨露も凌ぎ兼ね、餓鬼畜生前に成り果てし、殿御を愛しや戀しや、逢ひたやと思ふより外望みはない。身の果報何にせう。何も聞かぬ聞きともないと、兩手にて耳ふさぎ、武士の情には、せめて泣かせてくれるなと、わつと計りにうつぶして沈み入りたる有樣。（淨瑠璃、平家女護島）

●ひこぼしはたなばたつめと、天地のわかれし時ゆ、いなむしろかはに向きたち、おもふそらやすからなくに、なげくそらやすからなくに、あを波にのぞみたえぬ、白雲に涙はつきぬ、かくのみやいきづきてをらん、かくのみやこひつゝあらん。（憶良）

●わが心望みおもへばあたらよのひとよもおちずいめにし見ゆる。（萬葉）
●わがねがひ人の望もみつ鹽にひかれて浮ぶ波の下草。（源承）
●昔涙にのぞみたえたり菊の葉。（嵐雪）
●五月乙女にしかた望まん信夫摺。（芭蕉）
●所望する僧のちからや夏の月。（寒太）
●二つ三つよき名望まする角力取。（蕉村）
●大和路の望の春も暮れにけり。（智月尼）
●つと入つて望に誰とさゝれけり。（凡董）
●もう一りん望もありや九輪草。（清湖）
●鶴幸候に又望むべき事もなし。（頓琢）
●うす雲に歌や望まん白うちは。（八百波）
●年々や望も盡さず暮るゝ春。（玄化）
●はね上る池の江の魚よりもこけこそ庭の所望なりけり。（反炭）
●花盤に所望されしも今はほや後の祭は見る人ぞなき。（江戸住）
●まづしさにかたみてぼめど望なく何をせまいも思へざりけり。（園技）
●望むてふ月よりいかのHの丸に片手なのばす猿澤の池。（知州）
●望まれて餘儀なくなれる一枝はきかへる程に思ふ花卯。（蹴山）
●いもりの大望雨龍とならん事。（川柳）
●六人の望で琵琶を御彈き〳〵。（同）
●猶手を望むはみんな法師武者。（同）
●望まれて嫁一本はめ二本はめ。（同）
●狐つき鼠とまでは望みかね。（同）
●望まれて嫁あら撥を出してひき。（同）
●小間物屋大望女護嶋へ渡海する。（同）
●さりとは月ふけて、いつさて蟋蟀、ねもせで松虫、ふくれば鈴虫、すんとふかければ、せきやるはういよ轡虫、いとはぬ心に、てんとゆうた奥を望なら、根からふつりときりぐ〳〵す。（俗謡）
●嬉しやさきで何事も、談合せんと今まで、待ちぼうけになつたれど、一目あへばこれ本望、末たのみなき契なれば、これかぎり〳〵と、逢ふたびごとの觀念も、いまさらためていふことなし。（同）
●浅ゆはざつとした、いやよな望がござんす〳〵る。そこざひ〳〵、小雀山雀四十雀、唐松たけのいく千代も、變にうき茶の葉の色に。（同）
●勅〻彭曰、西城若下、便可三將兵南擊二蜀虛一、人若不〻知〻足、既平〻隴復望〻蜀、每二一發〻兵、頭鬚爲〻白。（范曄）
●飲且食分盡而廉、無〻不〻足分奚所〻望。（韓愈）

〔のもり〕野守

春日野のとぶひの野守。秋の野守。野守のかゞみ。野守のいほ。ことゝふ。

●春日野の飛火の野守出でゝ見よ。七種若菜は芹薺、五形菫佛の座、すゞ菜すゞしろ七草なり。正月一日を雞日といひ、二日を狗日、三日を猪日、四日を羊日、五日を牛日、六日を馬日、七日を人日といふなり。
ながく生田の小野の若菜摘む、千代のふる道嶮峨の野邊、其外高茅生、武藏野、菖蒲刈る淀野、眞野、蕨野刈る宮城野、交野、生野、伏見野、深草野、富士野、阿部野、高藏野、所々の野守あり。かすが野の草のはつかに雪消えて、まだうらわかき鶯の聲、これにつき野守の鏡といふ事は、雄略天皇と申す御門、狩をこのみたまひて、野に出でゝかりし給ひけるに、御鷹それて見えず。野守をめしてとはせけるに、御鷹のあり所を申す。いかにしてゝにゐながら

なさすがごとくに、さだかに申すぞととはせ給ひければ、此野に侍る水に、たかの影がうつりて侍れば、申すよしを奏しけるにより、野にある水な、はしたかの野守の鏡とは申しつたへたり。（正月摘）
●御身は此所の人か。さん候、是は春日野の野守にて候ふ。野守にましまさば、是によし有りげなる水の候ふは、名の有る水にて候ふか。是こそ野守の鏡と申す水にて候へ。あら面白や、野守の鏡とは何と申したる事にて候ふぞ。我等如さの野守、朝夕影を寫し申すにより、野守の鏡と申し候ふ。
又誠の野守の鏡とは、昔鬼神の持ちたる鏡とこそ承り及びて候へ。何とて鬼神の持ちたる鏡をば、野守の鏡とは申し候ふぞ。昔此の野に住みける鬼の有りしが、衰は人となりて此野を守り、夜は鬼となりて是なる塚に住みけりとなり。されば野を守りける鬼の持ちし鏡なればとて、野守の鏡とは申し候ふ。（謡曲、野守）
●如何に春日の局、時宗が參りたる由それ〳〵申し候へ。いつしかもり乳母まで、心苦りしかすが野の、飛火の野守、いでゝだに見候はぬぞや。時宗がまゐりたる由、それ〳〵申し候へ。あらふしぎや、祐成は只今きたりぬ。九上の禪師は寺にあり。それならで于はなさに時宗といふは誰ぞ。（謡曲、小袖曾我）
●春日野の、飛火の野守出でゝ見れば、今幾樣ぞ若菜摘む、此に出でたる老人は、此の春日野に年を經て、山にも道ひ里にも行く、野守の翁にて候ふなり。有り難や、慈悲萬行の春の色、三笠の山に長閑にて、五重唯識の秋の風、春日の里に音づれて、誠に智ひも直なるや、神のまに〳〵行きかへり、運ぶ歩みも積る老の、榮行ゝ御影仰ぐなり。（謡曲、野守）
●霧も絶え〳〵晴れ渡り、麥の葉生えに風あれて、朝出の霞や火を貫ふ、野守が見る眼はづかしと、駕立てさせて暇をやる。（浮瑠璃、冥途飛脚）
●あかねさすむらさき野ゆきしめ野ゆき野守は見ずや君がそでふる。（額田王）
●春日野のとぶひの野守いで〻見よ今いくかありて若菜つみてん。（古今）
●年毎に若菜つみつゝ春日野の野守もけふや春をしるらん。（躬恒）
●嵐ふく野守がいほの花ざかり今いくかか出で〻見るらん。（宗良親王）
●ささかくす野守がいほの篠の戸もあらはにおける萩の朝露。（家歌）
●春日野の飛火の野守今日とてやむかしかたみにわかなつむらん。（實朝）
●春日野の野守もなぞやと思ふ哉年つむ若菜かたみなければ、（相摸）
●この中にありともしらで春日野の野守と我み見てやなくらん。（泉樹）
●わすれ草生ふる野守にこと問はんふるえのま萩さくやさかずや。（契沖）
●あはれとも野守は見ずや初尾花袖ふるあさのあしたゆふべを。（千蔭）
●おのづから秋の野守となりにけり千ぐさの花を庭におほして。（同）
●花守は野守に劣るけふの月。（蕪村）
●春の夜を雁おひあかす野守哉。（曉臺）
●酢味噌あらば春の野守になり果てん。（許六）
●錦着て寒がる秋の野守哉。（也有）
●初しぐれ野守が宵のことばかな。（士朗）
●年年や野守が妻の内證客。（葛古）
●納豆叩く音は月下の野守哉。（貝朱）
●白雪の中に煙す野守哉。（寒太）

●狩人も野守のかゞみこほる日は影みぬ鹿に時やみつらん。（橘洲）
●春日野の野もりのかゞみくもらねどそれだに鹿は手にもうつらず。（花成）
●それ鹿のそれなも知らで草むらに鳥や野守のかゞみ居るらむ。（歌雄）
●武蔵野の野守しらずと宿からんねよげにみゆる春の若草。（仲啓）
●咲きみちし萩に野守が鏡さへみえぬと袖へうつる花ずり。（四　〃）
●春の野の野守もわれをあやしまん若菜つみとて嫁菜つみなば。（東雲）
●尾花にやたもとをからで秋寒み野守がきたる袖なし羽織。（石季）
●はし鹿の羽色ともみむ芦の花野守が池にうつりてざさく。（蘇丸）
●雁ならで秋の野守の鏡にもうつりやすらん雁の一行。（こりふ）
●春来れば飛火ほどにもうち清め備ふ野守のかゞみ似るかな。（唐丸）
●ぬすまんと野守をしのぶをかしさにころげて落つる萩の白露。（事足）
●神主は野守のやうに草を喫ひ。（川柳）

〔のわき〕野分

野分の風。かきほあるゝ。野分のあと。野分のゆくへ。草も朝ふす。枕さだめぬ花。吹きしをる千草。花の上につらき野分。

●此の花の色勝る景色などをも御覧ずるに、野分例の年よりもおどろ〳〵しく、空の色變りて吹き出づ。花どもの萎るゝをいとさしも思はぬ人だに、あなわりなと思ひさわがるゝを、況して草むらの露の玉の緒、亂るゝまゝに、御心まどひもしぬべく思したり。掩ふ計りの袖は、秋の空にしもこそほしげなりけれ。暮れ行くまゝに物も見えず、吹き迷はして、いとむくつけ、れば、御格子など參りぬるに、後めたくいみじと、花の上を思し嘆く。南のおとゞにも、前栽つくろはせ玉ひける折しも、かく吹き出で、もとあらの小萩、はしたなく待ち得たる風の景色なり。折れかへり露もとまるまじう吹き散らすを、端近う見たまふ。（紫式部）

●山の木どもゝ吹き降かして枝ども多く折れ伏したり。草村は更にも言はず、檜皮瓦、處々の立蔀、透垣などやうのもの、亂りがはし。日の屋に差し出でたるに、憂きがほなる庭のつゆきら〳〵として、空はいとすごうきり渡れるに。（同　〃）
●は月ばかり、夜ひとよふりたる雨の、あかつきがたより、風になりたるが、はて〳〵はいみじうなりて、檜皮など、木の葉の如くちらすめり。夕つけては、さすがによわりぬれば、おりたちて、そこら見あるくに、殊さらにゆひたてし萩さをになど、みながらおしふせられたるを、まくり手しておこしたつるに、露のはらはらとこぼれかゝれるは、雨にまさりと、いひしことこそおぼゆれ。（幸文）
●野分の又の日こそ、いみじう哀におぼゆれ。立蔀透垣などのふしなみたるに、前栽ども心ぐるしげなり。大なる木ども倒れ、枝など吹き折られたるだに惜しきに、萩女郎花などの上に、よゝぼひ這ひ伏せる、いとおもはずなり。格子のつぼなどに、颯ときはを殊更にしたらんやうに、こま〳〵とふき入りたるこそ、あらかりつる風のしわざともおぼえね。（清少納言）

●さるにても我夫の、秋より先に必と、ゆふべの數はかさなれど、あだし言葉の人心、頼めてこぬ夜はつもれども、嘶千に立ちくらして、そなたの空よとながむれば、夕暮の秋風、あらし山おろし野分も、あの松とこそはおとづれ。我待つ人よりの、音づれをいつさかまし。（謡曲、班女）
●風にしたがふ杏の落葉は、羅綺を舞ふ、石に濺ぐ飛泉の聲は、雅琴を弄ぶ。伎樂の遊法の御聲、合ひに合ひたり虫の音鹿の音、瀧つ響きも一つに亂るゝ、小野の千草の露に立ち添ふ野分の風に、錦も飾りし楢の紅葉ば、木陰の落葉に朽ちにけり。（謡曲、落葉）
●それとばかり心あてに、折らばや折らん初霜の、置さまどはせる白菊の、花も色そふ夕暮に、猶露しげき野分かな。（謡曲、花軍）
●我君少しもわるびれ給はず、心靜に眉衣刎ね退け、座を窪め三方取つて押戴き、檢使の方に向はせ給ひ、殿中を憚らず刃傷に及びし上は、斯くあるべしとは兼ての覺悟、只恨むらくは師直を、討ち洩せし無念、骨髓に徹して忘れ難し。この鬱憤を晴らさせよと、我が尻目に見給ひて。九寸五分取直し、腹にかばと突き立て給へば、太刀振り上ぐる介錯に、お首は前にと跡言ひさし、岸波と倒れ泣き沈めば、由良之助を始として、一座の諸士は髻を切ばり拳を握り、翻す涙と吐く息は、野分の空と夕立を、一つによせしもかくやらむ。（淨瑠璃、伊呂波實記）
●昨日まで早苗とりしが何時の間に、稲葉戦ぎて秋の野や、萩の朝明け萩の夕暮、月の桂も色まして、大てい四時心すべてねんごろなり。中について腹を斷つ秋の天と作りし唐の歌さへ身に染みて、目出度き秋の咄なり。扇の風いつしかに、今朝を野分と吹きかはり、一本薄穂にいでゝ。（淨瑠璃、小栗判官）
●野分する野べのけしきを見るときは心なき人あらじとぞ思ふ。（季通）
●野分たつ夕の雲の足早みしぐれに似たる秋の村雨。（爲兼）
●色々にのわきの風のなるまゝにちぐさの花のあとかたもなし。（素然）
●淺茅原野分にあへる露よりも猶ありがたき身をいかにせん。（相摸）
●靡するてくさの小野の色鳥を野分の風にならせつる哉。（有功）
●あらましきのわきにちらふ花薄おのがふゞきに袖さむげなり。（千隆）
●よもすがら野わき吹きしくしのゝめにしなれて咲ける朝がほの花。（契沖）
●野分せしあがたの宿はあれにけり月見にこよとたれにつげまし。（眞淵）
●もゝくさの花はさらでもうつりゆく秋のする野にのわき吹くなり。（春海）
●野分せしみすゞ高がや影ふして下葉にまじる秋はぎの花。（同　〃）
●猪も共に吹かるゝ野分かな。（芭蕉）
●棒ついて庄屋を見舞ふ野分哉。（鴬村）
●まひといき野分吹くらん薄月夜。（召波）
●悲しきも破れかぶれの野分哉。（几董）
●戸明くれば月赤き夜の野分哉。（闌更）
●淺川の水も吹きちる野分かな。（太祇）
●蹇むしろや野分に吹かす足の裏。（一茶）
●夏をむねと造れば庵に野分哉。（也有）
●鷲の巣や野分にふとる有磯海。（去來）
●蜂入の笠取られたる野分哉。（許六）
●吹きしをる野分は露も有明の月の桂ぞにしへかたぶく。（市人）
●まねくべき薄もふせば野分して手もちぶ

さたに種のする。（葉持）
●筈にたつ庭の萩垣ふきわけてあたり憐も見通しとなる。（古吉）
●柴の戸は野分の朝もかけがねのひぢを枕に寝ておきぬなり。（菅江）
●あたらしき壁まで頬をふくらして野分のあしたなかしくもなし。（世暮氣）
●田に畑にあらす野分ののら風そして鶉のどこもかしこも。（行就）
●野分する風はまさしくそんの卦にあたるとみゆるやれのうらかた。（耳順）
●かるかやもからぬなかやも風あれてうづらの床ぞみだれがちなる。（信人）
●手つだひのほしき野分のさわぎには畑のかゞしもとんでくるなり。（長久）
●野角力のありたるあとに野分して風にくみあふ藤廼堂。（乘安）
●代官は野分庄屋は中しわけ。（川柳）
●捉ぎ捨てた樣に野分の藤彩。（同）
●後の月見には野分の卷を書き。（同）
●藤彩野分にひだを崩さるゝ。（同）
●いで其比は神無月、くるわ〳〵すまひは涙でくらす、野分つれなや吹きちらいたは、あつたら小萩小薄、花に醉ひ又紅葉には、さめてたどりし土手おろし。（俗謠）

はノ部

【は】葉

葉片。葉綠。霜葉。輕葉。落葉。黃葉。黃落。簇々。鬪々。片々。木のは。ちりかふ。みどり色。こき。風にゆらぐ。繁りあふ。木の葉の雨。

●ふりかくしてしなどうちずせらるゝものから、ことさらに、ふみわくる人にやと、手づからはゝきとりて、門のあたりすこしかきはきなどするに、又も吹きくるあらしに打ちりまがふが、かたへよりつもりゆけば、箒もふようにて、すのこにしりかけつゝ、見ぬたるほど、やう〳〵くれ近くなりて、ねに行くからすどものみだれあふ木葉に飛びまがひたるは、かの夕日花やかにといひし秋よりも、今一きは身にしみてあはれなるに、風いと寒くなれば、引たて内に入りぬ。猶吹きまどはす木のはの、ちら〳〵とさうじにちりかゝりたる、時雨さへそふ心地していとなかしく。（廣足）
●橘の小島に御船さしとめて、物の音ども吹きたてたるほど、水の底も耳たてぬべくそゞろさむきほどなるに、折知りがほに空さへうちしぐれて、まきの山風あらましきに、木の葉どものとう〳〵散りまがふ氣色、いひたらずおもしろし。（增僥）
●十月つごもりがたに、おからさまに來て見れば、木暗う荒れりし木の葉ども、殘りなく散り亂れて、いみじくあはれげに見えわたりて、心地よげにさゝらぎ、流れし水も、木のはにくづもれてあとばかり見ゆ。（孝標女）
●嗟乎、我もとより不才の樗櫟、今は猶老い朽ちて、花もなく葉も落ちて、聊のことのはも綴るにたへず。（也有）
●いかに狂女、なにとてけふは狂はぬぞ。面白うくるひ候へ。うたとやな、あれ御覽ぜよ今までは、ゆるがぬ楮と見えつれど、

も、風のさそへば一葉もちるなり。たまたま心すぐなるを、狂へと仰せある人々こそ、風狂じたる秋の葉の、心もともに亂れ戀の、あら悲しや狂へとな仰せありさむらひそよ。（謠曲、班女）
●木の葉の雨の音便に、老の涙もいと深き、心を染めて色々の、木の葉衣の袖の上、露をもやどす月影に、重ねて落つる紅葉ばの、色にもまじるちりひぢの、積る木の葉をかき集め、雨の名殘と思はん。（謠曲、雨月）
●山里の風すさまじき夕ぐれに木のはみだれて物ぞ悲しき。（秀能）
●ふる音も袖のぬるゝもかはらぬを木の葉しぐれと誰名付けゝん。（俊成）
●風ふけば楢の枯葉のそよ〳〵といひ合せつゝいづら散るらん。（降賴）
●山おろしさそふ木のはをきくからに散りそふものは涙なりけり。（隆信）
●冬きてはしぐるゝ雲のたゆまだに四方の木の葉のふらぬ日ぞなき。（爲家）
●庭の面にたれさそひおく木のはとてつもれば風の又拂ふらん。（花山院入道）
●風ふかぬよるの軒ばにおとするは霜にもたへぬ木の葉なりけり。（枝直）
●山風にふくよの月におとはしてくもるともなくちる木のはかな。（眞淵）
●ちりうづむ木のはや深き谷水はこほらぬ先に音ぞ絶えゆく。（春滿）
●おほびえやなびえおろしのおとさえて木のはふきまくしがの唐崎。（春海）
●思ひやる其かた山の松風にちるとはしるやまどの木のはも。（諸平）
●草の戸に茶を木葉かく嵐哉。（芭蕉）
●水底の岩に落ちつく木葉かな。（丈草）
●木葉ちり雪降るうへに散る木の葉。（野坡）
●撥音に散るは霰永の木葉哉。（蕪村）
●夕暮に士と語るや散る木の葉。（一茶）
●椎の葉に盛りこぼすらし春の雪。（凡董）
●古いとて桐でないもの一葉かな。（也有）
●水無月の桐の一葉に思ふべし。（野水）
●ひとつ葉やひと葉〳〵にけさの霜。（支考）
●さむさをもいとはず庭にちり遊ぶわらべも風の木の葉なりけり。（相宥）
●花よりも其葉を引いてさゝせたる菖蒲刀はあぶなげもなし。（爲成）
●今日神のおたちなればや風をはらみ空さやけくも木の葉みだるゝ。（岡持）
●木々の葉はみなあらしこやかけぬらん山のは削るかんな月とて。（季保）
●心ありと花にいはれし物草のはかぬ落葉にあらはれにけり。（也有）
●木々の葉も秋の別に色を替へておどろきたちし夕暮の風。（岩國）
●野も山もちりつくしたる冬枯は木々の葉守の神のゐるす事。（韻人不知）
●淺澤に生ふる若菜は行水につまぬ先より葉はしたしもの。（庄司）
●花はほめ葉はじやまになる明り窓。（川柳）
●風が笛吹けば木の葉が舞をまひ。（同）
●掃除する人を木の葉が呼びかへし。（同）
●杉の葉を除け〳〵糸をたぐり行き。（同）
●桐の一葉のなほそれよりも、もろさ涙のつゆ〳〵よ。そりやあふ、つゆ〳〵よ。もろさ命の露ばかりそりやあふ。（俗謠）
●桐つぼに一葉を見るにつけ、わしや氣にかゝる、秋がきたとの辻占か。（同）

●面白いぞや木曾路の道は、笠へ木の葉がよひかゝる。（同）

●一葉落ちて天下の秋を知る。（淮南）

●石が浮んで木の葉が沈む。（同）

●葉をかいて根を斷つな。（同）

●輕葉獨悠々。天高片影流。隨風來此地。何樹落先秋。變色黃應近。辭林綠尚稠。無雙浮水面。孤絶落閑眸。年減誠難覺。將凋勢未休。客心空自北。誰肯問新愁。（薛能）

●霜後色初變。風高始亂零。和雲流遠澗。雜雨下空庭。掃處篠侵影。燒時帶遶餌。翻思在春日。繞屋正青々。（善住）

●綠葉影重々。秋來逐轉蓬。自無依樹力。莫謾怨西風。（朱樵）

●秋庭不拂携藤杖。閑踏梧桐黃葉行。（白居易）

●梧桐影中、一聲之雨空灑。鵲鵲背上、數片之紅纔殘。（順）

●枝々纔到地。葉々自生春。（杜甫）

●秋花冒綠水。密葉雜青煙。（李白）

●空庭多落葉。慨然知已秋。（陶潛）

●疎樹翻高葉。寒流絮細紋。（何遜）

●葉々者葉。其葉者兮。（詩經）

●葉低知露密。

〔はか〕墓

（塚の部參照）

陵墓。墳墓。寂寞。苔痕。荒墳。墓碣。墓々。枯草。おくつき。にひばか。いしぶみ。くちのこる。しるしの石。こけむす。あれはつる。

●この里近き白峯といふ所にこそ、新院の陵ありときゝて、拜み奉らばやと、十月はじめつかた、かの山にのぼる。杉柏は奥深く茂りあひて、青雲のたなびく日すら小雨そぼふるが如し。見が嶽といふ嶮しき嶽、背にそばたちて、千仞の谷底より雲きりおひのぼれば、咫尺をもおぼつかなき心地せらる。木立わづかにすきたる所に、土たかく積みたるが上に、石を三かさねに畳みなしたるが、うばらかつらにうづもれて、うらがなしきを、これならん御墓にやと心もかきくらまされて、さらに夢現をもわきがたし。現にまのあたりに見奉りしは、紫宸清涼の御座に朝政きこしめさせ給ふを、百の官人は、かく賢しき君ぞとて、詔かしこみてつかへまつりし。近衛院にゆづりましても、菟姑射の山の瓊の林に禁めさせ給ふな、思ひきや麋鹿のかよふ路のみ見えて、詣でつかふる人もなき深山の荊の下に神がくれたまはんとは。萬乘の君にてわたらせ給ふさへ、宿世の業といふものゝ、おそろしくもそひたてまつりて、罪なのがれさせ給はざりしよと、世のはかなきに思ひつゞけて、涙わき出づるが如し。終夜供養し奉らばやと、御墓の前のたひらなる石の上に、座をしめて、經文徐に誦しつゝも、かつ歌よみてたてまつる。

松山の涙のけしきはかはらじをかたなく君はなりまさりけり。（秋成）

●東山の板橋といふ所に山庄を造らんとて、此地の主を誰ぞといふに、北野の長者菅宰相在登卿の領知なりと申しければ、嘘て使者を立て、此所を賜ふべきよしを所望したりけるに、菅三位使に對面して枝橋の事、御山庄のために承り候ふ上は、子細あるまじきにて候ふ。但し當家の父祖代々此地に墳墓を卜めて、五輪をたて、御經を奉納したる地にて候へば、彼墓標を他所へ移し

候はん程は、御待ち候ふべしとぞ返事をしたりける。師泰是をきゝて何條其人惜まんずるためにぞ、左樣の返事をば申すらん。只其墓ども皆掘り崩して捨てよとて、鍬で人夫を五六人遣して、山を崩し木を伐り捨てゝ地を曳くに、疊々たる五輪の下に苔に朽ちたる尸もあり。或は芊々たる斷碑の上に、雨に消えたる名もあり。青塚怨に破れて、白楊已にかれわれば、旅魂幽靈何くにか吟ふらんと哀なり。（太平記）

●藤原の龍際。今年正月ばかりに、身まかりけるに、其墓高松山といふ所にありて、詣でゝ花など手向け侍りし。さばかりかたらひしものを、そこともなくて、松のしげれる中にたゝずむに、秋風のいとゞしく身にしむ心地して、

松たかき山のあらしの聲のみやそこはかとなくきゝてかへらん。

其まゝ母なるもうせて、墓の並びて侍るに、同じく手向けするに、あはれさいはんかたなし。

手向けするこゝろや野べに通ふらんなる花ごとに露こぼれつゝ。（直淵）

●御墓に參りたるに尾花のうす白くなりて、招き立ちて見ゆるが、所からさかりなるよりも、かゝるしも哀なり。さばかり我も〳〵と男女の仕うまつりしに、かく遙なる山の麓に、馴れ仕うまつりし人も、一人だになく、たゞ一所招き立たせ給ひたれども、留る人もなくてと思ふに、大かた涙せきかねて、かひなき御跡ばかりだに、霧ふさがりて、見えさせ給はず。（謡岐内侍）

●のう〳〵是なる石塔御覽候へ。不思議やな。是なる石塔を見れば、星霜ふりたるに、蓋葛はひまとひ、形も見えず候ふ。是は如何なる人のしるしにて候ふぞ。是は式子内親王の御墓にて候ふ。又此かづらをば定家葛と申し候ふ。あら面白や、定家葛と候へ。式子内親王、始めは賀茂の齋の宮には、如何やうなる謂にて候ふぞ、御物語り備はり給ひしが、程なく下り居させ給ひし後式子内親王、程なく空しくなり給ひしを、定家の卿忍び〳〵の御契淺からず。其に、定家の執心、かづらとなつて御墓にはひまとひ、互の苦しみはなれやらず、共に邪淫の妄執を、御經を讀み弔ひ給はゞ、猶々語り參らせ候はん。（謡曲、定家）

●ふしぎやな此御墓所へ我ならでは、七日〳〵に參り、御跡吊ふ者もなきに、旅人と見えさせ給ふ御僧の、涙をながし怨に吊ひ給ふは、如何なる人にてましますぞ。さん候ふ。是は朝長の御ゆかりの者にて候ふが、御跡吊ひ申さん爲め、是まで參りて候ふ。（謡曲、朝長）

●由良之助刀頂鼓して、左の小脇に突き立つれば、力彌も續いて突き立てたり。次第〳〵に突き立てゝ、突き込み引き廻し〳〵時も違はず場も違はず、主君の墓の左右にて、一度に腹を切つたりし、三世の緣こそ類もしけれ。頓て殘らず介錯して、直ちに御寺を墓所、萬劫末代萬々年、朽せぬ石に名を殘し、主君の子孫家繁昌、富貴自在の幸も、忠と孝との誠の心、天地に叶ひ佛神も、目出度く守り給ひけり。（淨瑠璃、恭盤太平記）

●ふすまぢをひきたる田に妹を置きて山路をゆけばいけりともなし。（人麿）

●古のさゝだをのこのつまどひしうなひ乙女のおくつきぞこれ。（萬葉）

●鳥べ山思ひやるこそ悲しけれ獨や苔の下に朽ちなん。（成範）

❶まれに來る夜半も悲しき松風を絶えずや苔の下にきくらん。（俊成）
●我も見つ人にもつげんかつしかのまゝのてこながおくつきどころ。（赤人）
●野べ見れば昔のあとや誰ならんこの世もしらぬ苔のしたかな。（修行）
●うつせみの世人とこしきものならば草のはらをば尋ねざらまし。（土滿）
❷七かへり霜おきかふる苔のしたにありしながらの名はくちずして。（枝直）
❸おもかげはありし其世にかはらねどしるしの石に苔おひにけり。（同）
●さらでだに露けきさがの野べに來て昔のあとにしをれぬるかな。（俊忠）
●墓場にはさくらもみえず椿かな。（也有）
❹夢によく似たる夢かな墓參り。（嵐雪）
❺水鳥や葦所の火遠く江にうつる。（几董）
❻陽炎や墓より外に住むばかり。（丈草）
❼霧や野中の墓の竹百竿。（蕪村）
❽紅梅や尼の手向くる母の墓。（其角）
●墓の松あはたゞしくもしぐれけり。（多代女）
❾ひぐらしや盆も過ぎ行く墓の松。（蝶夢）
●よしきりやよしありげなる墓圍ひ。（露谷）
❿なき人のたまか夜ふかき墓原の草葉のかげにまよふ螢は。（茂栗）
❶墓に來てふっつと髮をきり〳〵すか婆こふ後家と共なさの虫。（時寛齋）
❷墓の文あはれなりける次第なり。（川柳）
❸知れて居るものを敗へる泉岳寺。（同）
❹若藻に役者の墓をさがさせる。（同）
❺桶と花さげて定紋見てあるき。（同）
❻にえきらぬ連は高尾の墓へ行き。（同）
❼知れ無ねた墓場に汚す足袋の裏。（同）
❽江戸の日歯程にならぶ義士の墓。（同）
❾小夜更けて利休が墓に茶立虫。（同）
❿いつまでも來て拜みたい親の墓。（同）
●おもひのつゆのはら〳〵と、おちてぬらせる袖たもと、いふに泣きつれゆくのべの、煙ともせや墓原の、土にもなさでこもり井の。（俗謠）
❶わしが死んだら西と東に墓たてゝ、墓のぐるりに島三羽、鳥よ鳥よ、こしよがよいかやわるいかや。（同）
❷わしが死んだらしきみの花を、たてゝくだされ墓原に。（同）
❸上有二飢鷹號一。下有二枯蓬走一。茫々邊雪裡。一掬沙培塿。傳是昭君墓。埋二閑蛾眉一久。凝脂化爲レ泥。鉛黛復何有。時有二陰怨氣一。常生二墳左右一。鬱々如二苦霧一。不二隨レ骨銷朽一。嬋人無二他才一。祭枯繁二妍否一。何乃明妃命。獨懸二畫工手一。丹青一誰誤。白黑相紛亂。途使二君眼中一。西施作二嫫母一。同俗傾二寵幸一。異數爲二配偶一。禍福安可レ知。美顏不レ如レ醜。何言二一時事一。可レ戒二千年後特報二後來姝一。不レ須レ倚二眉首一。無レ辭挿二蒲釵一。嫁作二貧家婦一。不レ見青塚上。行人爲レ洗レ酒。（白居易）
❹出レ門見二墳墓一。纍々何其稠。中有二富人骨一。蔓草纏二白樓一。在レ世爲二歡樂一。所レ居疊三玉樓一。名妹紛圍レ座。彈絲發二清謳一。貧人生二憂苦一。死近二富人丘一。貧富竟不レ異。無レ樂亦無レ憂。寄レ言諸年少。倘已勿二他求一。人生惟立善。遺愛被二千秋一。（星巖）
❺白楊樹誰家墳。火燒二野草一。碑無レ文。路旁尚臥雙石馬。行人指是故將軍。當時發レ卒開二陰宅一。千車送レ葬城東陌。子孫今去野人來。高處牧レ羊低種レ麥。平生意氣安在哉。棘叢暮雨棠梨開。百年富貴何足レ悔。（高啓）
雍門之琴良可レ哀。
❻杏艷桃嬌奪二晚霞一。美遊無レ廟有二年華一。

漢朝冠蓋皆陵墓。十里宣春下苑花。（唐彥謙）

〔はぎ〕萩

簇紫。枝伏。滿庭。紫淵。鹿鳴。錦繡。

にほふ萩原。こはぎがもと。萩が花妻。もとあらの小萩。花すり衣。つゆにみだるゝ。匂ひこぼるゝ。いと萩の花。ぬれて色こき。紫のいろにくだくるつゆ。

❶此頃の秋の野を見んとて、つとめて、立出でしに、色々に亂れさきたる花の、朝霧にぬれて、一きは美しう見え渡りたる中に、物よりことに、あなめでたと見ゆるは萩になんありける。枝たをやかに咲きて、玉と見るまで露のおける樣など、目もあやなり〳〵。さを鹿も心ありてぞ分けてたちならすらんかし。げに此花のもとこそ立ちはなれがたかりしか。（高尚）
●萩は錦を地に敷けらんやうにて、むかし爲仲が長櫃に折り入れて、都の土産に持たせつるも、風流にくらす、きちかう、なみなへし、かるかや、尾花、みだれ合ひて、小男鹿の妻戀ふ聲、いとあはれなり。野の駒、ところ得顏に群れあるく、又あはれなり。（芭蕉）
❷すこし日たけぬれば、萩などのいとおもげなりつる露のおつるに、枝の打動きて、人も手ふれぬに、ふと上ざまへあがりたる、いみじういとをかしといひたる。（清少納言）
❸萩はいと色深く、枝たをやかに咲きたるが、朝つゆに濡れて、棹鹿のゆきて立ちならすらんと、心ことなり。（同）
❹給にかける、月なかくして懷に、もちたる扇、とる袖も三重がさね、其色衣の、つまのかねごと、かならずと夕暮の、月日もかさなり、秋風は吹けども、萩の葉の、そよとの便もさかで、鹿の音虫の音も、かれ〳〵の契、あらよしなや。（謠曲、班女）
❺秋風ぞ吹く白河や、こは陸奥の名をとむる、忍ぶもじずりわれしのぶ、小萩は今ぞ宮城野の、露をもたのむやどりかな。（謠曲、宮城野）
❻女郎花の一時をくれるといへども、いひ慰むる言の葉の、露もたわゝに秋萩の、本の契の消えかへり、つれなかりける命かな。（謠曲、蘆刈）
❼また露吾の嘯りは、露を含める糸萩の、かごとばかりに散りそむる、花よりもなほめづらしや。（謠曲、卒都婆小町）
❽頃しも盛の百日紅、花に詠ずる書院先、除十開かせ勝元は、君臣諸共酌む酒に、者は千倉檢校が、調妙なる物の音は、萩の葉渡る風よりも、身にしみ增る計りなり。（淨瑠璃、室町合戰）
❾花におくつゆをしづけみしら菅のまゝ萩原しをれあひにけり。（實朝）
❿殘なき命を惜しと思ふ哉宿の秋萩散りはつるまで。（源心）
⓫露ふかき小萩が原に立ちよれば花ずり衣きぬ入ぞなき。（下野）
⓬秋風は涼しくなりぬ馬なべていざ野に行かん萩の花見に。（萬葉）
⓭はぎはらや花のさかりに風ふけばこぼらさきの涙ぞたちける。（千陰）
⓮吹きわたす萩より萩にみだれつゝ風もいろなる宮城野の露。（宣長）
⓯秋萩のさきのをゝりに山河の水のみどりもみえずなりゆく。（春滿）

●あきつとぶ野中の水に影見えてふる枝のま萩今さかりなり。（諸平）
●みだるればつくろひかへて萩の花ひと夜にもとの錦なりけり。（言道）
●朝まだきさらみて見ゆる秋はぎはつゆもやふかき花やうつろふ。（蘆菴）
●七株の萩が手本や星の秋。（芭蕉）
●影みどり萩は輪になる風狂ひ。（野坡）
●置く露や朝日加はる萩の照。（杉風）
●似合しき萩のあるじや女宮。（召波）
●白萩を春わかちとるちぎり哉。（蕪村）
●行水のあと流れけり萩の花。（也有）
●小比丘尼の折つて捨てゆく野萩哉。（曉臺）
●萩ぜつくこゝろになりぬ小さかづき。（道彦）
●そちへふかばこちらへ吹かば萩の風。（鬼貫）
●萩枯れて奥の細道どこへやら。（惟然）
●七種や蓙にうらめば萩の露。（蓼太）
●よせぎれと見ゆるお寺の錦かなどこもかし。こもはぎだらけにて。（菅江）
●萩見んとむれつゝ來るに藍さびのかすりの衣着ぬ人ぞなき。（赤良）
●風の手にまくり上げたる白萩は人の目にさへつきのよすがら。（丹青齋）
●もゝ草の中なる萩に見とれつゝいくせんにんも通を失ふ。（多他見）
●是がまあなれといふとてをられうか錦を野べの秋萩の花。（加賀丸）
●すね萩の花のあるじは風の手にこまたとられん川心をせよ。（滿永）
●餅ならば袖にも入れて萩の花都へはよきみやげ野の原。（實柿）
●鳳凰のやうにきり戸のしだれ萩。（川柳）
●ぬのしゝの寢かへりに散る萩の露。（同）
●萩がきの是より左めかけ道。（同）
●はぎも紅葉もしりさつてござるぞよ。（同）
●こぼれ萩程に珠數やの鉋屑。（同）
●送り火の中に一と雨萩の露。（同）
●陸奥の萩行脚にうを失はせ。（同）
●なで上げてしめるは萩の雨戸也。（同）
●庵の庭秋は更紗にこぼれ萩。（同）
●ちりとなる景色はみえぬこぼれ萩。（同）
●いつかは君をまた宮城野の、萩の下葉の露にしつぽとぬれて、なにともなう萩吹く風の、便をもきくやとまちし戀心。（俗謡）
●下露の、萩は染めたりそめられて、おくは露やら扇やら。（同）
●萩の露によき酒なし。（俚諺）
●七里紅欄逐水斜。櫻昏桃面鬬春華。佳期別在秋山裏。來看雨餘開澹花。（星巖）
●青與翠帶花草比。蕊雲簇紫滿幽庭。微香妙色心如記。曾誦西天經絡經。（同）
●從他鐘磬苦催鐘。戀賞駢肩立落暉。風曇紫淵香乍逃。幾團黄蝶出叢飛。（同）
●曉露鹿鳴花始發。百般禁折一時情。（菅公）

〔はし〕橋

虹形。虹橋。竹橋。方橋。長橋。斷橋。輿梁。浮ノ河。飛空梯。張飛斷。

そりはし。船はし。柴はし。板はし。つぎはし。うちはし。苔の岩はし。くち木の橋。ゆめのうき橋。行合のはし。天の浮橋。はし柱。

●遠江と信濃の國のさかひなる川そひの地に、京丸とよぶところあり。その地は他より人の行きかふべきところにもあらず。國の境に藤の蔓もて、長さ五六十間もあらんとおもふほどの棧をかけたり。所の者は京丸の棧といへり。巾せまくして行くにさへ目くらみ、魂きゆるばかりなれば、かの地へゆくものとてはいと稀なり。（洪園）
●右は數十間高きがけにて、屏風をたてたるが如き處も多く、其下は木曾川の深き水なり。此間懸橋多し。前にある名をえし木曾懸橋より危し。いづれも川の上にかけたる橋にあらず。そは道のたえたる所にかけたる橋なり。かやうの懸橋唐繪などに多し。他國にはかよやうの懸橋まれなり。（金軒）
●そこはかとなく分けまよふ山路に、ロもやう〳〵かたぶきて、いとゞこゝろぼそきに、おもほえず谷川のながれに出でぬ。いはこす白浪をどろ〳〵しう、わたるべきすべもなければ、いとくちをしくながめゐたるに、あやしげなる柴はしの、いはのはざまにわたせるを、上つ瀬とほくふとみつけたる、いと〳〵うれしくて。（廣足）
●是より又下ること數百歩にして、石橋あり。長さ七丈餘りにして、恰も虹蜺のひけるが如く、苔滑に雲蒸して、その淵底の見えざれば、渡らんとするに瞑眩き、足さへたえてすゝみかねたる。（馬琴）
●その渡しつゝ濱名の橋についたり。濱名の橋、くだりし時は、黑木を渡したりし。この度は跡だに見えねば、船にて渡る。入江に渡せし橋なり。（孝標女）
●濱名の橋はあとだにさだかならず。すぎこし里の名に、橋本などいふ所のあるや、昔の名殘ならん。板田の橋ならば、せめてけたよりもゆかんを。

名のみ猶きゝこそわたれ東路の濱名の橋はあとだにもなし。（武女）

●なほ〳〵橋のいはれ委しく御物語り候へ。夫れ天地開闢の此方、雨露を下して國土を渡る。是れすなはち天の浮橋ともいへり。其外國土世界に於て、橋の名所さまざまにして、水波の難をのがれ、萬民富める世を渡るも、すなはち橋の德とかや。然るにこの石橋と申すは、人間の渡せる橋にあらず。おのれと出現して、つゞける石の橋なれば、石橋と名をつけたり。其面わづかに、尺よりは狹うして、苔甚だ滑なり。其長三丈餘、谷のそくばく深き事、千丈餘に及べり。（謡曲、石橋）
●懸しき物をいにしへの、跡はるゞゝと思ひやる、前の世の、報のまゝに生れ來て、心にかけばとても身の、生死の海を渡るべき、船橋をつくらばや。二河の流はありながら、科の十の道多し。誠の橋を渡さばや。（謡曲、船橋）
●都をいでゝさゞ波や、志賀の浦船漕がれ行く、末は有乳の山越えて、袖に露ちる玉江の橋、かけて末ある越路の旅、思ひやるこそ遥なれ。（謡曲、山姥）
●懸草の、種うゑんとて固めしは、神か佛の堂島を、來て見よとてや田簑橋、夜々を重ねて大江橋、橋のゆきげた雪ならば、いくたび袖を拂はまし。花のふゞきの櫻橋、梅田のみどり曾根崎の、寄葉隱れの鳥の音も、法華長屋の名を立てゝ、神祇釋教懸無常、中にこめたる中町や、其家々の吉野川。（浄瑠璃、心中刃）
●まづ娘には逢はせませぬ。私に似たらば定めて情氣深からう。脇へ心散らさず一筋に頼みます。憑性があつたらば、此姑が情

氣の腰押し、お持せの名酒、お前と私が此櫂に、かう手を掛れば契約の証した心、橋が捨れば渡が無い。蓬すが縁の橋渡し、此櫂も橋渡し、橋にて祝ふかさゝぎの、身も紅に染むるとも、世に語はるゝはしならん。　（淨瑠璃、鎗の權三）

❹昔のためし來塚、是も男と女郎花、それはくれる是は又、うねりし松に手をとりて、渡るも恋の浮橋や、無明の橋いと細き、心の罪に踏み滑る、足をふみしめ、踏みしめしても、上り煩らふ男の體。　（淨瑠璃、今宮心中）

❺顯みてる程に行きかふ旅人や濱名の橋と名付けそめけん。　（選盛）

❻樋の板も昔むす斗りなりにけり幾世へぬらんせたの長橋。　（匡房）

❼何事もかはりゆくめる世の中に昔ながらの橋ばしら哉。　（道命）

❽ことゝなき君こひわたる橋の上にあらそふしのは月のかげのみ。　（西行）

❾かち人のわたればゆるゝかつしかのまゝのつぎはしくちやしゐらん。　（實朝）

❿今もなほ忘のびぞわたるをとめ子がかよひなれけんまゝの繼橋。　（千隆）

❶たれしかも跡つけそめし白妙に箱おさわたす朝むつのはし。　（同）

❷いかにしてわたしそめけん雲ゐふむ山路のおくのそはのかけはし。　（高蹊）

❸たび衣きそぢの橋のあやふさもわたりなれたる駒ぞなづまぬ。　（涌蓮）

❹よをわたる身のうきはしは中々にかへり見するもあやふかりけり。　（春滿）

❺名月は二つ有つても瀬田の橋。　（芭蕉）

❻そらぬ橋有るべき水やかきつばた。　（也有）

❼あやめ草加茂の假橋今幾日。　（嵐雪）

❽蚊ばらしの夢に浮橋かゝるなり。　（其角）

❾かさゝぎの橋や給入の百人一首。　（許六）

❿兩國の橋にてきくやほとゝぎす。　（白雄）

❶幾人か時雨かけぬく勢田の橋。　（丈草）

❷橋渡る人にしづまる蛙哉。　（涼莵）

❸涼しさに四つ橋を四つ渡り凉。　（來山）

❹橋落ちて人岸にあり夏の月。　（蕪村）

❺いにしへは千人ざりを萬人に餘る五條のはしのゆきかひ。　（季弘）

❻殊勝なり無明の橋の苫衣青道心の袖のしづくも。　（千賀江）

❼兩國は橋の下行く舟迄も三筋の糸のたえぬなりけり。　（諏人不知）

❽三上山七まき卷きしむかでよりひとあし多きせたの長橋。　（里住）

❾代々かけて道もすぐなる聖堂のわたりにいかに筋違の橋。　（瓦滿）

❿今は世にふることのみやつの國の咄ながらのはしの名斗り。　（麹人）

❶後かたもながらときけばうた人の口にのこれるはし柱かも。　（行就）

❷大空のにしとはみれど山つゞき一字にかける岸のかけはし。　（同）

❸物さしのさしもけはしきあと先へ目をくばりつゝわたる梯。　（蛛滿）

❹中庸の道ゆづるとて一あしもかたよられざる谷のかけ橋。　（一村）

❺そり橋は乳母一生のなん所なり。　（川柳）

❻そり橋を先へ渡つて口をきく。　（同）

❼平家から檢使にあきる五條橋。　（同）

❽不調法ものと五條の橋でいひ。　（同）

❾かうもりの店を道はるゝ橋ぶしん。　（同）

❿いたづらがしかられてゐる口木ばし。　（同）

❶かるわざを出るとそり橋ふところ手。

❶によつき〳〵永代橋の冬木立。　（同）

❷鳴の海面見渡せば、たぐひ涙間にありあけの、月かげさえて白波の、雪をかけたる勢多の橋。　（俗謠）

❸橋に我身を投げかけて、渡らせうよの、とろ〳〵〳〵と、やれ渡らせう。　（同）

❹橋無き小川は涉られ宮い。　（俚諺）

❺石橋を叩いて渡る。　（同）

❻三條橋分七道路。六十州人來如鶩。鴨河墓濫壓欲裂。此橋屹倚盤石固。見道石柱之礎入地深五尋。橋頭不朽精銅鐫。誰其造者曰豐臣。天正十八歳庚戌。雜眷正月乃成役。雕銘十行字如新。寧流抉出蛟鼉窟。糜石出血誰逡巡。按史正在其三月。公實奉勅事東伐。元戎此處方營行。鎧仗映日太鮮明。想見蝦鬚助威容。縱觀擁橋九陌傾。日中時已無八國。顧率群雄如奴僕。久矣靖洲路不通。手執節刀剪荊棘。然後熊皮楮矢皆聚橋之東側。君不見整頓乾坤有數公。提挈同成太平功。長城漢倚秦皇帝。汴壘宋賴周世宗。興代不沒前世績。不然銘文毀已空。如何俗儒小人腹。希世偏要罵織豎。誰背著眼讀銘辭。唯見蹄輪日西東。吾來麈寧暫延佇。觸柱水聲與我語。　（山陽）

❼烏鵲塡腦滿。黄公去不歸。勢疑虹始見。形似雁初飛。妙應七星制。高分牛月輝。秦王空構石。仙島遠難依。（李嶠）

❽朱欄畫柱照湖明。白葛烏紗曳履行。橋下鯉魚晚無數。識君杖過橋聲。　（蘇東坡）

❾板橋衰柳日蕭々。首回宣和似暮朝。上己金明池上欲。畫船銜尾騎駝橋。（王漁洋）

❿離別何邊縮柳條。千山萬水玉人遙。月明記得相尋處。城鎖東風十五橋。　（張喬）

❶灞水橋西小路斜。日高猶未到君家。村園門巷多相似。處々春風裂穀花。　（羅隱）

❷綠淚東西南北水。紅欄三百九十橋。　（白居易）

【はじめ】始

元始。元初。原初。太初。太始。開始。創始。端緒。發端。はつもの。てはじめ。てほどき。

❸宮に初めて參りたる頃、物の恥しき事數知らず、涙も落ちぬべければ、夜にまゐりて、三尺の御几帳の後に侍ふに、給ゝど取り出でゝ見せさせ給ふだに、手も得さし出まじうわりなし。これはとあり、かれはかゝりなどの給はするに、高坏にまゐりたるおほとの油なれば、髮のすぢなども、なか〳〵ひろよりは、顯證に見えてまばゆけれど、念じて見などす。いとつめたきころなれば、さし出させ給へる御手のわづかに見ゆるが、いみじう薫ひたる濃紅梅なるは、限なくめでたしと、見知らぬさとび心地には、いかゞはかゝる人こそ世におはしましけれと、驚かるゝまでぞまもりまゐらする。曉には疾くなど急がるゝ、葛城の神も暫しなど仰せらるゝを、いかですぢかひても御覽ぜんとて臥したれば、御格子もまゐらず。女官參りて、こはなたせ給へといふを、女房さゝてはなつを、まてなど仰せらるれば、笑ひてかへりぬ。物など問はせ給ひの給はするに、久しうなりぬれば、おりまほしうなりぬらん、さは早とて、よさりは疾くと仰せらるゝ。ゐざり歸るやおそきと、あけちらしたるに、雪いとなかし。今日はひるつかた參れ、雪にくもりて現にもあるまじなど、たび〳〵召せば、この局

主人も、さのみやこもりね給ふらんとする。いとあへなきまで、御前許されたるは、思しめすやうこそあらめ。思ふにたがふはにくきものぞと、唯いそがしに出せば、我にもあらぬ心地すれば、參るもいとぞ苦しき。火燒屋のうへに、降り積みたるも珍しうをかし。御前近くは、例の炭櫃の火こちたくおこして、それにはわざ人も居ず。宮は沈の御火桶の梨絵したるに向ひておはします。上臈御まかなひし給ひけるまゝに、近くさぶらふ。次の間に、長炭櫃に間なく居たる人々、唐衣着乖れたるほどなり。安らかなるを見るも羨しく、御封とりつゞ、立ち居ふるまふさまなど、つゝましげならず、物いひえわらふ。いつの世にか、さやうに交ひならんと思ふさへぞつゝましき。あうよりて、三四人集ひて給など見るもあり。暫時ありて　さき高うおふ聲すれば、殿參らせ給ふなりとて、散りたる物ども取りやりなどするに、奥に引き入りて、さすがにゆかしきなめりと、御几帳のほころびより、僅に見入れたり。大納言殿の參らせ給ふなりけり。御直衣指貫の紫の色雪にはえてをかし。柱のもとに居給ひて、昨日今日物忌にて侍れど、雪のいたく降りて侍れば、おぼつかなさになどの給ふ。道もなしと思ひけるに、いかでかとぞ御答あなる。うち笑ひ給ひて、あはれともや御覽ずるとて、などの給ふ御ありさま。これよりは何事かまさらん。物語にいみじう目にまかせて言ひたる事ども、遂はざめりとおぼゆ。宮は白き御衣どもに、紅の唐綾二つ、白き唐綾と奉りたる。御髪のかゝらせ給ふるなど、絵にかきたるをこそ、かゝることは見るに、現にはまだ知らぬな、夢の心地ぞする。女房と物いひ、戯れなどし給ふを、答いさゝか耻しとも思ひたゝず、きこえかへし、空言などの給ひかくるを、爭ひ論じなどきこゆるは、目もあやにあさましきまで、あいなく面ぞ赤むや。御菓子まゐりなどして、御前にも參らせ給ふ。御几帳の後なるは誰ぞと、問ひ給ふなるべし。さぞと申すにこそあらめ。立ちておはするを、外へにやあらんと思ふに、いと近う居たまひて、物などの給ふ。まだ參らざりし時、きゝ置き給ひける事などの給ふ。實にさありしなどの給ふに、御几帳へだてゝ、よそに見やり奉るだに耻しかりつるを、いとあさましう、さし向ひきこえたる心地、現とも覺えず。行幸など見るに、車のかたにいさゝか見おこせ給ふは、下簾ひきつくろひ、透影もやと扇をさし隱す。猶いと我心ながらもおほけなく、いかで立ち出でにしぞと、汗あえていみじきに、何事をか聞えん。かしこきかげと捧げたる扇をさへ取り給へるに。振りかくべき髪のあやしさゝへ思ふに、すべて誠に、さる氣色やつきてこそ見ゆらめ。疾く立ち給へなど思へど、扇を手まさぐりにして、絵は誰が書きたるなどの給ひて、頓にもたち給はねば、袖を押しあてゝ、うつぶし居たるも、唐衣にしろいものうつりて、まだらにならんかし。久しう居給ひたりつるを、論なう苦しと思ふらんと、心得させ給へるにや、これ見給へ。これは誰がかきたるぞと聞たさせ給ふを、嬉しと思ふに、賜ひて見侍らんと申し給へば、猶こゝへとの給はすれば、人をとらへてたて侍らぬなりとの給ふ。いといまめかしう、身のほど年には合はず、かたはらいたし。人の草假字かきたる草紙とり出でゝ御覽ず。誰がにかあらん、かれに見せさせ給へ。それぞ世にある人の手は見知りて侍らんと、怪しき事どもを、唯答へさせんとの給ふ。一所だにあるに、又ささうちおはせて、同じ直衣の人參らせ給ひて、これは今少し花やぎ、樂言などうちし、ほめ笑ひ興じ、我もなにがしが、とある事かゝる事など、殿上人のうへなど申すを聞けば、猶いと變化の物、天人などのおり來るにやと覺えてしを、侍ひなれ、日ごろすぐれば、いとさしもなきわざにこそありけれ。かく見る人々も、家のうち出で初めけん程は、さこそは恐えけめど、かくしもて行くに、おのづから面馴れぬべし。

（清少納言）

●朔日の日、効き人をよびて、長き精進をなん初むる。諸共にせよとありとて初めつ。我ほた初めつ。我ほた初めよりも、こと〳〵しうはあらず。たゞ土器に香うちもりて、脇息の上におきて、やがておしかゝりて佛を念じ奉る。その心ばへ、唯極めて尊なかりける身なり。

（道綱母）

●夫れ大方の春の花、木々の盛は多けれども、花の中にも始なれば、梅花を花の兄ともいへり。其上梅の名所々々、國々所は多けれども、六義の始のそへ歌にも、難波の梅こそよまれたれ。

（謠曲、難波）

●又當參の人々も、訴訟あらば申すべし。理非によつて其沙汰いたすべき處なり。先々沙汰の始には、當世が本領佐野の庄、三十余郷かへし與ふる所なり。

（謠曲、鉢木）

●しかも所は月雪の、三吉野なれや花鳥の、色香によりて音樂の、呂律の調琴の音に、嶺の松風通ひ來る、天つ少女のかへす袖、五節の始是なれや。

（謠曲、國栖）

●猶よろこびの盃の、影もめぐるや朝日影、伊豆の三島の神風も、吹き治むべき代の始、幾久しくも限らじや。

（謠曲、春榮）

●先は岩戸の其初、隱れし神を出さんとて、八百萬の神遊び、是ぞ神樂の始めなる。

（謠曲、三輪）

●往古の、神代の昔山跡の、國は都の始にて、妹脊の始山々の、中を流るゝ吉野川、塵も芥も花の山、げに世に遊ぶ歌人の、言の葉草の捨所。

（淨瑠璃、妹脊山）

●配所三年が間、人のうへにも我上にも、戀といふ字の聞始、笑ひ顔も是始、殊更あま人の戀とは、大織冠行平も、磯にみるめの汐なれ衣、ぬれ始めは何と〳〵。

（淨瑠璃、平家女護島）

●露しぐれそむる紅葉の初しほやこがれはつべき始なるらん。

（千隆）

●うなゐ子がすがる乳房や世の中のめぐみのつゆの始なるらん。

（諸平）

●去年も夢今年も夢とたどりきていつを現のはじめにはせん。

（紫式部）

●おぼつかなたれにとはましいかにしてはじめもはてもしらぬわが身ぞ。

（同　）

●古をかたりかはせば逢ひ見ろも今日を始とおもほえぬ哉。

（久胤）

●年ふれどこひはをはりもなかりけり思ひそめしは始なれども。

（家隆）

●はじめなき昔とおもふぞあはれなるいつよりこひにむすぼゝれけん。

（後成）

●とはゞとひとはずばさてもあるべきを物のはじめにかへるべしやは。

（貫之）

●あさらけき完ぞしるき萬代のはじめとあふぐ秋の夜の月。

（貞時）

●いはひつゝけふきる竹の枝こそは嬉しさふしの始なりけれ。

（幸文）

●手始や搦ひ乘ねたる葉摘歌。

（作者不知）

●大津繪の筆の始は何ほとけ。

（芭蕉）

●手始は小雷にてすませけり。

（一茶）

⑩難波江や芦たゝみどりに日の始。（俊吉）
⑪物貫の聲かはりけり事始。（巴川）
⑫まつ風もまだ悪深きに謡初。（成美）
●事始またや梅から柳から。（尚白）
⑬御殿〳〵人むつまじき始かな。（曉台）
⑭霞も飯に來にけり事始。（可磨）
⑮うへもなき身の濕やひめ始。（乘雅）
⑯太管や太鼓の役の持始。（秋の坊）
⑰先ざつと若水綴の且霞さへうす彩色や四季のはじめは。（春湖齋）
●神の代もかくや試む筆はじめ硯の海をさぐる滋鉾。（島丸）
⑱三味線の端唄は春の鏡もちひきぞめをするあれ鼠かも。（鏡丸）
⑲皆初の割をせん暦にも小便せずとある方なみて。（夾一）
⑳爐の羽のそれ矢羽ねん弓はじめ鏡を出でし射場の男も。（松丸）
㉑ひめはじめ暦家の説は何なりとすべて女の所作をいふなる。（讀人不知）
㉒千代までもかはらぬ春のうたひぞめ松の太夫はけふもめさにつ。（月芳）
㉓さいご屁は大蘇内がひりはじめ。（川柳）
㉔渡邊ははじめて面相つかまつり。（同）
㉕よいしめりなどゝ時平も初手はいひ。（同）
㉖そもそもどらの始まりは花見なり。（同）
㉗ばつたりといふと東海と讀み始め。（同）
㉘はじめ歸おまへもまアがはじめなり。（同）
㉙琢敷裘嬢輕薄のはじめなり。（同）
㉚野がけ道親父の戒後初にさゝ。（同）
㉛法事から始めて泊る里の淫。（同）
㉜石があるさうだと郭巨初手はいひ。（同）
㉝嬢たふりをして居りや濕癖をかき始め。（同）
㉞はじめあり、なはりあるも浮世かな。めぐる月日と來る秋も、朔日あしたの山かづら。（俗謡）
㉟中々に初より、馴れずば物を思はじ。忘れは草の名にあれど、忍ぶほ人の面影。（同）
㊱わかれ思へばあはぬがましよへ、初めあらずばなか〳〵に。（同）
㊲始あれば終あり。（俚諺）
●一は萬物の創め。（同）
㊳終り初物。（同）
㊴逢ふは別れの始。（同）
㊵始のさゝやき後のどよみ。（同）
㊶初きらめき奈良刀。（同）
㊷天地果無初乎、吾不得知之也。生人果有初乎、吾不得而知之也。然則孰爲近。曰有初爲近。孰明之、由封建而明之也。彼封建者、更古聖王堯舜湯文武、而莫能去之、蓋非不欲去之也、勢不可也。勢之來、其生人之初乎、不初無以有封建、非聖人意也。（柳宗元）
㊸燕昭王、於破燕之後、卑身厚幣、以招賢者、郭隗曰、王必欲致士、先從隗始。況賢於隗者、豈遠千里哉。（司馬遷）
㊹有太易、有太初、有太始、有太素、太易者未見氣也、太初者氣之始也、太初者形之始也、太素者質之始也。（列子）
●搖青海之綠映紅塵、賭歌七月天風始。（富嘉謨）
●人生識字憂患始。姓名寵記可以休。（蘇軾）
●因思贈時語。持用結終始。（白居易）
●無名天地之始、有名萬物之母。（老子）

●高人山水心。結習自無始。（朱熹）
●大哉乾元、萬物資始。（易經）
●出入無窮、與日無始。（莊子）

〔はしら〕柱

支柱。柱石。門柱。倚柱。題柱。

かどばしら。はし柱。まき柱。くちし柱。宮柱。蚊柱。霜柱。はしら根。はしらだて。天の御柱。國のみ柱。

●東ざまにうち見やりたれば、山霞み渡りて、いとほのかに心悄し。柱により立ちて、思はぬ山など思ひ立てれば、八月より絶えにし人はかなくて、正月にぞなりぬるかしと覺ゆるまゝに、涙ぞさぐりもよゝにこぼるゝまで、

諸聲に鳴くべきものを鶯は正月ともまだ知らずやあるらん。（道綱母）

と覺えたり。

●阿夏はそれをうしとせで、只瀬十郎が事のみ、牡鹿の角の來の間も、忘れぐこそ物おもふ、天をながめて送る日の、門の柱に身をよせて、立ちつくせども來ぬ人を、まつ吹く風の便すら只一遍もきこえねば、里は怨みてうちなげく。（馬琴）

●馴れし住ひは川添の、門の柱は朽つるとも、死なずば出でじ、出だされじと、思ひしものを思ひきや、あきもあかれもせぬ中を、去られてかへる親里の、閨も高くならんとは。（同）

●昔下總の國に眞野の長といふ人住みけり。引布を手むら萬むらおらせ、さらさせけるが家の跡とて、深き川を船にて渡る。昔の門の柱のまだ殘りたるとて、大なる柱川の中に四つ立てり。人々歌よむを聞きて、心のうちに、

くちもせぬこの川柱のこらずばむかしのあとをいかで知らまし。（孝標女）

●後は山、前は野べ、い筷を筷に風さわざ世に絶えぬ身のならひとて、うきふししげき竹柱、部の方のおとづれば、間遠に結べるませ垣や。（平家物語）

●蟹に苦の時來ると、いひもあへねば塚の上に、火焔一群飛び覆ひて、光は悲魂の鬼となつて、標を振り上げ追ひ立つれば、行かんとすれば前は海、後は火焔、左も右も、水火の責に責められて、せんかたなくて、火宅の柱に、纏りつき取り付けば、柱は卽ち火焔となつて、火の柱を抱くぞとよ。あら熱や堪へがたや。五體の燒火の、黑煙となりたるぞや。（謡曲、求塚）

●月の夜影に見來れば、世を捨人、よい〳〵かゝる海士の家、松の木柱に竹の垣、夜寒さこそと思へども、芦火にあたりて御泊あれと申し候へ。（謡曲、松風）

●里離れ須磨の家居の習とて、何事を松の柱や、竹あめる垣は一重にて、風もたまらじ痛はしや。海は少し遠けれども、波たゞこゝもとに聞え來て、いつの間に、夢をも御覽候ふべき。（謡曲、絃上）

●見え渡る高根々々に消え殘る、雪のふゞきの音さへも、吹きあらしたる松の風、いとゞ淋しく杉坂は、村山里に亡き人の、名をのみ殘す石の數、遠りに立てし竹柱、茅が軒端もそこ〳〵に、尺にもたらぬ草莖、内に音する鐘の聲。（浮瑠璃、彦山權現）

●梅と椿の大木を、直に住家の門柱、立てそふ花も八重ぶきの、霞の屋根に蔦の壁、草のとぼそにそむ老女。（同）

●まき柱作る杣人いさゝめにかりほの爲とつくりけめやも。（萬葉）
●東風のあさぎの柱霞ながらいつふしなれて戀しかるらん。（肥前）
●國の中にたてしためしぞたてゝ見よなど御柱の入になるらん。（春滿）
●おのづからくちのこりたる門柱わがいへいかでたてなをさまし。（信實）
●飛驒たくみほめて作れる槇柱たてし心はうごかざらまし。（眞淵）
●たのしまん心なりせば松の垣竹の柱もさもあらばあれ。（爲廣）
●住みなるゝ此山里のまき柱あとだにのこれわが後の世に。（雅有）
●山里のあさ木の柱あさよひにたつとはすれど細きけぶりや。（藤平）
●うるさしとまつはる蔦をひきもせばよるぼひぬべし竹の柱は。（久胤）
●宮柱ひたのたくみが作りなすかなしき物とこひなしりぬる。（契沖）
●蚊柱に夢の浮はしかゝるなり。（其角）
●柱にもまたるゝ花やはつ暦。（也有）
●年渡りえや隅田川原の橋柱。（嵐雪）
●莊嚴の柱によりて合歡の花。（芭蕉）
●石寒し四十七士が霜柱。（几董）
●風かけて寂しき夜の柱かな。（土明）
●秋風やよる甲斐もなき竹柱。（曉台）
●帆柱に並ぶや霧の向ひ島。（北枝）
●高灯籠畫はものうき柱かな。（千那）
●梅ちかき庇柱やもたれもの。（杉風）
●影みえて肌寒き夜の柱哉。（闌更）
●萬歲にほめ立てられてはづかしき草の庵の柱數哉。（木綿）
●是程に殘る寒の霜柱數へおとしゝ三河萬歲。（きよすみ）
●柱とも立つべき秋のきりかみや霜もいろはの印にぞおく。（羽盛）
●領分のさか井の村と夕暮に棒杭よりもたつや蚊柱。（可童）
●萬歲は言葉たくみにおもしろや柱にさせるふしはなけれど。（雪風）
●野嵐と書いた柱にまとひつゝ人のながめとなりし畫がほ。（枝丸）
●しづまつて柱の飯をやつと拔き。（川柳）
●辻番は椿を杖ともはしらとも。（同）
●封じ目を柱で付ける急な用。（同）
●石になる木は南朝の柱なり。（同）
●床ばしらよつても見ずに年が明け。（同）
●幟竿後家は杖とも柱とも。（同）
●削るのが好きで柱が細くなり。（同）
●あゝ時なるかな金の柱も虫ではて。（同）
●子宝の出世柱に餅をつき。（同）
●御再建杖で柱を引きに出る。（同）
●蚊をうらみ夜半に釘打つ杉柱。（同）
●御代の盛はナ、八棟造り中門ろうかく、男女かいちうまん袖を連ねて、連ねて袖を、にぎはふ都、戀は世界に誰がたねまきそめて、おゝそれ〳〵〳〵、それが定か眞定か、ふたり比翼の初枕、妹脊わりなさめうとあひ、柱のかずが三千三百三十本、まばしら小柱見つけ柱、數居鴨居も水もたゝへる、がらん組みたて、百萬歲の樋のおと、しつていてう〳〵長久と、御代の榮ぞいさぎよき。（俗謠）
●あひはせなんだか遠江灘で、二本柱の大和丸。（同）
●久し振ぢやと柱で頭、あひたかつたと目に涙。（同）
●男の心と太極柱は太うてもふとかれ。（俚謠）

●獨活の大木柱にならぬ。（同）
●荊軻逐秦王、秦王環柱而走。群臣驚惧、事起不意、盡失其度。而秦法群臣侍殿上者、不得持尺寸之兵。諸郎中執兵、皆陳於殿下、非有詔不得上、方急時不及召下兵。以故荊軻逐秦王、而卒惶急無以擊軻。而乃以手共搏之。是時侍醫夏無且以其所奉藥囊提荊軻。秦王方環柱走、卒惶急不知所爲。左右乃曰、王負劍。王負劍。遂拔以擊軻、斷其左股。荊軻廢。乃引其匕首以提秦王、不中、中柱。秦王復擊軻、軻被八創。軻自知事不就、倚柱而笑、箕踞以罵曰。事所以不成者、乃欲以生劫之。心得約契以報太子也。（司馬遷）
●酷橋風月爲多情。還到春時別恨生。倚柱羣思倍惆悵。一場春夢不分明。（張侃）
●松寺曾同一鶴栖。夜深鑒殿月高低。何人爲倚東樓柱。正是千山響澗溪。（杜牧）
●題柱盛名兼絕唱。（錢起）
●繞柱遊題紛照映。（駱賓王）

〔はす〕蓮

●蓮。黃心。異蕊。仙葩。碧圓。綠柄。綠淨。搖風。擎雨。凌波。浮水。十里香。滿池嬌。散清香。浮小葉。

はちす。花はちす。ちもとの蓮。こぞめの蓮。法の蓮。胸のはちす。濁りにしまぬ。露の白玉。浮葉のつゆ。法の花。

●亜愛に咲ける夏草の花よりも猶もさゝやかなる池といへど、濁にそまぬ蓮の花つけたるばかり、心も清まる事はあらじかし。同じ花紅葉も、人により心によりて、かずまへられものすれど、わきて佛の御足膝のもとに仕う奉り、或は生きとし生ける人草も、皆このやどり願はぬものやはあらぬ。昔ありける菅原の大臣は、清蓮華入夢。拜佛座金蓮と作り給ひしぞかし。（長明）
●市路はわづか中垣一重隔てたれど、いたうひなめきたる田居に、家作りて、友だちのすめるを、とぶらひたるに、さうじ皆明け放ち、いよ掛け渡して、あるじははしのすのこの上に、扇手馴しつゝぬたり。待ちとりいたうよろこびて、さし向ひ物語す。家ぬのさま夏をむねとして、庭のかぎり池になし、蓮を茂く植ゑ並べたりけり。花は濃き薄き所せう咲きて、涼しく吹き來る風にたぐへて、打匂ひくるは、此世のうちとも思はれず。かく靜にすめるあるじの心よ、蓮の濁にしまぬにも似たるめり。（尙文）
●そこ清く拂ひ流されたる池のおもて、綠深う霞み渡りたるに、蓮の花のいろ〳〵開けわたりたるほど、誠に極樂の八功德、血の池もかうこそあらめと思ひやられて、すゞしくいみじきに、あるじの中納言の御かたち有樣、あてに氣高う愛敬こぼるゝばかりに、あたりまで匂ふ心ちして、おりたちいみじう心に入れて、經佛のかざり、尋常なるまじう思しいとなみたるさま、いみじからん后の位も何にかはせん。（濱松中納言物語）
●蓮のうき葉のうたげにて、のどかにすめる池の面に、大なるとちいさきと、ひろごりたゞよひてありく、いとをかし。とりあげて、物おしつけなどして見るも、よに

いみじうをかし。（清少納言）

●彌陀願む、心は誰も一聲の、内に生るゝ蓮葉の、濁にしまぬ心もて、何疑ひの有るべき、有り難や此教、洩らさぬ誓ひ目のあたり、受け悦ぶや上人の、御札ないざや保たん。（謠曲、誓願寺）

●けふよりは露の命もなしからず蓮の上の玉とちぎれば。（實方）

●うき世にはきえなば消えね蓮葉に宿らば露の身ともなりなん。（基俊）

●花といへばあだにのみやは見はつべき池の濁もそまぬ蓮葉。（春滿）

●散りはてゝ花はなけれど同じ香を納のこしたる池のはちす葉。（實道）

●風ふけばはすのうき葉に玉こえて涼しくなりぬ蜩のこゑ。（俊賴）

●はちすばのにごりにしまぬ心もて何かは露を玉とあざむく。（遍昭）

●露つゝむ池のはちすのまくり葉に衣の玉を思ひしるかな。（西行）

●うちよする浪かあらいか夕風の吹きうらがへすいけのはちす葉（千陸）

●をとめらがすがたの池にきにほふはちすの花のちらまくをしも。（土滿）

●はつ花をあすも見せんと夕ぐれはつぼみにかへる蓮なるらん。（有功）

●蓮の香や水をはなるゝ壹二寸。（蕪村）

●何いうて囁く舟ぞ採蓮花。（召波）

●釣舟に御僧を乗せて蓮見哉。（維駒）

●昼中や人靜りて蓮匂ふ。（桂舞）

●さは〳〵と蓮動かす池の亀。（鬼貫）

●蓮の花散るや八島のみだれ日。（史邦）

●蓮の花餘り匂ふて散らんとす。（升六）

●先活けて返事書く也蓮のもと。（太祇）

●笙涼し遙に蓮の葉分船。（拳太）

●浮蓮に魚乗らんとぞ守りたる。（道彦）

●尋ぬれば蓮の君子の門ばしら。（芭蕉）

●包まれて水ものびたる蓮哉。（野坡）

●御佛のうてなと見ればおそろしき鬼蓮までも水に浮べる。（玉川堂）

●此世から見ても涼しき蓮の葉や終にはのらん老のよは味噌。（走帆）

●夕立のにごりにしむはいや〳〵と蓮はかぶりを古池の中。（白人）

●蓮池をこけありく露の白がねはひろふ欲だになくて涼しき。（東作）

●危きにちかし蓮の上の露花の君子の側におきても。（雪丸）

●蓮葉に雨のくれたる水玉をいけになげうつ風の涼しさ。（宮人）

●そこふかく聞きては胸にすまさばや池の蓮の根はり葉ぼりに。（若持）

●ぞつとするほどに涼しき川童のかしらにおける露の蓮葉。（木登）

●花のみか蓮のまき葉の封じめも佛の法にはなれがたなき。（元住）

●花にめでゝ是は〳〵と手をうてば御魂の出づるはすのあけぼの。（春琳）

●蓮の實のとぶを見てゐるかゝり人。（川柳）

●こゝを折りなさいと蓮は生れつき。（同）

●八宗も色あらそはぬ白蓮花。（同）

●蓮をみにむすこを誘ふいやな後家。（同）

●あの蓮へかう居やしやうと魔れつき。（同）

●聲いろに折紙のつく蓮の中。（同）

●白蓮は諂ふ色のなき君子、（同）

●木やりにて蓮の葉へのる大佛。（同）

●舍利程は蓮も露持つ法の池。（同）

●寄り合うて見ては別れる蓮の露。（同）

●四靈順天女の池の蓮の上。（同）

●濁らぬは君子の胸の蓮花なり。（同）

●えもん正しき立ちすがた、其おもかげのかほよ花、いつか御法のうてなにて、しらべん蓮の糸よりも、ほそき心や郭公、いま一こゑのきかまほし。（俗謠）

●唄へ十七聲はりあげて、胸の蓮花の開く樣に。（同）

●泥中の蓮。（俚諺）

●蓮葉あきなひ。（同）

●水陸草木之花、可愛者甚衆。晉陶淵明獨愛菊、自李唐來、世人甚愛牡丹。予獨愛蓮之出於泥而不染、濯清漣而不妖、中通外直、不蔓不枝、香遠益清、亭亭淨植、可遠觀而不可褻翫焉。予謂菊花之隱逸者也、牡丹花之富貴者也、蓮花之君子者也。噫菊之愛、陶後鮮有聞、蓮之愛、同予者何人、牡丹之愛宜乎衆矣。（周茂叔）

●露冷蓮坡半已空。芳叢零落泣西風。無人解道殘花好。獨立衆塘煙雨中。（宋似）

●紅錦機空水國蓴。罅頭千蓋似秋風。鱸鄉一段衆枯事。都在沙鷗冷眼中。（黄齊）

●朝來雨衆白蓮花。白照資昏玉無瑕。穿蓮九街香不散。併將月色到吾家。（山陽）

●山綿苦報道。鱸錦已交加。聊挈聖人酒。來看君子花。曉風偏蕩蕩。午影半欹斜。幽賞何云已。留連到夕陽。（星巖）

●流牛何解避炎威。日照花房露已晞。不見芙蓉初發處。預張翠蓋護紅衣。（竹外）

●倒開翠扇清風曉。水泛紅衣白露秋。（許渾）

●經營題目佛驚眼。知汝花中植善根。（爲憲）

●曉風池蓮香度。晚日宮槐影西。（山谷）

●看取蓮花淨。方知不染心。（孟浩然）

【はせを】芭蕉

半捲。斜欹。庭外。窓前。鳳尾。翠扇。蔽日。鳴夜雨。戰秋風。

ひとつば。庭のばせを。風に破るゝ。雨の音する。

●義仲僅に三十餘騎を以て、かの數萬の兵を破りをはりぬ。風聞廣きに及びて、平氏の大將十萬の軍士を率して、北陸に發向す。越州、加州、礪並、黒坂、しの原以下の城郭にして、數箇度合戰す。策を帷幕の中に運して、勝事を咫尺のもとに得たり。然るに聚てば必復し、貴むれば必降る、秋の風の芭蕉を破るに異ならず、冬の霜の蕉蕉を枯すに相同じ。（平家物語）

●見ずや露をこそ、はかなき物といふめるに、今朝のまのあさがほの花におくれぬる事を、芭蕉の上にかける蜉蝣、風になびけるは、芭蕉やささだちて破れんとする、蜉蝣やさきに消えんとする。ともにあだなる身なり。人もまたしかなり。（西行）

●かはらずして長屋さびしく、花見し惜も、前栽の秋の哀に、匂ありながら、闌哀へ、芭蕉なほ夕風に形をうしなひ、門に人稀なれば鳥の聲寡つて、いつとなく内證は野となりて、鹿もすむべき風情。（西鶴）

●名月の粧にとて先芭蕉をうつす。其の葉廣うして、琴を覆ふに足れり。或は半吹き折れて、鳳鳥の尾を痛め、青扇破れて、風を悲む。たま〳〵花さくも花や可ならず。葉太けれども、斧にあたらず。（蝶夢）

●春過ぎ夏たけ、秋來る風の音信は、庭の荻原先そよぎ、そよかゝる秋と知らすなり。身は古寺の軒の草。忍ぶとすれどいにしへも、花は嵐の音にのみ、芭蕉葉のもろくも落つる露の身は、置き所なき虫の音の、蓬がもとの心の、秋とてもなどか變らん。よしや思へば定めなき、世を芭蕉葉の夢の中に、牡鹿の鳴く音は聞きながら、驚きあへぬ人心、思ひ入るさの山はあれど、唯月ひとり伴ひ、馴れぬる秋の風の音。（謠曲、芭蕉）

●芭蕉に落ちて松の聲、あだにや風の破るらん。風破窓を射て寂きえ易く、月疎屋を穿ちて夢なり難き、秋の夜すがら所がら、物冷ましき山陰に、住むとも誰か白露の、慈り行く末ぞ哀なる。（同）

●槿の花は日を見て榮じ、芭蕉は雷を聞いて開き、耳目なうして時を知る。況や明君機に臨み、變に應じて民を撫で、難苦を憐み世を富ます。（淨瑠璃、時頼記）

●人の命は芭蕉葉の、露とは知れどかねてより、斯くあるべしと思ひきや。（淨瑠璃、花襲會稽掛希染）

●秋風におふはせをばのくだけつゝあるにもあらぬ世とはしらずや。（教長）

●風ふけばあだにやれゆくばせをばのあはれと身をもたのむべき世か。（西行）

●さりゝゝすまぢかきかべにおとづれてよひの雨ふる庭のばせを葉。（寂蓮）

●いかゞするやがてかれゆく芭蕉ばにこゝろしてふく秋風もなし。（爲家）

●吹く風を芭蕉の葉してあふぎ入るまどのうちはゝ取るべくもなし。（言道）

●身をよきて秋行きかへば芭蕉葉の心のまゝに廣葉なりけり。（同）

●うゑてこそ見るべかりけれ國つ民これも言葉のひろき芭蕉葉。（有功）

●秋近き露のばせを葉風こえて月さへもろしありあけの庭。（光平）

●此の寺は庭一杯の芭蕉哉。（芭蕉）

●神樂歌かゝる芭蕉の廣葉哉。（盲水）

●ばせを葉や打かへし行く月の影。（乙州）

●芭蕉葉や在家の中の淨土寺。（露川）

●五合ほど露うちあくる芭蕉哉。（可風）

●物書に葉うらにめづる芭蕉哉。（蘇村）

●暮の春に芭蕉の雨の雫かな。（召波）

●野鳥の上手にとまる芭蕉哉。（一茶）

●破芭蕉心此ほど物くさき。（白雄）

●くるゝほどばせをにひゞく虫の聲。（許六）

●芭蕉にも思はせぶりのうこん哉。（鬼貫）

●ちからなく菊につゝまるゝ芭蕉哉。（素堂）

●染めかねて我と引きさくばせをかな。（蓼太）

●ばせを葉になにゝなれとや秋の風。（路通）

●はや秋の日に涼しくふる雨は庭のばせをのはにぞみるなり。（奴毛作）

●船に帆をかくのごとくの涼しさと先なぞらへる芭蕉葉の有り。（主守）

●涼しさは秋にも庭の芭蕉葉に玉まきそふる宿の打水。（二字守）

●芭蕉葉に雪はものかは若ゑびす賣りぬる聲に開く初花。（恥丸）

●芭蕉葉にふる雨よりも門たゝく水鶏に夢はやぶられにけり。（檜園）

●芭蕉の上で勘當をゆるすなり。（川柳）

●芭蕉葉の破れて月さすしたじ窓。（同）

●芭蕉葉に尺取虫は泊りかけ。（同）

●芭蕉葉の文鎮かるし蝸牛。（同）

●お祭りの獅子の尾らしい破芭蕉。（同）

●身にきる衣は芭蕉葉の、破れし袖に風わたり、雪寒うしてはらいかね。（俗謠）

●のふうらめしのあだ人や、六趣衆生たいでやらす、人間不定芭蕉葉の、生きてかへらぬ死出の旅。（同）

●芭蕉得雨便欣然。終夜作聲清更妍。細聲巧學蟲鳴紙。大聲能若山落泉。三點五點俱可聽。萬籟不生秋夕靜。芭蕉自喜人自惱。不如西風來却雨即休。（楊萬里）

●檐前蕉葉綠成林。長夏全無暑氣侵。但得雨聲連夜靜。何妨日色半牀陰。新詩蕉葉題將滿。老芰疎桐恨轉深。莫笑鄰人談松鹿。至今醒夢兩難尋。（王守仁）

●芭蕉心盡展新枝。新卷新心暗已隨。願學新心棄新德。旋隨新葉起新知。（張岐）

●午夢初回理琴。竹爐重炷海南沈。茅簷三日蕭蕭雨。又展芭蕉數尺心。（陸游）

●蟬欲盡驚絡緯鳴。秋風忽已動江城。山窗寂寂無眠夜。梧葉芭蕉聽雨聲。（黃姬水）

●籬外涓々泗水流。槿花半照夕陽収。欲問名字知相勸。又恐芭蕉不耐秋。（寶蕊）

●蕉葉倚孤石。綠映間庭宇。客意不驚秋。滿々任風雨。（高青邱）

【はた】旗

旌旗。軍旗。酒旗。旗色。長竿。半卷。閃々。翩々。ひるがへる。なびく。

●長年が一族名和七郎といひけるもの、武勇の謀ありければ、白布の五百端ありけるを旗にこしらへ、松の葉を燒きて煙にふすべ、近國の武士共の家々の紋をかきて、此處の木の本、彼處の峯にぞたておきける。此旗ども峯の風に吹かれて、陣々に翻りけるさま、山中に大勢充滿したりと見ぬびたゞし。（太平記）

●やがて斥候を遣しければ、且くして立かへり、敵は安四麻呂等にあらず、又山賊にも候はず、誰とはしらず千騎あまり、整々として稻麻の如く、陣列隊伍法に稱ひて、中軍には一流の白旗をおし立てたるが、尋常の敵にはあらず。こゝを去ること二十餘町、しばし人馬の足を休めて推寛んずありさまなり。（馬琴）

●洲崎に噪ぐ千鳥の聲は曉うらみをまし、磯間にかゝる機の音は、夜半に心をいたましむ。白鷺の遠松に群れ居たるを見ては、源氏の旗をあぐるかと疑はる。野雁の遂海になくを聞きては、兵共の終夜舟をこぐかと驚かる。（平家物語）

●一張の弓の勢は、半月の胸の前にかゝり、三尺の劍の光は、秋霜の腰の間に横へたり。高き所には赤旗多く打立てたれば、春風に吹かれて天に飜るは、只火炎の燃えあがるにことならず。（同）

●いかに申上げ候ふ。御諚の如く黑坂の上に、多くの白旗を立て候へば、平家の勢これを見て、あはや源氏大勢向うたるは、取りこめられては叶ふまじ。こゝは便宜の所なりと、祇並山の山中、猿が馬場と申す所に陣を取りて候ふ。（謠曲、木曾）

●豐に廣き御惡、天に輝き地に滿ちて、北辰の共する數々の、萬天に廻る星の如く、百官卿相雲客や、千戸萬戸の旗を擺かし鉾を横へ、四方の門邊にむらがりて市をなし、金環珠玉光を交へ、光明赫奕として日夜の勝劣見えざりけり。（謠曲、四海）

●保元の春の花、壽永の秋の紅葉とて、散

々になり浮ぶ、一葉の船なれや、柳が浦の秋風の、追手がほなる跡の波、白鷺のむれ居る松見れば、源氏の旗をなびかす、多勢かと肝を消す。（謡曲、清経）

●浦々には敵手舵の舟を浮べ、陸には赤旗いくらも立てならべ、春風に靡き天に翻る有様、猛火雲を焼くかと見えたり。（謡曲、鵜）

●君落人の御身にて御供とても一兩人、千騎にあまる追手の兵、多勢を頼み油斷するは必定、我等と長年兩人は向ふの松原にかくれ入り、母上は君の御供して、天神の社に忍び、上を始め各々下着の小袖をぬいで、裏表ひとの〳〵に解き放し、本社末社のかれのをともに大旗小旗の尺に切り、石なくゝつて森の梢、こゝかしこになげかけ〳〵、敵寄せくるとも靜まりかへつてほの〴〵の明の朝風の、きりのひまゝ〳〵森の樹陰に、旗の手のひらり〳〵とひらめくを、小勢と見る者有るべきか。一のみにあなどつて、油斷したる追手の勢、とむねをついて色めく所を、神樂堂の大太鼓、らん調にうち立て玉はゞ、先陣より崩れ立ち、後陣も共に亂るべし。（淨瑠璃、女楠）

●思ひ〳〵の家の旗、眞先に押立つる、青黄赤白紫や、五色あやどる紋の綾、小旗吹き貫き様々に、映り心や染色は、櫻にあらねども、都の錦と疑はる。（淨瑠璃、大塔宮）

●金もて錦をちうし月と日は今はた雲の上にのこれり。（俳雄）

●邊が門のつくれる小田をはむ鳥まなぶたはれて幡ぼこにをり。（萬葉）

●かり宮の錦のみ旗たちかへり忍ぶむかしのゆめにし見ゆる。（蕭平）

●ふたへなくおもふ心の赤坂に世さへ靡かす旗手高しも。（光秋）

●はぜ釣や水村山郭酒旗の風。（嵐雪）

●佐保姫の野路に立てたる小旗かな。（巣兆）

●初午や小旗をつかむ舟上り。（白雄）

●紅葉を須磨の風の直赤いは其旗いろやいら一めん。（都柳）

●赤はたとすまの内裏がうつろひて木々の松葉も落仕度見ゆ。（如意）

●楠のはたかとみゆる一ながれおもかげのこす菊の下水。（青蘆）

●白はたも赤はたも見ぬ世にすみて花やもみぢをめづる民草。（百年）

●旗色は源平桃の花斗りみよやいなりの杉を小だてに。（橘洲）

●郭公ゆうべの雲の旗よげに山のはむかふ鳥のねもなし。（同）

●白びやうしはた色を見てついと立ち。（川柳）

●女ばうは旗色を見て茶をわかし。（同）

●旗を立て加勢を頼むかしは餅。（同）

●旗色のいゝのは初手の節句なり。（同）

●旗色を湯出てあらはす平家蟹。（同）

●赤旗の怨獄海を横に遊ひ、（同）

●明後日に源氏の旗はかゝはらず。（同）

●異國貴日本で撫でる毘の旗。（同）

●旗のはて二布にする衣裝方。（同）

●源平の旗を順禮着てあるき。（同）

●旗色を見る。（俚諺）

●水村山郭酒初香。綺影青々字一行。盧眸低懸花霧濕。檣陰斜揭柳風涼。指揮意馬衝愁陣。描畫心旌入醉鄉。惆悵步兵招不起。半竿空自鮮斜陽。（謝宗可）

●滿磧寒光霜絶暇。幾條獨見印胡沙。無風欲亂孤烟直。有月還隨弓影斜。旭日臨城間虎豹。春雲蔭渚覩龍蛇。東風別有升平樂。杳雨初晴望杜家。（山陽）

●背景叢莊側。求賢市肆中。擁磨分彩燭。持餌曳丹虹。影麗天山雪。光搖朔塞風。方知美周政。抗旆賦車攻。（李嶠）

●野水晴山雪後時。獨行村落更相思。無因一向溪橋醉。處々春梅映酒旗。（李群玉）

●徒々王孫。悠々旆旌。龍旗所指。八表澄清。（滕彦）

●旗旗日暖如烏翼。（杜甫）

●郊雲拂畫旗。（岑參）

●風旗翻翼影。（駱賓王）

〔はた〕畑

陸田。蔬園。菜圃。地肥。壤沃。數畦。種植。栽培。綠畦。園生の畑。賤のやけ畑。かた山畑。遠山畑。

●城下はなれて半道ゆけば、瀬見の小川にあらねども、流すさしき石川あり。西も東も山畠にて、粟穂の鳥をどし、鳴子になるゝ村雀、妹脊兎のはらむてふ、月にうつらふ萩の露、さはらばおちん女郎花、そよ〳〵風に亂れては、袖もさながら花摺衣、すそ吹きまくる秋の野の、千草の泳めにしくものあらじと獨言ちたる所に、後より何氣もなく、ほんに氣がはれたのと、莞爾と笑ふ花かづら、雲の蕭寂寞として、天人の生寫かと、心も空にとびゆくさへ、切つたる月夜に、帷子の模樣まで殘りなく見え渡き、引きしごき帶しどけなく、二八の春に行き渡る程の振袖只一人、なちかたやしげりわ野邊の利鎌を以て、花を刈るよや女郎花押しわけ〳〵來りける。（都の錦）

●戌申のことし、霜のはじめなりけり。江戸を出でゝ、清戸といふ所に、旅よりたびのかりねも、十日あまり、世やある子やもてると、あるじに咄もやをら爲し。みそめて此あたりの事など尋ねさくに、昔はこゝもとも月の名におふ武藏野なりしよし。今は家つらなり、田畠と變じて、露おく草の名にもあらぬ、大根牛房の殊にめでたき里なりとかたる。（也有）

●岡の山畑雨霽れて、畝々繁る初粟に、嘶ゆる駒を率さ止め、あら不思議や此方の粟は穂もなきに、諸鳥群れ居て餌を啄む。彼所なる粟ほ穂に出れど、鳥の一羽もつかざるは、粟の繁みに隱れし者の有りと見えたり。（淨瑠璃、大磯虎稚物語）

●捨つるに極めし身の上も、そさろに心細げにて、三途の川は目の前の、麥吹く風のさゞ波や、空淋しくも名乘てふ、死出の田長を友がねに、さいたら畠の案山子かと、見るにつけ聞くに觸れ、彼世にたがふぞあぢきなき。（淨瑠璃、二つ腹帶）

●いたづらにあるくそのふのはたけせりわびしげにてもあるよなりけり。（知家）

●はりまなるおかまにつくるあゐばたけいつあながちのこそめをかみん。（信實）

●風わたるやけ山ばたのおたもえもまたことゆかずさゆる白ゆき。（爲家）

●人のすむさとのけしきになりにけり山ちのするのおづのやけばた。（行篤）

●あはれなる遠山ばたのいほり哉おばのけぶりのたつにつけても。（順德院）

●たま〳〵にはたうつ人のあるをこそしらぬ山路のよすがともみれ。（春海）

●なづなさく花のにほひにくれかねて霞にのこるけふの山畑。（同）

●なちかたの畑やくけぶりうちかすみ春おしほゆる深山べのさと。（千陰）

●遠方の山べの畑をつくる哉雲のはざまをかり庵にして、（清年）

●志づの男が芹くゆらす山畑の冬木のうれにひたき鳴くなり。（廣足）

●夏畑に折々うごく岡穂哉。（嵐雪）

●さみだれや蠶煩ふ桑の畑。（同　）

●若桑つむ跡は木をわる畑かな。（越人）

●うごくとも見えて畑の鼠かな。（去來）

●桑さして桑行く畑や老の春。（杉風）

●荒につく畑の柳緑せり。（几董）

●彼岸とてゐむやお寺の木綿畑。（也有）

●ゆ立に種ながしけり大根畑。（許六）

●見せばやな茄子をちぎる軒の畑。（惟然）

●山畠や蕎麥の白さもぞつとする。（一茶）

●日ざかりの畠に出でゝ手拭をかぶる男や唐茄子あたま。（曙　）

●のらまはりみてやおどろく蕎麥の花さくやの霜にうてる畠ぬし。（もち丸）

●かひつけて盗さし鳴子の瓜ばたけつるにこがれの色はつきもの。（菊成）

●ふる雨の足はともあれうみ過ぎて杏入といふ瓜の畑守。（米守）

●春がすみ薄くこくふの煙草ほどひとひき匂ふ山のくちもと。（鯉好）

●畑のきみひさにも秋のみのいりてあはたゞしくや初雁の聲。（雪道）

●稲妻のつまごめにして田も畑も八重垣つくる爲の八重垣。（折芳）

●三町の田畑作る民人は稻負鳥の名にや立つらん。（伍汰まろ）

●瓜畑たがゆるしけんふみこんで賣代鳥なく夏のこのころ。（同　）

●清正は人參ばたけふみあらし。（石門）

●畠へも寺へもこぼす化粧水。（川柳）

●月一つもたぬ葉はなし芋畠。（同　）

●嵯峨の畠何れか秋に粟の出來。（同　）

●宵の風拾ひぐひする梨子畑。（同　）

●白牡丹顔の畑へ嫁手作。（同　）

●もろこしのこつちは薩摩芋畑。（同　）

●背戸の畑にちよいと鍬うちこんで、又も苦勞の種をまく。（俗謠）

●畑水練。（俚諺）

●畑に蛤を求むるやう。（同　）

●せいたら畠。（同　）

●寒瓜方臥〻槃。秋猛亦滿〻陂。紫筇紛糅漫。綠芋蔫叅差。初菘向堪〻把。時韭日離々。（沈約）

●葛巾藜杖繞〻畦行。愛此曉園風露清。老蔓花開碧離叭。殘茄子結紫膨脹。（星巖）

●種〻豆南山下。草盛豆苗稀。晨興理二荒穢一。帶〻月荷〻鋤歸。（陶潛）

●耕地桑柘間。地肥菜常熟。爲問葵藿資。何二如廟廊肉一。（高適）

●花柳遶〻宅茂。先生在二郊居一。下〻惟良已苦。時作二帶〻經鋤一。（朱熹）

●春雨蔬成〻圃。秋霜柿滴〻林。（元好問）

〔はだ〕肌

肌膚。玉肌。豐肌。雪肌。粟〻肌。侵〻肌。透〻肌。

はだへ。玉のはだへ。雪はづかしき。

●支宗あまりのわりなさに、世人の面に紅粉を施し、身に羅綾をおびたるは、皆假なる婢娼にて眞の美質にあらず。同じくは楊貴妃の顯したる膚を見ばやと思召して、驪山宮の温泉に、瑠璃の沙をしき、玉の甃を滑にして、貴妃の御衣をぬぎ給へる貌を御覽ずるに、白く妙なる御はだへに、闌干の御湯を引かせければ、藍田日暖玉低〻淚。度嶺雲融梅吐〻香かとあやしまるゝ程なり。

●姫君はひるねしたまへるほどなり。うすものゝひとへをき給ひて、ふし給へるさま、あつかはしくは見えず。いとらうたげにさゝやかなり。すきたまへるほだつきもいとうつくし。（紫式部）

●この一日二日、春雨そぼふりて、諸人の心も漸く落ち居侍りしかば、いざやざれ歌の會にまかりて、結べる口をひらきてんと思ひしに、よべより童の熱の心地し侍りて膚も鹿の子斑に、時しらぬ山をあげ侍りしは、世に行はるゝ面瘡にてもゆあらめと、近き邊醫師の許往きて問侍りしに。（蜀山人）

●今山居久しうなりて衣裳は垢つき破れたれども、肌膚は殘んの雪より皓く、くろきかみ梳るに由なけれども、緣の髮春の花より芳し。（馬琴）

●其女裸にと御言葉かゝる。迷惑ながら金天鵝絨の後帶に手をかけて、色ほえたる袖褻なまくりとれば、うつくしき肌に折からの風あたりて、くれなゐの耻隱一重の有樣、主命ながらさりとは酷き御仕方なりと、いづれも身を縮めけり。（西鶴）

●松門ひとりとぢて年月を送り、みづから清光を見ざれば、時のうつることもわきまへず。暗々たる庵室に徒に眠り、衣寒暖にあたへざれば、肌は骨と衰へたり。とても世をそむくとならば髮にこそ、染むべき袖のあさましや。やつれ果てたる有樣を、我だに憂しと思ふ身を、誰こそありて憐みの、憂きをとむらふよしもなし。（謠曲、景清）

●朝に一鉢を得ざれども、求むるに能はず、草衣夕の肌を隱さゞれども、おぎなふに便あり。（謠曲、關寺小町）

●昔は芙蓉の花たりし身なれども、今は藜蒿の草となる。顏ばせは憔悴と衰へ、肌は凍梨の梨の如し。（謠曲、鵺鳥小町）

●腰元つれて乘物も、やめて親子の二人連、都の空に心ざす、雪の肌も寒空は、寒紅梅の色添ひて、手先凍えず凍え坂、薩陲峠にさしかゝり、見返れば不二の煙の空に消え、行方も知れぬ思ひなば、晴らす嫁入の門火ぞと、いはふて三保の松原に、つゞく並松街道を、狹しと打ちたる行列は、誰とゝられど浦山し。（淨瑠璃、忠臣藏）

●旅衣やつきかさねていぬれども猶はださむし妹にしあらねば。（萬葉）

●あからひくはだもふれずてぬれども心にことにわが思はなくに。（同　）

●あせいらばうれたくせこは思はじや人はだふるなまだらかぶすま。（仲實）

●夜は寒しねどこはうすしふるさとの妹がはだへは今ぞこひしき。（好忠）

●さよなかにせなが來らばさむくともはだへなちかみ袖もへだてじ。（同　）

●行末は誰が肌ふれん紅の花。（芭蕉）

●若竹は片肌ぬぎのきほひかな。（嵐雪）

●肌寒きはじめに赤し蕎麥の莖。（惟然）

●肌寒し竹切山のうす紅葉。（凡兆）

●夕立や大肌ぬいで蝸牛。（一茶）

●大粒に置く露寒し石の肌。（青羅）

●寒垢離の肌ぬき白き裏さよ。（路通）

●肌にふむ酢菅の聲や今朝の秋。（百川）

●痩肌やうひ〳〵しくも更衣。（杉風）

●鮭に肌ふれぬもうれし虎が石。（夢太）

●蚊と蚤にゆふべも肌をせゝられておいどはまだら目はふたがれず。（石燕）

●次第〳〵暑くなりなば今日かへし袷物もや肌はなれ物。（元成）

●降る雪は鷺毛の如く見るほどにたゞずむ

身さへいとか島肌。（飯盛）
●黄金の佛の膚にならんとて三部經をも一ぶづゝよむ。（蓬丸）
●雪の肌それとも見せずなさけなや余りに君がなめてふれるは。（朝者）
●おり姫は天の羽衣まれにきて今宵やなでんこひ星の肌。（梨柯亭）
●とらへつゝやう〳〵肌をふる夜著のあかつきつらや早しらみ來ぬ。（きせい）
●雪の寺袋もかたびらもひったり肌に付きし夕だち。（萬寶）
●手枕のうちがひまでもうちときて肌をゆるせる旅の親しき。（物築）
●吹風にこよひも肌をふれにけり後家は涼しき身持しながら。（芳居）
●さめ肌がきざで安珍すつこぬけ。（川柳）
●堪忍のいつちしまひに肌を入れ。（同）
●薩摩原土瓶の肌もあり。（同）
●ほれた同士るすにのこんの雪の肌。（同）
●道成寺うろこが肌のぬぎ仕廻。（同）
●紬の衿あづま女郎は肌へはき。（同）
●肌ぬいだ女子のかくす黒い虱。（同）
●仙人の目にちら〳〵と雪の肌。（同）
●蚊になれて五百羅漢は肌をぬぎ。（同）
●日の毒と知りつゝ見たき雪の肌。（同）
●あはれ蚊で更紗に染まる雪の肌。（同）
●磯まくら、苦の衣にあらねども、あづまくだりに合紋の、袖にせまいと心の起請、縮や紋へたゝんでくけて、なんの氣がねもいとしとはだに、肌にいとしとしめしもふ、ことばの糸のびんむすび、とけてまつよな緣のはしづめ。（俗謡）
●雪はちら〳〵話はつもる、氷つくぞや肌と肌、此花よけれどつもりが高い、どうせわが手ぢやとさきやせぬ。（同）
●雪の肌に氷の刃、露の命のすて處。（同）
●肌を脱いでかゝる。（俚謡）
●肌の物の善惡で。（同）
●白苧輕衫白玉巵。初涼恰與醉相宜。中秋未有今年好。月色如霜不粟肌。（竹外）
●烏皮几隱風枝鬢。白玉樓高冷透肌。（司馬光）
●淡々幃烟籠玉枕。粉肌生汗白蓮香。（王全才）
●撫凝肌于瑩潤。鏡照容于髮鬢。（鮑照）
●玉肌香膩透紅紗。（韋莊）
●園香綺鬢雲肌香。（陳基）
●皓體呈露。弱骨豐肌。（司馬相如）
●寒風吹我骨。嚴霜切我肌。（矢名氏）
●瘦茅茹珍宇。溽暑怕侵肌。（柳宗元）
●氷肌玉骨清無汗。（孟郊）
●快剝千顆輕紅肌。（黄庭堅）

【はち】蜂

蝗蜂。胡蜂。蠟蜂。釀蜜。尋花。繞巢。

つち蜂。くまばち。こしばそ。

みつばち

●昔中納言和田丸と聞ゆる人おはしけり。その末に余古太夫といふ兵者ありけり。年比三輪の市の側に城を作りて、妻の敵にせめられて城も破れ、兵も悉くうち失せにけり。辛うじて命ばかり生きて、初瀬山の奥に籠りてけり。敵あさり求むれども深く用意して、笠置といふ山寺の岩屋のありける中に隠れて、二三日住みけるほどに、岩のもとにて、蜂といふもの、いをかけたりけるに、大なる蜂のかゝりたりけるに、いをくりかけて卷き殺さんとしける時に、蜂を起してとりて放ちて蜂にいひけるやう、生けるものは命にすぎたるものなし。前世の戒が少くて、畜生と生れたれども、心あるは命を惜むこと人にかはらず。愚を重くする事同じかるべし。我敵に攻められて。辛きめを見る身をつみて汝が命をたすけん。必思ひしれとて放ちやりつ。その夜の夢に佛の水干姿なる男の來ていふやう。貴の仰悉く耳にとまりて侍る。御志實に忝し。我描き身を受けたりといへども、いかでかその恩を報じ奉らざらん。願くは我申さんまゝに構へ給へ、君の敵亡さんといふ。誰人のかくはの給ふぞといへば、貴の蜂の網にからまれつる蜂は、おのれに侍るといふ。あやしながら、いかにしてか敵をば討つべき。我に隨ひたりしもの、十が九は亡び失せぬ。城もなし。かゝりもなし。惣じて立ちあふべき方もなしといへば、などかくはのたまふ。殘りなるものも侍らん。二三十人ばかり構へて語らひ集めたまへ。この後の山に蜂の巣四五十ばかりあり。是も皆我に同じきものなり。語らひ集めて力を加へ來らんに、などか討ち得給はざらん。但その軍したまはんは、なよせたまひそ。木城のほどに假屋を造りて、なりひさご、蜜瓶子、かやうの物多く置きたまへ、やう〳〵まかりつどはんとすれば。そこに隠れ入らんためなり。しかしながらその日よからんと契りて、いぬと思ふ程に夢さめぬ。うけることゝは思はねど、いみじく哀に覺えて、夜にかくれ、故郷へ出でゝ、彼是隠れ居る者共をかたらひていはく、我生けりとてかひなし。最後に一矢射てしばやと思ふ。弓箭の道はさこそあれ、男どもなどいひければ、誠に然るべき事とて、五十人ばかり出でにけり。假屋造りてありし。夢のまゝにしつらひをれば、是は何のためぞと怪みければ、さるべき故ありとて、めでたくしつらひおきつ。その朝にほの〴〵とあけ離るゝほどに、山の奥のかたより大なる蜂、一二百、二三百うちむれて、いくらともなく入り集るさま、いとけむつかしく見えけり。日さし出づるほどに、敵の許へ、是に侍り、申すべき事ありといへりければ、敵悦びて、琴れ失ひて安からず思しつるに、いみじき幸なりとて、三百騎ばかりうち出でたり。勢をくらぶるに、物の數にもあらねば、侮りていつしかかけくむ程に、蜂ども假屋より雲霞の如くわき出で、敵の人ごとに二三十四五十取りつかねはなし。目鼻ともなく働く所ごとに刺し損じけるほどに、物も覺えず打ちころせども、五六こそしぬれ。いかにも〳〵する力なくて、弓箭の行方もしらず。まづ顔を塞ぎさわぎけるほどに、思ふさまに馳せまはりて、敵三百餘騎、時の程にたやすくうち殺してければ、恐なく本のあとに歸り居にけり。死にたる蜂少々ありければ、笠置の後の山に埋めて、堂をたてなどして、年ごとに蜂の忌日とて愚を報じけり。末にはは〳〵しき子孫もなかりければ、この寺をば、敵の孫にあたりける法師の、祖父の敵になりにける蜂の行方なりとて、燒き失ひければ、いみじき鳴呼の者なりとて、奈良よりはなたれにけり。すべて蜂は短少の虫なれども、仁智の心ありといへり。されば京極太政大臣宗輔公は蜂をいくらともなくかひ給ひて、何丸か丸と名をつけてよびたまひければ、召にしたがひて、格勤者などを勘當し給ひければ、何丸某刺してことの給ひければ、そのまゝぞふるまひける。出仕の時は車のうらうへの

物見にばらめきけるか、とまれとのたまひければ、とまりけり。世には蜂飼の大臣とぞ申しける。不思議の德おはしける人なり。（十訓抄）

●鉢不面なげに、ものいはんとはしつれども、小髮の外を剪れ、背を馬に敷かれしかば、頭だも擡げ得ず。日影まつ間の冬の蜂、痛手にさすがはり撓み、かよふは虫のいきばかり。（馬琴）

●蜂の巣のおほきにて、つき集りたるなど、いとおそろしき。（清少納言）

●山賊之助も蜂の戰、胸に當れどさあらぬ体、それはあやしき事ならず。蜂の戰ひ蛙の合戰、山林水邊にはまゝある事。蜂の中にて尼に遊なき蜂の頭とする。其蜂小蜂に刺し殺されたるによつて、山蜂仇を報ゆと見えたり。蜂は元より節義を守る虫なれば、嘯あらん。是を思へば人として、忠孝なきは彼蜂に劣つたり。侍は尚以て蜂こそはよさ鑑と、未然を察する山賊之助、後に思ひ合すれば、扨こそ蜂の戰も、鹽冶の家に異の、其前表と知られけるる。（淨瑠璃、忠臣講釋）

●大友の殘党迎あなどり難し。今語國（討ち洩たる殘党共、スハ合戰と聞くならば、蟻の如に集まり、蜂の如くに起りなば、ゆゝしき大事ならん。（淨瑠璃、朝顔日記）

●うきてよをふるやの軒にすむ蜂のさすがになれぬいとふものかな。（紫阿）

●牡丹芳御坊主蜂にさゝれけり。（凡董）

●巣の蜂の地主蜂したる騷哉。（太江丸）

●木鋏の白刃に蜂のいかりかな。（白雄）

●人追うて蜂戻りたる花の上。（太祇）

●腹立てゝ水呑む蜂や手水鉢。（仝　）

●蜂とまる木舞の竹や虫の蔓。（昌房）

●蜂の巣や十づゝ十の親を見し。（保吉）

●雨の日や巣を繞り居る蜂の聲。（百明）

●蜂の巣を蜂の出て行く眞昼哉。（速志）

●花見ても腹あしき蜂の劍哉。（殿庵）

●蜂花に入りて落ちけり茶椿。（牛眠）

●面々の蜂をはらふや花の巷。（嵐雪）

●山蜂や木の丸殿の雨の中。（蕪村）

●山吹の花にとび來てなとめ子があなやと蜂は物をいはせつ。（蔭雄）

●蜂のすのあなおそろしや忍ぶ夜にさす閨の戸はたゝかれもせす。（床夏）

●よしあしをいはざる桃の花園に口やかましき山蜂の聲。（麟記）

●寺ふりて秋の高野の山蜂やさす月影もいたくふけぬる。（茂松亭）

●蜂の巣をおほくかけぬるゆゑにこそ熊野をみつの山といふらめ。（未得）

●目ぐせにうそつく人とみつ蜂のさしてたのめる我ぞはかなき。（同　）

●花ちりし後はそのまゝ蜂の巣と指をさゝるゝ池の邊の蓮。（東山堂）

●さくら狩に思はず袖をはらはして花の香ちらす志賀の山蜂。（魚丸）

●咲きいでし花のすがたをわれに似た我に似たとや蜂のめづらん。（繁雄）

●初午にうしの角もじ蜂がさし。（川柳）

●村角力蜂にさゝれて勝負なし。（同　）

●手ならひの子蜂のごとくろぢから出。（同　）

●袖の蜂さすが浮世のはかりごと。（同　）

●蜂が巣をかける二王の鼻の下。（同　）

●蜂の胸かたあく帶をゝめたやう。（同　）

●姦計で本腹の子を蜂ばらひ。（同　）

●平蜘をつぶして蜂も逃げ。（同　）

●蜂の腰糸ほどあつて尻に針。（同　）

●蜂が來て佐兵衛の面をやたらさし。（同　）

●花の山惣立にする蜂一つ。（同　）

●門ちがひ蜂風鈴をのぞいて見。（同　）

●やんれ柿の木に蜂が巣をかけて、あしよな蜂ぢやと、立ちより見れば、角が二本あつて頭が獅子のやうで、どなかさくびれて、羽がひがよつあつて、尻に劍があつて、わしが白い股、ちよいと來ちやぶんとさし、ぶんと來ちやちよいとさし、わしは其時や、どうしやうと思ふた。（俗謠）

●寺の門口蜂が巣をかけて、坊主出りやさす這入りやさす。（同　）

●泣面を蜂がさす。（俚諺）

●虻も捕らず蜂も捕らず。（同　）

●牛の角に蜂。（同　）

●蜜蜂不食人間倉。玉露爲酒花爲糧。作蜜不忙采花忙。蜜成猶帶百花香。蜜成萬蜂不敢嘗。要輸蜜國供蜂王。蜂王未及享人已割蜜房。老農更來搜我蜜　老蜂無味只有滓。幼蜂初化未成兒。老農火攻不知止。既入吾室取我子。（楊萬里）

●雨閑中庭暖日浮。春禽百種聚喧啾。粉腰蜂子尤　紅。挽遍花叢未肯休。（道潛）

●風恬日暖蕩春光。戲蝶遊蜂亂入房。數枝園柳低衣桁。一片山花落筆床。（岑參）

●傍砌嬌紅花始開。誰居報道到梁臺。一枝未許美人戴。已有蜜官收採來。（星巖）

●不論平地與山尖。無限春光盡被占。來得百花成蜜後。不知辛苦爲誰甜。（羅隱）

●釀成百花脾。聊甜丁三口腹。人知口中甘。誰料腹中毒。（眞山民）

●弄晴沾落絮。帶雨護園花。有課常輸蜜。無春不到衙。（李俊民）

【はちぐわつ】八月

南呂。仲秋。仲商。桂月。橘春。はつき。ながの秋。木染月。月見月。秋風の月。草津月。紅染月。

●叢の蟲の聲々も、枕いさとき夜々、月は有明まで隈なき空なるに、端居の小簾疊みあげ、香爐峯の雪ならねど、月にもなどひとりごちて、松風の聲吹きおくる、夜半の中空言はん方なく、おもしろう思ひなさるゝに、後れし雁の飛びちがひたる、思ひ盡きせぬ世の中など、これをさへいとうこそ憂き身の種に取り蒔きたり。白妙の砧打つべき何菜のわたりならねど、こゝには袖の夜籠めて、打つ斧の音も、丁々として悲しう覺えたるに、生るを放つ御神事も、このごろに及びなさるれば、氏の公卿の家の内、思ひ遣らるゝも、むつかしかりぬべし。（長明）

●何時までか此處にて物はいはで思ふ。さながら八月になりぬ。朔日の日雨ふりくらす。時雨だちたるに來の時ばかりに晴れて、くつ〳〵ぼうしいとかしましきまで啼くを聞くにも、我だに物はといはろ。如何なるにかあらん。怪しうも心細う涙浮ぶ日なり。唯この月に死ぬべしといふさとしもしたれば、この月にやとも思ふ。相撲の會あるべしなども、のゝしるをば餘所に聞く。（道綱母）

●頃は八月半の日、神の御幸なる。御旅所を伏し拜み、久方の月のかつらの男山、さやけき影は所から、紅葉も照りそひて、日もかげろふの石清水、苦の衣も、妙なりや。（謠曲、女郎花）

●今日は八月十五日、嘉例の通り弓矢神を

祭る祝義日、御門第中御出ある故、掃除申付るに不行儀千萬、お組とやらは取分け、勝手も知らず騒しい。皆往け〳〵と四角十面しかつべらしく。（浮瑠璃、青蒲前操弦）

●初かりの聲きこゆなりはつきたつ朝の原のうすきりのまに。（深養父）

●きりん〳〵すさゝはなさ月打わびて淺茅か原に聲よわるなり。（兼藝）

●秋もはや半になれや我せこがかざしの萩もうつろひにけり。（家良）

●久方の雲井のかりのこしぢより初めてくるや八月なるらん。（爲家）

●紅葉つゝ後や散りなんこのごろはいまだは月の神なびのもり。（行家）

●松を見て名なぞ忘るゝ木染月露やむなしき色やつれなき。（讀人不知）

●色々に花咲きてこそしられけれ萩津月とはけふあすの露。（同）

●萩のはも露吹きみだす音よりや身にしみそめし秋風の月。（同）

●名にしおはゞ秋の半の空はれて光ことなる月ぞ見る月。（同）

●時雨つゝはしの立枝も紅葉して紅染の月ふかきくれ。（同）

●大寒や八月欲しき松の月。（一茶）

●八月や潮のさわぎな山かづら。（去來）

●八月も一たて暑し赤とんぼ。（指笠）

●家々にあさがほ咲ける葉月かな。（蓼太）

●八月や日向になれし花薄。（浸々）

●八月や二日の月もたしかなる。（千兮）

●秣負ふ人に雨ふる葉月かな。（政二）

●八月も一日なれば梅の花。（升六）

●八月や風にたのまぬ波のたつ。（三千彦）

●八月や木を吹く風に日の當る。（嵐外）

●八月や二日といふも秋の月。（萬籟）

●八朔や月の都の遣入口。（嵐山）

●八月と師走吉原こわい所。（川柳）

●八月の二日賣屋へ雪がふり。（同）

●八月の風の歌だと早太しやれ。（同）

●元氣　年八月雪を喰ひ。（同）

●石山も比良も葉月の雨紋日。（同）

●八月二日よし原の雪こがし。（同）

●八朔の雪解は八月日に流れ。（同）

●八月の皮さりあつい紋日なり。（同）

●當日の祝義八月すさましい。（同）

●葉月なかばの月すみて、空とぶ雁の聲落つる、白妙衣うつゝなる、ゆめのちぎりのあはれさよ。（俗謠）

●八月のあばれ蚊。（俚謠）

●吳中好二風景一。八月如二三月一。水荇葉自香。木蓮花未歇。海天微雨散。江郭纖埃滅。暑退衣服乾。潮生船舫活。兩衙漸多暇。亭午初無熱。騎吏語二使君一。正是遊時節。（白居易）

●八月湖水平。涵虛混二太清一。氣蒸雲夢澤。波撼岳陽城。欲レ濟無二舟楫一。端居恥二聖明一。坐觀二垂釣者一。徒有二羨魚情一。（孟浩然）

●八月霜飛柳逈黃。蓬根吹斷雁南翔。隴頭流水關山月。泣上二龍堆一望二故鄉一。（盧弼）

●寒蛩啼斷槿籬空。萬樹凋傷八月中。只有二南山芥桂在一。一株花發向二秋風一。（何景明）

●身寄鯨波鰐浪間。舟行八月海程艱。布帆忽破二風吹返一。却向二前青青後山一。（青村）

●慣聽鞋底百泉聲。日々幣斯爲二送迎一。八月秋風丹後路。著レ花山草不レ知レ名。（秋里）

〔はと〕鳩

林鳩。紋頸。花膺。斑衣。褐羽。喚レ雨。催レ耕。晴呼レ婦。雨逐レ雌。

山ばと。家ばと。くもりごゑ。妻よぶはと。雨よぶはと。友よぶこゑ。鳩の杖。

●先八幡に百人の僧をこめて、最讀の大般若を七日よませられたりける。最中に甲良の大明神の御前なる橘の木へ、男山の方より山鳩三つ飛び來りて、食ひ合ひてぞ死にゝける。鳩は八幡大菩薩の第一の使者なり。宮寺にかゝる不思議なしとて、時の檢校匡濟法印、此由内裏へ奏聞したりければ、是徒事にあらず、御卜あるべしとて、神祇官にして御卜あり。重き御愼と占ひ申す。但し是は君の御愼にはあらず、臣下の愼とぞ申しける。（平家物語）

●八幡放生會には御馬奉らせ給ひしを、御使などにも淨衣をたまはせ、御ゆづからもきよまはらせ給ひしかばにや、御前近き木に山鳩のかならずゐて、ひき出づるをりにとびたちければ、かひありと喜び興ぜさせ給ひけり。御心いとうるはしくおはします人の。信みいたさせ給ひしかば、大菩薩のうけ申させ給へりけるにこそ。（爲業）

●義實則馬より下りて、征箭二條を奉納し、且く祈念し給へば、眞夜中なるに、白鳩二羽、社頭の松の梢より、はた〳〵とはゞたきして、平郡のかたへとび去りぬ。これを見る諸軍兵、合戰勝利疑なしとて、勇まざるものなかりけり。（馬琴）

●酒宴も已に半なりしに、不思議や八幡の方よりも、山鳩翅をならべつゝ、味方の旗手に飛びかけり、納受のしるしをあらはしければ、木曾殿をはじめ軍兵ども、皆一同に伏し拜み、いよいよ加護をぞ願ひける。（謠曲、木曾）

●古木怪岩雲に聳え、羊の腸の坂道も平地と歩む六助が、柴荷をおろす鳥居前、木の葉つまんでから手水、宮居遙に禮拜し、岩頭に腰打かけ、ドリヤ一ぷく致さうと、燧かち〳〵吸ひかける。煙草のけぶり風に消え、空にまられぬ鳥一羽、ばたりと落つる膝の前、怪しと見れば諸翼を、矢に縫はれたる山鳩なり。ハヽアまたり、獵夫のねらひそれ、翅計りをとぢけるよな。六助の目にかゝりしは、運命いまだ盡きざる此鳥、放してやらんと矢を抜けば、さもうれしげに羽ばたきし、雲井遙に飛び去りたり。（淨瑠璃、彦山權現）

●たこひ身を粉に碎いても、胎内にあるから今日迄の親の苦勞、くらべて見れば百分一、あの鳩部屋の鳥でさへ、鳩に三枝の禮ある迚、諸鳥に勝れて孝行な鳥、どこから共なう、此家の軒へ集まつて來たるも、慈悲藏が心少しは通じ、類を以て集つたかと、思うて嬉しう思ひます。（淨瑠璃、廿四孝）

●ふる畑のそばのたつ木にゐる鳩の友よぶこゑのすごき夕ぐれ。（西行）

●とびかけるやはたの山の山ばとのなくなる聲はみやもとゞろに。（實朝）

●しげりつゝこぶかき山の夕ぐれはこもり聲にぞほともなきける。（信實）

●をとこ山おいの坂ゆく人はみなはとのつえにもかゝりぬる哉。（家良）

●いほりさすをかべのましばすゑなびさばとふきかはす秋の初風。（知家）

●をりにあへばはとふく秋の山人もよろづよとこそ聲たてつなれ。（隆信）

●我を秋とふる露なれば山ばとのなきこそわたれ君まつのえに。（讀人不知）

●所えて宮もとゞろにむかしべや今も八はたの山ばとのこゑ。（春滿）

❷跡たえてとはれぬやどは山鳩のともよぶ聲もうらやまれつゝ。（春湖）
❸鐘うてばこぼるゝ花な山鳩のよそげにあさるふる寺のには。（諸平）
❹柳のみ見えて鳩なく門の内。（閑更）
❺鳩眠る冬木ながらやはね釣瓶。（言水）
❻下閣や鳩根性のふくれ聲。（其角）
❼人立の跡に鳩なく餘寒かな。（石曜）
❽草の戸や鳩に好かれて長閑なり。（百非）
❾今朝の春鳩の三枝を見付けたり。（蕉太）
❿鳩なくや銀杏の上の花蕊。（斗筵）
⓫日永しと獨思ふや鳩の聲。（蒼虬）
⓬松に鳩春も夕となりにけり。（風齋）
⓭鳩が來て鳴かぬ日はなし夏百日。（老雀）
⓮鶯に鳩に小里の四月哉。（存亞）
⓯みよし野の奥に住みつる山鳩にむかしの御衣の色をしのびつ。（一の屋）
⓰親と子のわかれて飛べる山鳩も高低のある枝靈の中。（清樹）
⓱珠数かけて法師に似れば羽袖にも鳩はさまでに錦おざらず。（長樹）
⓲雉のごと戀せぬ鳩よ汝が胸のおもひありげにふくるゝやなぞ。（同）
⓳物おもひのあまりて胸のふくれしが誰まつがえの戀の山ばと。（滿月）
⓴どう思ひかへてもうきはやさばとのないてふくるゝむねぞくるしき。（山陽）
㉑鳩のなく秋の夕のはた雲も赤みがちなる土肥の杉山。（千賀江）
㉒首筋に珠数かけて行く堂鳩の年よりこいと友やよぶらん。（未得）
㉓くゝとなく鳩の峯にはのぼりけりロさへさんしの十二日にて。（桂雄）
㉔かさゝぎの巣をかりて居る山鳩は二季に三枝の禮を去るらし。（紀東）
㉕秋まちて野もせに鳴が鳩ぐけ　はとふきこぼす萩の上露。（閑閣）
㉖此あとは鳩でございと左慈はいひ。（川柳）
㉗四五枝ほど下つて泊る養子鳩。（同）
㉘納つて弓矢は鳩のふんだらけ。（同）
㉙御とうりう鳩やからすの聲ばかり。（同）
㉚石橋の鳩は神慮の御手品。（同）
㉛山鳩の曰　驚らは地下のもの。（同）
㉜山鳩に鶴も及ばぬ雲の上。（同）
㉝鳩の子は腹の中から夫婦なり。（同）
㉞下枝がなくてまごつく鳩の禮。（同）
㉟目前のふゞき石に山の鳩。（同）
㊱あらいたはしや百合若樣は〳〵、しらぬ他國に捨てられて、橋の欄干に腰うちかけて、〳〵、そより〳〵とふきくる風は、樣が便かなつかしや、〳〵、鳩が豆くふ、八兵衛殿、はとが〳〵、お花出ておへ竿打かたげ、よやりひやりに出でおやれ、〳〵、ちやつと出ておやれ、よやりひやりに出でおやれ。（俗謠）
㊲ねんね根來の御城の藪で、としよりこいよの鳩がなく。（同）
㊳鳩に三枝の禮あり。（俚諺）
㊴憑匠の子は能く鳩を馴らす。（同）
㊵鳩に豆殼砲。（同）
㊶雁も鳩も食はねば知れぬ。（同）
㊷終日爭巢占鵲居。平生蠢拙似愚夫。臆前壇狗彊盆布。頭上花枝錯落鋪。松塢天晴類逐婦。桑林日煖慣呼雛。徐熙一去今千載。誰染丹青作畫圖。（周愛蓮）
㊸村南微雨新。平綠靜無塵。散嘒桑條暖。間鳴屋後春。遠聞和曉夢。相應在鄰隣。行樂花時節。追飛見亦頻。（溫憲）
㊹雉鵲有巢。維鳩居之。之子于歸。百兩御之。（詩經）
㊺宛彼鳩鳴。翰飛戾天。（同）

❶何處芳草多。相呼向深隅。竹外立寒枝。山南又春雨。（新植）

〔はな〕花

繁花。芳菲。妖艶。丹青。紅紫。錦綉。臙脂。娟々。嬌々。夭々。不レ言。向レ陽。

さきにほふ。てりかゞやく。うつろふ。さきつゞく。さきのをゝり。花の色香。花の枝。花ぐもり。花色衣。花のそで。

●櫻花は、櫻は山櫻の葉赤くてりて、細さがまばらに交りて、花ぶげく咲きたるは、又たぐふべき物もなく、憂世の物とも思はれず。葉背くて花のまばらなるは、こゝなくおくれたり。大方山櫻といふ中にも、ま、なゝくのありて、細に見れば、一木毎に、いさゝか變れる所ありて、またく同じきはなきやうなり。又今の世に桐がやつ、八重、一重などいふも、やう變りていとめでたし。すべて盛れる日の空に見あげたるは、花の色鮮ならず。松も何も、背やかに繁りたる此方に咲けるは、色はえて殊に見ゆ。空清く晴れたる日、日影のさす方より見たるは、にほひこゝなくて、同じ花にもおぼえぬまでなん。朝日は更なり、夕ばえも。梅は紅梅、ひらけさしたるほどぞいとめでたきを、盛になるまゝに、やう〳〵ちらけゆきて、見所なくなるこそ、いと口惜しけれ。櫻のさける頃までも、散ることもらで、むげに匂なく、ねびれ萎みて、殘りたるを見れば、げに、ありて世中は、何事も皆かくこそと、見る春毎に思ひ知らるかし。白きはすべて、香、こゝあれ。見るめは品おくれたり。大方梅の花は、小き枝を、物にさして近く見たるぞ、情ながらよりはまされる。桃の花は、數多咲きつゞきたるを、遠く見たるはよし。近くてはひなびたり。山吹、薔子花、瞿麥、小萩、すゝき、女郎子など、とりゝ〳〵にめでたし。菊もよきほどにつくろひたるこそよけれ。あまりうるはしくまたゝかに作りなしたるは、なかなかに品なくなつかしからず。躑躅、野山に多く咲きたるは、目覺むる心地す。海棠といふもの、唐めきて細にうるはしき花なり。そも〳〵かくいふは、皆おのが思ふ心にこそあれ。人は又思ふ心異なるべければ、ひと樣にゝだむべきわざにあらず。又今樣の世の人のもてはやすめる花ども、世に多かるを、數へ出でぬは、殊更めきたるやうなれど、歌にもよみたらず、古きものにも見えたることなきは、心のなしにや、なつかしからず覺ゆかし。されどこれはたひとやうなるひが心にやあらん。（宣長）

●春くれば、さかざりし木草の花も、あまたさき出づる中に、それかれとかずまへいふ限は更なり。名もしらぬもなかしう見ゆるは、折からなめり。あるはいとよく晴れたる朝日の、のどかなる影に匂ひあひて、一際うつくしうあるは霞める月のかげの心にくきに、ほの〴〵見ゆるが、いひしらぬなど、あだし時にかゝらんやは、さるをかしき折に、又たぐひなき櫻の、さきいでたるよ。いかでかはなのめならんとぞ。（高尚）

●しかのみならずあるじの翁は、莊官許召びとめられて、よひすぐるまでいまだ還らず。俟たれぬ人のあまた來て、高わめきせし物のいひざま、皆わがうへにはあらざるか。村雨の刀うせしより、いよゝ日隆の花

とのみ淵むばかりの病苦に、身のなる果はしられたり。（馬琴）

●中將はこの幾年をこひ忍びて、相逢ふ今の心の中、優曇花の春まちえたる心地して、瑠璃の枕の上に陽臺の夢長くさめ、蓮理の枝のほとりに驪山の花自ら濕なり。（太平記）

●そも此花に住むぞとは、とぶさに散るか花鳥の同じ道にと歸るさの、さきだつあとか花の陰に、やすらふとみしまゝに、我こそ夜の主よと、夕ぐれなゐの花の陰に、木がくれて見えざりき。（謠曲、吏北）

●散りもせず、咲きも殘らぬ花ざかり、四方のけしきも一しほに、にほひ滿ち色にそふ、情の道にさそはるゝ老な厭ひそ花心。（謠曲、小鹽）

●百千鳥、囀る春は物毎に、あらたまりゆく日數經て、頃も彌生の空なれや、やよとゞまりて花の友、知るも知らぬも諸共に、誰も花なる心かな。（謠曲、四行櫻）

●吉岡鬼一法眼は、病苦忘るゝ氣ばらしと、女小性に介抱せられ、心勇みの駒下駄に、石蹈み分けて花島、見廻し〳〵、ホヽウ咲いた〳〵。此花開いて後更に花無しと思へば、取分け色香の身にぞしむ。是この花は打水に、露をふくんでぬれさぎや。かの程優しき花の名を、たが石わりと名づけゝん。主殿司と御垣守　二つ一つの大内山、天が下にはかくれなき、花の笑顔にうち着せて、名さけおされぬ京小袖、たとへば花の物狂ひ、羅生門に住む鬼なりとも、紐解きそむる大般若、御法の菊を見る時は、心和らぐ數島や。されば彭祖が七百歳、姿とかへぬ若やさも、此德なりと菊の露、我も餘た延ばへん。（淨瑠璃、鬼一法眼）

●花が花よぶ心の花は、すゑは實になる誓紙もあれど、つぼむまことか散るいつはりか、月にあかして日に文つけて、むねとむねとのたがひのうかひ、せめて花ともひらけかし。（淨瑠璃、花菖双姿繪）

●思ふともかれなん人をいかゞせんあかず散りぬる花とこそみめ。（素性）

●花の色は昔ながらにみし人の心のみこそ移ろひにけれ。（元長親王）

●吹く風にたへぬ梢の花よりもとゞめがたきは涙なりけり。（雅光）

●色見えでうつろふものは世の中の人の心の花にぞありける。（小町）

●花ならで花なるものはしかすがにあだなる人の心なりけり。（貫之）

●花と見てをらばをられよをしむまにあすに雪ともふりぬべき身を。（琴沖）

●わたつみの秋なき濱のはならばうつろふ中のなげきせましや。（枝直）

●ながらへて我身にはよしさかずともなほ幾春の花をこそ見め。（宣長）

●かつ咲きてはやくもちれる花にいつ人のなさけのならひそめけん。（古道）

●さきぬやとおもへば風にちる花のまだきうつろふ人の心か。（士滿）

●むく起に隣の花の匂かな。（芭蕉）

●白雲や花になりゆく顔は嵯峨。（其角）

●花に風かろく來て吹け酒の泡。（風雪）

●花の頃扇さいたり諸職人。（鬼貫）

●角入れし人をかしらや花の友。（丈草）

●酒部屋に琴の音せよ窓の花。（惟然）

●花と眺め櫻とながめ明け暮れぬ。（白雄）

●花の陰あかの他人はなかりけり。（一茶）

●玉川に高野の花や流れ去る。（蕪村）

●好もしや花の下家の夕煙。（道彦）

●面白や理窟はなしに花の雲。（越人）

●咲花のかへる根付の琥珀にもなりて木か

げの塵をすはばや。（赤良）

●いたづらに過る月日もおもしろし花見てばかりくらされぬ世は。（同）

●しら雲かなにぞと人のとふならばこたへてわらへ花のくちびる。（漁産）

●嵐こそあいさうなけれちる花の跡にぎやかすみねのしら雲。（宋得）

●山のはに花ぢや雲ぢやとあらそひの中へ出る日や埒をあけぼの。（東作）

●雨のみか春の日かげのちゝたるもやしなひえては花のかぞいろ。（同）

●あめつちの大からくりの花の山夜分の蚊にかゝるしら雲。（躬鹿）

●山河のわけへだてなくさけばとて智者も仁者も花をたのしむ。（めし盛）

●草はみな霜の翁となりはてゝ秋みし花のおもかげもなし。（杉成）

●女ばうのはら月にたち花にたち。（川柳）

●百人においれのわるい花の色。（同）

●花の山いつそころせの三下り。（同）

●奥中へ一雖あてる花の雨。（同）

●ひとり見る花にくびれた酒をのみ。（同）

●月花はおやぢ小言の定盛なり。（同）

●そも〳〵どらのはじまりは花見なり。（同）

●夜顔の花もまがきに咲いてゐる。（同）

●花なら花さ遊びなら遊びとさ。（同）

●花をみてそしてと親父むづかしい。（同）

●花盛り一日男世帶なり。（同）

●隱家深き奥山の、松の扉をまれにあけて、まだ見ぬ花のかほばせを、見るより濡るゝ袖手。（俗謠）

●なんぼ惜しみし、昨日の花もいたづらに、今日はいつしか、かはるならひの戀衣、もはや垣根も雪かと見ゆる卯の花、なほなつかしき時鳥。（同）

●さいてしをれてもたさく花は、優曇華の花木瓜の花。（同）

●四十だ〳〵とけさまで思うた、三十九だもの花ぢやもの。（同）

●言はぬが花。（俚諺）

●花に嵐の障あり。（同）

●花より團子。（同）

●月に村雲花には嵐。（同）

●寶物には花を飾れ。（同）

●花はみよしの人は武士。（同）

●花は折りたし梢は高し。（同）

●綠盆小樹枝々好。花比二人家一別開早。陌頭擔二得春風一行。美人出籠聞二叫聲一。移去莫レ愁花不レ活。啼與遠傳種。花缺。餘香滿路日暮歸。猶有蜂蝶相隨飛。買レ花朱門幾回改。不レ知擔上花長在。（高啓）

●今年花似二去年好一。去年人到二今年一老。始知人老不レ如レ花。可レ惜落花君莫レ掃。君家兄弟不レ可レ當。卿卿御史尚書耶。朝回二花底一恒會レ客。花撲二玉缸一春酒香。（岑參）

●淺深紅白宜二相間一。先後仍須二次第栽一。我欲二四時携レ酒去一。莫レ教二一日不二花開一。（歐陽修）

●紅花顏色掩二千花一。正是猩々血未レ加。染二出輕羅一莫二相貶一。古人崇レ儉成二奢華一。（李中）

●街西無數閑遊處。不レ似九華仙觀中。花裡可レ憐池上景。幾重牆壁貯二春風一。（張籍）

●江深竹靜兩三家。多事紅花映二白花一。報二答春光一知有レ處。應レ須二美酒一醫二生涯一。（杜甫）

●欲レ謂二之水一。則漢女施レ粉之鏡清瑩。欲レ謂二之花一。亦蜀人濯レ文之錦粲爛。（源順）

●瑩レ日瑩レ風。高低千顆萬顆之玉。染レ枝

染レ淚、長夏一入再入之紅。（菅三品）
●春眠不レ覺レ曉。處々聞ニ啼鳥一。夜來風雨聲。花落知多少。（孟浩然）
●池色溶々藍染レ水。花光熠々火燒レ春。（白居易）

〔はな〕鼻

鼻腔。隆鼻。尤鼻。尖鼻。高鼻。骨鼻。隆起。

はなひる。はなしろむ。はなたかし。

●しのぶの浦のみるめはもとより、耳とも口ともつゞけたらん歌にも、さのみけやけからず。いかなれば鼻といふ名の、ひとへに俳諧にはとゞまりぬらん。末摘花のわろ口もあからさまにはよみなし給はず。そのなかしみこそ、俳諧にはうれしかれ。さりとて脂の尻のとていやしむたぐひの物にもあらず。そも猿田彦の御鼻は神代一番の見事さにて、愛宕高雄の天狗連も自慢は鼻にあらはれながら、杉の木の間に、霧霜のおきどころなくて、いかに寒からん。見よや人の老いゆけば、目は遠山の霞たなびき、耳には鳥虫の聲もうとく、口は冬がれの菌もおちて、盛衰まのあたり、かなしみを催す。たとへ百年のつくも髮だに、鼻ばかりはかけもやらず。つぶれて用をかく事もなし。ひとり常磐の操を守りて、時しらぬ山とも稱すべけん。されば、おそるべき人心、むかし聖賢のをしへにも、視聽言動の四ばかりをあげて、鼻に警のゆるかせなるより、世におごりのきざし起りて、寵にほこる妾小姓のおほくは、主を鼻にかけて、心にあはぬ傍輩をも、鼻にあしらう高ぶりより、すてる鼻つくあやまちも仕出しぬる。えならぬかほりに、ひかれよる色のいましめは猶さらにして、女のよれる髮筋には、鼻の高き大象もつながれ、おほうの延せる鼻毛には、蜻蛉もつらるゝたゝめし、わざはひ蕭墻より起るときけば、つゝしむべきは鼻のさきなるべし。（也有）

●かの典藥が答へし事かたれば、衞門もいみじく笑ふ。北の方、こたびの御賀取の、はぢかましき事と腹立ちたまふ。宿世にやおはしけん。いつしかといふやうに孕み給へれば、心地よげに見え給ひし。北の方も思ひまつはれてなんおはすめる。四の君の御人は、あやしき事かな。これにはいみじう譽め給ふめるものを、鼻こそ中になかしげにておはすとこそいはるめれとの給へば、少納言嘲哢し聞えさせ給へるなり。御鼻なん中に優れて見苦しうおはする。鼻のうち仰ぎいらゝぎて、穴の大なることは、左右に對建て、寢殿も造りつべくなどいへば、いといみじき事かな。實にいかにいみじうおぼえ給ふらんなど、語らひ給ふほどに、中將の君、内裏よりいといたう醉ひてまかでたまへり。（落窪物語）

●つくづくと臥したるに、四の君見るに、顏の見ぐるしう、鼻の穴よりは、人通りぬべく、吹きいらゝぎて臥したるに、心づきなく、愛敬なくなりて、やをら物するやうにて、起きて出でたるを、北の方待ちうけて、の給ふ事かぎりなし。（同）

●ものなど仰せられて我をば思ふやといはせ給ふ。御いらへに、いかにかはと啓するに合せて、奩盤所のかたに、はなをたかくひたれば、あな心う、虛言するなりけり。よし〳〵といていはせ給ひぬ。いかで虛言にはあらん。よろしうだに思ひ聞えさすべき事かな。鼻こそは虛言しけれとおぼゆ。

（清少納言）

●繁樹がいふやう、いであはれ、かくさまく〳〵にめでたき事ども哀にも、そこら多く見聞き侍れど、猶我たからの君に、後れ奉りたりしなりのやうに、物の悲しく思ひやらるゝをりこそ侍らね。八月十日あまりの事に候ひしかば、折さへこそあはれに、時しもあれと思ひ侍りしものかなとて、鼻度々かみて、えもいひやらず、いみじと思ひたるさま、誠にその折もかくこそはと見えたれ。（爲業）

●わしは遠い處へ參ります程に、親父樣も御前樣にも、隨分おまめで〳〵と、しなれ掛れば母は驚き、遠い所へとはそりやどこへ、どうした譯で何しに行くと、根問へば親の歎され小日、サアしてやつたと目を嚬嚬き、親の物は子の物と、お前へこそ無心申せ、遂に人の物管片し、いがんだ事も致しませぬに、不孝の罰か、夜前私は大盜人に逢ひました。ヒヤア、其中に代官所へ上げる年貢銀、三貫目と云ふ物盜み取られ、百疋も無く仕樣も無く、お仕置に逢はうよりはと、慚愧極めて居りまする。情無い目に逢ひましたと、廣目釉をば顏に當て、しやくり上げても出ぬ涙、鼻が邪魔して目の縁へ、屆かぬ舌ぞ恨めしき。（淨瑠璃、千本櫻）

●ホヽ措いてたも、そなたの口からわんばくとは、舌長な慮外である。若しや御兄の無いときは、御次男でもお代櫻、け侮つて蹴つまづき、總領育てた大きな鼻、へし折れぬ用心しや。餘んまり鼻が高いとの、天狗がねたんで撮むぞや。笑止な事と出放題。（淨瑠璃、那須與一）

●まゆねかきはなびひもとけ待つらんやいつしか見んと思ふわが君。（萬葉）

●打なげきはなをぞひつる劔太刀身にそふ妹が思ひけらしも。（同）

●けふなればはなしはなしひまゆがゆみおもひしことは君にしありけり。（同）

●出でゝゆかん人なとゞめんよしなきに隣のかたにはなもひぬかな。（古今）

●蓮の香に目をかよはすや面の鼻。（芭蕉）

●世の中の榮螺も鼻を明の春。（其角）

●思ひかね鼻くろめたる牡猫哉。（成美）

●牛の鼻より行く草や芳ばしき。（路靜）

●若草や鼻押つけて牛の悲。（太蕪）

●天地の鼻のつまりし朧月。（蟻道）

●鼻先に智慧ぶら下げて扇哉。（一茶）

●入梅のひゝ鼻通さるゝ犢哉。（白雄）

●蘭とりに鼻はあれども梅のはな。（也有）

●雪に赤きもの道行く人の鼻の先。（杉風）

●其鼻は六尺ほどもありぬらし蕈賣ぼさちのりものゝ巢。（古渡）

●糟くさき頭巾かぶらば淵明が鼻にまがきの菊は匂はじ。（也有）

●氣のあはねまらうど來ればぜひもなくあしらふてゐる鼻にぞ有りける。（曾露）

●奥深く香の柴舟かよふらん桃源めける鼻の洞穴。（鹽風軒）

●長月の菊の匂をかぎこめば此鼻の後更に鼻なし。（笛成）

●雪の日も薪背負うて鼻の下やしなふ賤の顏の黑主。（梶丸）

●いづれ梅いづれ櫻か白雪に鼻をあかめて愛づる庭もせ。（於兎門）

●年禮の人あしらひもうつかりと鼻にこたへて匂ふ梅が香●（爲貞）

●鼻と鼻つきあひ居てもかくとだにいはぬは人のかさやかゝんと。（文化）

●冬ながら春かと斗り鼻の毛をぬく〳〵黑ふ埋火のもと。（古吉）

●おちやッぴい鼻の穴から煙を出し。（川柳）
●正成は鼻をふさいでさいをふり。（同）
○垣間見に鼻の出てゐるさるた彦。（同）
●白酒をきれいに飲んだ鼻の先。（同）
●猿田彦鼻をにぎつて汗を拭き。（同）
●すつぱりとなほりましたと鼻が落ち。（同）
●鼻壁で湯治の御供申し出で。（同）
●毒だてに鼻の先のはいひにくし。（同）
●大佛の鼻ぼどあると奏聞し。（同）
●梅が香は座禪の鼻の邪魔になり。（同）
●鼻筋が背中へとほるひきがへる。（同）
●身の内の文珠を鼻にぶらつかせ。（同）
●まう〳〵として十念の、つとめの地獄極楽もゆめのいろ〳〵に柳はみどり、鼻の下から出しだいを、一字不説といひさいて、喪あけの鳥へ。（俗語）
●苦しい時には鼻をも刮ぐ。（俚諺）
●目と鼻との間。（同）
●成るものは鼻から。（同）
●魏王遺二楚王美女一。楚王悅之。夫人鄭袖謂二新人一曰、王愛二子美一矣。雖レ然強二子之鼻一。子爲見レ王則必掩二子鼻一。新人見レ王因掩二其鼻一。王謂二鄭袖一曰、新人見二寡人一則掩二其鼻一。何也。鄭袖曰、其似レ惡レ聞二王之臭一也。王曰悍哉。令劓之無レ使レ逆レ命。（戰國策）
●擁レ鼻悲吟一向愁。寒更轉盡未レ回レ頭。紅葉傷レ心月半樓。却要紗屏無レ睡秋分夜。（韓愈）
●刻削之道、鼻莫レ如レ大、目莫レ如レ小。鼻大可レ小、小不レ可レ大也。目小可レ大、不可レ小也。（韓非子）
●香臭芬薌腥臊酒酸奇臭、以レ鼻異。（荀子）

〔はへ〕蠅

青蠅。蒼蠅。聚散。集レ盤。呼レ類。難レ逐。
むらがる。むれとぶ。
●とりもちもて、蠅といふ虫をおほくとりたるを、ふとけみさやうとて、目もおよばぬものを見るめがねのあれば、それもて見しに、そのもちにつきたる蠅が、にげんとして羽を動かすが、はてはその羽ももちにつきて、動きえず。かうべうごかして苦しむもあり。又久しくつきしは、飢にのぞみて、よわり死するけしきもあり。たゞに羽をならす音のみきゝしが、よく見れば、いとかなしきさまなりしとかたるを、さあらんよなど人のこたへしを、見しときゝしとはいと違ふものぞかし。見しごとくきゝ給はゞ、さあらんなどゝ計りはいひ給はじ。まいて目の及ばぬあたりのことは、猶心にて見給へかしといひしものありけり。（樂翁）
●筑摩、朝妻、江日、神崎は昔語りともおぼえぬるに、昨日の淵は今日の矢河となりて、人換り家變りぬれば、搗米の船には空しく蠅のむらがり。草履草鞋のかごは徒に風に動く。（南行記）
●信力よわきものには、他力をあたへてこれをすくふ。たふれふしたる赤子を、親のいだくが如し。余諸つよき顔諸にすがりてみづからすゝむ。驥につく蠅の千里にかけるが如し。（光行）
●蠅こそ憎きものゝ中に入れつべけれ。愛敬なく憎きものは、人々しう、書きつくべき物のやうにあらねど、萬の物に居、顔などに濡れたる足して居たるなどよ。人の名につきたるは必うとまし。（清少納言）
●一日假初に蓋ねのひぢを曲げたる漆間の胡蝶にもあらで、人もすさめぬ身は、似合しき蠅となりてたはむれしが、そこにも一顆の玉の上に、卒然として立とまりたるを、我ながらおほけなく、物汚したる心地して夢さめぬ。蠅や我ならん、われや蠅ならんと、分別いまだ定らざる所に。（也有）
●釋迦の鼻をせゝりたる蠅が、金色の光もさゝず。孔子の肌着を道ひたる蚤に、道徳備はる物にもあらず。（同）
●桑くも天照大神、皇孫を、蘆原の中津國の御主と、定め給はんと有りしに、荒ぶる神は飛び滿ちて、螢火の如くなりしを、事代主の神なごめはらひ給ひしこそ、今日の名越の始めなれ。されば古き歌に、五月蠅なす荒ぶる神をおしなべて、今日は名越のはらへなるらん。さてさばへなすとは、夏の蠅の飛びまわぐが如くに、さはりをなす神をいへり。（謠曲、水無月祓）
●衣服改め、刀引提げ出で迎へ、我等式の賤しき媚、御眼に留り御憐愍、正眞の氏なくて玉の輿、剩へ大分の賜物、親迄かゝる身になる事、千里の馬の尾に留まれば、蠅も千里を行くが如し。冥加至極と一禮す。（淨瑠璃、寶物語）
●エー腑甲斐ない。是蠅取蜘はな、小さけれども羽ある蠅を、とらんとする勇氣あり。虻蠅に劣つた縊真眞、赤松村上が聞く前、恥かしうはないか。サア物言はずと切腹切腹。（淨瑠璃、大塔宮）
●露にぬる椅のせみもあるものを何をむさぼる心ばへぞも。（善水）
●蠅を打つ音や隣もきのふから。（太祇）
●雪信が蠅打ちはらふ硯かな。（蕪村）
●信濃路や蠅に吸はるゝ痩法師。（許六）
●雨の蠅螢の上をありきけり。（超波）
●蠅追ふに妹忘れめや瓜作り。（其角）
●頗につく飯粒蠅に與へ曳。（嵐雪）
●あさましく蠅打つ音や森所。（召波）
●豊年の聲を揚げけり門の蠅。（一茶）
●我夢も露かされぬ蠅たゝき。（闌更）
●罪深く喪ぬ蠅や瓜の皮。（几董）
●蠅が來て蝶にはさせぬ糞掃哉。（也有）
●うき人の旅にも習へ木苔の蠅。（芭蕉）
●在所とて螢の上まで黑まめをまいたるごとく蠅いでにけり。（遙隣）
●秋こよひむかふる駒の尾につきて蠅もひかるゝ大内の庭。（萬化伎）
●むら〳〵と簀のほとりの蔓ばひの蠅ぞま黑になりてたかれる。（保が其）
●諺に蠅の力といふめれど蓋ねの顔をねちゆがめけり。（手慶）
●はへおうてひろねをすれば耳にまたうるさきものよかや賣の聲。（狂歌庭）
●たいどくの蠅を追うてるかゝり人。（川柳）
●かゝり人あたまのうへの蠅を追ひ。（同）
●蚊と蠅は酒池肉林がわき所。（同）
●神主は人のあたまの蠅を追ひ。（同）
●より合うて人のあたまの蠅をおひ。（同）
●蠅はにげたのにしづかに手を開き。（同）
●物さしでひる蹇の蠅を追つてやり。（同）
●ほくろかと思へば顔に蠅一つ。（同）
●蠅ひとつ須磨の鉢盂の濱千鳥。（同）
●あごで追ふ蠅は六味へたかるなり。（同）
●人の蠅を逐ふより己れの蠅を逐へ。

●雁が立てば蠅も羽づくろひす。（同）
●臭い物には蠅がたかる。（同）
●頭で蠅を追ふ。（同）
●蚊の夜づめ蠅の朝起。（同）
●蒼蠅蒼蠅、吾嗟爾之爲生。既無蜂蠆之毒尾、又無蚊睫之利觜。幸不爲人之畏、爾形至眇、爾欲易飽。杯盂殘瀝、砧几餘腥、所希杪忽、過回雖勝、苦何求而不足。乃終日而營營、逐氣尋香、無處不到。頃刻而集、誰相告報。其在物也、雖微、其爲害也至甚。若乃華筵廣夏、珍羞方狀、炎風之懊、夏日之長、神昏氣爽、流汗爲漿。委四支而莫舉、旺兩目而茫洋。惟高枕之一覺、冀煩敲之暫忘。念於爾而何負、乃於吾而見殃。尋頭撲面、入袖穿裳。或集眉端、或沿眼眶。目欲瞑而復警、臂已揮而猶攘。於此之時、孔子何由見周公於夢寐、莊生安得與蝴蝶而飛揚。徒使蒼頭丁壯、巨扇揮殿、咸頭垂而腦脫、每立寢而顛倒。此其爲害者一也。又如峻宇高堂、嘉賓上客、沽酒市脯、鋪筵設席、聊娛一日之餘間、奈爾衆多之莫敵、或集器皿、或屯几格、或醉醉酌、因之沒溺、或投熱羹、遂喪其魂、臨鼎、死而不悔。亦可哀矣。夫食尤是、赤頭。號爲泉蛇。一有霑汁、人皆不食。奈何引類呼朋、搖頭鼓翼、聚散倏忽、往來絡繹、方其賓主獻酬、衣冠儼飾、使吾揮手頓足、改容失色。於此之時、王術何暇乎清談、賈誼堪爲之太息。此其爲害者二也。又如醯醢之品、鹽豉之制、及時月而收藏。謹綱罟之固濟、乃衆力以攻潰、極百端而窺竊。至於大藏肥牲、嘉穀美味、蓋藏稍露於牌隙、守者或時而假寐、幾稍怠於防嚴、已竊遁其種類、莫不養息蕃滋淋漓敗壞、使親朋卒至、衆爾以無歡、藏獲倒竄、因之而得罪。此其爲害者三也。是皆大者、餘悉難名。嗚呼止刺之詩、垂三之六經、於此見詩人之博物。比興之爲構。宜乎以爾刺幾人之亂國。誠可嫉而可憎。（歐陽修）
●村北村南打稻忙。淨雲吹盡見朝陽。不宜便作晴明看。撲面飛蠅未退藏。（陸游）
●幾日亂朱紫。商飈欣掃除。孫郎彈不易。我子賦何知。懇懇涼秋至。營營計已疎。何來還集此。往事第中書。（王漁洋）
●眇形纖殼蓋中胎。鼓翅搖頭可憐哉。苦不自求何種類。玉階金殿也飛來。（郭璞）
●水結東溪凍未澌。風陵枯木怒猶威。不知春力來多少。便有青蠅負暖飛。（虞道悅）
●雞既鳴矣。朝既盈矣。匪雞則鳴。蒼蠅之聲。（詩經）
●黃鸝翠幕斷飛蠅。（張來）

〔はま〕濱

海濱。湖濱。水濱。江濱。天濱。河濱。陰濱。

はま田。はまべ。はまぢ。はまつゞら。はまひさぎ。濱ゆふ。あらき濱べ。しら濱波。はまのまさご。さゞれ波よる。

●濱の宮と申し奉る天子の御前より、父の渡り給ひたりし山なりの島見渡して、渡らまほしく思はれけれども、涙風向ひて叶はねば、力及び給はず。豫めやりたまふに、我父はいづくにか沈み給ひけんと、沖よりよする白浪にも、とはまほしくぞ思はれける。濱のさきごも、父の御骨やらんとなつかしくて、涙に袖はぬれつゝ、潮汲むあまの衣ならねど、乾く間なくぞ見えられける。渚に一夜逗留し、夜もすがら經讀み念佛して、指の先にて、濱の砂に佛の姿をかきあらはし、明けゝれば、僧を請じ、座禪功德さながら蟻塔にと回向して、都へ歸り上られけん心の中推し量られて哀なり。（平家物語）
●諸國に吹上の濱といふはあまたあり。海風荒く、遠淺の濱、に白砂をふき上ぐる地、をいづかたにても、吹上と名付くるなるべし。就中すぐれたるは、薩州西南の濱の吹上なり。其海もとより、涙なき大洋にて、風荒ければ、白砂をうづ高く吹きあげ、又是なふきあらすゆゑに、其砂の高低さだまらず、殊に濱長く、數十里を一目に望む。潔白の海上にて、白砂一點の塵もなく、風景不雙なり。（南谿）
●まひ子の濱といへる所ははりまぢにていとをかしき所なり。生ひつゞきたる松のひろごりふしたる枝々、たかうあらはれたる根のさまなど、こと所に似ず。なぎさによる波、おきゆく帆かげなど、あはぢのしまもめに近くて、とりあつめたるけしきいはんかたなし。いとちひさきをうかべて、なぎさはなれず漕ぎゆく。舟よ〳〵とよぶ聲のをかしさに、しばしがほどをとよびよせ打のりて、つかれたるあしやすめつゝ、濱の方をみやれば、おくれさきだつ旅人の松のひまより見えかくれして、あふぎさし出しつゝ、うちつれきなどしたる、海より見るけしき、はたえもいはずをかしく、はるゆくとも、よにあくまじきまさごぢのさまになん。（廣足）
●その夜は黑戸の濱といふ所にとまる。片つ方は廣やかなる所の砂子、はる〳〵と白きに、松原しげりて、月のいみじうあかきに、風の音もいみじう心ぼそし。（孝標女）
●神風や伊勢の濱荻折り敷きて、旅寢やすらんあらき濱邊に、清き渚の玉の數々、光も天照らす、天の岩戸の昔をうつす。（謠曲、御裝束）
●所は陸奥の、奥に海ある松原の、下枝に交る汐蘆の、末引きしなる浦里の、籬が島の苫屋形、圍ふとすれどまばらにて、月のためには卒都の濱、心ありける住居かな。（謠曲、善知鳥）
●都の手ぶりなりとても、旅は心の安かるべきか。殊更是は王土の命、重荷をかくる南の國、聞くだに遠き千里の濱邊、山は苔路のさかしきを、いつかは越えん旅の道、休らふ間もなき心かな。（謠曲、卷絹）
●がうならびましたが此濱の組の者共、此浦邊は漁り獵師男海士潜ぎの蜑、其外山をかせぐ獵師も入り込む外、商賣はわづか故、惣名を獵師町と申します。（淨瑠璃、安達原）
●山おろしにもみぢ散りしく色のはま冬はこしぢのとまりさびしな。（寂念）
●濱さよみ浦めづらしみ神代より千舟のはつる大わたの濱。（萬葉）
●松がけの清き濱べに玉しかば君きまさんぬ清きほまべに。（八束）
●波よする吹上の濱の濱風に時しもわかぬ雪ぞつもれる。（敎長）
●あだなみのたかしの濱のそなれまつなれやばかけてわれこひめやも。（定家）
●八百日ゆく濱路を清み磯松のつねにと思ふかげもありけり。（諸平）
●君が代はとほつあふみの濱におふる松の千年も近しとやする。（春滿）

㉑住吉の出見の濱はあはぢしまむかひのたてし名にこそありけれ。（長流）
●名に高きたかしの濱はそれぞともいはねどしるき浦の松原。（宣長）
●浪よする磯の松原吹く風のおとも高しの濱も名ぐはし。（武備）
㉒寂しさや須磨にかちたる濱の秋。（芭蕉）
㉓乞食せん月の爲には外が濱。（許六）
㉔春の泊鯛呼ぶ聲や濱のかた。（几董）
㉕初霜や蘆折遠ふ濱堤。（支考）
㉖濱の子が風の名呼ぶや紙鳶。（旨原）
㉗見わけれど月の爲には外が濱。（鬼貫）
㉘戸もたてず一濱ねたり天の川。（藪物）
㉙水仙の夕日たまりや濱の家。（巴流）
㉚初松魚さぞな所は小名の濱。（桃隣）
㉛仙人のよはひはつきじありそ浮の濱のまさごは打ちつくすとも。（赤良）
㉜あだ波も高しの濱のち鳥わなかけじや袖のぬれも社すれ。（未得）
㉝しら濱にあさる千鳥のつばさにも赤みをそふる夕やけの雲。（元輯）
㉞置く霜は今も難波の浦人がやきつるしほとみつの濱邊に。（靜音）
●おりものゝひろたの濱邊磯地のしまの名のみに今朝の霜ふり。（魚口）
㉟打込みし浪のつゝみに琴の音風に舞子の濱の松風。（田馴）
㊱大伴のみつの濱邊にあし火をばたける煙の立ちなびくみゆ。（朝雲）
㊲雨空の舞子の濱のほとゝぎす一さし汐になだこえて行く。（洞住）
㊳油斷する日あし高師の濱千鳥遊び過してかける夕凪。（若糸）
㊴刈る稻のかぶき芝居に取りこんだ人も十分のうへ出しの濱。（文化）
㊵夕凪の歸るにつれて段々と千鳥は友なよひつぎの濱。（千賀江）
●武の神の先は濱邊を弓の敵。（川柳）
㊶濱の公事綜此方なき寢入り。（同）
㊷舞踏おそれず濱々と下女ぬかし。（同）
㊸白石は濱をへらさぬ御うけ也。（同）
●親ににらまれて平目の濱へ行き。（同）
●三黑迄砂へ踏み込む由比ヶ濱。（同）
㊹蔦心が有つてひまどる濱の道。（同）
㊺濱風に屏風の衣吹おとし。（同）
㊻御姿は故事を云ひ〳〵濱でまひ。（同）
●由井ヶ濱びくり〳〵とさせた所。（同）
●君とそひねの小夜あらし、つれてよするや、汐の干潟の眞砂地を、今はよそめに三の濱。（俗謠）
㊼七里小濱のな、砂のかずほど思へども、緣がうすいやらそひもせぬ。（同）
㊽月はしら〳〵したゝの濱よ、濱のまさごはみな玉よ。（同）
㊾くるか〳〵と濱へ出て見れば、濱の松風音ばかり。（同）
㊿濱の松風音ばかり。（俚謠）
(51)普天の下率土の濱。（同）
(52)送レ我出二重圍一。長揖清江濱。我老益不レ堪。惟有二一頃田一。（蘇東坡）
(53)氣合龍祠外。聲過鯨海濱。（蘇味道）
(54)耕二于寰間之野一。釣二寂寞之濱一。（韓愈）
(55)釣船猶繫鏡湖濱。（陸游）
(56)綢花亂築裏二江濱一。（杜甫）

〔はやし〕林

山林。森林。鶴林。肉林。深林。幽林。寒林。蕭林。凋林。茂林。里ばやし。松ばやし。花の林。木のはの林。星の林。鶴の林。かた山林。言葉の林。

(57)山を遶れて山林に交るは、心を治めんとて道を行はんがためなり。然るを妄は聖に似て、心は濁にしめり。住家は卽ち淨名居士のあとを汚せりといへども、たもつ所は周梨槃特が行にだも及ばず。もしこれ貧賤の報の自ら煩すか、將妄心の至りて狂はせるか。（長明）
●南にかけひあり。岩をたゝみて水をためたり。林の軒近ければ、つま木拾ふにそしからず。名を外山といふ。正木のかづら跡を埋めり。（同）
●そもこの山に入りしより、鶯の林のしげきをわき、鷲の嶺の高きを仰ぐ。一念不退讀經の外は、よに他事なきものから、佛もこゝに救ひ給はず。神さへ助け給はずて、みこもれる事實ならば、よしや臥房を共にせずとも、それいひとかんあかしはなし。（馬琴）
●かくて森々たる林をわけて峨々たる峯をこゆれば、貴名の嶺は此山にたかし。大かた遠近の木立に心をわけられて、一方ならぬ感懷に思ひみだれて過ぐれば、朝雲翠くらし虎李將軍が栖をさり、暮風谷寒し鶴鄭太尉が跡にすむ。（光行）
(58)露の功德たまりて蒼海とたゝへて、善根林をなし、機感時を得て、今生を生死の終とし、當來を解脫のはじめとする。（同）
●先は生田の名にし負ふ、是に數ある林をば、生田の森とは知るし召さずや。又今渡り給へるは、名に流れたる生田川、水の綠も春淺き、靈間の若葉洞む野邊に、少なき草の原ならば、小野とはなどや知るし召されぬぞ。三吉野志賀の山櫻、立田初瀨の紅葉をば、歌人の家には知るなれば、所に住める者なればとて、生田の森とも林とも、知らぬ事なのたまひそよ。（謠曲、求塚）
●濃さもうすきも錦にて、吉野の山櫻　嵐にも尾にも靈の端の、かゝる詠めは靈きぬ世の、君も人も身をあはせ、心をのべて花衣、野べの葛のはひかゝり、林にしげき木の葉の、天長く地久に、幾萬代の道ならん。（謠曲、芳野）
●月もさやけき夜もすがら、四方の景色もすみのぼる、光を覆ふ靈ならで、雀のやどり影くらき、松の林に風あれて、汀の波のおのづから、音もはげしく打寄りて、高根にひゞく山彦は、とう〳〵さつと布引の瀧。（淨瑠璃、一の谷）
●うちはへて世は春なれや天の原星の林も花と見ゆらん。（家隆）
●さがのなるときはやしのなのみしてうつろふいろに秋風ぞふく。（實冬）
●まさきちる片山ばやしくるゝ日にいまはなごりと秋風ぞふく。（重經）
●ねにたてぬみやまばやしのさをしかはつまとゝのへて戀ひやねぬらん。（行家）
●おぼつかなうたの林にあつむなるその言の葉はちるやちらずや。（顯昭）
●もみぢ葉をたづねて入れば山本の林にひゞく鳥の一聲。（蘆庵）
●我やどの竹の林のかげしげみさゝぬるすゞめも千代となくなり。（幸文）
●我とわが心にとひてわくる哉深き林の苦の細道。（廣足）
●人めさへ見る日あまたになりにけり片山林花ささしより。（景樹）
●うぐひすに感ある竹のはやし哉。（芭蕉）
●杜宇馬子の寢て居る松林。（言水）
●足早に竹の林やみそさゞい。（惟然）
●うめさくら落花をふまぬ林哉。（曉鶯）
●籠り得ぬ鳥ども寒き林哉。（保吉）
●海はれて春雨けぶる林かな。（白雄）

●正月の月見る梅の林かな。（少汝）
●香に醉うて袖ふる梅の林かな。（蘭更）
●もゝ咲いて鳥紅の林かな。（蓼太）
●薄暗きみどりの林立ち寄れば貴の暑なうばふ涼しさ。（永笑）
●名に高き竹の林の蔦は七のかしこき人くどりかも。（仲達）
●思ひきや雲の林のみてくにてかくもさやけき月をみんとは。（閑人）
●立ち並ぶ木々の茂りしとこなればげにも林はかくとこそしれ。（眉山）
●我君の御代のためしとくれ竹の林は直なるものとこそみれ。（鉛里）
●道春の氏の心とみやま路にしげる大樹の林なるらし。（行也）
●みづがきの久しく成ぬまつ林色はかはらぬよつの常盤木。（蘭狐）
●千年も世にあれかしと思ふ人鶴の林にいるぞはかなき。（有風）
●たつた山花の錦をはぎとりて夏はみどりの林とぞなる。（柚洲）
●深林人しらず竹の子を盗み。（川流）
●無量樹の國だて鶴の林也。（同　）
●林から兎飛び込む涙しづか。（同　）
●武の道で文は柳の林なり。（同　）
●其信義桃の林に雙の庵。（同　）
●只酢を溜めて蒲田の梅林。（同　）
●林の中でおさへたる御献上。（同　）
●林では鶴も無常につかはれる。（同　）
●山林をさがしあてたは西の狩。（同　）
●林にもあまる茂りや冬木立。（同　）
●衆議成レ林、無翼而飛。三人成二市虎一。（淮南子）
●東流不レ作二西歸水一。落花辭レ條羞二故林一。（李白）
●黄鳥穿レ林度レ曲。青山入レ座忘レ言。（張瑞圖）
●窓間梅熟落レ帶。墻下筍出成レ林。（茫石湖）
●風細飛花相逐。林深啼鳥時移。（陸游）
●鼓吹千林鳥。波濤萬壑松。（李笠翁）
●窓中列遠岫。庭際俯二喬林一。（謝朓）
●密林含二餘清一。遠峰隱二半規一。（謝靈運）
●老馬空知レ道。窮猿豈擇レ林。（宋登春）
●孤獸思二故藪一。離鳥悲二舊林一。（陸機）
●下有二采薇士一。上有二嘉樹林一。（阮籍）
●有レ鶯在レ梁。有レ鶴在レ林。（詩經）
●贈二彼中林一。俟薪俟蒸。（同　）
●紅葉聲乾鹿在レ林。（温庭筠）
●啼鳥空林一家。（高啓）
●雲林野思幽悲。（倪瓚）
●林深欲レ借レ秋。（祝枝山）
●園林幽雅。（揚公遠）

〔ばら〕腹

口腹。腹心。腹案。皷レ腹。捧レ腹。抱レ腹。

はらわた。はらの内。はらつゞみ。はらぐろ。はらばふ。

●去程に高重走り廻りて早々御自害候へ、高重先を仕りて、手本に見せ進らせ候はんといふまゝに、胴ばかり殘りたる鎧ぬぎて抛げすてゝ、御前にありける盃を以て、舍弟の新右衛門に酌を取らせ、三度傾けて、攝津刑部大夫入道々準が前におき、思ひさし申すぞ、是を肴にし給へとて、左の小脇に刀をつきたて、右の傍腹まで切目長く掻き破りて、中なる腸たぐり出して、道準が前にぞふしたりける。道準盃をとりて、あはれ肴や、如何なる下戸なりとも、此を呑まぬ者あらじと戯れて、其盃を半分ばかり呑み殘して、遺恨入道が前にさしおき、同じく腹切りて死にけり。（太平記）
●几帳の綻よりかきあげて見出せば、貴子にともしたりつる火は早う消えにけり。内には物の後にともしたれば、光ありて、外の消えぬるも知られぬなりけり。影もや見えざらんと思ふに、あさましうて、腹黑う開えぬとも、の給はせでといへば、何かは侍ふ人も、答へて立ちにけり。（道綱母）
●伏姫は思ひがけなく、奇しき童にときさとされて、無明の眠さめながら、渺かとぞ思ふあとゝめぬ、人の言葉のあやしさに、なほ疑ははれまなき、涙の雨に敷妙の、袖はものかは腸を、絞るばかりにむせかへり、なげき沈ませたまひけり。（馬琴）
●二世をかけたるおんみにすら、疑はれたる小腹の内を、見せも見られもせぬ苦しさは、胸にあなあるる胡の國に、生れぬ身とて甲斐なけれ。（同　）
●いひつゞくれば昔源氏物語、枕草紙などに事ふりにたれど、おなじ事、又今更にいはじともあらず。おぼしき事いはぬは腹ふくるゝわざなれば、筆にまかせつゝ、あちきなきすさびにて、かいやりすつべき物なれば、人の見るべきにもあらず。（兼好）
●其後合戰度々にて、又主從二騎にうちなさる。今は力なし。あの松原に落ち行きて、御腹召され候へと、兼平すゝめ申せば、心細くも主從二騎、粟津の松原さして落ち給ふ。（謡曲、兼平）
●新兵衛手を打ち、そうぢや誤つたゝ。お主へ不忠の言ひ譯に、切つた腹が三味線の皮にもならず。猫に劣つたむだ死に、命さへ生きて居たら、年々に主人の御恩、送り返す期も有らう。御異見さつと聞き屆けた。（淨瑠璃、三組盃）
●なち方の、あらゝ松原、松原に、わたりゆきて、つくゆみに、まりやなたぐへ、うまびとは、うまひとどち、やいつこは、やいつこどち、いざあはなわれは、たまきはる、うちのあそが、はらぬちは、いさごあれや、いざあはなわれは。（熊之凝）
●みもろの、そのたかぎなる、おほぬこが、はらにある、きもむかふ、心をだにか、あひおもはずあらん。（仁德天皇）
●大君は神にしませば、赤駒のはらばふ田ぬを都となしつ。（旅人）
●六月は腹病やみの晏かな。（芭蕉）
●花盛り大腹中となりけらし。（杉風）
●灌佛やもとより腹はかりの宿。（雅村）
●稻妻の腹にはいるか蟇。（葛三）
●水呑めば腹のふくるゝ暑哉。（几董）
●秋近し黄ばみかゝりし鮎の腹。（其考）
●かくぶつや腹を並べて降る霰。（拙侯）
●侍は腹さへ切るに炬燵哉。（支考）
●角鶏に腹つき出して袷かな。（許六）
●うき世をも臍におさめてしつかりと出世をはらむ腹ぶとの魚。（樋洲）
●こゑ〳〵にさわぐ蛙の腹ふくれ一寸さきは暗も月夜も。（芳泉）
●生るゝも死するも人は同じこと腹より出てゝ野原へぞ入る。（貞德）
●道傍の地藏も腹を立ち姿いく度となくなでる青柳。（三笑）
●穂にいづる一村すゝきはらみては月まちがほの武藏野のはら。（有風）
●野もはらなたてるや霞はるといへば握りこぶしで向ふ早歳。（李郷）
●我戀は袖やたもとにおしあてゝ忍ぶとすれど腰に出にけり。（穴主）
●なかしげに狂へる菊の花見んとたちよれる人は腹やかゝへん。（不埒）

㊀文學ぶ氣にはり持ちで腹にある知惠の袋や縫ひひろげけん。（天光）
㊁偽のなき腹中の赤からば心の猿の尻にやあるらん。（文字丸）
㊂神農はたび〳〵腹もくだして見。（川柳）
㊃腹を切る事もをしへてかあいがり。（同）
㊄生酔の腹を見ぬいた料理人。（同）
㊅切腹をしたかんばんは固木丹。（同）
㊆殘念とはら切る場所をうもれ木の。（同）
㊇はりたては千秋樂に腹をなで。（同）
㊈ことしや世がようて穂に穂がさいて、樹はいらいで實ではかる、聲も高天が腹つゞみ、なるかならぬか引いても見やれ。（俗諺）
㊉おまんこりや〳〵なぜまゝくはぬ、腹が痛いか夏やせしたか、腹も痛まぬ夏やせもせぬが、腹に八月のお子がある。（同）
㊊稻荷祭の太鼓の音、强つく〳〵考へ、ひとりで氣をもむ腹つゞみ。（同）
㊋月は重なる腹な子は太る、なま木いかだで氣が浮かぬ。（同）
㊌腹も身のうち。（俚諺）
㊍脊に腹は替へられぬ。（同）
㊎れん木で腹を切る。（同）
㊏補うない腹さぐられるな。（同）
㊐腹八分に醫者入らず。（同）
㊑十人よれば十腹。（同）
㊒東坡一日退朝食罷、捫腹徐行、顧謂侍兒曰、汝輩且道是中何物、一婢進曰、滿腹都是文章、坡不以爲然。又一人曰、滿腹都是機械、坡亦以爲未當。至朝雲乃曰、學士一肚皮、不合時宜。坡捧腹大笑。（調謔篇）
㊓蒯聵氏之時、民居不知所爲、行不知所之。舍哺而熙、鼓腹而遊。（莊子）
㊔盧其心、實其腹。（老子）

〔はる〕春

青帝。東君。駘蕩。陽和。淑景。良辰。雁北。燕南。蝶舞。鶯囀。暖風遲日。芳草名花。はるの開。はるの色。春のかげ。はるの心。道ある春。このめけぶる。みどりにかへる。春の山ぶみ。

㊕此方彼方霞みあひたる梢ども、錦をひき渡せるに、御前の方は、はるゞゝと見やられて、色をましたる柳、枝をたれたる花も、えもいはぬにほひをちらしたり。外は盛過ぎたる櫻も、今さかりにほゝゑみ、廊をめぐれる藤の色も、こまやかに開けゆきけり。まして池の水に影を寫したる山吹、峯よりこぼれて、いみじきさかりなり。水鳥どものつがひを離れずあそびつゝ、細き枝どもをくひてとびちがふなしの、涙のあやに紋をまじへたるなど、物の譬やうにもかきとらまほしき。まことに斧の柄もくだいつべうおもひつゝ日をくらす。（紫式部）
㊖或時淋しき町はづれにさしかゝり、夕ぐれ急ぐ春の名殘に心もとなき雨ふりて軒づたいに歸るに、花山の酒機嫌なる奴、薄色櫻をあらけなく手折り、手にかざして歸る醉の貌つき、春の木の間の入日のごとく照りて、眼に角を入れて、往來に輔あてをして噪ぎ來る。是かや春の物ぐるひと、人みな恐怖をなして蔀門口を鎖しけり。（西鶴）
㊗それより具足かゞみひらき餅に、睦月の寒さもくれて、二月は彼岸の閑子をぞ、花よりとよみし人もありしを、草餅の節供に桃もちりて、つゝじ山吹とふけ行くまゝに、まんぢう實の祭もねぶたく、空は蛙に蛩を呼ばれて、春雨つれ〴〵とふり出る比は、かき餅のいじり燒に、そかの右馬頭が夜咄もまみつべけれ。（也有）
㊘千早振神の御庭の雪なれや、白妙に雲も霞もうづもれて、いづれ櫻の梢ぞと、見わたせば八重一重、げに九重の春の空、四方の山なみおのづから、時ぞと見ゆる氣色かな。（謠曲、田村）
㊙春は曙漸う白く成り行くまゝに、雲間の紫雲やかに摘み出でつゝ、霞たちたる花の比は更なり。さればあやしの賤迄もおのれ〳〵が品につき、齋祝ふ年の兄、ましてやいともやんごとなき、大樹の元の梅が香や、先咲き初むる室町の、御所こそ花の盛なれ。君は足利十二代源義晴公、左大臣に任官有り、武威海内に輝きて、のべふす六十六の花、豐なる世の貢物、殊更姿の腹に、御男子懷胎有りければ、尙も目出度春ぞとて、各賀儀を申さるゝ。（淨瑠璃、廿四孝）
㊚深き惠を汲み分けて、祝ひことぶく御代の春、櫻や松梅も、皆御慈悲に生ひ茂り、北野の社かう〳〵と、木の間〳〵に打つ幕の、内は男女の色はへて、都ぞ春の錦なり。（淨瑠璃、一の谷）
㊛花飛び蝶驚けども人憂へず、水殿雲廊別に春を置き、曉日よそほひなす千騎の女、紅脣翠黛色をまじへ、土も闌干の梅が香や、桃も櫻もとこしへに、花を見せたる南京の、時代ぞ盛りさかりなる。（淨瑠璃。國姓爺）
㊜芹のえもかくてや人はくたしけん山路おぼゆる春の空哉。（蕉宗）
㊝いとひにし老こそけふはうれしけれいつかはかゝる春に逢ふべき。（永範）
㊞霞しく松浦の沖にこぎ出でゝもろこしまでの春をみる哉。（慈圓）
㊟花故にしらぬ山路はなけれどもまどふは春の心なりけり。（道因）
㊠心あらん人に見せばや津の國の難波わたりの春のけしきを。（能因）
㊡行くもくも花にとまりて逢坂の關路まさしき春のこの頃。（春滿）
㊢いく春の山の霞をへだて來て見しよの花のとほざかるらん。（枝直）
㊣二見がたつのぐみわたるあしかびに神代の春もおもほえにけり。（千藤）
㊤あしかびのもゆると見えし神代より心にきざす春は替らじ。（有功）
㊥春といへば人の心ぞたゞならぬ世は花鳥のあはれのみかは。（春海）
㊦我宿の春は來にけり具足餅。（鬼貫）
㊧蓬萊の山まつりせん老の春。（蕪村）
㊨御代の春數帖の萌黃に定まりぬ。（越人）
㊩日の春をさすがに鶴の歩み哉。（其角）
㊪花の春こんな親爺ぢやなかつたに。（大江丸）
㊫猪の首のつよさよ今朝の春。（凡兆）
㊬源氏にも稀なる老が春なれや。（許六）
㊭雪降や紅梅白し花の春。（杉風）
㊮いそがしや春を宮の柿樽。（洒堂）
㊯春や今水に影行く鳥と雲。（去來）
㊰花鳥の六十帖や春三月。（蟹太）
㊱春の日のまだ暮れやらぬ節用や永字八方かけあるけども。（的丸）
㊲高き枝いうらにとまりて長々と落ちぬ日足も申のこく玄。（眞顏）
㊳三月はつくれど質のふる裕うけぬかぎりは春にぞありける。（不埒）
㊴うの毛にてついたる程もきずなきは君が

八千代の玉の春哉。（峯風）

❶春なれや亀戸の茶屋の若菜飯しゃみに赤のたるを知るのみ。（橘丸）

❷年のくれはなしの奥に春が有り。（川柳）

❸よい春だのとは大きい中の町。（同）

❹一寸の草にも五分の春の色。（同）

❺くまざゝはかつをの腹で春を待ち。（同）

❻いつかいゝ春にむもてはなつてゐる。（同）

❼掛乞も二三丁程春をふみ。（同）

❽かけとりがとほして來たで春でなし。（同）

❾御代の春海老から胴もかざり物。（同）

❿水蔵くるしさ打わすれいゝ春だ。（同）

⓫返答はどふだといへば春の事。（同）

⓬春左近夏は右近がにほふなり。（同）

⓭雲にしたひ、雨にこがれて一枝の、梅なる命の春さへも、浮世の夢とちりはてゝ、なんのことやら袖のつゆ。また此世に初櫻、たまゝ椿そひぶしの、桂女もあるやらん。（俗謡）

⓮春は梅に鶯、躑躅や藤に、炭冬、櫻かざす宮人は、花に心移せり。（同）

❶一花開けば天下皆春。（俚諺）

❷東望望春春可憐。更逢晴日柳含烟。宮中下見南山盡。城下平臨北斗懸。細草偏承回輦處。飛花故落舞鸞前。宸遊對此歡無極。鳥囀歌聲雜管絃。（羅邦）

❸二月三月天漫漫。高枝低枝烟浸明。老子狂道歡伴去。春風似爲少年來。紫陌嘶嘶殘金絡馬。紅樓閑取玉交盃。東山寺々賞遊遍。須向西峨看一回。（星巖）

❹浩蕩東風裡。徘徊無所親。危城三面水。古木一邊春。衰世難行道。花時不稱貧。滔々天下者。何處問通津。（李咸用）

❺鳴鳩乳燕寂無聲。日射西廳潑眼明。午醉醒來無一事。只將春睡賞春晴。（蘇東坡）

❻千枝紅雨萬重烟。畫出詩人得意天。山上春雲如我懶。日高猶宿翠微巔。（袁枚）

❼洛陽訪才子。江嶺作流人。聞說梅花落。何如此地春。（孟浩然）

❽花前微笑拾紅巾。帶雨黏來細草勻。此意可憐如隔世。三年不見故園春。（張船山）

❾淡々輕陰暗碧紗。寒梅欺雪雲鬟斜。春雲忽破晴暉閃。已有啼鶯來繞花。（蟾溪）

❿泫然淚下惜時親。故人玉骨沒風塵。三樹陵頭明月夜。鵑悲梅謝不成春。（溪琴）

⓫出門何所見。春色滿平蕪。可歎無知己。高陽一酒徒。（高適）

〔はるのあめ〕春雨

濛々。雨細。雲低。濕花。無聲。如膏。催花。濕柳。桃花淚。楊柳烟。

はるさめ。かすむ雨。ほそくふる。みどりそふ。降るとも見えぬ。霞にしめる。かすむ春雨。

くるゝもわかぬ。かすみたちそふ。山のはきゆる。夕淋しき。軒の絲水。花のしづく。

❶花盛はさらなり。さらでも柳など青やかにうち烟り、うら〳〵とてりたる日は、蕨つく〳〵しなどいかならんと、野山のさまのみ戀しう思ひやられて、庵の中には籠りぬがたき心、人さへゆくりなく訪ひ來つゝ、近さわたりまで、いざ〳〵などそゝのかすめり。雨のふる日は、さることも思ひ絶えて、人はた音づれねば、文机にのみよりゐたる、中々になかしうなん。茅ふける軒は、雨の音靜にて、池水のあやこまやかなるに、いと深う霞める梢より、翅ぬれたる鳥共の、そこはかとなく飛び渡るなど、いといたうをかし。暮れゐればましていとゞめやかにて、見る書さへ今一きは心しみゐ。風少し吹き出でゝ、爐邊の火のまたゝきたるに、何ともしらぬ花の香の、ほのかに打薫りたるなどもをかし。（廣足）

❷しのぶにつたふ軒の水も、見えぬばかりにくれゐねば、かうしおろす折しも、庭の眞砂ふむけいしの音さこゆ。誰ならんと見れば、しめやかなる雪の雨に、物語せんとて、親しき友の來れるなりけり。徒然なりしに、いと〳〵嬉しくよろこび聞えて後、とはず語に、かくふりつゞきては、そこの梅は散りぬらん。かしこの櫻は咲きやしぬらんといへば、まらうど山雨松草庵中と口ずさぶ。珍らしからぬ唐歌なれど、折からはをかしうぞ聞えし。（高尚）

❸三月二十日、夜雨ふる。中宮大夫殿神樂をうそぶき給ひて、蕭々たる暗き雨の窓を打つ聲とくちずさみ給ふ。絵物語に書きたらんことを、聞くやうにておもしろし。雨風もともにはげしければ、

物ごとにあはれすゝむるけしきにて秋とおぼゆる雨のおとかな。（中務内侍）

❹二月にも成りぬれば、雨いとのどかにふるなり。かうしなど明けつれど、例のやうに、心あわたゞしからぬは、雨のするなめり。（道綱母）

❺此の春雨の昨日今日、晴間も見えぬつれづくに、今日も暮れぬと告げ渡る、聲も淋しき入相の鐘、つくづくと、春のながめの淋しきは、おのぶにつたふ、軒の玉水おとすごく、獨ながむる夕まぐれ、伴ひかたらふ諸人に、御酒をすゝめて盃を、とりん〳〵なれや梓弓、やたけごゝろの一つなる、つはものゝ交はり、頼みある中の酒宴かな。

思ふ心のそこひなく、唯うちとけてつれづくと、降り暮らしたる宵の雨、これぞ雨夜の物語、おなじ〳〵言葉の花も咲き、匂ひも深き紅に、面もめでゞ人心、隔てぬなかの戯は、面白や諸共に、近く居よりて語らん。（謡曲、羅生門）

❻乱春は、殊に櫻の花心、色香に染むや深絲、糸よりかけて青柳の、露ゝ亂るゝ春雨の、夜ふりけるか花色い、例じめりして景色立つ、吉野の山に着きにけり。（謡曲、吉野天人）

❼云ひたい事の數々も、今は云はれぬ二人が中、繁しい人を振り捨てゝ、一人寐る夜の手枕も、彼の郎郎の枕なら、夢になりともせめてマア、添ひ臥す事も有れかしと、わしや幻に見やうとて、惚れはせぬもの味氣なやと、我身をとんと高闌に、凭れ掛りし立姿、柳の枝に春雨の、風吹き添へる風情なり。（淨瑠璃、明烏六花曙）

❽我せこが衣春雨ふるごとに野邊のみどりぞ色まさりける。（貫之）

❾つくづくと春のながめのさびしきはしのぶにつたふ軒の玉水。（行慶）

❿梓弓おして春雨けふふりぬあすさへふらば若菜つみてん。（古今）

⓫忘ちろさことこそなけれつくづくと春はいづこもながめのみして。（重郷女）

⓬春雨のけふふりそむるかひ有りて山の梢はうすみどりなり。（周防内侍）

⓭はるさめのあやおる池に時わかぬ水のみもどりもそふかとぞ見る。（蘆菴）

●はるさめにこすゑあやなくなりにけりさらでもかすむ夕暮の山。（春海）
●すみだ川みのさてくだす筏師に霞むあしたのあめをこそしれ。（千蔭）
●かゝげ見しをすのと山も雲きえて雨のどかなる庵のうち哉。（景樹）
●染さると霞わけこし里の子がえびらにかゝるゆぐれの雨。（諸平）
●春雨や蛙の巣ったふ雨のもり。（芭蕉）
●うたゝ寝に使三度や春の雨。（几董）
●春雨や蛩這入る石灯籠。（杉風）
●文ぬれしことわりいふや春の雨。（召波）
●春雨や枕くづるゝうたひ本。（支考）
●龍田に燈を呼ぶ聲や春の雨。（蕪村）
●春雨や読はるかに家中町。（閑吏）
●鐘はみな遠寺になりぬ春の雨。（蓼太）
●窓にくふ牛のあぶらや春の雨。（許六）
●旅人の夜川や越ゆる春の雨。（曉臺）
●おもひ絶えて侮さる宿に春の雨。（白雄）
●かき蛩り虱色なる春の空はさびしさ増る雨中ちう〳〵。（走帆）
●南寶もおのが業とて嬉しげに朝からかさな春雨の頃。（穴主）
●新宅の壁もまだひぬ長の日にたらり〳〵とふすま春雨。（きよろり）
●とり上げて打しめりたる春雨に今宵つゞみのねごゝろもよし。（久呂面）
●春雨の降るかふらぬか疑ひのかやの軒端へ手を出して見る。（廣道）
●春雨の音なしぶりはいろ〳〵と小草そだつるしめしなるべし。（八橋）
●山住は唯雨もりのぱつちりとひとりながめの春のさびしさ。（山主）
●花を見るまどもはづれて揚弓のあたり静けき今日の春雨。（石季）
●あひまなくこまかに風の手も見えて將棋をさせる宿の春雨。（占正）
●ながき日を一日ふりし行列にくたびれもせぬ春雨のあし。（市人）
●千早振る神の惠や春の雨。（川柳）
●春雨の御歌書寂の御土産。（同）
●春雨にうたれてゐるは菠薐。（同）
●ほうろくにあられたばしる春の雨。（同）
●春雨の奥海となり山となり。（同）
●雨をねめ〳〵辨當内で喰ひ。（同）
●御の字になつたと花見支度する。（同）
●梅が枝に小よりを殘す春の雨。（同）
●春雨やつい牡丹餅に御手が付き。（同）
●春雨に砥石のかわく柚が宿。（同）
●破鍋の果を焼いて食ふ春の雨。（同）
●春雨にしつぽり濡るゝ鶯の、羽風に香ふ梅が香や。花に戯れしほらしや。妾や鶯ぬしは梅、やがて身まゝ氣儘になるならば、サア、鶯宿梅ぢやないかいな。サアサ何でもよいわいな。（俗謡）
●あはれ若木を桐ヶ谷、歎きにしぼむ白太夫、頼む木陰も泣き入りて、ふるは誠か春雨の、袂もつまも淵と流るゝ四の袖。（同）
●難波江の、片葉の蘆の結ぼれかゝり、解けてほぐれて逢ふことも、松にかひある春の雨。（同）
●おもしろの春雨や、花のちらぬほどふれ。（同）
●雨聲初歇候。苦色猶同春。水釋魚將躍。煙籠柳欲顰。空濛連遠郭。虛室接平津。未著一篇絶。已沈三市塵。賞深茅屋士。恩渥蓼村民。細滴宜微醉。流霞認至仁。陽和從此始。景象逐時新。且約尋芳日。重來整角巾。（星巖）
●霏々漠々暗和春。羅翠疑紅色更新。寒入風裏濕曉聲。細隨油壁靜香塵。連雲似織休迷雁。帶柳如啼好贈人。別有空階寂寥事。綠苔狼藉落花頻。（吳融）
●小閑疎簾香篆遲。冥々春曉似昏時。揺窗鳥老眠看如畫。撥觸愁腸散似絲。淺綠樹滋驚未覺。小紅花濕蝶還知。輕袋麗穀垂楊畔。問殺江頭老釣師。（錢謙益）
●一夜聲喧客夢搖。春風吹送願滿々。不知新水添多少。漁艇都撐逆板橋。（湯擴祖）
●江南十里曉鶯啼。野店小橋垂楊西。日暮行人思二醉。杏花滿地願凄々。（船山）
●一雙燕子語簾前。病客無憑盡日眠。聞道杏花一人不到。滿庭春雨綠如煙。（王芳）
●一臥連旬不出家。野梅離落已毬葩。驟聞昨夜溪村雨。春枕分明夢杏花。（磐溪）
●春自往來人送迎。愛憎何事別陰晴。落花雨是催花雨。一樣檐聲前後情。（三樹）

【はるのうみ】春海

波静。渺々。洋々。茫々。極目。連雲。
のどけき。波たゝす。風しづか。
浪路もかすむ。

●年もかへりぬ。所々浦々あはれなる事をのみおぼしなげく。佐渡院あけくれ御行をのみし給ひつゝ、なをさりともとおぼさる。隠岐には浦よりをちの、はる〴〵とかすみわたれる空をながめ入りて、過ぎにし方かきつくしおもほしいづるに、行方なき御涙のみぞとゞまらぬ。

うらやましながき日かげの春にあひてさほくむあまも袖やほすらん。（増鏡）

●比は三月廿八日のとなれば、海路はるかに霞みわたり、哀を催すたぐひかな。只大方の春だにも、暮れゆく空は物うきに、況や是は今日を最後、只今限のことなれば、さこそは心細かりけめ。沖の釣舟の波に消え入るやう覚ゆるが、さすが沈みもはてぬを見給ふにつけても、御身の上とや思はれけん。（平家物語）

●おもしろや頃しも今は春の空、霞の衣ほころびて、翠白妙に咲く花の、嵐も匂ふ日影かな、眺しき海士の心まで春こそ長閑かりけれ。花誘ふ、比良の山風吹きにけり、漕ぎ行く舟の跡見ゆる、鳴の浦わも遙々と、霞み渡りて天つ雁、帰る越路の山までも、詠めに續く景色かな。（謡曲、白髭）

●わすれめや山路をわけて清見がた、はるかに三保の松原に、たちつれいざやかよはん、風向ふ雲のうき涙たつと見て、釣せで人や帰るらん、待てしばし春ならば吹くものどけき朝の、松は常盤の聲ぞかし、涙は音なき朝なぎに、釣人おほき小舟かな。（謡曲、羽衣）

●いざや歌はん此君の、昔を今にかへす涙の、おきの海の荒磯の、新島守は誰やらん春風に礒山櫻咲くのみか、沖には涙の花ぞ散る。（謡曲、隠岐院）

●はる〴〵とやへの汐路におく綱をたな引くものは霞なりけり。（節信）

●霞しく松浦の沖にこぎ出でゝもろこしまでの春を見る哉。（慈圓）

●難波潟汐路はるかに見渡せば霞にうかぶ沖の釣舟。（四方）

●春の海の中つ遠山かすむ日は心もなぎぬしほぢはるかに。（契沖）

●かひ拾ふ少女が袖の浦見ればおきにもかすむ朱のそぼふれ。（有功）

●天雲のむかふすゑつの渡つみの霞めるかたゆ舟ぞ見えくる。（魚彦）

●霞たつ末の松山ほの〴〵と涙にはなるゝ横雲のそら。（家隆）

●春きぬと涙ものどかにわだの原八十島かけて霞たなびく。（自寛）

●けふぞ見る春の海邊の名なりけりすみよしの里すみよしのはま。（定家）

●よさの海の春のうら〳〵見渡せばとまやのにはにわかめかりほす。（殷富門院大輔）

●春の海終日のたり〳〵哉。（蕪村）

●春の海遥何に集る人一里。（曉台）

●紫に夜はあけかゝる春の海。（几董）

●春の海陽を見ても遊ばるゝ。（月居）

●春の海に流れ出でたり都鳥。（漫々）

●長々と蟬も伸する春の海。（附馬）

●なびきせぬ岩に烏帽子を春の海。（言水）

●春いまだ潮に音あり夜の海。（長翠）

●足もとの夜明はしらず春の海。（葛三）

●帆柱に帆のもたれけり春の海。（蓼太）

●春の海淺きとまでにおもひけり。（背虹）

●百里行く東雲の帆や春の海。（午心）

●行燈さへ汐のひたすらよさの浦船もすわりて霞む海原。（桃波）

●うつ涙も靜にみえてのどけさは霞にもるゝ春の海原。（和喜住）

●鎌倉の七里が濱に出てみればうしほ引くなり春のうな面。（來福）

●かず〳〵の貝やとらんと諸人のよくもかわけるはるの海原。（吉住）

●かる焼と木賊と見えて春の海。（川柳）

〔はるのかぜ〕春風

東風。淑氣。微和。料峭。冲融。解ㇾ凍。吹ㇾ花。展ㇾ草。度ㇾ柳。皺ニ綠波一。拂ニ芳草一。

そよふく。花をふく。みどりをわたる。かすみふきわく。花の香おくる。

●ゆゑあるたそがれ時の空に、花は昨年のふるゆき思ひ出でられて、枝もたわむばかりさきみだれたり。ゆるらかにうちふく風に、えならずにほひたる、みすのうちのかなりも、ふきあはせて、うぐひすさそふまにほつべく、いみじきおとゞのあたりのにほひなり。（紫式部）

●淺綠にかすめる空。やう〳〵紫だちてあけゆくに、さし出づる朝日のかげ、花やかに匂ひて、吹くとしもなく打ぬるみたる朝ごちに、池の氷もなごりなうとけわたり、綾おりみだる水のおもに、かげうつす岸の柳は、佐保姫のねくたれがみかと見ゆるに、かの風は新柳の髮をけづり、波は蓊苔のひげを洗ふとつくられたるたくみに、鬼神をなかしめたりしふる事も、思ひ出でらるゝはた。（安海）

●一年ある山里に旅寢したりけるに、立かへりたる春のけはひも、都のすまひにはやうかはりて、寒つくれどもとかやいへるからうたの心も、かゝるあたりのさまにやなど、折ふし哀に思ひぬたる朝ぼらけの程、ふく春風もまだ寒けきまゝに、起き出でんこゝちもせねば、猶夜の衣にまつはれながら、火桶かきおこしなどしつゝ、やをらとの方を見出したるに、

花はまださかぬのきばの梅が枝に春をしれとやきなく鶯。（弘魚）

●はるかにかすみ渡りて、四方の梢をこはかとなく煙り渡れるに、なかしう風のふきいでゝ霞を傳ふさま、あにかゝまほしうなん。（尊澄）

●住みなれし空にいつしかゆく雲の、うらやましきけしきかな。迦陵頻伽のなれ〳〵し、聲今さらにわづかなる、雁金のかへりゆく、天路をきけばなつかしや。千鳥鳴の沖つ涙。ゆくか歸るか春風の、空に吹くまでなつかしや。（謠曲、羽衣）

●かすむ夜の、月は出でゝもうば玉の、よるべ定めぬうかれ鳥、鳴く音も法の聲添へて、花の跡訪ふ春の風、聲ものすごき波枕、假寢の夢やさますらん。（謠曲、藤）

●見送る出陣、見返へる里、別れてこそはつか弓、風新柳の髮を櫛る、柳の木影に敷皮や、軍慮をくだく楯正行、雌幕の内に勝つ事を、千里の野陣春風に、旗手ゆゝしく見えにける。（淨瑠璃、菊水之巻）

●跡には不審とつ置いつ、思案吹き散る春風に、梅が枝したひ鶯の、さへづる聲に法華經も、既にくれぬとつげぬらむ。（淨瑠璃、彦山權現）

●筑波山雫のつら〳〵けふとけて枯生のすゝきはる風ぞふく。（凱淵）

●浸みどり亂れてなびく青柳の色にぞ春の風も見えける。（元眞）

●梅がえの花ふきかゝる春風はいとひながらもなつかしき哉。（祐盛）

●花盛とひくる人のしるべしてあるじ顏なる春の山風。（季廣）

●櫻花夢かうつゝか白雲の絶えてつれなき春の山かぜ。（家隆）

●をしむにはとまらぬ花の隨へばうちやましきは春の山風。（良圓）

●百數のおほみや人のをりかざすやなぎがえだにはる風ぞふく。（春鄕）

●おをやぎのかつらぎ山のあさみどり霞もなびくみねの春風。（宣長）

●朝ぼらけすゞなさく野の春風を小蝶の袖に見そめつる哉。（廣名）

●ちるべくもあらぬ限は春風のふくものどけき山ざくら哉。（景樹）

●春風や人聲うつる三笠山。（芭蕉）

●片町にさらさ染むるや春の風。（曉臺）

●漁舟みえて吹くなりはるの風。（大江丸）

●春風やとある垣根の赤草履。（一茶）

●春風に吹き出されけり水の胡盧。（去來）

●誰をたが待つ伽羅ならん春の風。（麥太）

●春風や三保の松原清見寺。（鬼貫）

●春風の夜はあらしに亂れけり。（曉臺）

●春風のこそつかせけり炭俵。（几董）

●春風や別れてみゆる水の末。（長翠）

●春風や君むらさきの袖かづく。（闌更）

●濱づとや歸るさをふく春の風。（白雄）

●春風もよひ程がやのこなたより横へ杉田の里の梅が香。（菅江）

●春風のふきつけ紙か白々とさくの仁王の門前の梅。（慈悲成）

●如才なくかなりもて來て手柄振梅のこまたなくゞる春風。（常持）

●山々もこの頃わらふ智慧つきてあたまてん〳〵春風ぞ吹く。（伊賀住）

●行人のくはへ煙管のすひがらも横に飛火の野邊の春風。（假盛）

●春風にもはや頭巾もいらぬ頃はなのあたりをよきてふくめん。（中塗）

●寒からぬ野邊の春風そよ〳〵と吹き立てられてもゆる早蕨。（手丸）

●遠乘の馬のすそふく春風に一鞭當てる青柳の枝。（額輔）

●春風の吹けば柳は門の戸のあいてもなきに何招くらん。（起窓）

●春風の手のとゞくだけどこ迄もこゝのすみから菫つまばや。（貞岡）

●春風を壁んで配る門禮者。（川柳）

●春風は吹くに掛取り和らがず。（同）
●虎の尾も臥龍もいとふ春の風。（同）
●春の風女ごゝろに吹いて來る。（同）
●春風に空で武者繪がときの聲。（同）
●春風で花屋をたゝく門柳。（同）
●姿婆しや緋の袴、きたあしどりはしやなら〳〵と、野邊の春風そよふけば、みすのひまより唐猫の、綱に引かるゝ女三の宮の櫻なかざす檜扇や。（俗謠）
●さいた櫻にふく春風は、のほんへ、花のあたりをよぎてふけ〳〵、こぼれてかゝる花のつゆ。（同）
●散りやすきならひと惜、よそにのみきゝし身も、うつろふは我科、恨むまじや春風。（同）
●毎歲東來助二發生一舞、空悠揚徧二寰瀛一。暗添芳艸池塘色。遠逐高樓簫管聲。簾透二驪宮一偏帶恨。花催二上苑一剩多情。如何一瑞車書日。吹取青雲道路平。（羅隱）
●欲レ識二春來處一。先看花信風。來レ掛枝上綠。已綻蕊頭紅。長養元功普。吹噓大造同。何須催二鵲鼓一。列レ繡舍園東。（乾隆帝）
●莫レ怪頻過二有レ酒家一。多情長是惜二年華一。春風車レ賞置車恨。幾見二開花一又落花。（雍陶）
●玉樓傾側粉墻空。重疊青山遶二故宮一。武帝去來紅袖盡。野花黃蝶領二春風一。（王建）
●閑門春盡落花紅。欲レ問二鄉書一望二過鴻一。百事無レ成親已老。等閑三十一春風。（山陽）
●海天初曙曉暾紅。十萬旌旗方向東。蕩蕩沉寒千古雪。山河喜色浴二春風一。（溪琴）
●春風隨處作二春情一。楊柳依々絲未成。昨夜池塘新雨足。蛙聲鬧亂讀書聲。（李孝先）
●往回歲晚氷霜少。春到二人間一草木知。便覺眼前生意滿。東風吹レ水綠差差。（張栻）
●花下忘レ歸因二美景一。檐前勸レ醉是春風。（白居易）
●始識春風機上巧。非二唯織二色織二芳芳一。（英明）
●人間一夜回二春風一。（陸游）
●萬國春風百花舞。（歐陽修）
●東風生意滿二皇都一。（周伯奇）
●東風隨處起二芳華一。（洪景盧）

〔はるのくれ〕春暮

鶯老。花殘。柳暗。蠶眠。落花。飛絮。青陽謝。萍始生。水送。殘花。烟迷。碧樹。ゆく春。春のとまり。彌生の末。春のわかれ。花ものこらぬ。をしむ涙。とまらぬ春。春のふるさと。

●都を出でゝ日數ふれば、三月も半すぎ、春も既に暮れなんとす。遠山の花はのこりの雪かと見えて、浦々島々かすみわたり、來し方ゆく末の事ども、思ひつゞけ給ふるも、こはされば、いかなる宿業のうたてさぞとの給ひて、只つきせぬものは涙なり。（平家物語）
●三月の二十日あまりにもなりぬ。御前の木立何となく青みわたりて、木ぐらきなかに、中島の藤は松にとのみおもはずさきかゝりて、山時鳥まちがほなるに、池の汀の八重山吹は、井手のわたりにことならず。見渡さるゝ夕ばえのなかしさを、獨み給ふもあかねば、さぶらひわらはの、なかしげなるして、一枝をらせ給ふ。（大貳三位）
●思はずも、花見がてらの道すがら、是まで來ぬる旅衣、今日鶯の聲なくは、まだ雪消えぬ山里の、春ゆく事を知るべしや。（謠曲、誘引）

●折しも春の暮つ方、風吹かずかしこき日影を興じつゝ、故ある木立の花盛、わづかなる、萌黃の陰に亂れつゝ、いとみ爭ふ鞠の數、暮れ行く庭に思はずも、手個の猫のまつはれし。（謠曲、落葉）
●かやうにうつろふ四つの時、ことわりなれや夏かけて、さかり久しき藤波の、花に立ち添ふ朝霞、くれゆく春のかたみぞと、惜しむ心の紫の、深く頼みて松が枝に、かゝる契ぞたのもしき。（謠曲、藤）
●花も皆散りぬる宿は行く春の古郷とこそなりぬべきなれ。（貫之）
●身一つの歎ならねば暮れて行く春の別なとふ人ぞなき。（讃岐）
●散りにけり哀れ恨のたれなれば花の跡とふ春の山風。（寂蓮）
●柴の戸をさすや日影のなごりなく春くれかゝるみ山べの里。（宮內卿）
●哀とは我身のみこそ思ひけれはかなく春なすごしきぬれば。（千里）
●なしめども日數はけふにつき弓の心つよくもはるぞくれゆく。（枝直）
●ちる花にしばしおくれし日數さへつひにとまらぬ春の別路。（宣長）
●ちりのこる花はなごりもあるものをつれなく暮るゝ春や何なり。（春海）
●けふの日も入江かすみて行く舟のあとなき波に春ぞくれゆく。（蘆庵）
●おもひかねながむる空に行く雲も春をおくると見えてさびしき。（蕉蹊）
●入相の鐘もきこえず春の暮。（芭蕉）
●庭訓も皆三月で春くれぬ。（許六）
●我ためにとぼし遲かれ春の暮。（曉台）
●ゆく春や一寸先は木下やみ。（也有）
●僕が妻の絹著て歸る春のくれ。（几董）
●放下僧終に笑はで春の暮。（蘭更）
●大原の千句過ぎたり春の暮。（召波）
●大和路やよき宿とつて春のくれ。（完來）
●地の油誰か轉びて春のくれ。（道彥）
●春の暮隣の牛もよごれけり。（葛三）
●とめて行く忘れがたみにせんざいの若荷だけにも春の薫を。（綾人）
●行く春の越ゆる山路も散る花の雪づかへせよせめて一日。（三笑）
●もろ〳〵の鳥はものかは此ごろは花みる人もすがへりぞする。（香保留）
●花もみなつくしの筆のちらし書かへすがへすもなしき春の日。（蕭）
●をだまきのいとに結びてとめてみん三輪のすぎゆく春の別を。（炭方）
●將棊ならさしとゞめたき春の日にふとつき出す入相のかね。（眞志）
●小手卷をかすみのすそにとぢ付けんくれて行くへのみわけがたさに。（工）
●いとやなぎしだれざくらに藤かゞら三つよりにして春やとゞめん。（村武）
●花とともに春の別のよきふとんかなだにのこせくゝり枕に。（宮守）
●よけいありと思ひし花も散りはてゝ今は十方に暮の春哉。（几董）
●春延びた蹄命暮にて又ちゞめ。（召波）
●唐崎へ堅田のかへる春の末。（同）
●月もおぼろにふみまよふ、花のおもかげ夢かとも、をこはかとなくくれてゆく、春のわかれやにくからん。（俗謠）
●暮れてゆく、春のかたみか村しぐれ、花はちりても、春にさくとは思へども、今は世の、かずならぬ身の友ちどり。（同）
●遊節日々入二烟霞一。九十春中稀レ在レ家。頻買杏花村店酒。飽嘗醍醐竹房茶。野香幾陣猶飛蝶、池雨連朝已鬧蛙。把玩流光聊取レ適。從他送二到鬢邊華一。（星麿）

●春光欲レ盡夢相來。一氣悠々病未レ痊。玉樹瓊柯陳後主。曉風殘月柳屯田。情多可レ忍別レ花去。感集何堪聽レ雨眠。滑粉輕烟吟不レ了。等閒老却美人天。（同）

●資鳴香消春夢殘。起來無レ力倚二闌干一。庭前不レ合二新添一樹。雨過綠陰生二暮寒一。（宋謙甫）

●雨後茶甌將レ結レ局。風前芍藥正饒レ粧。道人不レ管春深淺。贏得山中歲月長。（玉菴）

●晝靜簷疎燕語頻。雙々閑雀動二階塵一。柴扉日暮隨レ風掩。落盡閑花不レ見レ人。（元稹）

●綠池芳草滿二暗波一。春色都從二雨裏一過。知是人家花落盡。藥畦今日蝶來多。（高啓）

●林下居常唳起遲。那堪車馬近來稀。春深菅水巖垂レ地。庭院無レ風花自飛。（邵雍）

●暮春者、春服既成、冠者五六人、童子六七人、浴二乎沂一、風二乎舞雩一、詠而歸。（論語）

●低レ翅沙鷗潮落曉。亂レ絲野草草深春。（管公）

●人無二更少一時須レ惜。年不二常春一酒莫レ空。（筆）

〔はるのつき〕春月

朧月。朦朧。幽靜。如レ煙。照レ花。臨レ江。

かすみにのこる。かすみのおく。霞にふくる。猶かげさむし。おぼろにかすむ。涙にくもる。梅かをる軒ばの月。雲なきそらにかすむ。霞の袖につゝむ。おぼつかなくもいづる。

●月おぼろにさし出でゝ、池廣く山こぶかきわたり、心ぼそげに見ゆるにも、住み離れたらん、いはほの中思しやらる。西面には格子もわたり思はずやと、うち屈して思しけるに、あはれ添へたる月かげの、なまめかしうしめやかなるに、うちふるまひ給へるにほひ、似るものなくていと忍びやかに入り給へば、少し膝行出でゝ、やがて月を見てはほす。又こゝに御物語のほどに、明方近うなりにけり。（紫式部）

●昔東の五條に、大后の宮おはしましける西の對に住む人ありけり。それを本意にはあらで、心ざしふかゝりける人、行き訪ひけるを、睦月の十日ばかりに外に隱れにけり、在所はさけど、人の行き通ふべき所にもあらざりければ、猶臺しと思ひつゝなんありける。又の年の睦月に、梅の花盛に去年をこひて、いきて立ちて見、居て見れば、去年に似るべくもあらず。うち泣きて、あばらなる板敷に、月の傾くまでふせりて、去年をこひてよめる。

月やあらぬ春や昔の春ならぬ我身一つはもとの身にして、

とよみて、夜のほの〳〵とあくるに、泣く〳〵かへりにけり。（伊勢物語）

●霞ぬなわたる月かげの、そこはかとなく霞める氣色は、大方世の中の長閑さとぢめたる心地ぞせらるゝ。折からの物の哀隈なく澄みわたる光こそ、秋の空には及ばざらめ、うつるも曇る朧月夜に霞まぬ波のけはひ、花にくらせる木間に、待つとしもなくさしのぼるかげの、えんにうるはしきかたは、又いまぞたちまさりて見えける。（弘調）

●夜もすがら御遊びどもあるに、いつもといひながら、朧の屋の花の梢おもしろく、秋ならねども、身にしむばかり風もはげしき花のあたりは、げにゆきても恨みまほしき心地して、おぼつかなき程に、霞める月はしく物なくおぼえて、折からは物のねもすみのぼり、面白きに、定めなくはれ曇る村雨のつゝも、作りいでたらんやうなり。（中務內侍）

●更闌け夜靜かにして、四所明神の寶前に、耿々たる燈も、夜を背けたる影かとて、共に憐む深夜の月、朧々と杉の木の間を洩りくれば、神の御心にも、しゝ物なくや思すらん。月に散る、花の陰行く宮廻り、逝ぶ少みの數よりも、積る櫻の雪の庭、又色添へて紫の、花を垂れたる藤の門、明くるを春の景色かな。（謠曲、采女）

●むかしかな。昔かな。花も所も月の春、ありし御幸を花も忘れじ。花も忘れぬ、心やなしほの。山風ふき亂れ、散らせや散らせ散りまよふ、木のもとながらまどろめば、櫻に結べる夢かうつゝか、世人定めよ。寢てか覺めてか春の夜の月、あけぼのゝ花にや殘るらん。（謠曲、小鹽）

●日も夕暮に程もなく、なるや彌生の空なれば、月も朧にさし出でゝ、山の端白き松の風、枝を鳴らさぬ木の下に、暫し休らふ旅居かな。（謠曲、寢覺）

●見て暮らす、花の下臥更くる夜の、月影ともに靜なる、けしきに染みて音樂の、花に聞ゆる不思議さよ。（謠曲、難波）

●照もせず曇りもはてぬ春の夜の、月に榮ある庭櫻、そよ吹く風にさそはるゝ、花の吹雪を打興じ、詠め入りたる袖澤が、日元ちらつく醉心。（淨瑠璃、朝顏話）

●淺みどり花もひとつに霞みつゝおぼろに見ゆる春の夜の月。（孝標女）

●梅が香も身にしむ比は昔にて人こそあらぬ春の夜の月。（俊成）

●雞波がたかすまぬ涙もかすみけりうつるもくもる朧月夜に。（具親）

●てりもせずくもりもはてぬ春のよの朧月夜にしくものぞなき。（千里）

●高殿は霞にうかぶ心地して川音ふけぬ春の夜の月。（美鄕）

●夕ひばり芝生におちて聲やめば山よりのぼる春の夜の月。（契沖）

●さしくだす舟は波路にあとたえて水上かすむ春の夜の月。（春海）

●ながめても思はぬ誰か春の夜の霞を月にゆるしそめけん。（景樹）

●まゝの江や玉藻かりけんおもかげもほのかにうかぶ春の夜の月。（千蔭）

●かへる雁なくね霞みて大くらの入江にふけし春のよの月。（諸平）

●春月や印金堂の木の間より。（蕪村）

●くらき方はけぶるが如し春の月。（曉台）

●人魚もとむ方士歸らむ春の月。（大江丸）

●乙の子の生れ日暮れて春の月。（一茶）

●桑にあはぬ目鏡やおぼろ月。（其角）

●春の月雉子の遠音に傾きぬ。（士朗）

●かりがねの哀をくもる春の月。（椙堂）

●春も十日月は玉子に似たりけり。（成美）

●春の月山椒の皮にむせてけり。（白雄）

●清水の上から出たり春の月。（許六）

●いもゝなく團子もくはぬ春のよの朧月見はしき物もなし。（なまくらのお大盡）

●春の日のくれかぬるこそ道理なれ月しろものゝあたへ千金。（一之）

●雨笠なめされし月の水車霞の淀にかげおぼろなり。（常持）

●千金のあたひ正直正銘にて一國ものゝ春の夜の月。（梶丸）

●雨降らで笠はきぬれど下駄さへもはきはきとせぬ春の夜の月。（岡邑）

●霞みては時めく花の王にさへ笠をぬがざる春の夜の月。（橘洲）

●老の見る柱暦もかくあらん霞みて月の分かぬ大小。（有泰）

●澤水にすめど秋よりよきぞとは晴れていはれぬ春の夜の月。（有敷）

●朧なる月にすかしてそろ〳〵と田螺も家を引きありく見ゆ。（雄成）

●一入ゆかし辛崎の朧月。（川柳）

●樓もる月にやうやう酔がさめ。（同）

●丸窓へぶつかけた雲朧月。（同）

●梅ちる軒になほてりもせず、くもりがちなるおぼろ夜の、月にこがれて立ちやすらへば、庭の敷のしらべに通ふ、松の春風いまさら〳〵に、君がおもかげ、三筋のいとよなつかしや。（俗謡）

●伏敵門頭浪捐〻天。當時築石自依然。元兵沒〻海蹤猶在。神后征〻韓事久傳。城郭影浮春浦月。絃歌聲隱暮洲煙。昇平有〻象君看取。處々垂楊繫〻寶船。（淡窓）

●柳塘淡々暗〻啼鶯。一鏡晴飛玉有〻聲。好是夜闌人不〻寐。半庭寒影在〻梨花。（呂中孚）

●四郭塵紅夜未〻收。林頭月色澹含〻愁。小閣期〻人人不〻至。生憎花影上〻欄頭。（茶山）

●下巷柳深三弄笛。上街花白一枝簫。使〻人延佇低回久。春月依々思案橋。（船山）

●芳草青青柳放〻芽。東風搖曳幾枝花。宵燈不〻可隣家夾。春月如〻波浸〻碧紗。（玉碧瑩）

●芳露無〻聲濕〻畫簷。庭林日午影高低。今年眞是明寒食。數丁春鵑一々棲。（星巖）

【はるのの】春野

花影。柳陰。細草。幽花。鳥啼。花謝。碧水。綠野。芳樹。綠陰。もえいづる。みどりそふ。もゆる綠。霞をそむる。草の春風。末野の春。野べにあこがるゝ。

●霞ならぬ心もうきたちて、いとのどけき春のけしきに籠されて、昔わが方にあまた年ぬたりし、野守が庵をとはんと出でたつに、里はづれに、あまたあげまきが、紙鳶のぼして遊べるさま、まづいとのどけし。やゝ燒野の原を分けゆくに、雉とふ雄のこゑ、はるかにきこえ、菫の床をはなるゝ雲雀、袂よりたつこゝちしていと近し。かくてかのすみかにいたるに、いみじう悅びて、所につけたるはゝこもちひ、又蕨、土筆、令法、菫草などをてうじ、あはせにしてあるじす。海の物よりも中々に珍らしう覺ゆ。家はありしよりけに荒れまさりて、貧しげなれど、打わたしたる野づらは、ささつゞく蘿蔔畑にて、垣根のめぐりに、山吹を植ゑたるが、花さき亂れつゝ、黃金白銀に埋れたるやうに見ゆれば、花の色にはとみたり。あるじの歌こへるに、

宿ながら野べの氣色を見渡して春に富みたる宿にもあるかな。（陽綱）

●深山には、松の雪だに消えなくに、都は野べの若菜つむ、頃にも今はなりぬらん、こゝは又、もとより所も天さかる、鄙人なればおのづから、憂きも命の生田の海の、身の限りにて憂き業の、春としもなき小野に出でゝ、若菜摘む、いく里人の跡ならん。雪間あまたに野はなりぬ。（謠曲、求塚）

●心せよ春の野邊、春の野に、菫摘みにと來し人の、若紫の菜や摘みし、實にやゆか

りの名をとめて、妹背の橋も中絶えし、佐野の茅だち若だちて、綠の色も名にぞ染む。（同）

●蓋は人目の繁ければ、都の人が春の野に、駒かけちらす中にも、えいさらえいさと、網を引く、花の錦の經緯、知らぬ人をも心して、問へば迷はぬ道路など、通ひなれて迷ふらん。（謠曲、地主）

●信永公の御息女千本の姫と聞えしは、けふ九重にならびなき、花とこそ吉野櫻より、眞にあかぬ品かたち、かざり立てたる乘物に、つれてかちぢの所々も、さゞめき渡る春の野に、つまこふ雉子のねなのみぞ、たれと伏見の里ちかく、遠山松のちら〳〵と、外めづらしき道草に、道はかどらぬ女子同士。（淨瑠璃、三日太平記）

●春雨の降りそめしよりかた岡の裾野の原ぞ淺綠なる。（基俊）

●秋までの命もしらず春の野に萩の古枝をやくときく哉。（和泉式部）

●春日野の草は綠になりにけり若なつまんと誰かしめけん。（思見）

●こゝにのみ枕からまし春はたゞこゝろひくまの野べのわかくさ。（春海）

●そこことなく野邊にくらしつ花をとひとりなあはれむ心々に。（有功）

●鈴菜さく春にはなりぬけふもとひすもこてふの野べに遊ばん。（同）

●はるかにもあがるひばりの聲きゝて野べのけしきを空にしる哉。（直好）

●雪間よりむら〳〵見えしくゝたちの花のさかりに野はなりにけり。（龍臣）

●おしなべていざ春の野に交りなん若なつみくる人もあふやと。（深養父）

●春の野に心やらんと思ふどち來りしけふはくれずもある哉。（萬葉）

●稍赤き長刀行くや春の野邊。（闌更）

●春の野や礫のやうな鳥が飛ぶ。（道彦）

●はるの野や長きかつらの裾につく。（朱山）

●春の野の名もなつかしみ矢倉蓮。（一徹）

●春の野や首より多き都人。（蓼圭）

●餅酒に慍して春の野づら哉。（白雄）

●春の野を味方に草の枕哉。（蓼太）

●俳味噌あらば春の野守になりやせん。（許六）

●蝶は舞ひ雀はをどる春野かな。（眞室）

●春の野や木瓜は蓮の敷き合せ。（沾德）

●うちみれば千ぐさの中のつゞみ草日も永ちなる春の野遊び。（元也）

●春の野にかゝる霞のへだて有りもゆる若草きゆるおら雪。（則季）

●春の野をかきわけみればそこゝにふみにじりたる土くれの筆。（奴毛作）

●吸筒の酒はひたりてつゞ給へ醉ひても七日野べに遊ばん。（興人）

●春の野はやくともやがて待たれかし子を思ふ雲雀妻慕ふ雄。（菅江）

●田樂の木の芽に腹もはるの野や霞の帶をゆるめてぞふく。（木綱）

●武藏野に遊びくらさん筑波より不二へ霞の幕も打たせて。（殿岡丸）

●吸物の外にわらびの手から手へ皆とり膳の春の野遊び。（駒丸）

●春の野に紅うらよごす土の筆。（川柳）

●鹿は落ち芦は角ぐむ春の野邊。（同）

●春の野に夏の走の日傘。（同）

●うゐがため春の野に出る遊賢。（同）

●春の野で若菜梅がえ氣を晴らし。（同）

●かりの世に、かしにゆく身の苦をぬけて、人だちおほき春の野に、しのぶがほなるいつまでも、かはらぬ色は常盤木の、えだに

たとへてちかひしことも、間の扇の檜垣言かや。　（俗謠）

●水遠氷堰漸有聲。氣融烟場晚來明。東風好爲陽和使、遂放草蓬花報發生。　（錢起）

●騰檀蹈翻波底月。荷動銜破隴頭雲。半簑煙雨人中畫。一幅耕圖畫裡人。（徐常耶）

●春曉綠野秀。　（謝靈運）

〔はるのはじめ〕春始

（一月之部參照）

孟春。立春。陽春。青陽。四始。はつ春。立ちそむる。たちかはる。あづまより來る。春くるみち。霞たちそむ。春の色のはつしほ。一夜のへだて。

●昔なにがしの宮にいみじうかしづきたまふ姫君おはしけり。いとあてにらうたげなるものから、およずけねびたまひても、あへかに子めきて、おほどかにきすぐにおはせば、侍らふ人々、あはれ今すこしすがすがしきけのそはましかばと、あたらしき事にいひあへり。春の始、朝日うらゝかに打けぶりて、にほひそめたる園の梅にきなく鶯の聲いとなかしきに、えたへ給はず、やなら庭におりたちて、ほど近き山を打わたしつゝ、いとあやしきおもゝちして、昨日まで高嶺に殘りし雪の、さやかに見えつるを、けふはいとほのかにけ遠くなりにたるはいかならんとのたまへるに、おもと人ことばはなくて、

山の端のにぐるためしはまだしらず霞み初めたるよそめなりけり。

ときこえて、いとくちをしのおほんこゝろやと、うちくにうちなげきたりとなん。　（弘綱）

●年かへりても雪げの風のみさえ渡りて、軒端の梅だにほゝゑまねば、またるゝ物さへ思ひ絶えて鳴かぬかざりはなど打ずしなるに、やうくに空はれて、四方の梢もほのかに霞みそめぬるあした、出づる日影もうらゝかなるに、いつしかとしたまたるゝ程、軒近き竹村にいと高う打ないたる、ふと耳おどろかれて、先いと嬉しきに、はしの方にいてゐて見れば、こなたかなた枝移りしつゝ、あまた聲鳴くなるが、まだいとうら若きものから、にほひなつかしう、打つけに心のどかなるも、げに此鳥の聲なくばと、ふるごとさへぞ、かづくおもひ出でらるゝや。　（廣足）

●梅の花笠春も來て、繼ふてふ鳥の梢かな。松の葉色も時めきて、十返り深き綠かな。風を逐つてひそかに開く、年の葉守の松の戸に、春を迎へて忽に、うるほふ四方の草木まで、神のめぐみになびくかと、春めきわたる盛りかな。歩みをはこぶ宮寺の、光のどけき春の日に、松が根の、岩間なつたふ苔莚、數島の道までも、げに來ありや此山の、天ぎる雪の古枝をも、猶なしまるゝ花盛り、手折りやすると守る梅の、花垣いざや園はん。梅の花垣をかこはん。　（謠曲、老松）

●頃は正月の十日あまり霞あさらかに日落ちて萬山紅なり。實にや面白や梅が枝に、來居る鶯春かけて、鳴けどもいまだ薄雪の、朝まつりする神垣や、隔てぬ惠頼むなり。あらありがたや此の神に、頼みを深くかけまくも、忝なや偽りの、無き御心頼むなり。當麻なる、鬼島やいづく水上の、當世の波も深綠、苔のむすきか岩船の、出でしも遠き代々を經て、國豐なる今までも、

哲の舟に身を浮けて、御影を頼む春の日の、今日長閑なるあしたかな。　（謠曲、常陸帶）

●筑波山、此面彼面の花盛、雲の林の陰茂き、綠の空もうつろふや、松の葉色も春めきて、嵐も浮ぶ花の波、櫻川にも着きにけり。　（謠曲、櫻川）

●時めくや、采女の衣の色添へて、君に進むる盃も、花待ちえたる觀言は、千年の春の始かな。　（謠曲、駒乘）

●面白や花の都の初春や、音羽の山の薄霞、今日立ち初めし年波は、賀茂の川風長閑にて、氷解け行く清瀧や、谷の戸出づる鶯の、聲や高尾に聞ゆらん。とばたの面の末續く、淀野の澤のまこも草、芽含みわたる折しもは、水野御牧の放れ駒、實に音に聞く津の國の、難波の浦の春風に、たかしの濱や住吉の、松の綠と一入に。　（淨瑠璃、義經新高館）

●袖ひぢてむすびし水の氷れるを春たつけふの風やとくらん。　（貫之）

●けふといへばもろこしまでもゆく春を都にのみと思ひける哉。　（後成）

●いつしかと明けゆく空のかすめるは天のとよりや春はたつらん。　（顯仲）

●久かたの天のかぐ山てらすヨのけしきもけふぞ春めきにける。　（實定）

●みしまえにつのぐみわたる蘆のねの一よの程に春めきにけり。　（好忠）

●をつくばも遠つあしほもかすむなりねこし山こし春や立つらん。　（眞淵）

●をちこちの山のみ雪もかすむなりけさより春になりにけらしも。　（土滿）

●天の原はるたつらしも朝霞うら安の名にたちみちにけり。　（千蔭）

●いとはやもふるとし遠き心地して雨にかすめるけさの初春。　（蘆庵）

●のどけさは袖にしられてから衣きのふにも似ぬはるの初風。　（宣長）

●春もやゝけしきとゝのふ月と梅。（芭蕉）

●初春や人に冠花に鳥。　（蓼太）

●梅柳初春の眼たしかなり。　（白雄）

●はつ春のめでたき名也かつを寶。（越人）

●初春や當はよき子もほしからず。（曉台）

●初春は榮賞も來ぬやおもしろみ。（道彦）

●明けにけり皆初春に成りにけり。　（吏登）

●はつ春や男ばかりも美しき。　（月守）

●初春や往き交ふ人の花の袖。　（石言）

●鶯の一聲聞けば初春のねうち定まる千金衣鳥。　（赤良）

●海の景よいとや申す春駒の齒にまだたらぬわか芝の浦。　（墨人）

●明けてよき春はきにけり白雪にひとつもあしの道つけずして。　（嫁々）

●千金の春は立ちたり初相場やどに年始の客もうけせん。　（三笑）

●なよ竹のたわめる雪もとけてけさ直なる御代の春や立つらん。　（空人）

●春來れば椀にも小松花がつを。　（川柳）

●初春のつみ草遊ぶ人でなし。　（同）

●其時の岩戸もやくや明の春。　（同）

●初春から霜なしにして入を取り。（同）

●春先は戸田も復野の櫻草。　（同）

●天の原、あかねさし出づる日影には、春のいたらぬくまもなく、雪間のくれのわかやかに、いろづき初めし朝より、まづあらたまる皆人の、心の花の紐とけて、軒端の梅に香りあひ、みかきが原の姫小松、引かでも千代のいろ見えて、雪消の澤につむ若菜、のべの早蕨をりはへて、都ぞわきて佐保姫の、なさけを盡すころなれや。　（俗謠）

●花の春たつ朝には、日影くもらでにほや

かに、人の心もおのづから、のびやかなるぞ四方山。（同）

●暁啓散龍豆稭灰。問就燈紅一焜二一盃。白髮不公饒老早。東風有力破寒來。魚吹皺影池心日。釜嶂生香屋角梅。何限殷憂掃無跡。笑顏旋復逐春開。（星巖）

●客愁擬向春來減。春到秋期倍蓰時。走馬已無年少樂。聽鶯空有故園思。日光晶々濃熙草。風力颯々緩墜絲。辟歷溟南酒家路。共誰來往問花枝。（高啓）

●蒔家清景在新春。柳嫩鶯黃綠未勻。若待上林花似錦。出門皆是看花人。（揭巨源）

●新曆才將半紙開。小庭猶案爆竿灰。偏憎掛柳難鈴轄。又慮東風意緒來。（來鶴）

●春度春歸無限春。今朝方始覺成人。從今克己應須勉。願與梅花俱自新。（盧同）

●池凍東頭風度解。窓梅北面雪封寒。（篤茂）

●柳無氣力條先動。池有浪文氷盡開。（白居易）

●今日不知誰計會。春風春水一時來。（同）

●夜向殘更寒磬盡。春生香火曉爐燃。（春道）

●氷消田地蘆錐短。春入枝條柳眼信。（元慎）

〔はるのみづ〕春水

綠波。桃浪。曳練。緩藍。眠崑。泛鷗。南浦。東湖。芳草渡。緣楊堤。

ゆるく流るゝ。みどりの波。花を浮ぶ。花をはこぶ。雪げにごる。

●憐むべし篋姫は、なれぬ手業にたへぶすま、しら衣ならで賊どもが、垢さへ血さへきふるせし、衣いくつとなくときわきて、盥にのせて水際まで、推しもて遣るだも苦しきに、下り立たんとて踏みかゝる、石坂くづれ苦深く、岸滑に水高く、落ちなばやがて淪む身を、しづめかねつゝやう〳〵に、淺瀨たづねて、細脛をぬらせば寒き春の水、思はず揚ぐる片足は、われ似たるかも白鷺の、友得がほなるも形なく、心はいとゞ細布の、一衣浸してふりそゝげば、手も堪へがたく入りわたる、岸の薄氷ゆりくだき、さゝら涙たつ水の文を、見るに膽たえ目くるめきて、人氣はなれし大江山、いくその鬼にとられたる、風流少女がときあらひ、かくありけんと身ひとつに、思あはしてよゝとなく、涙の川はこゝならで、濕りがちなる裳裾に、袖さへぬれてあはれなり。（馬琴）

●つのぐみわたる蘆の若葉も、そこはかとなく立ちこめて、こゆる白涙まで、けさは霞にむせびつゝ、音ばかりかすかに聞ゆる春風に、聲をほにあげてかへる雁がねも、漕ぎ出づる船の梶の音にまがひつゝ、これもかれも、ゆくへたど〳〵しきぼどの難波江の春のけしきは、げに物見しらん人の爲に、殊更に作りいで、三津の濱松まちこふらんやうなるは、なにがしの心あれなと、身をなげきしも、さる事なりかし。（宣長）

●まことや澤の榕ども、白き赤き枝をかはしつゝ、有りしよりけに咲きみちて、かつちる花の道風、いとなまめかしう打薰りつゝ、色も香も世にいひしらぬ氣色にて、花の鏡の水かげも、げにあはれと見えたり。

さきみちてかつちる花の下風に底なるかげもかをる池水。（弘魚）

●此頃までは、漕ぐ舟のゆきゝさはりし入江の氷も、いつしかと涙殘なうとけわたりて、汀の蘆の角ぐみ初めたるものどけきに、かなたの岸の柳の、絵にかきたらんやうに、打かすめる物から、さすがにあるかなきかの春風になびくさまの、ほの〴〵と見ゆるもをかしき。（弘測）

●いかにあれなる道行人、櫻川には花の散り候ふか。何散方になりたるとや。悲しやなさなさだに、行く事やすき春の水の、流るゝ花をや誘ふらん。花散れる水のまに〳〵とめくれば、山にも春はなくなりにけり。（謡曲、櫻川）

●降りつみし高ねのみ雪とけにけり清瀧川の水の白涙。（西行）

●朝なぎに棹さす淀の川をさも心とけてぞはるはみなるゝ。（好忠）

●霜がれの蘆まのつらゝ打とけてのどかにすめるこやの池水。（有安）

●年ごとに春はくれども池水におふるぬなはゝたえずぞありける。（順）

●昨日までかへす山田と見し程に雪げの水はかげすみてけり。（祺子内親王）

●みわたせば水の煙もいとゆふも一つにかすむいけのおも哉。（千隆）

●はるの日に氷とけゆく澤水のけぶりやよもにかすみそむらん。（春海）

●氷ゐてしゞまなりつる山寺のかけひの水もけさ聞ゆなり。（有功）

●木の川や小田の大堰の春の水かすみながらにたれかひくらん。（諸平）

●彩さへに匂へる梅の下水を若なつむとてにごしつる哉。（尊孫）

●物ゆかし魚の兒みゆる春の水。（沾德）

●春の水ところ〳〵に見ゆる哉。（鬼貫）

●影とらんとすれば春の水黃なり。（曉台）

●夕されば千鳥飛ぶなり春の水。（蓼太）

●堀川や家の下行く春の水。（太祇）

●春の水かるく能書の手を走らす。（其角）

●磯山や小松が中を春の水。（几董）

●書舟の狂女のせたり春の水。（蕪村）

●きのふ今日音にきこゆる春の水。（杉風）

●春の水こゝろとむれば早き哉。（長翠）

●花蛍田螺のあとや水の底。（丈草）

●春の水に秋の木の葉を柳瓶。（嵐雪）

●立かへりまたあふくまの河水もゐるめる春は埋木ぞなき。（綾人）

●風もけさこちになりけり只一夜ぬるまにかはる玉川の水。（松風）

●いにしへの文字やつるべの繩をもてむすび初めぬるけさの若水。（如羊）

●ふたを今明けてめでたく重箱のくみて視へるはるのわか水。（烏彩）

●うらゝかに春はたつ田の紅葉より氷もけさは流す川みづ。（炭方）

●下手のとるあやせの氷風の手にまた水となる春の長閑さ。（蟲機）

●梓弓はる風の手にひもときて岩間にあたる谷川の水。（丸見）

●氷醫をするとは見えぬ春の水。（川柳）

●若水の車井春へくり返し。（同）

●駘宕春光日夜浮。韶華如夢水東流。纒綿柳岸三分月。零亂桃花數點鷗。折萊何人能立脚。逆風無涙不回頭。青簾紅舫聽簫鼓。好語吳儂莫遠遊。（張船山）

●三月桃花涙。江流復蒼痕。朝來沒沙尾。碧色動柴門。接縷垂芳餌。連筒灌小園。已添無數鳥。爭浴故相喧。（杜甫）

●溶々漾々欲平橋。知是巴山雲盡消。紅雨落花來滾々。綠烟芳草去迢々。沅湘已沒

陽邊渡。湓浦新添鷲外潮。向晩漁郎去相親。大家齊上木蘭橈。（楊基）

●殘梅濕雪管三廻。乖柳輕煙在三五橋。須放二酒船一來看玩。一川淡水帶二春潮一。（星巖）

●晉是清平詩酒仙。大悲閣上弄二風烟一。慈雲滴レ悲養花雨。載レ酒又浮春水船。（溪琴）

●長隄春水綠悠悠。畎入二漳河一一道流。莫レ聽擊鼓催二去櫂一。桃溪淺處不レ勝レ舟。（王之渙）

●暮然飛過誰家燕。遍地香來甚處花。深院日長無二箇事一。一瓶春水自煎レ茶。（周氏）

●柳外朝々雨。平添暮過痕。往時桃葉渡。今日更銷魂。（袁凱）

〔はるのやま〕春山

嵐光。翠影。翠幕。畫屏。百花。群水。暖氣浮。芳蔭綠。

みどりの山。霞の衣。みどりにけぶる。花の白雲。霞にかくる。花の

●竹林院、堂のまへにめづらしき竹あり。一ふしごとに四方に枝さし出でたり。うしろの方におもしろき作り庭あり。そこよりすこし高き所へあがりて、よもの山々見わたしたるけしきよ。まづ北の方にざわう堂、まち屋の末につゞきて、物より高く目にかゝれり。なほ遠くは多武の山、高とり山、それにつゞきて、うしとらのかたに龍門のたけなど見ゆ。東と西とは谷のあなたにまぢかき山々あひつゞきて、かの子守の御社の山は、南に高く見あげられ、いゐぬのかたに葛城やまは、いと〳〵はるかに、霞のまより見えたるなど、すべてえもいはずおもしろき所のさまなり。（宣長）

●明けゆく空はいといたう霞みて、山の鳥どもゝ、そこはかとなくさへづりあひたり。名もしらぬ木草の花ども、いろ〳〵に散りまじり、錦をしけると見ゆるに、鹿のたゞずみありくも、めづらしく見給ふに、なやましさもまぎれはてぬ。（紫式部）

●頃は二月始のことなれば、峯の雪は消えて、花かと見ゆる所もあり。谷の鶯音づれて、霞に迷ふ處もあり。登れば白雲皓々として登え、下れば青山峨々として峯高し。松のゆきだにきえやらで、苔の細道幽なり。（平家物語）

●千早振、神の御庭の雪なれや、白妙に、雲も霞もうづもれて、いづれ櫻の梢ぞと、見わたせば八重ひとへ、げに九重の春の空、四方の山なみおのづから、時ぞと見ゆるけしきかな。（謠曲、田村）

●春は、春霞、立ち出で見れば深山邊の、梢にかゝる白雲は、花かと見えておもしろや。松風も匂ひ枕に花散りて、それとばかりに白雲の、色香おもしろき氣色かな。（謠曲、鵺小町）

●鷲の御山の花の色、枯れにし鶴の林まで、思ひ知られてあはれなり。清水寺の地主の花、松吹く風の音羽山、こゝは又嵐山、戸無瀬に落つる瀧の波までも、花は大井河、井關に雪やかゝるらん。（謠曲、四行櫻）

●いざ今日は、春の山邊にまじりなん。暮れなばなげの花の陰、月に詠じて天の原、時の調子に移り來る、舞歌の聲こそあらたなれ。（謠曲、志賀）

●春の色、棚引く雲の朝ぼらけ、長閑けき風の音羽山、今朝越え來れば是ぞ此、名におふ志賀の山越や、湖遠き詠かな。（同）

●年毎にかはらぬものは春霞たつたの山のけしきなりけり。（顯輔）

●淺みどり霞みわたれるたえまより見れどもわかねいもせ山哉。（國信）

●昔たれかゝる櫻のたねをうゑてよし野を春の山となしけん。（長經）

●我宿の梢ばかりと見し程によもの山べに春はきにけり。（顯基）

●大かたの霞はたちもおよばねど春のひかりにほふ富士のね。（千隆）

●をつくばの高嶺は雪にあらはれて霞にまごふは山しげ山。（春海）

●春ごとに霞のまゆをひきはへて山はちとせも面がはりせぬ。（久胤）

●けさ見れば霞のそこに浮ぶなりかもの羽色の春のむらやま。（有功）

●まだもえぬ木の芽の山も雁がねの歸る便に春をしるらん。（經平）

●日くるゝに雉子うつ春の山邊哉。（蕪村）

●春の日や暮れてもみゆる東山。（一茶）

●曉をまつ嶽佛や春の山。（曉台）

●起臥に眺むる春の野山かな。（闌更）

●鐘撞くと共に暮るゝや春の山。（成美）

●波のへの一里はちかし春の山。（長翠）

●春の山毎日近くなりにけり。（茶靜）

●春の山瀧みて坊のやどり哉。（午心）

●春の山窓からみても時うつる。（梅室）

●はるの山一つは持ちて歸りたし。（一貞）

●春山の霞男に棹姫のなびくすがたや雪柳の枝。（長根）

●先づ開く暦のはしにもれながら笑ひぞめする春の山々。（山圭）

●雪はきえ花はふくみてのどけさは峯にふもとにあらはれにけり。（樣の門）

●ほどちかき麓はそれとみえかねてかすみにのこる春の山のは。（四成）

●おもしろきあの山見さいこの山もいたゞきつれて立つ霞かな。（心笑）

●かり行くやさく花の山人の山花みる人を花のふなりに。（瑞洲）

●見わたせば霞のたちぞかゝりける雨降山も春の長閑さ。（爲成）

●須彌山も五岳もふじも一時にどつとゝ笑ふ春は來にけり。（赤良）

●仙人の霞をくふな喰物と思へば山のはにもかゝれり。（湖鯉鮒）

●春の日の永井兵助よこたへし霞のたちは山のはを引く。（耳類）

●朝日かげさして箱根の山のはゝ横に霞の引出しも有り。（藤也）

●樂燒は枯野錦出春の山。（川柳）

●立てものゝ山をくまどる春霞。（同）

●塵ぞつもりて山姥と、かたちは晴れて春げしき、峯のかすみは帶すなる、あしがら山にかけわたす、山より山の岩橋や。（俗謠）

●あゝしんき、それでねもせで迷ひまよふ、人の心と川の瀨は、定めなや、春の山路はおもしろや。（同）

●春風に、笑顔こぼるゝ花の山、姿もかほも取りなりも、ひらりぼうしのしどけなく。（同）

●重疊太古色。濛々花雨時。好山行恐盡。流水語相隨。黑壤生二紅本一。黃猿領二白兒一。因思石橋日。曾與二道人一期。（貫休）

●雨時烟霧裳時歷。眉黛模糊粧未レ勻。至竟春山足二姿態一。不レ將二淡掃一面遊人。（茶山）

●遠黎遙背粧二點春一。凌晨隔レ水看逾新。筑波山是八嬢樣。淡掃二雙尖一來向レ人。（星巖）

●料峭東風春未レ酣。一川雪解水拖レ藍。今朝秩父諸山路。已見峯々帶二嵐風一。（磐溪）

●紅塵堆裏得レ閑難。且寄二幽心一圖畫間。香爐茶殘客初散。小窓明處看二春山一。（山陽）

●君去春山誰共遊。鳥啼花落水空流。如今送レ別臨二溪水一。他日相思來二永頭一。（劉商）
●驛過春山草自香。（許渾）
●萬木春山叫二杜鵑一。（李涼譚）

〔はるのゆき〕春雪

料峭。繽紛。迷レ花。壓レ柳。潤レ麥。欺レ梅。添レ寒。飛レ花。舞レ絮。埋二野色一。勒二花容一。
つもらぬ雪。降りもたまらぬ。春のあはゆき。霞をわけてふる。花にまがふ。
●二月つごもり、風いたく吹きて、空いみじく墨きに、雪少し打ちりたる程、墨戸に主殿司きて、かうして侍らふといへば、よりたるに、公任の君宰相中將殿のとあるを見れば、ふところ紙に、
　すこし春あるこゝちこそすれ、
とあるは、げに今日の景色にいとよくあひたるを、これがもとはいかゞつくべからんと、思ひわづらひぬ。誰々かと問へば、それ〳〵といふに、昔壯かしき中に、宰相中將の御いらへなば、いかゞ事なしびにいひ出でんと、心一つに苦しきを、御前に御覽ぜさせんとすれども、うへのおはしましておほとのごもりたり。主殿司はとく〳〵といふ。實に遲くさへあらんはとり所なければ、さはれとて、
　空さむみ花にまがへてちるゆきに、
とわなゝくく〳〵かきてとらせて、いかゞ見給ふらんと思ふもわびし。これが事を聞かばやと思ふに、そしられたらば聞かじとおぼゆるを、俊賢の中將など、猶祭侍に申してなさんと、さだめ給ひしとばかりぞ、兵衛の佐中將にておはせしが語り給ひし。（清少納言）
●此院は池のすまひ、山の木立もとよりよしあるさまなるに、時ならぬ花の梢をさへ、作り添へられたれば、春の盛にかはらず、咲きこぼれたるに、雪さへいみじう降りて、殘る常磐木もなし。洲崎にたてる鶴の氣色も、千代をこめたる霞の洞は、誠に仙宮もかくやと見えたり。（增鏡）
●京には、友まつ計り消え殘りたる雪、山深く入るまゝに、稍降りつみたり。常よりはわりなき稀の細道をわけ玉ふ程、御供の人もなきぬ計り、面白うゆづらはしき事をさへ思ふ。（紫式部）
●雪の降りつもれるに、吾住む方を見やり玉へば、霞のたえ〴〵に、木末ばかり見ゆ。（同）
●若菜つむ、生田の小野の朝風に、猶さえかへる袂かな。木の芽も春の淡雪に、森の下草なほ寒し。深山には、松のゆきだにきえなくに、都は野べの若菜つむ、頃にも今やなりぬらん。（謠曲、求塚）
●爰に人皇七十七代後白河の院と崇め奉る、ゆかしき聖主おはします。されば保元の春の雪、風に音なきなみきの庭、右近の櫻左近の橘、外は柳に愛でさせ給ひ、殊更今朝の白妙に、不老門の朝日影、遲きを頼はせ給ひける。かゝる處に三河といへる十一歳の女の童、南面の簾さら〳〵と下し、北のやかげを見せ奉る、はや消えがちの白雪を、少時と思ふ心ざし、深く感じさせ給ひ。（淨瑠璃、凱陣八島）
●潮とともに延び上り、見送り見返る恩愛いもせ、主從の歎きになづみ行き兼ぬる、駒の足取り諸手綱、引わかれ行く雲のあし、吹雪交りの朝霞、ひらの高根のさへ返り、春めきながら野も山も、雪にまがへて白旗の、やへ立つ敵いその中を、心細くも巴御前只一騎。（淨瑠璃、盛衰記）
●今更に雪ふらめやもかぎろひのもゆる春べとなりにしものを。（萬葉）
●かすが野にけふもみ雪の降りしくは雲路に春やまだこざるらん。（深養父）
●いづこにも春の光はわかなゝにまだみよし野の山はゆきふる。（躬恒）
●白たへの袖にぞまがふ都人わかなつむ野の春のあわゆき。（後鳥羽院）
●霞たちこのめも春のゆきふれば花なき里も花ぞちりける。（貫之）
●うぐひすの聲する竹はをらじとて薄くぞかゝる春のあわ雪。（長流）
●みるがうちにはかなくきゆる淡雪はもゆる春野にふればなりけり。（春海）
●悔にちり柳が枝にみだれつゝはるこそ雪はあはれなりけれ。（千蔭）
●さほひめの霞かぐれの山まゆもよそほひうすきはるのあわゆき。（契沖）
●ふるとしは名のみなりけりはるまちてさくや木ごとの花の白雪。（枝直）
●春の雪吹きなぐられて猶寒し。（蓼太）
●春の雪扇で拂ふ衣紋かな。（曉台）
●椎の葉に盛りこぼすらし春の雪。（凡董）
●買ひたての足駄のたけや春の雪。（許六）
●紙漉の手元にちるや春の雪。（闌更）
●吹き晴れて又ふる空やはるの雪。（太祇）
●海にみん春の白雪地にあはき。（白雄）
●是までか〳〵とてはるのゆき。（支考）
●旅人よ雪は降るともはるの空。（士朗）
●春の雪おもひ捨てゝも降りにけり。（樗堂）
●一面の銀世界にて千金の春の相場や安く立つらん。（赤良）
●光陰の矢庭に消えぬ弓となる竹にはつる雪。（喜常）
●味は冬にさら〳〵變らねどはるの淡雪。（九鶴亭）
●たにたまらず。（同）
●厌ならで枯木に春の白雪に是も一時の花さかせ雪。（一空舍）
●あたゝかになる勘定の外ものは積り無日たる如月の雪。（空人）
●蝶と飛び千鳥とふれる淡雪の今宵はとまれ七種の葉に。（高見）
●春寒き雪はいやぢやとみな目ににくがる風の花ぞうち散る。（讀人不知）
●まりほどに丸くまろめて降るからはとかくけばやき春の淡雪。（雜鹿）
●女よりあなづられけり冬ならぬ雪はあまりにあは〳〵として。（古渡）
●道もせにくるふ犬より吹く風にはやけしかけるはるの淡ゆき。（良蘭）
●去年よりもまたかくだんと詠むれば是はたまらぬ春の淡雪。（梶人）
●子僧なぜかくとこぶしをふり上げてはり合もなく消ゆるあは雪。（杉村）
●吹く風の手々にさゝぐる松明やふつて消えたる春のあはゆき。（茂久輔）
●つもらんとすれどさら〳〵青柳のかぶりをふりて消ゆる淡雪。（羽紬）
●嫩葉として綿程かぶる春の雪。（川柳）
●姫笹もうす化粧する春の雪。（同）
●貧學の灯りにたらぬ春の雪。（同）
●駒が嘶鞍摺れ程に春の雪。（同）
●夢かうつゝか朧夜の、月毛の駒に片手綱、引きとゞむれば春の雪、とけて亂れし我思。（俗謠）
●元和歳在レ卯。六年春二月。月晦寒食天、天陰夜飛レ雪、連宵復竟日。浩々殊來レ世。大似二落二驚毛一。蜜如レ飄二玉屑一。寒銷春淫淫。氣變風漫漫。上林草盡沒。曲江水復結。紅

乾杏花死。綠凍楊柳折。所懷幽性傷。非惜年芳絕。上天有二時令一。四序平分別。寒懷苟反常。物性皆天閑。我觀二聖人意一。魯史有二其說一。或記人不レ水。或書霜不レ殺。上將レ敬二政教一。下以防二異端一。玆雪今如何。信美非二時節一。（白居易）

●春淺寒喧未二遽開一。除雲釀レ雪又連朝。紙窗濕々輕風度。竹瓦琅々微霰跳。綫補二梅花疎處一。去。年投二池凍解邊一。消。餘膏却助二東君手一。招二引青蟲一入二舊燒一。（六如）

●南國春寒朔氣廻。霜々還阻二百花開一。全移二暖律一何方去。似レ悞新鶯昨日來。平野旋銷雖レ皺レ紬。遠林高綴却遮レ梅。不レ知金勒誰家子。只待二晴明一賞二帝臺一。（李建勳）

●新年都未レ有二芳華一。二月初驚見二艸芽一。白雪却嫌春色曉。故穿二庭樹一作二飛花一。（韓昌黎）

●北闕丹雲裂曉霞。東風吹レ雪滿二山家一。瓊草定少二千年和一。銀樹長開三六出花一。（許玉）

●瑤臺雪花數千點。片々吹落春風香。（李白）

〔はるのゆふべ〕春夕

（春夜の部參照）

緑暗。紅稀。暮色。晩霞。のどかにくるゝ。花の夕ぐれ。

●梅が香さそふ春風に催されて、ありつる春のやどり、ふり捨てがたう思ひ出でられつゝ、かつはいかで思へると試みがてら、夕暮のまぎれに物して、薙のもとにやなら忍びよりたれば、毋屋の簾こゝかしこわたしたるに、入方の日影花やかにさし入りつゝ、いとゞ疲るくまなく見渡さる。いづくなるらん、さうじみはなし。さるべき女房ばかりぞ端近う集ひ居たる。夕ばえのけしきに、心とゞめたるさまにて、かたみにうち語らふは、花の上なるべし。散りかゝるなやくもるといふらんなど、打うそぶくけはひ、ほの〴〵きこゆ。（弘魚）

●ひるの間の程、心のかぎりにほひみちたる、搗に打むかひたるは、思ふらん人と、むつ物語する心地すべし。落ちかゝる入日の空、一きはあかりて、影なのめにさしたる夕ばえ、わざと作り出でたらんやうに、もてはやされて照り輝けるは、土器の數重りて、聯歩を顧はせる顔つきとも見なさば見なるべし。暮れはてゝ月さしのぼれるに、きはやかにはあらで、なつかしき程に匂へるは、おほとなぶらのもとに、そばみぬたらん火影の、えもいはれぬさますべし。（清臣）

●山寺のや、春の夕ぐれきてみれば、入相の鐘に花ぞ散りける。さるほどに、寺々のかね、月落ち烏鳴いて霜雪天に、みちしほ、ほどなくひだかの寺の、江村の漁火愁に對して、人々眠ればよき障ぞ。（謠曲、道成寺）

●こゝは入島の浦づたひ、海士の家居もかずく〳〵に、釣のいとまも波の上、かすみわたりて沖ゆくや、海士の小舟のほの〴〵と、見えて殘る夕まぐれ、浦風までものどかなる、春の心やさそふらん。（謠曲、入島）

●春を待て咲く花を、見る人もなき谷の戸に、鳴く鶯の聲までも、處がらあはれを、催す春の夕べかな。（謠曲、松山天狗）

●日も夕暮に程もなく、なにや彌生の空なれば、月も朧にさし出でゝ、山の端白き松の風　枝を鳴らさぬ木の下に、暫ゝ休ふ旅居かな。（謠曲、羅生門）

●頃は正月の十日あまり、霞ありさらかに日落ちて萬山紅なり。（謠曲、當麻）

●さくらいろにみづも染めけり神風やみもすそ川の春の夕ぐれ。（延李）

●山寺の春の夕ぐれ來て見れば入相のかねに花ぞちりける。（能因）

●降りまさる我が袖の雨もうし身を思ひしる春の夕ぐれ。（基長）

●いたづらに花やちるらん高圓の尾上の宮の春の夕ぐれ。（行能）

●散り殘る垣ねがくれの梅がえに鶯なきつ春の夕ぐれ。（良家）

●そことなく花の香かをり櫻色になべてかすめるはるの夕ぐれ。（盧庵）

●うら〳〵とゆふ日かげろふ野面より高ねの花にかへる白雲。（純固）

●ひなぐもり霞む日影はいりはてゝまた一時の春の夕ぐれ。（久胤）

●ほつ〳〵も手にふれながらとりかねて花折りやむる春の夕ぐれ。（言道）

●雨まじり風うちふきてふるさとにちるはなさむし春の夕ぐれ。（契沖）

●燭の火か燭にうつすや春の夕。（藻村）

●田螺ないて土臭き春の夕哉。（保吉）

●ゆうべしづまる春の心かな。（闇史）

●今つきし澤庵漬けて春の夕。（凡童）

●親の日をこれはしたりや春の夕。（一瓢）

●いねし子の寒られ來り春の夕。（文枝）

●かならずな用は忘れそ春の夕。（一映）

●松に嫌春も夕となりにけり。（風齋）

●白川を越えても春い夕かな。（長翠）

●あつと見て聲もおぼろの柳かげ月こそ霞め春の夕鞠。（國史園）

●花の色はうつりにけりこ小町でふ紅をあざむく春の夕雲。（初丸）

●くれそうでくりや千金の春の日も只一りんの月にかゝべし。（柳下亭）

●手折りにし櫻ばかりか醉どれもかたげて戻る花の夕暮。（紫雄）

●香風漂ゞ雪石床溫。呼ゞ醒嬢奴醉夢魂。好借二影輦一扶得起。茶蘼架上月黃昏。（星巖）

●露華方照ゞ歳。雲影復經ゞ春。虛閨稍覺ゞ暮。幽幌日凝ゞ塵。（王儉）

〔はるのよ〕春夜

柳眠。草夢。燈寒。客夢。沈々。悄々。梨花月。胡蝶夢。香滿ゝ衣。花上月。一刻千金。

おぼろ月夜。花ぐもる。

●夜もすがら御あそびどもあるに、いつもといひながら、廳の屋の花の梢おもしろく、秋ならねども、身にしむばかり風もはげしき花のあたりは、げにゆきても恨みまほしき心地して、おぼつかなき程に、霞める月はしくものなくおぼえて、折からは物のねもすみのぼり面白きに、定めなくはれくもる村雨の空も、作りいでたらんやうなり。かこち顔なるともいひぬべう、ながめたるに、三位。

はれくもり花のひまもる村雨に、とあれど、うちまざれつゝ、つくろひともなければ、心のうちに、

あやなく袖のぬるゝ物かは、

とぞ覺えし。こよひはげに春の宮居もかひある心地して、

月かげにいく春經てか花も見し今宵ばかりの思ひ出ぞなき。（中務內侍）

●いたう霞みたる霄の月にもよほされて、こゝかしこあくがれありきけるに、荒れたる家に物はかなげなる小三垣ゝ心ありてし

なしたる、ふと見つけてたゞすめば、女。わらはにやり戸おしあけさせて、照りもせず曇りもはてぬなど、ひとりごちつゝ見出す女のけはひ、けしうはあらじと、猶立ちやすらへば、塵うち掃ひ、さゝめく音するは琴なるべし。これ久しう御手もふれさせ給はぬな、かゝる朧夜なたゞにやはなど、せちにそゝのかされて、忍び〳〵にかきならすつま音。軒の松風にひゞきあひて、折つきなからず、えんになかしきかいまみなりけり。（依平）

❸明けぬれば夜深う出で給ふに、有明の月いとをかしう、花の木どもやう〳〵盛過ぎて、僅なる木陰のいとおもしろき、庭に薄く霧渡りたる、そこはかとなく霞みあひて、秋の夜の哀に多くたちまされり。隅の間の高欄におしかゝりて、とばかり眺め給ふ。中納言の君見奉り送らんとにや、妻戸押し開けて居たり。（紫式部）

❹さらぬだに、春の夜は習ひにかすむものなれば、四方の村雲うかれ来て、霧けども〳〵、月朧にて見え給はず。遥に程へて後、取り上げ奉りたりけれども、はや此世になき人となり給ひぬ。（平家物語）

❺すはや敵添ふ時の鼓、後夜の鐘の音響きぞ添ふ。あら名殘惜しの夜遊やな。惜しむべし〳〵。得難きは時、逢ひ難きは友なるべし。春宵一刻値千金、花に清香月に陰、春の夜の、花の陰より明け初めて、鐘なも待たぬ別れこそあれ。待て暫し待て惜し、夜はまだ深きぞ。白むは花の陰なりけり。よそはまだ小倉の、山陰に殘る夜櫻の、花の枕の夢は覺めにけり。嵐も雪も散りしくや、花を踏んでは、同じく惜しむ少年の、春の夜は明けにけりや、谷さびて跡もなし。（謡曲、西行櫻）

❻げに〳〵是こそはいとま惜しけれ。ことに心なき春の一時、げにをしむべし、をしむべしや、春宵一刻値千金、花に清香月に陰、げに千金にもかへじとはいま此時かや。あら〳〵面白の地主の花の景色やな、櫻の木のまにもる月の、雪もふる夜嵐の、さそふ花とつれて、ちるや心なるらん。（謡曲、田村）

❼盛満つや、法の山風月ふけて、光やはら〳〵、月朧にて見え給はず。遥に程へて後、取り上げ奉りたりけれども、はや此世になき人となり給ひぬ。（平家物語）

❽春の夜の一時を千金に換へじとは、花に清香月に陰、是に願ひのたまさかに、行き逢ふ人の一曲の、其ほどもあたら夜に、はや〳〵謡ひ給ふべし。（謡曲、山姥）

❾月は限なき春の夜の、鐘ばかりこそ朧なれ。面白の折柄や、妙なる法の聲、心耳を澄ます有難や。（謡曲、泣不動）

❿開きしにまさる要害は、まだ冴えかへる春の夜の、霜に関めく軒の瓦、皜天に鮏振りて、石壘高く築き上げたり。堀の水藍に似て綱を引くが如く、末は黄河に流れ入り、櫻門堅く鎖せり。（浄瑠璃、國性爺）

⓫なには潟かすまぬ波もかすみけりうつるもくもる朧夜に。（且観）

⓬てりもせずくもりもはてぬ春の夜の朧月夜にしくものぞなき。（千里）

⓭春のよの短き程をいかにしてやこゑの鳥の空にしるらん。（きぬき）

⓮宿りして春の山べにねたる夜は夢の内にも花ぞちりける。（貫之）

⓯春のよの朧月夜やこれならん霞にくもる有明の月。（丹後）

⓰心にもかなふいのちもえてしがな月と花とのあはむかぎりは。（西行）

との春のよにせん。（契沖）

●かつらぎの神も花ゆゑいとゞしく朧月夜やあくるわびしき。（同）

❸春の夜の朧月夜にしく物は花にくらしゝむしろなりけり。（美鄕）

●心さへ霞む雲路をたどゝ哉朧月夜のうかれありきに。（伴雄）

❹春の夜のかすめる月に風たえて香さへおぼろの庭の梅が香。（管長）

❺春の夜の枕嗅ぐやら目が醒れた。（鬼貫）

❻春の夜なうちくづしたる嘶哉。（芭蕉）

❼春の夜や曾あけぼのゝ其中に。（蕪村）

❽春の夜や遠歌みちたる九條殿。（凡董）

❾春の夜や足洗はする奈良泊。（召波）

❿春の夜や女な怖す作り事。（太祇）

●春の夜やゆめ〳〵油斷すべからず。（大江丸）

⓫春の夜は心のあまるばかりなり。（士朗）

●春の夜の髢来なくも月夜哉。（同）

⓬春の夜や行燈きえてものゝ降る。（長翠）

●春の夜や具今は上き草の庵。（成美）

⓭風にゆらぐ月のみふねに梅が香のうはのりなして馨る春の夜。（窓明）

⓮春の夜にあゞのごとくに霞みつゝ月の影さへおぼろまんぢう。（白人）

❷春の夜のおぼろ月夜と世の中のばくちうたぬにしくものはなし。（守武）

❸早わらびの手なば出せし春なれば延々とねる夜半の暖か。（朱樂庵）

❹とく起きて花を愛でむと思ひ寢の明日を待ちては長き春の夜。（春住）

❺のびなする柳の目さへねむるらんだん〳〵たけのつまる春の夜。（二宇守）

❻春宵一刻値は三分なり。（川柳）

❼春の夜の六千兩はえゝ直段。（同）

❽およしよといはず小聲で春の夜の。（同）

❾春の夜をすこぶる氣ばる毛唐人。（同）

❿春の夜の髢なくも月夜哉。（同）

●櫻蕊を重詰めにする花の宵。（同）

●此春は月夜も閻の五丁町。（同）

❶春の夜と紫同じ直段なり。（同）

❷てりもせずくもりもやらぬ、月はおぼろの春の夜の、ゆめばかりなる手枕に、君が浮名やかひなくたゝん。兎角人目のしげしげなれば、忍ぶ山みち忍びて通ふ、井手の玉川、岸根の蛙、いまやなくらんうき世の中に、我と同じく、もの思ふ身の、あらば語らんうさつらさ。（俗謡）

❸しづけさ富の窓のうちあやなく花のかをりきて、恨はながき春の夜に、まさも得やらぬ玉すだれ。（同）

❹春の夜のゆめおどろかすくだかけの、そのきぬ〴〵の物おもひ、又あふことのいつかはと、深き心のかこちぐさ。（同）

❺春の夜に、ツイ來ることゝ待ち詫びて、憂し〳〵が癖となり、胸にさしこむ月さへも、雲が隔つる朧夜は、晴れて逢はれぬ知らせぞえ。（同）

❻春宵一刻直千金。花有二清香一月有レ陰。歌管樓臺人寂々。鞦韆院落夜沈沈。（蘇東坡）

❼漏聲透入碧窗紗。人靜鞦韆影半斜沈。麝不レ燒金鴨冷。淡雲籠レ日照二梨花一。（同）

❽金鑪香燼漏聲殘。剪々輕風陣々寒。春色惱レ人眠不レ得。月移二花影一上二欄干一。（王安石）

❾銀缸照レ著歡春醒。倚二遍雕欄一睡未レ成。燈火誰家庭院裏。櫻桃花下倚吹レ笙。（邱吉）

❿疎影黄昏春可レ憐。東風吹レ月到二牀前一。多情恐被二梅花妬一。拒二絶妃娥一閉レ戸眠。（精庭）

●濃々春雲能二皓月一、香花滿地堆二香雪一。醉重三羅袂一倚二朱欄一、小數玉仙歌未闋。（劉兼）

●背、燭共憐深夜月、踏、花同惜少年春。（白居易）

ひノ部

〔ひ〕日

陽烏。火精。金鴉。玉盤。陽谷。咸池。重光。久照。臨照。耀炳。光芒。暉々。赫々。

あさひに。てる日。あさづくひ。夕づくひ。わたる日。天づたふ。あくる日かげ。日影いさよふ。にほふ朝日。たかてらす日。

●今は御格子まゐれとありけるにやと見えて、御親しき殿上人なめり。源中納言の四位少將顯國、右大臣殿の加賀介家定、あかノ〳〵と日のさし入りて赤きに、はら〳〵とおろしていぬ。あなあさまし。こは如何にしつるよと、えさらぬ心にまかせぬ。日のくるゝだに、大殿油を疾くさし出でよかしと、まだおろさぬ先に、心もとなく覺えしものを、はな〳〵とさし出でたる日に、おろしこめて、わざと暗うなすよと覺ゆるに、ものぞおぼえぬ。（讃岐典侍）

●日數ふるまゝに古郷も戀しくて、立かへり過ぎぬる跡をみれば、いづれか山、いづれか水、雲より外に見ゆるものなし。朝に出でゝ夕に入る。東西を日の光にわきまふといへども、晩るればとまり明くればたつ。（光行）

●書夜を露命に論ぜん事はかたし。（光行）

●こゝに眼を拭ひて扶桑第一の富士を見出せり。その樣雪の大屋をおくが如し。人々手を拍ち、奇なりとよび、妙なりと稱讃す。千勝萬景迎接するに遑あらず。雲脚下に起るかと見れば、忽ちにして日光眼を射る。身は天外にあるが如し。（牧之）

●淺草となんいふ所をすぐる頃より、うちくもりしも所々ほろ〳〵降くみえて、日影のほのめくもうれしう、行くほどあまたにして、花の都をはなれば、左右みなかりあげたる田にて、なのづからなる小草の、青みわたりたるに、羅の一つ二つほど、雪のおもかげみせてたるもをかし。（定信）

●夏きても春のなごりの草の香、のどやかに日かげてりそふ。（遊女大橋）

●布引山。まやのふもとに打かすみて、日かげほの匂へり。（景樹）

●春日野に、若葉摘みつゝ萬代を、祝ふなる、心ぞしるき曇りなき、天つ日嗣の御調物、運ぶ巷や都路の、直なる御代を仰がんと、關の戸さゝで千里まで、普く照す日影かな。（謠曲、難波）

●いや何事のそれよりも、先御らんぜよ折柄に、ほの見たて色づく木々の初瀬山、風もうつろふ薄雲に、日影も匂ふひとしほの、さぞな氣色もかく河の、うちわの曉まで、げにたぐひなや面白や。（謠曲、玉葛）

●天の原ひと日ひと夜をみちかへりとよさかのぼる日のおほみかげ。（土滿）

●入りてかつ出でにし日より天のとを世のあけくれのはじめとぞしる。（春滿）

●ひんがしの青海原のなみまより、とよさかのぼる日のおほみ神。（春郷）

●みちのべの日影のつよくなるまゝにならすたのもしのもりの下かげ。（定家）

●たのもしなあまねき光世にいでゝくもらぬ空にてらす日かげは。（爲家）

●いまもかもまつたか山はてらす日にその色ときのはじめをぞしる。（光俊）

●名のみして山はみかさもなかりけり朝日夕日のさすをいふかも。（貫之）

●天つそらめぐるは同じかげながら我日の本を猶てらすらし。（後花園院）

●あふげなほ岩戸を明けしその日より今に絶えせぬてらすめぐみは。（後土御門院）

●あふぎてもかしこきものは天てらすひるめの神のみかげなりけり。（濱臣）

●日の光いたらぬ里はなきものをうとしとうらむ人もありけり。（年平）

●日の光沖中川を雪解かな。（太祇）

●靈がほや日はくもれども花盛。（沾圓）

●夕立や日は奈良坂の片面。（麥水）

●六月や海原暮れて日の匂ひ。（其笑）

●日盛や厩に並ぶ馬の尻。（碧哉）

●峰つくる雲に並びて照る日哉。（圓更）

●天津日の岩やとざして入りし時世人の神やかわかざりけん。（梅秀）

●あふがざる人はあらじなくもりなき此大み代をてらす日の神。（月屋）

●まばゆさに目さへあきたぬ日のみ門こがね斗りやちりばめにけむ。（打麿）

●出づる日の高さひきゝもおしなべておなじ惡みのかげやあふがん。（凹成）

●あく迄も月はみつれどかしこみてみるめまばゆき日のみかげ哉。（彩垣）

●山のはの霞をわけて出づる日の光のどかに春は來にけり。（篁枝）

●山姫の山づとめきて秋より出すは八千代の初日なりけり。（橋洲）

●天のはらへることもなくはるゝ〳〵と道につかれの見えぬ日のあし。（卯雲）

●かるわざへ殘りすくなく日があたり。（川柳）

●信濃へは地響がして日はあたり。（同）

●盜まれた顏へやう〳〵日があたり。（同）

●つとめものうき一筋ならば、とくも消えなん露の身の、日影忍ぶのよる〳〵、人にあふをつとめの命かな。（俗謠）

●孔子東遊、見二兩小兒辯鬬一、問二其故一。一兒曰、我以爲日始出去人近、日中時遠也。一兒曰、我以爲日初出時遠、而日中時近。一兒曰、日初出大如二車蓋一、及二其中一、纔如二盤盂一。此不爲遠者小而近者大乎。一兒曰、日初出滄々涼々、及二其中一、如探湯。此不爲近者熱而遠者涼乎。孔子不能決也。兩兒笑曰、孰謂汝多知乎。（孔子）

●金烏新浴大東洋。帶濕來輪未吐芒。癸山遠日猶宿霧。海濤漸作赤金光。三萬六千中一日。來此始見全日出。瞬息飛升難正視。乃信羅浮吾白髮。今日春盡欲呼鱙。（傳、語義和且徐行。）（山陽）

●日出暘谷、入於咸池、拂於扶桑、是謂晨明。登於扶桑之上、爰始將行、是謂朏明。臻於衡陽、是謂朏中。對於昆吾、是謂正中。經於泉隅、是謂高。薄於虞泉、是謂黃昏。淪於蒙谷、是謂定昏。日西垂、景在樹端、謂之桑榆。（淮南子）

●高天淨二秋色一。長漢轉二蒼車一。玉樹陰初正。桐圭影未斜。翠蓋飛二圓彩一。明鏡發二輕花一。再中夏表瑞。共仰靈暉賒。（庾世南）

●四望寥天淨。三秋旭日升。碧梧長露滴。

紫紬帷帳遠。遠目清光居。幽懷叙紙澄。渾忘長與愛。欲向最高攀。（金之俊）

●日輪浮動義和推。東方一軋天門開。風神爲我掃煙霧。四海蕩々無塵埃。（施肩吾）

●仰視白日光。皎々高且懸。秉燭八紘内。物類無偏頗。（劉楨）

〔ひ〕火

火畑。火災。夜明。燔炙。猛火。陰火。冷竈。烈々。炎々。燎原。焚山。就乾。

もゆる火。いさり火。かやり火。あぶらひ。むねの火。あし火。

もゆるほのほ。やきつくす。

●世の中さわがしとて年號かはる。三月十八日建長になりぬれど、猶火災しづまらで、廿三日また〳〵姉小路室町、唐橋の大納言雅親の家のそばより火いできて、百餘町やけたり。むびたゞしともいふかたなし。寛元四年の四月にも、おそろしき火侍りしかど、この度は猶それよりもこえたり。かの雅親の大納言の家ばかり、四方は皆焼けたるに、焼れるいと〳〵ふしぎなりとぞ、見る人ごとにあざみける。曉より出できたる火、夜に入るまできえず。未の時ばかりに蓮華王院の御堂にもえつきければ、俄に院も御幸なる。御道すがらもさながら烟をわけさせ給ふ、いとめづらかにあさまし。攝政殿も御車にまゐり給へり。三十三間の御堂の千體の千手、一時にほのほにたぐひ給へば、不動ほくと堂ものこらず、寶藏鎮守ばかりぞ、辛うじてうちけちにける。後白河院のかばかり、御志深うおもほしたちて、長寛二年供養ありし後は、やんごとなき御寺なりつるに、あさましなどいふもおろかなり。又今熊野の鐘樓僧坊などおほくやけぬ。つじ風さへ吹きまじり〳〵て、ほのほの飛ぶ事鳥のごとし。またの朝までもえけり。その書つ方ざきの火もえつきて後、又雙林寺といふわたりに火出で來て、なにがしの姫君の御もと、ふるき昔のあと皆煙になりぬ。その火消えて後又夕つかた、岡崎わたりに火いで來て、攝政殿御もとせう〳〵焼けゝり。又承明門院の近き程にも火いで來て、人々まゐりつどふ。中御門より二條まで、又火出できて、十八町やけぬ。すべて廿三日よりつごもりに及ぶまで、日々へ時々へて、あるは一日に二三度、二むら三むらにわけてもえあがる。かゝる程に都は既に三分の二やけぬ。いとゞめづらかなりし事なり。たゞ事にあらずとて、院の御前に陰陽師七人召して、御占行はる。重き御つゝしみと申せば、御修法どもはじめ山々にも御祈仕り奉るべきよし、ことさらに仰せらる。（增鏡）

●されども義を守る勇士なれば、勢多少によるべからずとて、竹下へ打裏りて敵の陣を遙にみおろしたれば、西は伊豆の府、東は野七里山七里に、焼き雙べたる篝火の數、幾十萬とも、知らざりけり。只晴天の星の影、滄海に移る如くなり。さらば御方にも篝火を焼かせんとて、雪の下草打拂ひ、處々刈り集めて、幽に火をふきつけたれば、夏山のしげみが下に夜を明す。照射の影に異ならず。（太平記）

●然る程に、猛火煙々として幹を焦し、烈燄漸々に立ちのぼりて、大枝細葉を焼き落す、勢いふべうもあらざるに、虚の内、幹の外につみかさねたる薪には、疏黄焰硝をまじへたれば、爆竹たる音凄しく、煙は虚空に布き滿ちて、有頂天にも届くべく、火はあたりの土をこがして、其底坤軸までも通るべからんと覺えて、人皆魂を落し、胸を潰さずといふ者なきに、薪つきんとすると、義興下知して、初よりなほ繁しく焼草を、虚の内へ投げ入れさせて、些ともたえまあるとなければ、いかなる靈蛇神龍なりとも、免れ果つべうは見えざりけり。（馬琴）

●にはかに火の事ありとさわぐを、とまのひまより見れば、此船より、三町ばかり上つ方に繋ぎたる、大船のあなたより、火燃え出でぬと見えて、風につきて飛び來るほのほ空に充ちて、我船にもほと〳〵落ちかゝりぬべし。人々驚き立ちて、よく見れば、燃ゆる火にはあらで、汀の方より飛びくる火物なりけり。かなまりの大きなるもありて、空高くくるめき上るさま、おそろしといはむも世の常なり。之倫と共に手火とりて、船人の働を助けんとすれど、皆吹きけされて、ともしつけぬべきよしなし。（廣足）

●頃は神無月十日餘りの事なれば、冬野の景色の面白さに、何心なく打出でたりしに、爽四方の圍みなし、柏野の草に火々かくれば、餘焰頻りに燃え來り、遁れ出づべき方もなく、敵攻め鼓を打ち懸けて、火焰を放してかゝりけるに、尊飯を拔いて、敵を拂ひ忽ちに、煙し走り退けと、四方の草を薙ぎ拂へば、飯の精霊風となつて、煙も草も吹きかへされて、天にむらがり地にうづまいて、爽の陣に吹き暗がつて、猛火は かへつて敵を焼けば、數萬の爽ども、皆焼け死にて其跡の、燒は積つて山の如し。（謡曲、草薙）

●葛城や、木の間に光る稲妻は、山伏のうつ火かとこそ見れ、實にや世の中は、電光朝露石の火の、光の間ぞと思へたゞ、わが身のなげきをも取り添へて、思ひましばを焼かうよ。（謡曲、葛城）

●たとへを知るも數ならぬ、身には及ばぬ事なれども、妹背の道はへだてなき、かの漢王の其昔、甘泉殿の夜の思ひ、たえぬ心や胸の火の、煙にのこる面影も、見しは程なきあほれの色、なか〳〵なりし契かな。（謡曲、小督）

●葛籠算箕挾箱、引き散らし打碎き、あまの焚く火々もえ上り、煙に見えぬ面影に、世はなほも身をもだえ、可愛やおさいが嫁入りの時、まあ妥で門火をたき、千秋萬歳と祝ひし其道具、門火の跡で灰となす、母のからだ諸共に、薪木になして失れぬかと。（浮瑠璃、鎗の權三）

●御垣守衛士のたく火の夜はもえてひるはきえつゝ物をこそ思へ。（能宣）

●なにはめがすくもたく火の下こがれ上はつれなき我身なりけり。（清輔）

●つの國のなにはたゝまくをしみこそすくもたく火の下にこがるれ。（紀内親王）

●春の野につくるおもひのあまたあればいづれを君がもゆるとか見ん。（道綱母）

●人しれぬ心の内にもゆる火は煙はたゝでくゆりこそすれ。（讀人不知）

●朝な〳〵うちてたく火のあるはきえあるはもえぬる我心かな。（清雄）

●とことはに有りとは見せぬ君の火をうちいでゝいつか人にしらせん。（蘆庵）

●もゆる火のほなかにたちてやくるとも露たじろかぬ心ともかな。（同）

●ひめしまにあまの釣舟よせかねて身をいさり火にこがれてぞふる。（契沖）

●ひるはもえずあればこそあれ御垣守衛士のたく火も人の思も。（たみ子）

●遠ひがた涙をやく火のほの〴〵とをりし

づまれるあかつきの雲。（枝直）

●鍛冶の火も殊さらにこそ釜の雲。（嵐雪）

●遠山へ野火がついたぞ初時雨。（一茶）

●寒月や門へ火の飛ぶ鍛冶屋哉。（太祇）

●鑄鋼の火は炎々と雪見哉。（几董）

●舟にたく火に鶯たつる千鳥かな。（龜洞）

●餅つきて火をかいて行く男部屋。（岱水）

●火を打てば軒に啼き合ふ雨蛙。（丈草）

●火を焚けばいつも吹く也冬の風。（確嶺）

●雪降る夜時の火見ゆる山手哉。（麥雄）

●炭油薪に事をかきながらたえぬはおのがむねにもゆる火。（吉渡）

●釜の下に住みつけたりし灰猫の目が光るかと見れば埋火。（眞寫）

●胸の火のもゆる葦や鵜がひ船もつれし縄はとけながら川。（路牛）

●さよひめのなりたる石を打わらは今もおもひの火やいでぬべき。（百年）

●夜ごとつむ枕のちりなやきすてよわが胸の火のもゆる折から。（松友）

●提灯のきえし飛脚に火とらそと釜の方からいひさうなみち。（栗提）

●いかにやの時分小鍛冶は火をおこし。（川柳）

●火ないぢり消して異見に暇をやり。（同）

●江戸入だなどゝ野がけは火をばたき。（同）

●櫻ちる度に茶瓶の火がおこり。（同）

●知らぬ火をあてに飛び行くむめの花。（同）

●爪の火を息子夜なゝけしに行き。（同）

●臭に火を焚いて祭の鍋の數。（同）

●此所が火と日なたの火入敎へられ。（同）

●立間に持つた十能の火がおこり。（同）

●火をかりによれば田舍は一本出し。（同）

●薄き情をなりはへて、いとはかなくも泣きくらし、包むにあまる胸の火に、よすがら身をやこがすらん。

●くるしき胸のほむらの火、わきくる水にのうきえもせず、かすかに隔つあさましや。（同）

●衛士のたく火は夜こそもゆれ、胸に焚く火の絶えやらぬ。（同）

●薪を抱きて火を救ふ。（俚諺）

●飛んで火に入る夏の虫。（同）

●煙あれば火あり。（同）

●日から火が出る。（同）

●末牌梛聲徹二耳底一、急上レ屋以眺、蔭烟蕩レ天、從レ西而南、連亘數里、合爲二一匹赭色帶一。而猶以其爲二貧鄙一也、不二甚爲一意。所謂他人之苦、傍觀以爲レ樂者。既而隣人聒々叫呼、出而觀レ之則板牆數間、爲二風所一吹倒一也、人情恟々、不二復能一閑坐看書一。黃昏又上レ屋、向者一匹帶、變作二半天鶴翼之雲一、如レ怒如レ激、馳者回者、騰者飛者、如二龍之吟一、如二虎之嘯一、如二雷車之轟レ空、如二天地鬼神、騎レ象乘二狡猊一、驅二山妖海魅、千百惡魔一。鬱勃最激、漸浸瀰漫、蹙レ所二底止一。乃下レ屋、輕裝走二于毅侯之家一、時已晚矣。火氣堀燿、街衢若レ畫、防レ火者、避レ火者、東西奔走、絡繹如レ織。（養山）

●烈燄須臾欲レ滿レ城。爆聲相和、暫鐘聲。天與地蹕渾間事。只恐三光不二復明一。（星巖）

●風前細煙起。月裏黑烟生。發レ燄看二喬木一、徒先識二遠城一。（廣厚吾）

●竹裏吹レ火上二吟燈一。（劉仲尹）

●短存火紅。（杜甫）

●飛レ火就レ燥。（易經）

【び】美

美麗。美容。美景。艶美。妖艶。艶麗。

うるはし。うつくし。らうたし。花やか。かゞやく。めもあや。

●爪にかきたるちごのかほ、雀の子のねずなきするにをどり來る、又紅粉などつけて居ふたれば、親雀の虫など持て來てくゝむるも、いとらうたし。三つばかりなる兒の、急ぎて道ひくる道に、いとちひさき塵などのありけるを目敏に見つけて、いとをかしげなる小指にとらへて、おとななどに見せたるいとうつくし。あまにそぎたる兒の目に、髮のおほひたるを、掻きは遣らで、うち傾きて物など見る、いとうつくし。たすきがけにゆひたる、腰のかみの白うなかしげなるも、見るにうつくし。おほきにはあらぬ殿上わらはの、さうぞきたてられてありくもうつくし。みかしげなる兒の、おからさまに抱きてうつくしむ程に、かひつきて廂入りたるもらうたし。雛の調度蓮のうき葉のいとちひさきを、池よりとりあげて見る。蕚のちひさき物はいとうつくし。何も何もちひさき物はいとうつくし。いみじう肥えたる兒の二つばかりなるが、白ううつくしきが、二藍のうすものなど、衣ながくてたゞきあげたるが、はひ出でくるもいとうつくし。八つ九つ十ばかりなるなのこの、髮幼げにて文よみたるいとうつくし。雛の雛の足だかに、白うなかしげに、衣みじかなるさまして、ひよ〳〵とかしがましく鳴きて、人の後に來立ちてありくも、又親のもとにつれだちありく、見るもうつくし。雁の子、舍利の殼、瞿麥の花。（清少納言）

●又その頃天王寺に院のまうでさせ給ふついでに、住吉へも御幸あり。神はうれしと後三條院仰せられけんためし、思ひ出でられ侍りき。大宮院も御まゐりなれば、出車ども、いろ〳〵の袖口ども、春秋の花紅葉を一度にならべて見る心地して、いとうつくしく、目も慄くばかりいどみつくされたり。（增鏡）

●此君今はかくと見えし時、御髮の肩にかゝりけるを、小く美しき御手をもちて、前へかきこさせ給ふを、守護の武士ども見參らせて、あないとほし。未御心のましますぞやとて、皆鎧のそでぬらさぬ者なしけり。（平家物語）

●童男童女敎なきもの、或は才あり、或は美なるも、道德仁義によらずして、才に誇り美を頼まず。蚌鷸相持して漁人に得られ、山鷄影を愛して、溺るゝの悔あらん。（馬琴）

●有りし敎に隨つて、蓬萊宮に來て見れば、宮殿巍々として更に邊際もなく、莊嚴巍々として、さながら七寶をちりばめたり、漢宮萬里の粧ひ、長生殿山のありさまも、是にはなぞらふべからず、あら美しの所やな。（謠曲、楊貴妃）

●龍田の川の水は濁るとも、和光の影にあきらけき、眞如の月は猶照るや。龍田川紅葉流れし跡なれや。いにしへは錦のみ。今は水の下紅葉、あら美しや色々の、紅葉重ねの薄氷、わたらば紅葉も氷も、重ねて中絶ゆべしや。いかで今は渡らん。（謠曲、龍田）

●誠や光陰とゞまらず。春過ぎ夏も來て、草木心なしとは申せども、時を忘れぬ花の色、かほよ花とも申すやらん。あら美しの杜若やな。（謠曲、杜若）

●也みし親族はあの子の香典、四十九日の蒸物まで、持つて寺入さすといふ、悲しい事が世にあらふか。育ちも生れも賤しくば、殺す心もあるまいに、死ぬる子は媚よしと、美しう生れたが、かあいや其身の不仕合せ、何の因果で疱瘡まで、仕舞うた事ぢやとせきあげて、かつぱと伏して泣きければ。　（浄瑠璃、菅原傳授）

●お成儲の新御殿、花殿を造る三つ間四つ間、いつも御機嫌養淫公、色と酒とに亂れ髪、捌け過ぎたる御盡し、善盡し、美盡したる遊君舞子奥女中、色々酔ふ其風情、四季の草花を一時に、咲かせ眺むる心地せり。　（浄瑠璃、三組盃）

●うるはしとあがもふ妹をおもひつゝゆけばかもとなゆきあしかるらん。　（萬葉）

●見わたせばむかつをのへのはなにほひてりてたてるはははしきたがつま。　（同）

●うるはしみあがもふ君はなでしこが花になぞらへて見れどあかぬかも。　（同）

●たらばなのこほのはなりがおもふなんこゝろうつくしいであれはいかな。　（同）

●なみなへしなまめきたてる姿をやうつくしよしと蟬のなくらん。　（後頼）

●組糞や塵さへけさは美しき。　（千代）

●美しきかほかく雉の距かな。　（其角）

●美しき砂に小松のみどりかな。　（士朗）

●どれが子の疱瘡美しタがすみ。　（道彦）

●つりさがる魚美しやゆんがすみ。　（葛三）

●竹の子や兒の齒ぐきの美しき。　（嵐雪）

●美しき顔隠しけり鉢敲。　（闌更）

●蚤の跡失れも若さは美しき。　（一茶）

●葬や惜氣せぬ妻うつくしき。　（凡董）

●撫子やそのかしこさに美しき。　（惟然）

●美しく彩色咲きの杜若水のすみ繪も又きれいなり。　（爲成）

●美しき若葉も今は散うせてあすは冬きに植ゑかへる庭。　（菊穂）

●美しき花の姿は小町にもにほんにめだつ妹がえりあし。　（蓋盛）

●よくもめて老が紙衣のやはらかく著よさうにもみえて美し。　（東雲）

●うつくしき花のくちびる櫛貴妃がつけし紅裙の色ふかみ草。　（影住）

●美しき筆とやめでん池の面の峯にすみ繪の杜若をば。　（酒吉）

●山姫のすそ野を風のふきあげてみるも美し白菊の花。

●美しと人もみたてん夕まぐれまがきにかゝるをみなへしをば。　（樂住）

●美しき花につうをやうしなはんかすみをわけておつるひばりは。　（鮫々軒）

●草市へ出る三尊の美しさ。　（川柳）

●はなうたの出る名代はうつくしい。　（同）

●家老とは火を擦る顔の美しさ。　（同）

●言たてにする裸身はうつくしい。　（同）

●うつくしい手のかけまはる琴の上。　（同）

●美しい柳へ繻子の詩が見える。　（同）

●伊達を駿河の、富士の御山の化粧顔。美しさゆゑ文をやり、おらが心を思ひやり、せめて一夜はなん〳〵なびかんせ。　（俗謡）

●花清の春の朝霞、柳櫻の色深く、錦の袂かざり來て、行幸をまつぞうるはしさ。　（同）

●みめか美いとて心が人か、大坂木偶の坊で面ばかり。　（同）

●色も美ししほらしの見櫻、たが袖ひくとて散らすな花吹雪。　（同）

●千謂レ韶蠱美矣、又盡善也。謂レ武盡美矣、未レ盡善也。　（論語）

●好而知二其惡一、惡而知二其美一者、天下鮮矣。　（禮記）

●聖人者原二天地之美一、而達二萬物之理一。　（莊子）

●天下皆知二美之爲レ美、斯惡已。　（老子）

●天地有二大美一、而不レ言二四時一。　（同）

●地還有二餘美一。我遊探二奇懷一。　（孟郊）

●直城風日美。平陵雲霧除。　（庾信）

●登覽江山美。徑行草樹荒。　（陸游）

●言語之美、穆々皇々。　（荀子）

〔ひがし〕東

東方。東國。東海。關東。山東。江東。日東。徂レ東。朝レ東。向レ東。

ひんがし。あづま。あけぼのゝ空。日の出づる方。

●鳥もきこえぬ山里なれど、家を守る犬の聲も、春めきたるやうに覺えて、東の戸ざし、しばしばかりあけものすれば、空の氣色昨夜見しにかはりて、續の紙に白粉つけたるやうに、所々白う見なされて、耀く星のかげも、見が中に薄く覺えて、東のかた、御神のたゝせ給ふべき辰巳のあたりに、横居る雲一條は本細う末ふとし。又一つは虹のかけはしと覺えて、小柴の平緒のも、いつのほどにか、薄墨の紙屋紙の色になりゆくは、又何方よりかは、暫しが程暗うなりて、山蔭のものあひ艶やかならぬに、外面の鳥の聲、花待つばかりにや、長閑に囀づりいで、谷の川も音そへて聞ゆるに、三明六通の佛の御耳にはなど、掛卷もかしこくも淚み來るに、此度は星の八十川原いづち往にけん、一つ二つそれかあらぬかと殘るやうに見えて、山の端ににほひ出づる朝彦の御かげ、堆朱の玉垣、いかなるたくみの塗りみそなはせしとか。　（長明）

●東は野のはる〴〵とあるに、東の山際は、比叡の山よりして、稻荷などいふ山まで、あらはに見えわたり、西は並の岡の松風、いと耳に近う、心細く聞えて、内にはいたゞきのもとまで、田といふものゝ引板ひきならす音など、田舍の心地していとなかしきに。　（孝標女）

●萬物うき本性に老の癖さへそひて、まめなる所には、花薄ほにさし出づべくもあらねば、ひたやごもりにこもりぬて、春は南の軒の紅梅にうそぶき、秋は東の籬の白菊をつむ。　（文雄）

●かくて朱之介主從は、馬をおひ里をはなれて、ゆき〳〵て車野の前殿まで來にけるとき、東方やう〳〵しらみつゝ、月光薄くなりしかば、乃介坊二は、馬を追うて阪を登らんとする程に、馬は二疋ながら鞋をさらして、その緒をながく引きたりける。　（馬琴）

●犬塚番作は、必死の覺期も忠孝の誠を護らせ給ふなる、神明佛陀の冥助によりけん、からく一條の血路を開きて、金蓮寺を脱れけり。東をさしてよもすがら、名をだにしらぬ山路に、わけ入り樵夫のかよふ細道を、たどる〳〵天をあかしつ。　（同）

●唐土の、空は雲井に隔て來て、東の國に至りても、猶東路の末遠き、海山かけてはるゝ〳〵と、日數重ねて行く程に、名にのみ聞きし富士の嶽や、裾野に早く著きにけり。　（謠曲、富士山）

●是は都北白河に、年經て住める女なるが、思はざる外に獨子を、人商人に誘はれて、

ゆくへも聞けば逢坂の、關の東に國遠き、東とかやに下りぬと、聞くより心亂れつゝ、そなたとばかり思ひ子の、跡を尋ねて遂ふなり。（謠曲、隅田川）

●誰がいひし春の色は、東より來たれども、南枝花初めて咲くと、詠ぜしも此梅に、かざれる春の色とかや。（謠曲、北野物狂）

●既に四更を過ぎたれば、東の陽氣は是鶏鳴、南北西に人氣立つは、ハヽあやしや東國の軍勢、坂本の城間近く寄せると冠えたり。咲をとゞめ出陣の、用意有れと云渡し、庭の井筒をしつかと踏まへ、古木の松が枝麗の木づたふ如くかけ上り、ハア、、寄せたり〳〵、東は志賀越辛崎日、伊逢の一黨奥州勢、勢田唐崎までみち〳〵たり。（浮瑠璃、鎌倉三代記）

●なう懐かしや懐しや。母は冥途の苦の下、日の本とやらんに父上ありと計りにて、便を聞かん知逢もなく、東の果と聞くからに、明くれば朝日を父ぞと拜み、暮るれば世界の圖を披き、是は唐土是は日本、父は父にましますよと、給園では近いやうなれど、三千餘里の彼方とや。（浮瑠璃、國性爺）

●わがこひの道よ東のかたなればあふ坂のせきはこえなん。（宣長）

●月も日もまづ出でそむる方なればあさゆふ人のうちながめつゝ。（良經）

●ひんがしの國にわがたれば朝日さすはこやの山のかげとなりにき。（實朝）

●朝日さすきしの青柳打なびき春くる方はまづしるき哉。（定家）

●朝日かげのぼる槍をから人のあふぎそめても幾世へぬらん。（諸平）

●東路に春たちにけりから舟のつしまの波ものどけかるらん。（眞淵）

●龜のぜにのれりし神も天皇の出でますかたの汐瀬をしへき。（美楯）

●秋風はさむけくなりぬ我君の遠く東にはしつくまに。（言道）

●鳴呼櫻枳ともならで江の東。（曉柔）

●西吹けば東へたまる落葉哉。（蕪村）

●花鳥の輝く山や東向。（枕隣）

●誰々も東向くらん月の暮。（去來）

●小夜碪關のひがしはあはれ也。（士朝）

●紅梅は乳母が家居の東哉。（淡水）

●乙鳥の來るや入江を東うけ。（窯谷）

●下蔭のはたゝきしてやとりが鳴く東より先秋はくるらん。（湖鯉館）

●御墓子の身にあまりにし東山峯の松風みどり落すな。（奇絲齋）

●ひんがしの其の方角の卵の花はまだ夜深きにしら〳〵と咲く。（波寐留）

●めぐり見る花見車の車道春のひがしの淵ぬんきなき。（關哉）

●柴引の裏れ陰見世の東山。（川柳）

●青葉から東は向かぬ青法師。（同）

●御行列花の東へ御こし入。（同）

●東方そりやきこえぬと女護島。（同）

●布團一つで名の高い東山。（同）

●初日の出しらむ東の源氏から。（同）

●ひんがしの照りを富士御遙拜。（同）

●橋迄も江戸は日本の東也。（同）

●われが契はこの世から、はなれ〴〵のもの思ひ、どこへとりつく島もなし。東ときけば遠けれど、それにはあらぬあの江戸ぼりを、ふかきちぎりとかよはす文も、海かきりかやあとたえて。（俗謠）

●西へ西へとお月も星も、嘘や東はくらかちう。（同）

●一宵文話好因緣。忽向東歸路四千。（別潘

已醒人已遠。滿江春水月如煙。（佛山）

●人家一展高橋東。招客青旗因々風。（梅凝）

●遠朝寒雨又酸風。獨取三長途一類二轉蓬。何堪浪華一千里。家山更在三浪華東。（誠軒）

●年來鬢髮老未老。此去江淮東復東。（蘇東坡）

●斗柄東指而天下皆春也。（淮南子）

●家住錢塘東復東。（李賀）

●鼓角渦天東。（杜甫）

●水萬折必東。（荀子）

〔ひかり〕光

光輝。光芒。光線。光被。光照。清光。晨光。山光。電光。風光。流光。烟々。輝々。和光同塵。み光。日の光。玉の光。月の光。光みつ。世をてらす。

●おほかたにうちみ奉る人だに、こゝろしめ奉らぬはなし。もの〻情しらぬ山がつも花のかげにはなほやすらはまほしさにや、この御光をみ奉るあたりは、ほど〳〵につけて、わがかなしと思ふむすめを、つかうまつらせばやとねがひ、もしはくちをしからずと思ふいもうとなどもたる人は、いやしきにても猶この御あたりにさぶらはせんと、思ひよらぬはなかりけり。ましてさりぬべきついでの御ことの葉も、なつかしき御氣色をみたてまつる人の、すこしものゝ心を思ひしるは、いかさはおろかに思ひきこえん。あけくれうちとけてしもおはせぬを、心もとなきことに思ふべかめり。（紫式部）

●四年と申しゝ三月に道昭和尚と申しゝ人の室のうちに、俄に光滿ちて、香しき事かぎりなし。道昭弟子を呼びて、この光を見るやと問ひしに、弟子見るよしを答へしかば、道昭ものないひそといひし程に、室より光いでゝ寺の庭にめぐりて、やゝ久しくして、この光西をさして行きさりて後、道昭繩床に端坐して命終りにしかば、弟子ども火をもちてはふりて、その骨をとらんとせしに、俄に風吹きて灰だにもなくふき失ひてき。（忠親）

●いで又いみじく侍りしことは、やがておなじ君の大井河の行幸に、宮小路の御息所の御腹の御子の七歳にて、まひせさせ給へりしばかりの事こそ侍らざりしか。萬人しほたれぬ人侍らざりき。あまり御かたちの光るやうにしたまひしかば、山の神めでゝとり奉り給へりてしぞかし。（榮花）

●有りがたの氣色やな、もとより高き雲の上、月も光はあきらけき、雲龍閣や阿房殿、光もみち〳〵て、げにも妙なる有樣の、庭には金銀の砂を敷き、四方の門邊の玉の戸を、出で入る人までも、光を飾るよそほひは、誠や名に聞きし、寂光の都喜見城の、たのしみもかくやと、思ふ計りの氣色かな。（謠曲、邯鄲）

●しかりとは云へども神國王地のめぐみを賴み、彼土蜘蛛を中にとりこめ、大勢みだれかゝりければ劔の光に少しおそるゝ氣色を便りに、切りふせ〳〵土蜘蛛の、首打ちおとし悦びいさみ、都へとこそ歸りけれ。（謠曲、土蜘蛛）

●神は非禮を受け給はず。水上清しや龍田の川、御殿しきりに鳴動して、福宜が鼓も聲々に、有明の月曉の光り、和光同塵おのづから、光も朱の玉垣かゞやきて、あらたに御神體顯はれたり。（謠曲、龍田）

●天皇の賢き御代を守るなる、右近の馬場の春を得て、花上苑に明にして、輕軒九陌の樂に交る神心、和光の影も曇なき、君の威光も影高く、花もゆるがず治まる風も、のどかなる代のめでたさよ。（謠曲、右近）

㊀ありがたや治まる御代の春とて、山河草木おだやかに、五日の風や十日の、天が下照る日の光、曇りはあらじ玉水の、藥の泉はよも盡さじ。あらありがたの奇瑞やな。（謠曲、養老）

㊁無智無能の身を以て、朝恩に世を榮え、數代の君に忠をなす義臣の者はこの仕合せ、日月常に照せども、雲隔つれば光なし。智惠明なる皇后を、言ひ掠めたる讒者の目先、弟の身として兄親を、罪に落する天命知らず。（淨瑠璃、三蘇賞）

●此方も目指す相手ぞや。人な頼まじ助太刀させぬ、卑怯の働し給ふなと、拔き合せ唯二人、切り結ぶ劍の光、火影に輝く電光石火。（淨瑠璃、大友眞鳥）

●九重に今もますみの鏡こそなほ世をてらす光なりけれ。（後村上院）

●天の原あかねさし出づる光にはいづれの沼かさえ殘るべき。（菅公）

㊂五月雨の空にも月は行くものを光みねばやしる人のなき。（光俊）

㊃集めこし螢も雪もとしふれば身をばてらさぬ光なりけり。（具定）

㊄油火の光に見ゆる我かづらさゆりの花のゑまはしき哉。（家持）

㊅さし出づるこの日の本の光よりこまもろこしも春をしるらん。（宣長）

㊆八坂瓊の光をきこみ天つちのそこひのうらは涙かざりもなし。（清平）

㊇天津星おちてなるてふ石の中にありし光や玉となすらん。（契沖）

㊈みがきなばたれか光の見えざらん心のたまは石ならねやは。（蘆庵）

㊉たぐひなき光にもあるか住の江の磯たちならす涙の上の月。（春海）

㊋うつす手に光る螢や指のまた。（太祇）

㊌星の思くらきに餘る光哉。（長翠）

㊍うつくしう老い初むる春のひかり哉。（闌更）

㊎闇の夜のくらまの峯の火打石うちかへしつゝ光るいなづま。（芭蕉）

㊏夏虫はみなひつこみし小山田にさし出ぢましく光る稻葉。（曉台）

㊐天日月地は金銀の光なり。（道彦）

㊑若松の四方に影さす光かな。（三笑）

㊒猫の目の窟に光る寒さ哉。（川柳）

㊓今日の月さてもなしまぬ光哉。（折芳）

㊔桔れ〳〵て光をはなつ尾花かな。（凡童）

㊕爪切てひさぐ銀の光かな。（嵐雪）

㊖入月や時雨るゝ雲の底光り。（丈草）

㊗石も木も眼に光る暮かな。（去來）

㊘しる谷や霞の光桃の花。（北枝）

㊙月の光り今日は蜻のかしらより。（蓼太）

㊚すゝはきの塵にまじはる神棚もけふよりわけて光ますらん。（市人）

㊛千金の春の光を横へて霞のたちやはく山のこし。（竹光）

㊜みちぬればかくる暫の世の中にたゞとこしへや御日の光は。（二八丸）

㊝萬代の池の玉藻の光をも汀の龜の甲にいたゞく。（蕪長）

㊞光には鯉も恐る、江戸川のほたるは土地の草わけにして。（古道）

㊟かきわけてみればかすかに明方のほしほど光るよいの埋火。（翠逝）

㊠光るてふ姿もしばしとゞめぬは名もいな妻のいなのさゝ原。（眞壽美）

㊡闇の夜のくらまの峯の火打石うちかへしつゝ光るいなづま。（三笑）

㊢夏虫はみなひつこみし小山田にさし出ぢましく光る稻葉。（折芳）

㊣天日月地は金銀の光なり。（川柳）

●朝踏り姑御前の眼がひかり。（同）

●鞍の天窓にしては光り過ぎ。（同）

●遠く來る大工天窓が光るなり。（同）

●御隱居がなでるで光る下女が玉。（同）

●全盛も光にとける床の雪。（同）

●洛川のほたるは親がひかるなり。（同）

●稻妻が二つ光るで後家とした。（同）

●雷藏に宵から光る長つぼね。（同）

●旅のそら、草の庵の夜もすがら、かゝれる月のかげさえて、光に庭の霜かとも、疑ふ心とけやらで、ふりさけ見ればあの山の、千年の松に月もはや、香づき入るやもろともに、また手枕のうつゝにも、都の夢やむすぶらん。（俗謠）

●つくろひはなけれど、何所か尼花草、露をふくめるしほらしさ、月に光をますわいな。（同）

●親は此世の油のひかり、親がござらにや光ない。（同）

●親の光は七所照す。（俚諺）

●彌陀の光も金次第。（同）

●男の光は七光。（同）

●煩悩えんとして光を增す。（同）

●玉殿かざれば光なし、（同）

●注瀉不滿、酌焉而不竭、而不知其所由來、此之謂藻光。（莊子）

●露和玉屑金盤冷。月射珠光貝闕寒。（韓偓）

●挫其銳、解其紛、和其光、同其塵。（老子）

●落今似若存。（杜甫）

●初月出不高。衆星尚爭光。（蘇軾）

●神光出資髻、法雨洗浮埃。（李商隱）

●銀箭耿三寒漏、金鉄凝一夜光。（李商隱）

【ひぐらし】蜩（蟬の部參照）

茅蜩。

こゑしきる。片山陰。尾上とよもす。秋おもほゆる。こゑの內よりくる。

●春うちすぎて、夏ごろ、宿直がちなる內住に、つとめて一日ありて、暮るれば參ヒなどするを、笹しうと思ふに、蜩の初聲聞えたり。いとあはれと驚かれて、

あやしくも夜の行くへを知らぬかな今日ひぐらしの聲はきけども。

といふに、出でがたかりけんかし。（道綱母）

●夏は時鳥をきく。かたらふごとに死出の山路をちぎる。秋はひぐらしの聲耳にみてり。うつせみの世をかなしむかときこゆ。（長明）

●そこも知らぬ小野の細道、末もつゞかぬかたへの野べの、入り方に、なり行く秋の夕日影、空の景色も冷まじくて、蜩の、聲さへしきる山の陰は、なぐらき心地のみ、心細き夕かな。我住む方の庵とて、歸り馴れずは旅人の、いかでか分けん道ならん。（謠曲、落葉）

●夕立の雲もとまらぬ夏の日のかたぶく山にひぐらしのこゑ。（式子內親王）

●ゆふづく日さすや庵の柴のとにさびしくもあるか蜩のこゑ。（忠良）

●柴をしげみと山のかげやまがふらん明るもしらぬ日ぐらしのこゑ。（實方）

●今こんといひて別れしあしたより思ひぐらしの音をのみぞなく。（遍昭）

●ひぐらしの聲する山の松陰にいはまをくゞる水ぞすゞしき。（實定）

●妹が髪ゆふ日かぎろふ高まどのをのへとよもしひぐらしなくも。（土滿）

●秋ちかき片山林ひとはこでさびしくもあ

るか日ぐらしの聲。（有功）

●蜩のこゑの内よりくれそめて雲靜なりたそがれのやま。（定信）

●秋のうへは小雨のなごりきらめきて秋おもほゆる蜩のこゑ。（幸文）

●蜩や山田を落つる水の音。（瓢竹）

●蜩やあかるき方に鳴きうつり。（曉達）

●蜩や寺から寺に油賣。（童起）

●蜩や宿ねだり居る梵論二人。（寸砂）

●蜩や螢をもれ來る秋の聲。（蕉太）

●寒いぞよ軒の蜩唐辛子。（一茶）

●蜩や捨てゝ置いても暮るゝ日を。（すて女）

●蜩もなかずなりたる夕哉。（長翠）

●蜩や撞かずに暮るゝ鐘もあり。（柳居）

●年四十日ぐらしの聲耳に立つ。（白雄）

●蜩や海すこし見ゆるくの木原。（寒松）

●蜩はよき聲もてり星今宵。（道彦）

●風すぐる杜の梢もかげろひて夏をよそなる日ぐらしの聲。（秋光）

●ひぐらしの鳴きたる跡のさびしさは涙こぼるゝ宿の蚊遣火。（漉近）

●日ぐらしやあすかの山も紅葉して深く染井の村みえぬなり。（國住）

●おのが時來ると世話しくなく聲や春秋しらで其ひぐらしも。（梨丸）

●土器をかわらけ賣の投げるうちひぐらしのなく日暮の里。（古渡）

●千草にすだく虫のねの、はたおる音はきりはたりちやう、〳〵、つゞりさせてふ蜩さりゝくす。（俗謡）

●雨餘雲漏レ日。蟲思已喧々。時節還利冥。聲音似二故園一。爲レ誰吟二綠野一。相共送二黃昏一。便是秋來信。猶聞又幾根。（李觀）

●雲鵬九萬摶二扶搖一。蒙叟狂言付二笑蜩一。一夢化爲二胡蝶一去。此游眞箇小逍遙。（磐溪）

●鳴蜩嘒々綠陰涼。六七人家枕二野塘一。一路響聲沿レ水轉。滿畦風露稻花香。（梅隱）

●仲尼適レ楚出二於林中一。見二荷蓧者一承レ蜩猶レ掇之也。（莊子）

●野草變レ色兮至葉稀。鳴蜩抱レ木兮雁南飛。（曹植）

●寒蜩怨而無レ聲兮。古木凄其寡レ枝。（皮日休）

●抱レ枝寒蜩靜。繞レ耳飛蚊清。（蘇軾）

●餘情至際蝶。新經樹間蜩。（高啓）

●猛蒲深二藻影一。柳亂咽二殘蜩一。（周伯琦）

●莞彼柳斯。鳴蜩嘒々。（詩經）

●如レ蜩如レ螗。如レ沸如レ羹。（同）

●秋蟬唫レ葉。寒雀噪レ枝。（沈約）

〔ひげ〕 鬚

髭。鬚髮。白髯。銀針。蓬々。離々。

八束のひげ。白ひげ。苦のひげ。むねにたる。かきなづる。

●月はむかしにかはらねど、變りにけらし面影は、憔悴枯槁とやせおとろへ、剃らねば髮は肩にたれ、彼凌雲の額をかき、一夜の中に千字文を、撰びし苦心は數ならず、わがうへやなく山鳥、面眞白になりぬれど、かへる日もなき沖津波、潮と琉黃の氣にくろみ、髯いかめしく、銀の針をうゑたる頰骨高く、眼くぼかに腹ふくよかに、この世からなる餓鬼道の、苦艱比べんやうもなく、海松のごとくかきたれたる、裾をむすびて肩にかけ、腰にみるめをまとひつゝ、島あしにつらぬきたる、雜魚二つ三つ手にさげて、よろめき來つる磯畔に、いくたびか腰うち伸ばし、吻と息はきて、磯蜩松の株に尻をかけにける。（馬琴）

●此君を手馴れ奉りしより後は一日片時も離れ進らする事なし。我身の年の積る事を思はず、早く人となさせ給へかしと、明暮思ひて嘗み進らせ、月日の如くにあふぎつるに、只今斯る目を見ることの心憂さよ。常は我膝の上に居たまひて髭をなで、いつか人となりて、國をも莊なも餝けて、知らせんずなんど宣ひしものを。（保元物語）

●島人魚來らんと、小舟とり〳〵こぎ出でけり。御舟にまゐるかたちを見れば、人にはありながら、あやしき事限なし。かしらはをどろのごとくみだれ、眉のへだてもなくて顔いとおそろしげなるに、さかひげいときたなくはえふたがりて、たゝ目ばかりぞ見えける。（絕成）

●時に萬似みねたかし、樹根にまとふてこしなかゞめ、千里巖さがし、苔の髮をかなぐりて壓なのゝく。（光行）

●唐土に優りしものは何々ぞ。京羽二重と大名のお道具持の造り髭、揃うて〳〵徒士の衆、手を振る腰振る鳥毛振る、鵜が岡への御參詣、先驅後乘きらめきて、光を三つの大鳥居、さんかつらの松かげに、御乘物を舁据うれば。（淨瑠璃、鎌倉三代記）

●小山のごとき磐石にて造り立てたる手水鉢、ゆるぐと見えしが引かつぎ、顯れ出づる水晶宮、おどろの白髮三千丈、髯ぼう〳〵と眼の光り、星と輝く其有樣、奥ゐ目がけて歩み行く。（淨瑠璃、彦山權現）

●かつまだの池はわれしる蓮なししかいふ君がひげなきかごと。（萬葉）

●法師らがひげのそりくひ馬つなぎいたくなひきそ法師なからん。（同）

●髭つらな人な咎めそ年の市。（芭蕉）

●名月や歌人に髭のなきがごと。（蘆雪）

●髭剃るな後の月見は宗祇庵。（蓼太）

●青柳や怒らぬ時の美髯公。（同）

●馬鹿面に白き髭見ゆ今朝の秋。（凡董）

●余所はみな若葉に髯の穗蓼哉。（也有）

●髭かくるやと薩にかざす藪柑子。（杉風）

●髭白きかたうど得たり梅の花。（北枝）

●老猫の髭に冬至の日ざしかな。（春樹）

●春の雪宗祇の髭に植うる程。（福來）

●祇や鰹や髭に落花を捻りけり。（蕪村）

●唐土の人かとぞみる三吉野の花に髭をもそらぬ山がつ。（眞顏）

●ぬく髭の數もひにふに塗壁どの夜蕪かぶろがなぶり返した。（百子歌）

●髭黑の田長やあびん苗代のこやしの灰をちらす春風。（勇也）

●むさし野の薄に似たる胸髭の中を流るゝ汗や逸水。（綾文）

●てる月のかゞみに向ふ關守はながめながらに髭や拔くらん。（俊滿）

●これみよと髭かきなでゝかゞみ解海老のめでたく春や迎へん。（仙高）

●田つらさへ氷消えてはよる波にあらひてやみん草の寄髭。（花丸）

●うの花の月見て是れも老いぬらんとまる蝴蝶の髭の白きは。（百羽）

●髭有りてひつじに似たる唐人はみくにの紙をほしとこふとか。（復春）

●船のはらかわかさずしてつかへんとわびし泪に髭もぬれけん。（水枝）

●勘當のそせうのたしに髭がなり。（川柳）

●著て見やと母は俄にひげがはえ。（同）

●ひだち坊飛魚らしいひげが生え。（同）

●鵜をまつうちに早太は髭をぬき。（同）

●ひやうし木へひまな下座見の髭がはえ。（同）

●たはけめといつては髭を一本ぬき。

●髭を抜ききると辻番風なり。（同）
●月隠も神楽の間髭をぬき。（同）
●むや〳〵の闕守髭をはやしてる。（同）
●髭わさの鏡に嬢氣をへらし。（同）
●しほふきやおたふくなして髭を剃り。（同）
●祖父の髭は七日に生えて八日にすちり。（俚諺）
●お髭のちりをとる。（同）
●三歳兒に髭のはえたやう。（同）
●我觀二人鬢一、長而復黑、冉冉而調、離々若二綠坡之竹一、鬱々若二春田之苗一、因レ風披拂、隨レ風飄颻、留乃附以二豐頤一、表以二蛾眉一、數以二素顔一、昂以二妍姿一、約之以二纖纖一、調レ之以二芳脂一、萃々翼々、靡々綏々、振レ之數二暮鬱一、若二元珪之乘一。於是搖レ鬢奮レ髭、則論二說唐堯一、鼓レ鬢動眉、則研二覈藏否一、內官墜レ形外闕レ宮。相如以之閒レ部、顔孫以之棠々。豈若レ于晉、既亂且緒、枯槁悉瘁、劬勞辛苦、汗垢流離、汗穢泥土、倫嘯攜擕、與レ塵爲レ伍。無二素顔可レ依、無二豐頤可レ恃。動則因二於怒風一、靜則窘二於薄命一、爲髭正苦、于頤一、爲身不レ能レ庇二其四體一、爲レ智不レ能レ飾二其形駭。癩鬢瘦面、常如二死灰一、曾不レ如二犬羊之毛尾、狐狸之毫蓋一。爲二子鬢一者、不二亦難一乎。（王褒）
●到處逢レ人求二至藥一。幾回染了又成レ絲。素絲易レ染髭難レ染。墨髭當年合レ泣髭。（劉駕）

【びじん】美人

國色。蕙性。蘭心。雲鬢。花顔。蟬髮。蛾眉。傾城。絶代。明眸。皓齒。窈窕。遠山眉。花見羞。くはしめ。たをやめ。つきの眉。花のおもわ。ゆきのはだへ。

●爰に弘農の楊玄琰が女に楊貴妃といふ美人あり。是は其母貴嬪して、楊の陰にねたりけるに、枝より餘る下露、婢子におちかゝりて胎內に宿りしかば、更々人間の類にてはあるべからず。只天人の化して此土に來るものなるべし。紅顔翠黛は元來天のなせる實なれば、何ぞ必しも瑠粉金膏の假なる色を事とせん。漢の李夫人を寫しゝ畫工も是を畫かば、遂に筆の及ばざる事を怪み、巫山の神女を賦せし宋玉も是を讃せば、自言の方に卑しからん事を耻ぢなん。實語るをきゝても迷ひぬべし。況や其色を見ん人をや。かやうにわりなく覺えし顔色なれば、時の王侯、貴人、公卿、大夫、媒妁を求め、婚禮を厚くして、夫婦たらん事を望みしかども、父母かつて許さず。秘して深窓にありしかば、天々なる桃花の曉の露を含みて、牆より餘る一枝の、霞に匂へるが如くなり。或人是を媒して、玄宗皇帝の連枝の宮、寧王の御方へ進らせけるを、玄宗天威に誇りて、濫に高將軍をさし遣して、道より奪ひ取りて、後宮へぞ册き入れ奉りける。玄宗の叡慮寧王の御愚、花開く枝の一方は折れてしほめるに相似たり。されば月來二前殿一早。春入二後宮一遲と詩人も是を題せり。尋常の爽梅樹折れて、軍將に上れば一段の清香人を感ぜしむ。民屋蕭颯たる衰楊柳、移りて宮苑にいれば、千尺の翠條別に春風長かるべし。さらでだに妙に勝れたる容色の上に金翠を莊り、薰香を散せしかば、只獸喜園の花の陰に、舍脂夫人の粧をなして、春に和せるに異ならず。一度君王に面をまみえしより、紬の中の珊瑚の玉、掌の上の芙蓉の花と、見る目もあやに御心

遠びしかば、暫も其側を離れたまはず。晝は終日に鬢を共にして、南苑の花に醉を勸め、夜は通宵席を同じうして、西宮の月に宴をなじ給ふ。（太平記）
●姫はことし二十に滿たず。容顔固より玉をあざむく。巫山の山神が雲となりし夢の面影を留め、小野小町が花に比べし歌の風情を殘せり。金屋の內鶴隙の下に、やしなはれ給ひしは更にも言はず、今山居久しうなりて、衣裳は垢つき破れたれど、肌膚は殘の雪より皓く、くろきかみ梳るに由なけれども、綠の髮春の花より芳し。細腰いよ〳〵複せて、風にたへざる柳の如く、玉指ほそ〳〵細りて、笹に慣める竿に似たり。（馬琴）
●次に吉原雀の、品よく止りし竹の葉の、亂れし髮もいはけなき乙女の姿、稍憂愁ずるも猶天津風、雲の通路吹きとぢし、樂屋の唐紙さとあきて、二八ばかりの艷女、燈籠髮の透額、烏帽子水干きの國の、道成寺へとまひ出でたるにぞ。作りし眉もさえ〳〵として、君が名字のよだれをながし。名まへおみきの醉心地、思へば〳〵この子の金箱を引摺いでも失せまほし。（鶯山人）
●いたはしやな小町は、さもいにしへは遊女にて、花のかたちかゞやき、桂の眉墨青うして、白粉を施さず、羅綾の衣多うして、桂殿の間に餘りしぞかし。歌をよみ詩を作り、醉ひをすゝむる盃は、淡月袖に靜なり。まことゑなる有樣の、いつ其ほどにひきかへて、頭には霜蓬をいただき、嬋妍たりし兩鬢も、はだへにかじけて墨みだれ、艷々たりし雙蛾も、遠山の色を失ふ。百年に一年足らぬつくもがみ、斯かる愚は有明の、影はづかしき我身かな。（謠曲、卒都婆小町）

●春は春遊に入つて、夜は夜を專とし、後宮の佳麗三千人、三千の寵愛一身に在り。かく類なき貴妃の紅色、芙蓉の紅色かへて、未央の柳の力もなし。たゞよわ〳〵と伏柴の、露の命もいかならん。心づくしの春の夜の、木の間の月も朧にて、雲井に歸る雁金も、我如くにや鳴き渡る。霞の內の櫻、ひとへに惜しき姿かな。（謠曲、皇帝）
●疑をも上げずひれふすや、翠翅金雀とり〳〵に、かざしの花もうつろふや、枕波の斜紅の、世に類なき姿かな。實にや春雨の、風に從ふ海棠の、眠れる花の如くなり。（同）
●梨花一枝、雨を帶びたる粧ひの、大液の芙蓉の紅、未央の柳の綠も、是にはいかで優るべき。實にや六宮の粉黛の、顔色の無きも理や。（謠曲、楊貴妃）
●小町が歌をこそたゞこと歌の、ためしに引くのみか我ながら、美人の形も世に勝れ、餘情の花と作られ、桃花雨を帶び、柳髮風にたをやかなり。（謠曲、鸚鵡小町）
●いづれを見るも妙にして、柳髮風にたをやかに、桃顔露を含んで、色猶深き姿なり。中にも昭君は、ならぶ方なき美人にて、帝のおぼえめでたかりしなり。（謠曲、昭君）
●先一番は豐原のもゝえが娘二ゐの君、りさんの春のにほひ水、肌へのつやの暖かに、夜半のはつどこ引しめて、寢てもらひたき條や、目もとゐだかき眉ぐもり、笑ふがごとく見えにけり。次にかけしは吉峰のちふるが妹、春風といふ女、いかなるふのぐ何筆に、寫せばうつす顔面は、今さき出でし初櫻、にひ鐵漿のうば玉も、人の心を暗になせとや迷へとや、ア〳〵しづめとや、たれか氣まゝに書きなせし、筆のすさびも

鯨ましと、しばらくながめ玉ひけり。扨又つぎは中納言、せきをが娘明石ぎみ、近江の兵衛が卯の花山吹、はらからの美女、紀のやすむねがをとの姫、八重といへるは幼なき振分髪の亂れても、心ちらさで一心に、いづこの殿がしたひもを、結ぶの神の神心、かれて聞きたし問はまほし。第七番にかけたるは、おほゐの長者がやうし式部の前、おめをおびたるとこなつの、風にめさます笑ひがほ、みどりのふきびん嬋妍として、八字のほそまゆ宛轉たり。實に三千の憂ぐさも、色香うしなふためしにて、唐の虞氏君王昭君、貴妃李夫人をうつす共、此上はよもあらじとやや〳〵、見とれたまひければ、君をはじめたてまつり、伺候の官女かんだちめ、末世の美人これなりと、のゝめきさゞめきたまひけり。

（淨瑠璃、國姓爺後日合戰）

●情懷樣の色小袖、追風淺く香らせて、錦手携へ出で給ふは、巫山の神女雲となり、雨となり好し振も好し。三十餘人の女郎も、花の逸りの深山木と、景色推されて見えければ、さては國司の物好きも、見處ありしと聞えける、八十間の長廊下、十六間の欄干を、寛く歩ませ給ひしは、晴れざるに何の虹、花を吐くかとあやまたる。

（淨瑠璃、小栗判官）

●あけぼのに霞こめたる花よりもあかぬは妹がにほひなりけり。（大進）

●女郎花めでたきはなのすがたかな衣通姫もかくやありけん。（兼昌）

●繪にかくと筆も及ばじ少女子が花のすがたを誰に見せまし。（仲實）

●さしかざす扇のつまのほつ〳〵にきみのにほひぞこぼれかゝれる。（春門）

●すきかげもこぼれて匂ふ花櫻をすのうちにはたれかうゑけん。（諸平）

●いざやまだ憂世にふらぬ姿かな竹よりいでし少女なるらん。（同）

●うべしこそ背きたつめれかへり見ばいくその國もかたぶきやせん。（雲翁）

●十六は美人の圖なり月の色。（支考）

●扇に入りて美人に馴るゝ燕かな。（嵐雪）

●春風におさるゝ美女のいかりかな。（曉台）

●花手折る美人縛らん春一夜。（几董）

●背梅に眉あつめたる美人哉。（蕪村）

●琵琶を抱く月滿面の美人かな。（大江丸）

●梅の花美人來れり漸二更。（召波）

●涼まうとすれば美人の座敷哉。（葛古）

●春雨に大欠伸する美人かな。（一茶）

●元日や雨に美人の高鼾。（蓼太）

●柳陰美人を抱く時も有り。（同）

●花の陰笑ひ上戸の美人あり。（蘭更）

●魂をうばひ取つたる曲者のすがたは柳顔ばかりいだう。（楠洲）

●天上より落ちし美人はさもなくて嶋地の王の腰や拔かさん。（武雄）

●酒の池肉の林にすむものは姿にかなふ洗魚落雁。（澄丸）

●たをやめの姿のみかは客人の投げうつ文も雁落る如。（爛圭）

●見てだにも人の命やけづるらん小野となのりし美しき人。（文丸）

●白妙に美人もしかず芙蓉峰。（川柳）

●百姓がなけば美人は笑ふなり。（同）

●勾當の内侍因果とうつくしい。（同）

●夕もみぢ道きく美女の物凄し。（同）

●内ぞゆかしき籠わきの美しさ。（同）

●不受不施のくせに容顔美麗なり。（同）

●うつくしい顔で掲貴妃ぶたを喰ひ。（同）

●美人天上より落ちたるはそとわ也。（同）

●天氣迄美女いふなりの歌の德。（同）

●秋風に團扇の美女も祇王程。（同）

●竹を出た美人五人にふしを言ひ。（同）

●殿樣をからぼりにする美しさ。（同）

●向ひ小寺を誰が建てた、日本長者の乙姫、みめよく肌美く、かたちよく、手にはにほんの玉を持ち、足には黄金の沓をはく。（俗謠）

●千代も替らぬ夫定め、されば いなばの遠山松よ、これは美し乙女子の、昔を今に舞の袖。（同）

●美人といふも皮ひとへ。（俚諺）

●美人の終は鏡になる。（同）

●美女は惡女の仇。（同）

●富士山の見える國には美人が出來ぬ。（同）

●遙見二窓下人一。娉婷十五六。霞光抱二明月一。蓮體開二初旭一。綵紗雲雨仙。氛氳蘭麝馥。風流薄二綺洗一。時世寬二袙束一。袖帙二異文綬一。裙輕二單絲縠一。裊腰銀絲壓。桃掌金筐盤。碧顏紫滿蔔。袴花紅石竹。凝レ情都未レ語。付レ意微相瞩。眉敏遠山寄。髮低片雲絲。

（白居易）

●曉院鹿鹿鳴二露井一。玉人夢斷梨雲冷。起開二妝閣一笑窺レ奇。月裏分明見二蛾影一。自對猶憐況主家。春風一面斷腸花。何由錦入二寄銅內一。不レ遣二秋霜換二蛾翠一。（高啓）

●裙影搖レ風月滿身。輕々裊折一枝春。玉肌冰骨爭二清艷一。孰是梅花孰美人。（支峰）

●杏腮桃面太妖嬈。占二得春風一色轉饒。不二是江郎持二彩筆一。愛卿眉黛有レ誰描。（星巖）

●手如二柔荑一。膚如二凝脂一。領如二蝤蠐一。齒如二瓠犀一。螓首蛾眉。巧笑倩兮。美目盼兮。（詩經）

●一枝濃艷露凝レ香。雲雨巫山枉斷腸。借問漢宮誰得レ似。可憐飛燕倚二新粧一。（李白）

●芙蓉不レ及美人粧。水殿風來珠翠香。却恨含レ情掩二秋扇一。空懸明月待二君王一。（王昌齡）

●褒國夫人承二主恩一。平明騎レ馬入二金門一。却嫌脂粉汚二顏色一。淡掃二蛾眉一朝二至尊一。（張祜）

●温泉寺畔晚鐘殘。出レ浴雙肌汗未レ乾。銀管吹レ煙香裊郁。青山影裡倚二闌干一。（船山）

●何處佳人婀娜裝。青山初日照二流黃一。輕羅半掩金跳脫。春寺燒レ香逢二貴妃一。（金大轡）

〔ひと〕人

人類。人性。人品。人道。人間。人界。人倫。非人。神人。聖人。人がら。もろ人。ひとゞ〳〵。人の身。うけがたき身。

●行く川の流はたえずして、しかももとの水にあらず。よどみに浮ぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとゞまることなし。世の中にある人と住家と、またかくの如し。玉敷の都の中に棟をならべ甍を爭へる尊き卑しき人の住居は、代々をへてつきせぬものなれど、これをまことかと尋ぬれば、昔ありし家は稀なり。或は去年破れて今年は造り、あるは大家滅びて小家となる。住む人もこれに同じ。處もかはらず、人も多かれど、いにしへ見し人は、二三十人が中に、僅に一人二人なり。朝に死し、夕に生るゝならひ、唯水の泡にぞ似たりける。知らず生れ死ぬる人、何方より來りて何方へか去る。

長明

●かゝる貴人の子たりとも、その傳のいやしければ、おのづからみのいやしきにうつるべし。人はその地の質をうけ、性に有てる土地がらの氣質を、天地は左あらしむるとも、非常の草木だに、移しうゝれば類をかふる自然にして、いはんや善なる性を備へし人の際においてをや。（洪園）

●現彼人の薄情なる、恋の爲には、その身の安危も思はぬ、烏滸の白物なりしを、只一旦の恩義に感じて、はやくそなたをめあはせしは、うたてや人を知らざりし。わなみの淺慮、そなたの薄命、箭五郎といひ奥手といひ、めのよる方へたまもよる、これにつきても世間に、人たる人は稀なりけり。とばかりにして人の不實を怨みて、仇の思をまさば、共に不實の人となりてん。人の心はとまれかくまれ、今一たび救はんと思ひにければ、さのふひそかに里正刀禰と、故老達にうちかたらひつ。願書を立野の御陣にもてまゐりて、命乞をせん爲に、準備大かた整ふたり。（馬琴）

●人は、天地の靈なり。天地は、かぎろところなし。人の性なんぞことならん。寛大にして、きはまらざる時は、喜怒これにさはらずして、ものゝためにわづらはず。（衆好）

●あらおもしろのくちずさみや、右近の馬場のひをりの日、むかひに立てる女車の、所からなる昔語り、はづかしながら今はまた、我身の上に業平の、何かあやなくわきていはん、おもひのみこそしるべなりしを、左様にながめしことのはの、其舊跡もこゝなれば、今またかやうに事問ふ人も、いつなれもせぬ人なれども、たゞ花故に北野の森にて、言葉をかはせば、みずもあらず、みもせぬ人や花の友、しるもしらぬも花の陰に、相宿りしてもろ人の、いつしかなれて花車の、相立て、木の下に、下りゐて、いざやながめん。（謠曲、右近）

●柳箱鏡奩の此鏡より世の中は、人こそ人の鏡なれ。人の振り見て我振の、善きも惡しきも身の手本、畫に書く筆のすさみには、京や大阪の上臈も、心で見れば今茲に、吉野初瀬の花も見る。（淨瑠璃、鎗の權三）

●ありがたき人になりけるかひありて悟りもとむる心あらなん。（西行）

●うけがたき人の姿にうかみ出でゝこりずや誰も又沈むべき。（同）

●玉ちはふ神のむすびにうまれつる人としらざる人ぞはかなき。（廣高）

●田の面より我門さしてくる人の近づかぬまに誰としらばや。（言道）

●ひく人もひかるゝ人も水の泡のうき世なりけり淀の川舟。（大綱）

●なき名のみ辰の市とは騒げどもいざまだ人をうるよしもなし。（人麿）

●なに事を思ふ人ぞと人とはゞこたへぬ先に袖ぞぬるべき。（慈圓）

●思へども猶ありがたき契かなこのたび人に生れぬる身は。（良印）

●花よりも人こそあだになりにけれいづれを先にこひんとか見し。（もちゆき）

●人選びして一人なり花の陰。（一茶）

●此雲がむかひにおこす人も人。（嵐雪）

●人に似て猿も手を組む秋の風。（珍碩）

●見しりあふ人のやどりの時雨哉。（荷兮）

●ゆふがほの淵むは人のしらぬ也。（野水）

●明月や遠見が松の人もなし。（圓水）

●秋の夜や山鳥の尾に是の人。（支考）

●人の身はまはり燈籠にさも似たり火がきえぬればいきぞとまれる。（行順）

●鶴しいや鶴もいや松竹もいやたゞの人にて死ぬぞめでたき。（赤良）

●まことある言葉傳へて月花にあそべよ人は萬物の靈。（の庵）

●いつはりは人間にあり室の梅。（川柳）

●人を汲み出すと井戸がへ仕舞なり。（同）

●歌がるた人といふ字に手が五つ。（同）

●人同じからず花見の仲間われ。（同）

●翁さび人なとがめそ旅ばおり。（同）

●その昔せんだくの場へ人がふり。（同）

●白澤はわきしやう門で人を見る。（同）

●山入はにたり四人つよい人。（同）

●井戸端へ人の噂を汲みに行く。（同）

●人目おしはず人さへいはにや、おつて者しよぞやたつじまを。（俗語）

●人は見掛に依らず。（俚諺）

●人を見て法を説け。（同）

●人間萬事塞翁の馬。（同）

●人に一癖。（同）

●人を鏡とせよ。（同）

●人の口恐ろし。（同）

●形於上者謂之天。形於下者謂之地。命於其兩間者謂之人。形於上、日月星辰皆天也。形於下、草木山川皆地也。命於其兩間、夷狄禽獸皆人也。曰然則吾謂禽獸人可乎、曰非也。指山問焉、曰山乎、曰山可也。山有草木禽獸皆擧之矣。指山之一草而問焉、曰山乎、曰山則不可。故天道亂而日月星辰不得其行、地道亂而草木山川不得其平、人道亂而夷狄禽獸不得其情。天者日月星辰之主也。地者草木山川之主也。人者夷狄禽獸之主也。主而暴之、不得其爲主之道矣。是故聖人一視而同仁、篤近而擧遠。（韓愈）

●一抹平林烟夕暉。山烟漠漠燕飛飛。倚欄遙認天邊電。何處行人帶雨歸。（趙乘文）

●故園共酌菊花觴。往事悠々十二霜。人在洛城秋色裡。鴈風燕雨過重陽。（星巖）

●伐木丁々入遠林。骨骸不厭白雲深。請看鉤餌親淵者。猶是人間機巧心。（淡窓）

●四海聲名難著我。一坡風月正宜人。（張至龍）

●人有氣、有生、有知、亦且有義。故最爲天下貴也。（荷子）

●與人交外淡中堅。（白居易）

●漫然清世一閒人。（張子）

〔ひとり〕 獨

獨棲。獨往。獨立。獨行。孤獨。單獨。

ひとりだち。ひとりゐ。友なし。

捨小舟。友なし小舟。

●世の理をも辨へ、身の行末をも思ひ給はゞ、七十になり給ふ父の、病氣によりて出家遁世して、遥みて來り給ふをだに斬るほどの不當人の、まして我々を助けたまふことあらじ。哀はかなき事し給ふ頭殿かな。是は清盛が和讒にてぞあるらん。多くの弟を失ひ果て、只一人になして後。事のついでに減さんとぞ計らふらんを曉らず。只今我身も失ひ給はんこそ悲しけれ。（保元物語）

●ゆかしくしたまふなるものを奉らんとて、源氏の五十餘卷櫃に入りながら、在中將、とほぎみ、せり川、しらゝ、あさうづなどいふ物語ども、一袋とり入れてえて歸る。心地の嬉しさぞいみじきや。はしなく

僅に見つゝ、心もえず、心もとなく思ふ源氏を、一の巻よりして。人もまじらず、几帳のうちにうちふして、ひき出でつゝ見る心地、后の位も何にかはせん。（孝標女）

●もし念佛ものうく、讀經まめならざる時は、自ら休み自ら怠るに妨ぐる人もなく、また耻づべき友もなし。殊更に無言をせざれども、ひとり居れば口業ををさめつべし。必禁戒をまもるとしもなけれども、境界なければ、何につけてか破らん。（長明）

●同じ心ならん人と、しめやかに物語して、をかしき事も、世のはかなき事も、うらなくいひ慰まんこそ嬉しかるべきに、さる人あるまじければ、露たがはざらんとむかひゐたらんは、一人ある心地やせん。（兼好）

●風のたよりと思へども、夏もはや杉のまどの、秋風ひやゝかに吹き落ちて、圍雪の扇し雪なれば、名をきくもすさまじくて、秋風うらみあり。よしや思へばこれもげに、あふは別れなるべし。其むくいなれば今さら、世をも人をも恨むまじ。只おもはれぬ身のほどを、思ひつゞけて獨居の、班女が園ぞさびしき。（謠曲、班女）

●くちなしや我一の谷にていかにもなる身のいけどられ、今は東のはてまでも、かやうに面をさらす事、前世の報といひながら、又おもはずも父命により、佛像を亡ぼし、人命をたちし。現當の罪をはたす事、前業よりなほはづかしうこそ候へ。げにげにこれはおんことわりさりながら、かゝるためしはいにしへ今に、多き習ときくものを、獨となゝ歎き給ひそよ。（謠曲、千手）

●薪負ふ友もなくて、獨山路の花の陰に、長休みしつる恥づかしやと、夕の雲に立ち隠れて、志賀の宮路に歸りけり。（謠曲、志賀）

●愚の者の言ひごとや、獨生れて獨死す、誰をか友と岩間水、疾々歸れと宣へば獨入らせ給ひては、衆生濟度の血縁は何と、出入る月の光こそ、我無始無終のともなひよ。いや月には友なきぞとよ。衆生を照さば月は友、蟲る衆生をさて如何に、蟲らば蟲れ其儘に、月は昔の友なれや、言はじや聞かじむづかしや。來年出づべき家無ければ、山とて入るべき山もなし。（淨瑠璃、釋迦如來）

●きりぐすなくや霜夜のさむしろに衣かたしき獨かもねん。（萬經）

●岩がねの床にあらしをかたしきに獨やねなんさよの中山。（有家）

●二人ゆけどゆきすぎ難き秋山をいかでか君がひとりこゆらん。（大來皇女）

●みゆきふりさえゆく夜半にかしのみのひとりねるゝをあはれともしれ。（諸鳥）

●いつまでか草をかさねて獨のみしきしのふべき床のさむしろ。（通蓮）

●くろかみの長きこの夜をひとりのみ亂れてものを思ひあかさん。（蕃蹊）

●たゞひとりまろねするよの夜長きをあひ見るよはになすよしもがな。（春海）

●ひとりのみながむるそらをわたる雁おもふわたりへなきて行かなん。（後瀬子）

●門すぐる風をしるべに樫の實の一人いでゝも拾ふうなゐか。（諸平）

●夕日さす野澤の末の山かげに若菜つむ子やひとりなるらん。（魚貫）

●さみだれや田中に動く人ひとり。（蓼太）

●海風たゝみもむづかしき世や獨住。（嵐雪）

●おぼろ月宇治の山邊を一人行く。（曉臺）

●藪入にねるや一人の親の側。（太祇）

●畑打や耳うとき身の只一人。（蕪村）

●暮山の雨松茸のすゞ〳〵と獨。（杉風）

●愚痴々々と獨に更ける月見かな。（鬼貫）

●獨寢もよき宿とらん初子の日。（去來）

●五月雨の音をきゝわくひとり哉。（白雄）

●木兒の獨笑ひや秋のくれ。（其角）

●獨居の野分ながらに朝寢哉。（召波）

●かはりしを恨みわびたる獨寢になみだばかりはふたりまへなる。（春風）

●毋のちゝ父のすれこそこひしけれ獨りでくらふ事のならねば。（光）

●先御膳すんだはなどゝひとり者。（川柳）

●ひやめしの時がりをするひとり者。（同）

●ひとりものどうぶるひする飯をくひ。（同）

●匙をひつてをかしくもなしひとりもの。（同）

●御製にもれしかまどのひとりもの。（同）

●ひとり見る花にくびれた酒なのみ。（同）

●一人者内からしめて頓死する。（同）

●ひとりもの店賃ほどは家に居ず。（同）

●川向の隣へたまる一人者。（同）

●一人ものひとなぐりだと笹をかひ。（同）

●夜半に君ひとり行くらん盜みぐひ。（同）

●みよや夕の小笹の螢、あれといはんも一人かな。二人そひねの蚊屋つりぐさに、夜半のつゞみのかぎりをうらみ。あるはあけゆくかねごとか。（俗謠）

●ほんに世界の妻ともなれば、男ひとりを守の神の綱さへ切れて、こよひ〳〵とまつ身はあけて、今朝はむかしの鐘のこゑ。（同）

●文はあまたにかことはまゝよ、思ひそめしは只一人。（同）

●孔子見老聘。老聘新沐。孔子便而待之。少頃見曰、形體拙若槁木、似遺物離人而立於獨也。（莊子）

●善之爲道者、不誠則不獨、不獨則不形、不形則雖作於心見於色出於言民猶若未從也。（荀子）

●朝徹而後能見獨、見獨而後能無古今。（莊子）

●自我抱茲獨、覯俛四十年。（陶潛）

●廣蹠天地間。偃蹇惟我獨。（陳淳）

●君子必愼其獨。（大學）

〔びは〕琵琶

四絃。半月。中虛。素桐。龍首。丹柱。斜抱。清音。斷續。

なかばの月。四の緒。松風通ふ。涙をさそふ。

●上の御局の御簾の前にて殿上人日一日琴笛ふき遊び暮して、まかで別るゝ程、まだみ格子をまゐらぬに、おぼとなぶらをさし出でたれば、戸の開きたるが、あらはなれば、琵琶の御琴を、たゞ樣に持たせ給へり。紅の御衣のいふも世の常なる袿、又張りたるも數多奉りて、いと黑く艷かなる御琵琶に、御衣の袖を打かけて、とらへさせ給へるめでたきに、そばより御額の程、白くけざやかにて、僅に見えさせ給へるは、喩ふべき方なくめでたし。近く居給へる人にさしよりて、半隱したりけんも、えかうはあらざりけんかし。それはたゞ人にこそありけめといふを聞きて、道もなきを、わりなく分け入りて啓すれば、笑はせ給ひて、我は知り

たりやとなん仰せらるゝと、傳ふるもをかし。（清少納言）

❶一度冬籠のとものがらは、所願成就圓滿すと承れば、相もしうこそ候へとて、靜に法筵敷らせて居給へば、やう〳〵日暮れ、居待の月さし出でゝ、海上も照りわたり、社壇も淵靈さて、誠に面白かりければ、常住の僧、是はさこゆる御事なりとて、御琵琶を奉る。經正これを取りひき給ふに、上玄石上の祕曲には宮の中もすみわたり、實に面白かりければ、明神も感應に堪へずや思しけん、經正の袖の上に白龍現じて見え給へり。經正あまりのかたじけなさに、暫く御琵琶をさしおかせ給ひて、かうぞ思ひつゞけらる。

千はやぶる神にいのりのかなへばや
しろくも色のあらはれにけり。（平家物語）

●春秋の事などいひて、時に從ひ見ることには、春霞おもしろく、空ものどかにかすみ、月のおもてもいとあかうもあらず、遠うながるゝやうに見えたるに、琵琶のつがうてう、ゆるらかに彈きならしたる、いといみじく聞ゆるに、また秋になりて、月いみじうあかきに、空は霧わたりたれど、手にとるばかり、さやかにすみわたりたるに、風の音、虫のこゑ、とりあつめたる心地するに、箏の琴かきならされたる平調のふきすまされたるは、何の春とおぼゆかし。（孝標女）

❷又鹿兒島にありし時、森本見流なる人の家に招かれ、種々馳走の上、寶生といへる法師をよびて、琵琶をひかせり。遠近、五倫、花の香、小町、玉章、似我、墨繪、老曾の森、覺鶯の夢などいふうた數々ひけり。先其うたの名も雅にして其章もまた古めかし。其音のひきゝは、春の鳥の霞の中に囀るが如し、谷の清水の岩ほにむせぶに似たり。其しらべ高きは、冬の嵐の梢れ殘る松に渡るが如し。

●亡者の爲には何よりも、淒婆にて手馴れし青山の琵琶、おの〳〵樂器を調へて、糸竹の手向をすゝむれば、亡者も立ちより燈の影に、人には見えぬ者ながら、手向の琵琶を調ぶれば、時しも頃は夜半樂、眠りを覺すをりふしに、不思議や晴れたる空かき曇り、俄に降りくる雨の音、しきりに草木を拂ひつゝ、時の調子も如何ならん、いや雨にてはなかりけり。あれ御覽ぜよ雲の端の、月に叢の岡の松の、葉風は吹き落ちて、村雨の如くに音づれたり。面白やなりからなりけり。大絃は嘈々として、私語に異ならず。第一第二の絃は、索々として秋の風、松を拂つて疎韻おつ。第三第四の絃は、冷々として夜の鶴の、子を思つて籠の中に、鳴く雞も心して、夜遊の別をとゞめよ。（謠曲、經政）

❸その時重衡與に乘じ、琵琶をひきよせ彈じ給へば、また玉琴の絃合せに、あはせて聞けば、峰の松風かよひ來にけり。琴を枕の短夜のうたゝね、夢もほどなく東雲もほのぼのと、明けわたる空の、あさまにやなりぬべき、あさまにやなりなんと、酒宴を止め給ふ、おん心の中ぞいたはしき。（謠曲、千手）

●思ひよらずも琴の音の、押して御琵琶を給はりて、祖父は琵琶を調ぶれば、姥は琴柱を立て並べて、撥音爪音、ばらりからりからりばらりと、感涙もこぼれ、詠じも劣るばかりなりや。彈いたり〳〵面白や。（謠曲、弦上）

❹みるまゝに涙ぞかゝる四のをの行末ながきねにつたへても。（新待賢門院）

❺四の緒のおらべにつけて思ひ出でよ半の月にわれもわすれじ。（玉葉）

❻四の緒の調にそへし松風は聞きしにもあらぬねにや有りけん。（嘉喜門院）

●おもひやれ塵のみつもる四の緒にはらひもあへずかゝる涙を。（後京極院）

●涙ゆゑ半の月はくもるともなれて見し世のかげは忘れじ。（後醍醐天皇）

●四の緒の琴こそあらめ翁まろいかに遊へて引きすさぶらん。（藤平）

●月ごとの調もひきぞしらるらん四の時しる四の緒の琴。（太平）

●四の緒のしらべさやかに現はれて響るゝ月も光そふらし。（同）

●四の緒はみつのいつゝにひきかけて滿ちたる月の影に調べん。（直好）

●四の緒の半の月もかきくらし涙しぐるゝみちのそらかな。（袋樹）

●行春やおもたき琵琶の抱心。（蕪村）

❼帛を裂く琵琶の流や秋の聲。（巴人）

❽琵琶を抱く月滿面の美人かな。（大江丸）

❾雜水に琵琶聞く軒の綴哉。（芭蕉）

❿ひきすてし車は琵琶のかたきにて。（野水）

⓫梅椿琵琶の己の日も過ぎにけり。（蕚三）

⓬琵琶抱く膝のすれたる袷哉。（護物）

●辨天に似たる女の思ひきや琵琶をいだきて旅寢せんとは。（常恒）

●琵琶の緒の四筋にたらぬ燈に窓より遊ぶ横笛のむし。（眞顏）

●木ゝをみな法師となして琵琶の音にはら〳〵と降る時雨哉。（眞柴）

●さゞ涙のひざきもこもるびはの音にしがのうち風吹きやそふらん。（空々庵）

●蘭にあはれ見する涙のぽろん〳〵おちし平家やひく琵琶法師。（蘭水）

●ほとゝぎす唯一聲をさく市が彈き殘した琵琶の半月。（有斐）

●馬にのせて引き立つる時の琵琶にそふ君が涙やはらり〳〵はらりん。（先賀）

●落ちあしの駒こそ出でめ平家をばかたれる琵琶の瓢がたより。（一の屋）

❶おそれなくよつの緒をひくめしひ哉蛇をかへしゝ笛にあはせて。（鳳鳴園）

●むら雨のしらべも涼し水枝さす青山を名のたかき四つの緒。（槇の屋）

❷琵琶の弟子一人ふえると二人へり。（川柳）

❸琵琶の在る宅を三曲で御たづね。（同）

❹琵琶の曲行くもかへるも立ちとまり。（同）

❺六波羅の廿餘年を琵琶にのせ。（同）

❻琵琶の曲下手か上手かしれぬ也。（同）

❼六人の望で琵琶を御彈き〳〵。（同）

❽琵琶法師聞人は灰をかきならし。（同）

❾べろん〳〵は一門の物がたり。（同）

❿イヨ四糸と琵琶をほめてる大たわけ。（同）

●御詠歌を琵琶に合せる竹生島。（同）

●高麗もろこしの廿五絃、十三絃に日の本の、琴の糸筋みちすぐに、琵琶の四つ緒三の糸、引く薄霞しのゝめに、はつ梅づくし盡しなく、なほ幾春も久方の、月もおぼろに、春日野や。（俗謠）

●かねてやしりてうつしけん、手馴の琵琶の音にたてゝ、かきならしつゝなげくにぞ、今はかひなき四の糸。（同）

●潯陽江頭夜送客。楓葉荻花秋瑟々。主人下馬客在船。舉酒欲飲無管絃。醉不成歡慘將別。別時茫々江浸月。忽聞

水上琵琶聲。主人忘歸客不發。尋聲闇問彈者誰。琵琶聲停欲語遲。移船相近邀相見。添酒回燈重開宴。千呼萬喚始出來。猶抱琵琶半遮面。轉軸撥絃三兩聲。未成曲調先有情。絃々掩抑聲々思。似訴平生不得志。低眉信手續々彈。說盡心中無限事。輕攏慢撚抹復挑。初爲霓裳後六么。大絃嘈々如急雨。小絃切々如私語。嘈々切々錯雜彈。大珠小珠落玉盤。間關鶯語花底滑。幽咽泉流水下灘。水泉冷澁絃凝絕。凝絕不通聲漸歇。別有幽愁暗恨生。此時無聲勝有聲。銀瓶乍破水漿迸。鐵騎突出刀槍鳴。曲終收撥當心畫。四絃一聲如裂帛。東船西舫悄無言。唯見江心秋月白。嘆吟放撥插絃中。整頓衣裳起斂容。自言本是京城女。家在蝦蟆陵下住。十三學得琵琶成。名屬教坊第一部。曲罷長教善才服。粧成每被秋娘妬。五陵年少爭纏頭。一曲紅綃不知數。鈿頭銀篦擊節碎。血色羅裙翻酒汙。今年歡笑復明年。秋月春風等閑度。弟走從軍阿姨死。暮去朝來顏色故。門前冷落鞍馬稀。老大嫁作商人婦。商人重利輕別離。前月浮梁買茶去。去來江口守空船。繞船明月江水寒。夜深忽夢少年事。夢啼妝淚紅闌干。我聞琵琶已好手。曲罷曾教善才服。座中泣下誰最多。江州司馬青衫濕。（白居易）

○江月未出明星懸。主人欲客夜不眠。座呼伶兒撥四絃。龍頭高撚玉軫圓。轉關未奏漢宮先。勞嚨咽切斷復連。澀如清澗溜凍泉。細如碧樹吟秋蟬。忽然繁急何蟲鬨。風沙滿把撒四筵。雁行驚起飛不聯。浮雲落葉俱紛紛。一聲抹斷萬里煙。夢入紫雲愁胡天。問渠怨恨有幾千。口不能說指爲傳。令人悵望思往年。梁園楚榭長周旋。惟中典宴羅綺鮮。夜遣飛騎迎嬋娟。低鬟出拜絲燭前。文絲香篠搭左肩。曲項紫鳳抱半偏。楓香一調妙入玄。好手正可羞重蓮。座間客客皆詞仙。舉杯邀我賦長篇。贈之醉寫蜀錦箋。可當二十萬纏頭錢。如今遠客江海邊。欲聞絲音久無緣。故人已散陵谷遷。生死流落俱堪憐。今宵聽此眞偶然。願影憔悴非昔妍。長河欲曙落遠川。暫當歡娛一反覆。向隅無言涕淚連。此身如在潯陽船。（高啓）

●金屑檀槽玉腕明。千絃撥撚爲多情。只愁拍盡涼州調。盡出風雷是撥聲。（張祜）

〔ひばり〕雲雀

鷚。囀天。天鷚。告天子。叫天子。

ひめひなどり。夕ひばり。ひばりの床。芝生におつる。雲ゐにあがる。燒野にかへる。霞むすかた。霞にまがふ。

●武藏野の草はみながら青み渡りて、大空につゞくみどりの色、えもいひしらぬに、雲雀の聲さへうち霞みて、ゆけどもく〳〵かぎりなく、長き日もやゝくだちゆけば、芝生

の巢をや思ふらん。夕日と共に落ちくる聲いとのどけしや。（高尙）

●雲雀なく空のどかに、行先の渡場とひながら、畑打のさせるに、がん首さし合せて、一ぷく吸ひ付けたる心こそ、漂母が飯の情より、うれしさはまさらめ。（也有）

●マヽ燒野の原を分けゆくに、妻とふ雉のこゑはるかにきこえ、菫の床を離るゝ雲雀、秋よりたつ心地していと近し。（陽綱）

●寂寥たる廢寺院、昔の餘波は礎のみ。淀々たる夏草の裡より、驚きたつ告天子は雲に入り、奇怪たる新樹の蔭には、郭公鳥の聲高く聞えたり。（馬琴）

●風は上なる松本や、雲雀落ちくる粟津野の、草の茂みを分け越して、瀨田の長橋うち渡り、野路篠原の草枕、夢も一夜の旅寢かな。（謠曲、綾馬）

●夏は鳥屋ぎはの、應に雌を忘れ伺、鳥屋伺ふ隙もかけ鶉、ねり雲雀取小鷹がひ。（謠曲、總角）

●彼等が父河津まで、代々一國の主なりしに、今身一つを置く處なし。賴朝は蛭が小島の流人なりしが、今六十餘州を掌にす。始る運、終る運、賴朝を討たんとは、假令ば揚る雲雀の影を追うて、水底に沈むが如し。平家數萬の鐵をさへ、賴朝が居城百里四方に寄せ付けざりし運命に、彼等の切先及ぶべきか。用心は無用の至り。（淨瑠璃、替我虎が磨）

●うら〳〵にてれる春日にひばりあがり心かなしも獨思へば。（家持）

●かすみつる空こゑあらめ草の原落ちてもみえぬ夕ひばり哉。（爲尹）

●道しらば我に教へよ夕ひばりやすくもあがる雲の上哉。（賴武）

●霞たつ春野のひばりなにしかもおもひあがりてねをばなくらん。（眞淵）

●おほ空はそこはかとなくかすむ野にこゑのみおつる夕雲雀哉。（春海）

●はるされば雲雀なく野の朝霞空にひばりのこゑばかりして。（枝直）

●いとゆふにながき日くらしつながれて中空にのみまふひばり哉。（千蔭）

●大空はかすみばかりの春ならんあがる雲雀の聲なかりせば。（有功）

●己が子のすだち誘ひて野の雲雀手も及ぶべき空にてぞなく。（言道）

●かの見ゆる園べのかたは朝雨のかすみになりて雲雀なくなり。（久胤）

●原中やものにもつかず啼く雲雀。（芭蕉）

●帆柱のせみより下す雲雀かな。（其角）

●田樂や仰向く口へ舞ひ雲雀。（許六）

●風呂數へ落ちよつゝまん舞ひ雲雀。（惟然）

●子や待たんあまり雲雀の高上り。（杉風）

●草麥や雲雀があがるあれ下る。（鬼貫）

●水雲や流れ〳〵て啼く雲雀。（闌更）

●落草の麥生ひそろふ雲雀かな。（蓼太）

●山陰の夜明をのぼる雲雀かな。（凡董）

●松風の空や雲雀の舞ひ別れ。（丈草）

●舞ひ雲雀籠の鳥屋が手に落ちて買ふ直も高くなりもこそすれ。（赤良）

●足引の山鳥の尾のながき日にせいくらべして立つ雲雀哉。（暮輔）

●舞ひ遊ぶ雲雀も風のいとがすみ引けばこくうにのしあがりぬる。（於古足）

●三日月のそりにも乘らん夕雲雀花のふゝきの山路あがりて。（田鶴丸）

●白雲にのるかとばかりみえつるは江口あたりの舞ひひばりかも。（玉丸）

●立ちのぼるけぶりにまけずおとらじとと

もにまかれる春の野ひばり。（原成）

●独人の行き通ふ道になり〳〵はきを引きたつる春の野雲雀。（曉雲）

●だん〳〵と聞けばたかねをあげ雲雀雲の上にもとりや有るらん。（蕉 ）

●春霞はしごになして野ひばりのだん〳〵〳〵とのぼる長閑さ。（里繁）

●晴りの野べにあまりて空に猶雲雀の聲の雲にこぼるゝ。（居安）

●あはびとるあまつみそらの舞ひひばり汝も夕はすにや入るらん。（未繁）

●揚げ雲雀人で申さば御ちやッぴい。（川柳）

●懸身から雲雀は聲をふるひ出し。（同 ）

●ゆくへいづくと定めなき、おみつが心亂れがみ、さら〳〵〳〵にわくかたも、なくは雲雀かやぶうぐひすの、野暮とやらちやと笑はさ花の、八重に思ひて一重に聞く。（俗謠）

●雲雀高く上れば天氣朗なり。（俚諺）

●叫天兒。叫天兒。天何高々汝何卑。麥隴風微春正熙。飛飛帶ㇾ聲淺ニ天宇一。凌ニ天宇一。造ニ天閾一。天閾深嚴虎豹蹲。義和鼓ㇾ日火鞭折。玉女投ㇾ壺雷電奔。嗟汝雖ㇾ勞徒爲耳。嗟能聽ニ汝區々言一。汝不ㇾ聞旋階鵷鷺皆拱默。福祿安全到ニ子孫一。（星巖）

●雛梁燕子畫檐雀。笑汝高飛也等閑。終日告ㇾ天天不ㇾ答。還低ニ倦翼一下ニ田間一。（竹外）

〔ひん〕貧

陋巷。衡門。破牖。寒釜。簞瓢。塵甑。牛衣。蝸廬。雨もる宿。まづしき。やれし衣。風もおひめおふ。うゑになく。たまらぬ。

●竹川因幡介正忠はいぬる寛永二年の秋、主君猫間光隆卿、木曾義仲に面叱せられ、憤に堪へずして自殺ㇾ給ひ、その家忽に滅亡せし程に、光隆の舍弟新太郎光實は、六曾を狙ひうたんとて、洛を忍び出で、家の子等はおのがさまざまに離散しつれども、正忠ひとり托孤の精忠を竭すに、その妻葛戸又夫に劣らぬものなれば、夫婦かひ〳〵し く光隆の後室八重垣の方と、幼君鈴若丸のおん供して、嵯峨の片ほとりなる大井のわたりに赴き、こゝにさゝやかなる草の舍を造りかけて、しばし身の置きどころとして、艱苦の中にはや三年あまりを經て、貯へもの も既につきたり。加旃正忠に老母ありて年の齢七十にあまり、目は盲ひて耳も聰らず。立居さへ自在ならぬに、一子于江松なほいはけなければ、是彼手足まつはりにて、よろづ便なきことのみなれば、夫婦が忠孝萱常にすぎたれば、いよ〳〵志をうつすことなく、君に事へ親に事へて、身の貧しきを憂とせず。しかるに八重垣の方は年頃積るもの思ひに、いといたう身も細り、光實は出で給ひしより、絶えて一度も信なかりしかば、是につけ彼につけて、心ぼそさもいやましつ。牡鹿鳴く嵯峨野の秋と詠じけん、うち悲しさを身ひとつにして、長き病つきに臥し給ひしが、病日にましてまくらのあがるべうもあらず。醫師も眉根をよせて、おこたり果てなん事おぼつかなしとさゝやくにぞ、正忠葛戸はいよ〳〵安き心なく、數もあらぬ夫婦が衣服、太刀、髮の飾なんど調度に至るまで、沽りしろなして藥を調へ、眞珠、熊膽、人參、すべて價貴きを厭はず、療治等閑ならずものせしが、頃し上十月の下旬なれば、おさけの水も寒けきに、物みなうりつくしてせんすべなし。

只この上は神佛の冥助を禱る外あるべからずとて、夫婦かたみがはりに、清涼寺、釋迦堂、清水寺の觀世音に參詣し、八重垣の方の、疾病平愈なさしめ給へと、いのる外他念なかりけり。（馬琴）

●さいつ年なやましうせさせ給ひたるけにや、御年のほどよりは、いたうくづをれ給ひて、いと弱うおはすなるものを、御心のまゝに樂しみ給はん道も絶えはてたるこそ、いともかしこくかなしけれ。人なみなみの貧しさならば、猶いかばかりもせんやうのありなんを、衰へはてたる家の内は、何ひとつおこなふべき業もなきぞ、かなしくも又くやしかりける。（廣道）

●そも顏子は陋巷にありて、いかさのめし瓢壺酒に、貧の樂をあらためずとや。さるを今世の人々借金の山なして、是を苦にすれば限なし。百までいきぬ身を持ちて、さのみは心をかなしめんや。一寸さきはやみの世ぞと、放言に腹うちたゝきて、我は貧に安んじたりなど、おなじ貧樂の引きことにいふは、やるせなき心のはらへならめど。（也有）

●けふの無駄走は業際里の掟にして、榮根咬み得ば百事なすべしを、貧の風雅の方人とはまゝ侍るなり。（同 ）

●實にや世の中に貧程悲しき事はなし。女の身にて諸人に交はり、石を引かんも耻かしければ、あちざる人に暇を乞ひ、何方へも行かばやと思ひ候ふ。（謠曲、千引）

●實にや閑窓に煙絶えて、春の日いとゞ暮し難う、弊蓽に燈消えて秋の夜長し。家貧にして親知少く、賤しき身には故人疎し。親しきだにも疎くなれば、よそ人はいかで訪ふべき。（謠曲、雲雀山）

●あゝうら山しき殿原が合戰や。せめて古道具の一領もあれかし、取つて投げかけ何百萬騎が中なり共、只一揉にかけ破り、兩陣の目を驚かせんものを。何をいふとも涙人の、紙子頭巾に鋤一丁、思ふに甲斐のあらばこそ、貧は諸道の妨と、世の諺も我身のうへ、えゝ無念口惜やと、こぶしを握り牙を噛み、男泣にぞ泣き居たり。（淨瑠璃、女樵）

●風まじり、雨ふる夜の、雨まじり雪ふる夜は、すべもなく、さむくしあれば、かたじほを、とりつゞしろひ、糟湯酒、うちすゝろひて、しはぶかひ、鼻ひしゝ〳〵に、しかとあらぬ、聲がきなでゝ、あれなおきて、人はあらじと、ほこらへど、寒くしあれば、麻ぶすま、ひきかゝぶり、布かたぎぬ、ありのことゞ、さそへども、さむき夜すらを、われよりも、貧しき人の、父母は、うゑさむからん、妻子どもは、こひてなくらん、この時は、いかにしつゝか、汝が世はわたる。天地はひろしといへど、あがためは、せばくやなりぬる、日月は、あかしといへど、あがためは、てりやたまはぬ、人皆か、われのみやしかる、わくらはに、人とはあるを、人なみに、あれもなれるを、わたもなき、布かたぎぬの、みるのごと、わゝさがれる、かゞふのみ、かたにうちかけ、ふせいほの、まげいほの内に、ひた土に、わらとさしきて、父母は枕の方に、妻子どもは、あとのべに、かくみぬて、うれへさまよひ、かまどには、烟ふきたてず、こしきには、くもの巣かきて、飯かしぐ、こともわすれて、ぬえどりの、のどよひ居るに、いとのきて、みじかきものを、端きると、いへるが如く、楚とる、さと長が聲は、ねやどまで、きたちよばひぬ、かくばかり、すべなきものか、世の中

のみち。（愚良）

●うちたえてつねになりぬるかねおひめ拠もうからぬ我心から。（言道）

●瀬にかはる家だにあらば飛鳥川まづしきけふの瀬もいとはじ。（大茂）

●われよりもまづしき人の世にもあればうばらからたちひまくゞるなり。（秋成）

●ゆきて見ん身のはれ衣も中々にうれしき春の花ぐもり哉。（名垂）

●野に山に心とびたつ春の日も身にはこてふのはねなだにえず。（同）

●かにかくに疎くぞ人の成りにける貧しきばかり悲しきはなし。（幸文）

●さかしらに貧しきよしといひしかどけふとしなればこゝらすべなし。（同）

●今はとてあかつき衣ぬがめどもあらためつべき新衣もなし。（同）

●久方の雨もる宿の板びさしいたくもよにはあはぬ我かな。（同）

●まどしきもうれしかりけりかく迄に人の心のくまをしらめや。（同）

●夜はになくたづも我子はおほふべしやつれはてゐる独ぞかひなき。（易興）

●貧乏な儒者訪ひ来る冬至哉。（一茶）

●貧乏の御下風敷や蕪子花。（蕪村）

●化けながら狐貧しき師走かな。（同）

●貧乏な耳にたまらぬみぞれ哉。（其角）

●貧つみて貧なる女機による。（許六）

●貧乏な烏賊の黒みにかたなみ。（芭蕉）

●一町の貧者先だつ幟かな。（沾徳）

●我貧は掛乞の来る事もなし。（曉臺）

●富む家も貧しき家も梅さきぬ。（五明）

●貧乏性いたゞく星や杜宇。（白雄）

●うつり香の蒜貧しさよ鍋の蓋。（召波）

●四方からひつぱり磨著のひまもなく貧乏病もいへの一流。（鶴人）

●木好の貧乏な身は富貴てふたからかぞへて見る隣草。（東作）

●痩世帯たゞ貧乏に花さかず牡丹は今は株がついても。（存賀）

●形身こそ今はあだなれなき親のゆづりおかれし貧乏の神。（芳園）

●富はいかに我貧しさは雨もりのその度々に家をうるほす。（田造）

●いつはりのある世なりけり神無月貧乏神は身をもはなれぬ。（花盛）

●貧藏へ本尊は移し佛壇の燈もかけ持の家のともしさ。（雄長老）

●盗人も見むかぬ程のあばら屋を夜な〳〵月ののぞき社すれ。（樂人）

●白波のよらぬもむべな夕まぐれつまみとるべき鹽だにもなし。（夢見）

●源左衛門あじろに組んだ足袋をはき。（沙汰麿）

●貧乏も替我ほどすれば名が高し。（川柳）

●よい男貧乏神の氏子なり。（同）

●螢がりおもひ付いたは貧學者。（同）

●大黒を貧乏神と納所いひ。（同）

●隣から借りやう貧家のなれ〳〵し。（同）

●宮芝居いかにも替我が貧に見え。（同）

●ちう三を貧乏神とおやぢいひ。（同）

●貧乏を長者うちやむ高野山。（同）

●清貧の佐野のわたりを銀世界。（同）

●それ天人には五衰、人間には八苦とて、八つの苦のあるその中に、貧ほどつらきものはなし。貧苦とだにもなりぬれば、うとき人にはいやしまれ、旦暮に衣重ねゝば、夜寒さいとゞたへやらず。朝夕がとぼしければ、ことゝひかはす人もなく、ひとりじゆんぎに交らねば、なぐさむ方も更になし。たま〳〵列座に連りて、心はがうじやうに、人にすぐれて見ゆれども、重の衣がうすければ、かたみしよぼらで口惜しや。（俗謡）

●貧は病より苦し。（俚諺）

●家貧しくして孝子出づ。（同）

●稼ぐに追ひ付く貧乏なし。（同）

●貧乏間なし。（同）

●貧すれば鈍する。（同）

●金持の貧乏人、貧乏人の金持。（同）

●嘆息又嘆息。園中有ㇾ衆行人食。貧家女爲ニ富家一機。翁世隔ㇾ塵不ㇾ得ㇾ力。水寒手澁絲脆斷。續來續去心腸烟。單蟲促々機下啼。兩日織成一匹半。輸ㇾ官上頭有ニ零落一。姑未ㇾ得ㇾ衣身不ㇾ著。當ㇾ窓却淺實樓姐。十指不ㇾ動衣盈ㇾ箱。（王建）

●寒生ニ肌粟一苦ニ衣單一。夜減ニ頭圓一覺ニ帽寬一。荒寂在ㇾ家猶逆旅。窮空養ニ老亦蔬餐一。柴實纔突膽烟細。齋盞燈釭照ㇾ字難。猶幸新醯三斗熟。半窓梅影助ニ清歡一。（陸游）

●貧居仍是舊實既。刺ㇾ骨霜威已凜然。殘菊再爲ニ重九節一。早楓漸近小春天。惟餘ニ白髮一存ニ公道一。不ㇾ免貧楊尼ニ閔年一。且倒生前一抔酒。家窮喚起醉中眠。（星巖）

●冠蓋間居少。罈瓢陋巷深。稱ㇾ家開ニ戸牖一。量ㇾ力置ニ園林一。儉薄身都慣。營爲力不ㇾ任。飢來ニ一片肉一。暖臥ニ兩重衾一。樽有ニ陶潛酒一。爐無ニ陸賈金一。莫ㇾ嫌貧活計。更窮即勞ㇾ心。（白居易）

●朔風飄ニ胡雁一。慘澹帶ニ砂礫一。長林何蕭々。秋草轉更碧。北里富蕭瑟。天高樓夜吹笛。焉知南隣客。九月猶絺綌。（杜甫）

●自歎年來刺骨貧。吾廬今已屬ニ西隣一。愁懃說與東園柳。他日相逢是路人。（宋氏）

●賢哉回也。一簞食、一瓢飲、在ニ陋巷一。人不ㇾ堪ニ其憂一。回也不ㇾ改ニ其樂一。賢哉回也。（論語）

〔ひる〕晝

晝間。白昼。日中。

まひる。日ざかり。ひるなか。

ひるま。ひるね。かたぶかぬ日影。中空。高きひかげ。ひるねの床。

●笠置の城已におちて、主上四はれさせ給ひぬときこえしかば、虎の尾をふむおそれ御身の上にせまりて、天地雖ㇾ廣御身を可ㇾ被ㇾ藏所なし。日月雖ㇾ明長夜に迷へる心地して、晝は野原の草にかくれて、露に臥す鶉の床に御涙を尋び、夜は孤村の辻にそみて、人を尤むる里の犬に御心を惱され、何處としても、御心安かるべき所なかりければ、かくても暫はと思召されける處に、一乘院の侯人按察法眼好專如何してきゝたりけん、五百餘騎を率して、未明に般若寺へぞよせたりける。（太平記）

●此秋は虫のねしげき淺茅が原にことならず。なきくらし給ひても、晝はおのづからまぎれ給ふ。心のつまとかいひふらしたる夕ぐれの空、霧わたりて、ありか定めたる雲のたゞずまひ、淡しうながめやり給へり。（大貳三位）

●晝の程の暑けさは、水の上さへむとくにて、いとたへがたかりしを、やう〳〵日かげも傾きて、木の間よりそよぎ出づる風のいと涼しきに、ゆあみなどして立ちいづれば、月のかげさへほのめきて、晝の苦しさもかず〳〵忘られぬ。（廣足）

●けふも亦ふる。此陣屋は海づらにて、ひらけたれど、秋のしわざにや、霧ことにふか

くして蓑もなぐらし。（紀成）

●むつかしや、難波の浦のよしあしも、晩しき海士はたぞ知らぬ。唯世をわたる爲なれば、假の命つがんとて、蘆を取り運びて、此市にいづる蘆敷に、おあし添へて召されよや。おあし添へて召されよ蘆なから、難波の蘆を刈り持ちて、よろは月をも運ぶなりや。名殘なし夕汐の、蓑の内に召されよや。蓑の内に召されよ。（謠曲、蘆刈）

●いつまでぞ桜花の春はときはにて、なほ幾久し有明の月、月人男の舞なれば、雲の羽袖をかさねつゝ、よろこびの歌を、歌ふよもすがら、日はまた出でゝあさらけくなりて、よろかと思へば蓑になり、ひるかと思へば、月又さやけし。（謠曲、邯鄲）

●堅田の網は夜こそ引きよけれ。蓑は人目の繁ければ、都の人か春の野に、駒かけちらす中にも、えいさえいさと網を引く。（謠曲、地主）

●顔に毛抜きもあてる者、見世の前で蓑日中、町の衆道行く人、友朋輩も見るぞかし。丁稚小者をする樣に、曲もない打ち擲き、背骨は折れうが碎けうが、打たるゝ槌は痛うない。憐れを知らぬ親方殿。（淨瑠璃、心中刄）

●中空の日かげにきえて朝つゆのひるまは草のなびくともなし。（後柏原院）

●冬ながらさすが春こそかたぶかぬほどは日影ものどかなるそら。（時方）

●くもとなり雨となるてふ半天の夢にも見えよ夜ならずとも。（有家）

●みつしほのながれひるまをあひがたみみもめの浦によるをこそまて。（深養父）

●秋なれば萩の野もせに濯く露のひるまにさへもこひしきやなぞ。（光孝天皇）

●あらはにもならばならなんわが袖のひるともなしにひぢぞまされる。（央行）

●あふぎみよかたぶくかたの中空にてらす光もさかりありとは。（春滿）

●朝な夕な間近く見しも中空の日かげに遠き沖つ島山。（定信）

●つとめあれば夜さへをしく思ふにもたゝにくち木のふしやくらさん。（基綱）

●蓮花にもしろしは見えて瀾刈のうつるを蓑としろもかしこし。（政爲）

●わかなの日蓑から雨となりにけり。（曉台）

●紙衾蓑は衣桁の預かな。（尚白）

●月なくて蓑は霞むや昆陽の池。（鬼貫）

●蓑鐘や苦竹そよぐ山づたひ。（丈草）

●蓑かれば首筋赤きほたるかな。（芭蕉）

●栗の花や豆の粉めしの蓑げしき。（許六）

●今朝うゑて蓑から風の柳かな。（也有）

●解にてなのれと覺めぬきくの蓑。（風雪）

●蓑も見るつれなき人の蒲團かな。（凡董）

●里の蓑藥の花深し雞のこゑ。（牧童）

●山水や蓑もそこらに啼く蛙。（卓池）

●堪へがたき蓑の日光街道も涼しき月に夜は結構。（勇光）

●ひづみなき日かげにひるねする大工背筋のみぞにあせの水もり。（園果亭）

●たちよらんかたきも夏の日盛りやもちし扇のかげならずして。（栗樵）

●蓑かともさとり違へて逢坂寺起きあかりみる月のさやけさ。（根丸）

●望月の駒にこよひは夜を蓑と化す狐やのせてきぬらん。（行儀）

●吹きそろふ花も暑さの日盛やはすのまき葉もよれてみゆれば。（鬼面）

●其手代其下女蓑ほものいはず。（川柳）

●ひるあけて見れば工合のよいふすま。

●蓑間來て五十歩程錢を置き。（同）

●口とりは帶へつないで蓑賣する。（同）

●蓑みれば夜まで律義な男なり。（同）

●待よひの蓑まで只の侍從なり。（同）

●蓑の顔番頭色師とは見えず。（同）

●朝寢する人をおこすは蓑といふ。（同）

●蓑の譯茶がらをあけに出るを待ち。（同）

●蓑迄はもらひ水にて詠めたり。（同）

●汎蓑間鬼がそろ〳〵大晦日。（同）

●君とわれとがその中を、きり〳〵す〳〵と、なくはいのるかつらにくや、戀路のやみに蓑さへくらし、見えかくれ、かうちやはてまい、これのうやいの。（俗謠）

●蓑はかやかれ、夜はなはなへ。（俚謠）

●蓑九夜八船六。（同）

●蓑行燈のやう。（同）

●蓑苦ゝ短夜正不レ長。清猷妙舞看未足。樓頭曙鼓聲皇々。明星拔レ地纔數尺。日光搖動來三扶桑。蓑苦ゝ短蓑亦不レ短。山中暇日如三小年。塵世光陰疾如レ箭。古來開國多三聖明。歷三盡艱難一身百戰。一朝戡定俱三至尊。承明殿上頭毛髮。安期靈藥還復黑。（郷板橋）

●桃笙石枕與レ閑宜。政是清和雨霽時。野服猶留胡蝶粉。山扉已送杜鵑巵。煙萦金博香消早。人到三華胥一夢醒遲。庭院深沈蓑偏永。綠陰如レ水滴三風帷。（星巖）

赤松黃帝墳纍々。學レ仙學レ佛空爾爲。蓑苦ゝ短四日飛。

ふノ部

【ふうふ】夫婦

偕老。同穴。書レ眉。分レ鏡。齊レ眉。舉レ案。如レ賓。執レ爨。射レ雉。犯レ齋。いもせ。いもせの道。いもせの契。

●昔田舍わたらひしける人の子ども、井のもとにいで遊びけるを、おとなになりにければ、男も女も耻ぢかはしてありけれど、男は此女をこそ得めと思ひ、女も此男をと思ひつゝ、親のあはせんとすれども、聞かでなんありける。さて此隣の男のもとよりかくなん。

筒井筒井筒にかけしまろがたけすぎにけらしな妹見ざるまに。

女かへし、

くらべこし振分髪もかたすぎぬ君ならずして誰かあぐべき。

などいひ〳〵て、遂に本意の如くあひにけり。さて年頃ふる程に、女親なく便なくなるまゝに、諸共にいふかひなくてあらんやはとて、河内の國高安の郡にいき通ふ所いで來にけり。さりけれど此もとの女、あしと思へる氣色もなくて、出しやりければ、男、異心ありてかゝるにやあらんと思ひ疑ひて、前栽の中にかくれゐて、河内へいぬる顔にて見れば、此女いとようけさうして、打ながめて、

風吹けば沖つ白波たつた山夜半にや君がひとりこゆらん、

とよみけるをきゝて、限なく悲しと思ひて、河内へもなさ〳〵いかずなりにけり。まれ〳〵かの高安に來て見れば、始こそ心

にくゝし作りけれ。今は打解けて、髪を頭に巻き上げて、面長やかなる女の、手づから飯かひ取りて、けこの器物にもりけるを見て、心うがりて往かずなりにけり。さりければ、女大和の方を見やりて、

君があたり見つゝ居らん生駒山雲なかくしそ雨はふるとも、

といひて見出すに、からうじて大和人来んといへり。よろこびてまつに、度々過ぎぬれば、

君来んといひし夜毎に過ぎぬれば頼まぬ物のこひつゝぞふる、

といひけれど、男すまずなりにけり。

（伊勢物語）

●抑妹背のながらひは、偕老同穴のゆゑあり。たゞうちあろ友にはなずらへ難ければ、妻をもとむるには、上臈は品をもえらぶべし。次ざまには、みめしなを先とすべからず、心を撰ぶべきなり。唐の梁伯鸞が妻孟光は形極めて見にくかりけれども、夫に仕へしたがふ道、二心なかりけり。夫世を遁れて、霍陵山に入りける時にも、附きしたがひて、家の貧きをもあなづらず、婦の禮までも、整敬なるによりて、志深かりけり。誠にその姿、四施南威なうつせりとも、夫をかろしめ、外心あらんは却りて仇となるべし。何の益かあらん。秦中吟といふに、

富家女易レ嫁。嫁晚孝二於姑一。貧家女難レ嫁。嫁早輕二其夫一。

などあれば、いみじく便ありても、夫のためなほざりならん女よしなくこそ、すべて妻を定むる事、法令のたしへあり。

（十訓抄）

●これよりのちはいさゝ川、憂かれて中は絶えたれども、下ゆく水の通路は、かはらぬ心の誠のみ、朝な夕なにおん身の上、慈もあらず世に出し、富み栄えさせ給はせと、祷らぬ日とてはなきものを、心つよきも限あり。妻を棄て給ふが伯母御へ義理か。わらはが思ふ百分一、おん身に誠ましまさば、しかゝくの故ありて、かへり来ん日は定めがたし。潜びて出てよもろともにと、宜はするとも夫なり妻なり、たれかみそか夫とてそしるべき。いと強面しと思ふほど、離れがたきは女子の誠、分つ秋にふり棄てられて、おくがれて死なんより、おん身の刃にかけてたべ。百年の後を冥土にて俟ち侍らんとかき口説く、いとも切なる恨のかず〳〵、泣音憚る千行の、涙は釉に湛へたり。

（馬琴）

●ふしぎや見れば老人の、夫婦一所にありながら、遠き住の江高砂の、浦山國をへだてゝ住むと、いふはいかなる事やらん。うたての仰せ候ふや。山川萬里を隔つれども、たがひに通ふ心づかひの、妹背の道は遠からむ。まづ案じても御覽ぜよ。高砂住の江の、松は非情のものだにも、相生の名はあるぞかし。ましてや生ある人として、年久しくも住吉より、通ひ馴れたる尉と姥は、松もろともに此年まで、相生の夫婦になるものを。

（謡曲、高砂）

●立ち去りて跡もなく、かたちも消えてあとは唯、煙ばかりぞ反魂の、孝行ならば、何ぞやしばしも留まらぬ。傳へ聞く漢王は、李夫人の別故、甘泉殿の床の上に、ふるき衾の恨を添へ、九花帳の中にて、此香の煙を立て、月の夜更け行く鐘の聲。艶容便々と氣色だつ、玉殿にうつろひて、李夫人の御姿、ほのかに見え給へり。三五夜中の新月の、夜半の空隈なくて、長安雲上の粧ひ、氣色に至る心地して、昔感涙をうるほせば、君も龍顔に、御袖をおしあてゝ、反魂の煙のうちに、立ちよらせ給へば、又李夫人は消え〳〵と、時雨もまじる有明の、見えつ隠れつかげろふの、有るか無きかの御姿、かくやと思ひ知られたり。

（謡曲、反魂香）

●夫れ鴛鴦の衾の下には、立ちさる思ひを悲しみ、比目の枕の上には、波を隔つる恋ひ有り。ましてや深き妹背の中、同じ世をだに忍草、我は忘れぬ音を泣きて、袖にあまれる涙の雨の、晴間まれなる心かな。

（謡曲、砧）

●今自らが云ひ殘す、必ず夢と覺さずと、白地に聞いてたべノウ。我こそ誠は柳の精、雨露の恵に生育ち、かやうに夫婦と成る事も、一かたならぬ因縁ぞや。先の生にて暫ひたる、契を結ばん其ために、假に女の姿と變じ、柳が本に待ち受けて、夫婦と成りしも五とせの、春や昔の春の頃、季仲が鷹狩に、鷹の足緒のかゝりし時、數多の武士に切り崩され、既に枯れなん此柳、其時お前が一矢の手柄、鷹を助けて葉柳の、枝に障りし、アレ〳〵、又もや爰にちりくる葉は、我を迎ひに来るかと、思へばやる方詮方も、なく〳〵見やる足元へ、ちりくる柳の葉隠れや。

（浮瑠璃、三十三間堂）

●嘘か〳〵と管持つて、くゝめる様な母の慈悲、おもはゆげなる玉手御前、世様のお詞なれど、いかなる過去の因縁やら、俊德様の御事は、累た間も忘れず戀ひこがれ、思ひ餘つて打付に、いうても親子の道を立て、難面返事かたい程、猿猴まさる戀の淵。いつそ沈まばどこ迄もと、跡をしたうて歩はだし、芦の浦々難波がた、身をつくしたる心衛を尋ね、夫婦にして下さんすが、親のお慈悲と手を合せ、拜み廻れば。

（浮瑠璃、合邦の辻）

●枕を重ね肌觸るれど、愛慈に溺るゝ計り、妹背の契りにあらばこそ、一つ心に月を愛で、同じ檜の花を眺め、心の合ふこそ誠の夫婦、彼の花に舞ふ胡蝶、番ひ〳〵はありながら、子として生みたる事はなし。番ひが同じ露を音め、心を通はす契りにて、花の中より子を生ます。人間迚も其通り、誠の心ぞ夫婦なる。雌蝶は御身、雄蝶は麿と覺念し、花に心を留め給へ。必ず懐妊あるべきぞ。是を夫婦のしろしにて、色に執着し給ふな。

（浮瑠璃、釋迦如來）

●難波人あし火たくやはすしたれどおのが妻こそとこめづらしき。

（萬葉）

●しきしまの大和の國に人二人ありとしもはゝ何かなげかん。

（同）

●つゝましき新手枕の心をばいもせのみちの末もわするな。

（定信）

●わがせこは物なおもひそことしあらば火にも水にもわれなけなくに。

（安部女郎）

●ながらふるつまふく風の寒き夜にわがせの君はひとりかねらん。

（與謝女王）

●いもが川いで入るごとにはやゆきてはやかへりこいひしひとはも。

（古道）

●かも山の岩ねしまける我をかもしらにと妹がまちつゝあらん。

（人麿）

●おもひやれむなしきとこを打はらひ昔をしのぶ袖の雫を。

（基俊）

●先だゝじおくれじとこそおもひしか契りしかひもなき別哉。

（頼時女）

●お手討の夫婦なりしな更衣。

（蕪村）

●桑つみや夫は畑打つ川向ひ。

（沙長）

●似たものゝ夫婦立ちけり紙雛。

（閑室）

●片すみに煤け雛も夫婦かな。

（一茶）

●四陣や花に夫婦のにしめもの。

（召波）

●女夫して住持よはしぬ花に鏡。（几董）
●ぽつ〳〵と喰積あらす夫婦哉。（嵐雪）
●花盛子でありかるゝ夫婦哉。（其角）
●しがらきや茶山しに行く夫婦づれ。（秀）
●蚊の聲の中にいさかふ夫婦哉。（李由）
●松かげや夫婦ぐらしの蜆汁。（奇淵）
●夫婦して屠蘇すふ朧月夜哉。（蓼太）
●あさ顔に夫婦の杖をならべけり。（蒼虬）
●相生の夫婦の中にちよつこりと松のふぐりのつきしみどり子。（成丈）
●旅まくら鎌くらかけて夫婦づれ手をひきがやつ鳴が岡さま。（東作）
●たのしみは春の櫻に秋の月夫婦なかよく三度くふめし。（つらね）
●たなばたは嵐いらずの夫婦かと思へばしぶわたすかさゝぎ。（水元）
●三夫婦も揃うたごとく雁がねのわたり初むる天のはし立。（折敷）
●わかれてもたがひにえんはきらず玉まめでたよりをとふ夫婦ども。（里松）
●御夫婦の山と申すもことわりや筑波は富士の北の方にて。（喜多留）
●ねどころはひとつなれども筑波山夫婦別なる峰のみやしろ。（頤也）
●仕まふ時夫婦別あり内裏びな。（川柳）
●放生會いづれも夫にござりませ。（同）
●あら世帶こはらしい手になりんした。（同）
●萬歳がほしをさしたる夫婦中。（同）
●どのうそがほんの夫婦にならうやら。（同）
●ふぐ汁に夫婦別あるうつくしさ。（同）
●をかしさは夫婦喧嘩を狆が吠え。（同）
●子が出來て川の字なりに寢る夫婦。（同）
●二三丁出てから夫婦つれになり。（同）
●當分はならんで食ふのはづかしき。（同）
●子の寢冷豆日夫婦喧嘩なり。（同）
●くれてあやめもわかぬ五月闇、こよひ一夜を千年とも、ほんの夫婦とおもひ川、わたりかねたる川竹の、身はまゝならぬ身なれども、死ぬる覺悟でおちこちの、みちの案内は知らねども、あと見かへらぬ死出のたび。（俗謡）
●こひ草の、しげれる峰に八重葛、そのくさ〳〵のえんによる、萩の下着に桔梗の上着、萩と薄はまことの夫婦、露の情を世にうけながら、契もうすき朝顔の、さかりにならでゆく野べの、草の涙やそよぐらん。（同）
●似た者夫婦。（俚諺）
●夫婦喧嘩は犬も食はない。（同）
●夫婦は二世のちぎり。（同）
●生爲二同室親一、死爲二同穴塵一。他人猶相勉。而況我與レ君。黔婁固豪士。妻賢忘二其貧一。冀獻一農夫。妻敬儼如レ賓。陶潛不レ管生。程氏自爨薪。梁鴻不二肯仕一。孟光甘二布裙一。君雖レ不レ讀レ書。此事耳亦聞。（白居易）
●春時初嫁秋來病、九月東遊我未レ歸。獨擁二寒衾一壓二針線一。辛勤還爲寄二寒衣一。（惠周賑）
●年來無二夢到一彤扉一。臥聽三南王漏稀。記得去春風雪夜。添レ香喚レ我着二朝衣一。（同）
●紫海風濤黃蘗雲、蹄跡相伴十年餘。何當レ安二頓生涯一。煩レ剪二花畦夜雨疏一。（星巖）
●佳人失レ手鏡初分。何日圓則再會レ君。今朝萬里秋風起。山北山南一片雲。（杜樊川）

●酒旆搖々水繞レ林。紅雲一簇照二斜陽一。夫妻橋畔夫妻飲。醉二死花前一也不レ妨。（續處）
●征婦思二征夫一、有レ身當レ殉レ國。君爲二塞下土一。妾作二山頭石一。（劉綺）
天怒便易レ妻。改嫁名義犯。休レ罵妾薄倖。旦看張茲範。（濮陽鄭）
●女有レ家、男有レ室、無二相瀆一也。留二之有レ禮、易レ此必敗。（左傳）
●關々雎鳩。在二河之洲一。窈窕淑女。君子好逑。（詩經）
●婦人無レ爵、從二夫之爵一、坐以二夫之國一。（禮記）
●夫婦節而天地和。風雨節而五穀熟。（墨子）

〔ふえ〕笛

奇韻。横吹。嘹亮。悽清。裂レ石。穿レ雲。斷レ腸。暢レ神。
よこぶえ。こまぶえ。ふえのね。ふえのしらべ。こちくの笛。こゑすみのぼる。草かりぶえ。
●二月十日のうら〳〵と長閑にてりわたりたるに、わたどのゝ西の廂にて、うへの御笛ふかせ給ふ。高遠の大貳、御笛の師にて物し給ふを、異笛ふたつして、高砂をなりかへし吹かせ給へば、猶いみじうめでたしといふも、よの常なり。御笛の師にて、そのことゞもなど申し給ふ、いとめでたし。御簾のもとに集り出でゝ、見奉るなりなどは、我身に芦つみしなど、覺ゆる事こそなけれ。すけたゞは木工允にて、藏人にはなりにける。いみじう荒々しうあれば、殿上人女房は、あらはにとぞつけたるを、顏につくりて、さうなしのねし、をはりうどの種にぞありける。とうたふは、尾張の兼時が女の腹なりけり。これを笛にふかせ給ふを添ひ侍ひて、猶たかう吹かせおはしませ。得聞きさふらはじと申せば、いかでかさりとも聞き知りなんとて、密にのみ吹かせ給ふを、あなたより渡らせおはしまして、このものなかりけり。只今こそふかめと仰せられて吹かせたまふ。いみじうをかし。（清少納言）
●ある所にゆきける時、夕月夜のをかしきまに〳〵、おからさまに、友なる何がしが物したり。前栽など植ゑ渡し、心ことにまぜ結ひて、西の廂に出で、萩薄の月に面白く匂へるを見て、酒たうべつゝ、笛吹きすさびて心やるさまなり。おのが物せしをいたう悅びて、何くれと物語するに、あるじ笛とうでゝ、高砂を繰り返し吹きて、さうなしのをはりうどの種にぞ有けるとうたふは、清少納言が、何とかやをかしき草紙に、藏人すけ忠が事を、かきしをまねびたるなるべし。折にあひていみじうをかし。
笛竹の只ひとふしと思ひしをさま〴〵聲の籠りぬるかな。
とよみて打ずしたるは、げにゆかしき主の、心おちひにこそ。（蜻蛉）
●あやしの竹のあみ戸のうちより、いとわかき男の、月かげにいろあひさだかならねど、つやゝかなる狩衣に、ささしぬき、いとゆゑづきたるさまにて、さゝやかなるわらはひとりをぐして、はるかなる田の中のほそ道を、いなばの露にそぼちつゝ分け行くほど、笛をえならずふきすさびたる、あはれときゝしるべき人もあらじと思ふに、ゆかんかたしらまほしくて、見おくりつゝ行けば、笛をふきやみて、山のきはに惣門のあるうちに入りぬ。（袋好）

●さて〳〵樵歌牧笛とは、草刈の笛樵の歌の浮世を渡る一節は、歌ふも舞ふも、吹くも遊ぶも、身の業の、好ける心に依竹の、小枝蟬折さまざまに、笛の名は多けれども、草刈の吹く笛ならば、是も名は、青葉の笛と思し召せ。住吉の汀ならば、高麗笛にやあるべき。是は須磨の鹽木の海士の焼きさしと思しめせ。（謠曲、敦盛）

●あぢきなや、とても消ゆべき露の身を、猶おき顔に浮草の、波にさそはれ、舟にたゞよひていつまでか、憂き目を水鳥の、沈みはてんと思ひきり、人にはいはで岩代の、待つ事ありや有明の、月にうそぶく氣にて、船の舳板に立ちあがり、腰より横笛抜き出し、音もすみやかに吹きならし、今様をうたひ朗詠し、來なかんゞみて、終にはいつかあだ波の、歸らぬは古とまらぬは心づくしよ。〳〵（謠曲、清經）

●思ひ出せば不便やな、今はの際迄も、肌身放さず持ちたるは、コヽ此青葉の笛、我と我身の石塔を、建てゝ貰うた價にと、渡して置いた此笛の、我手に入りしも親子の緣、魂魄此世にあるならば、なぜ世にはまた見えぬぞ。聞えぬ我子や、なつかしの此笛やと、肌に付け身に添へて、盡させぬ思ひやるせなき。コレ申し此笛がよい御かたみ、經だらにより笛の音を、手向けるが直に追善、敦盛樣のお聲をば、聞くと思うて遊ばせと、すゝめに隨ひ藤の方、涙にしめす歌口も、ふるうて音をぞすましける。（浄瑠璃、一の谷）

●牛若君辨慶一人召連れて、雪の遠見に出で給ひ、上るり姫とも白菊の、薩の下に立ち忍び、御耳を寄てゝ、斯かるあづまの偏土まで、都を極す管絃の、爪音こそは氣高けれ。是程の管絃に、笛の無きこそ心得ね。某是にありながら、笛を吹かぬも口惜しと、かの蟬折をとりいだし、樂は天滿天神の惜ませ玉ふ想夫戀、八つの歌口打しめし、音もさら〳〵と吹く竹の、弓矢の末は人間の、げにだねならぬ一曲に、皆々感にぞたへける。（浄瑠璃、末廣十二段）

●男出立の虚無僧に、心のふしの數とへば、思ふ思ひは二つ三つ、五つ六つの歌口な、ためてゆるめて三人が、心揃はぬ笛竹の、中にあしらふ毋きぶの、鶴の巣籠り吹きそらし、虚無僧修行ほろ〳〵と、ほうしや門に立ち並ぶ。（浄瑠璃、時賴記）

●あなたばかり雲のうへ人ふきたてゝ春の霞さへゝづらすなり。（後鳥羽）

●吹きたつるふえのしらべのこゑきけばのどけさかりもあらじとぞ思ふ。（仲實）

●浪の音にたゞへてぞきくすみの江の汀にてきくこまぶえのこゑ。（兼昌）

●さく人のみゝさへさむさ秋風に吹きあはせたる笛のこゑ哉。（和泉式部）

●吹きまよふもみぢの風のふえのねにたちまふ人の袖かへる見ゆ。（爲家）

●ひとりねをいまはなにゝかなぐさまんとなりのふえも吹きやみぬなり。（顯昭）

●とふ人の笛もきこえて垣の内に梅ちる風のおもしろき哉。（眞淵）

●浦安のくにぶりしるく萬世にくだてふ笛はねをたえにけり。（同）

●笛竹のひとよむなしき折にだによそにふけともおもはざりしを。（讀人不知）

●天つ人雲のかけはしうちわたしさそふばかりの笛竹のこゑ。（堯空）

●草笛の上手盡しぬ夏の月。（几董）

●鹿笛の上手を盡すあはれさよ。（樹水）

●鹿笛の山の端通す月夜かな。（唯玉）

●笛の音に涙もより來るすまの浦。（蕪村）

●谷水の鬼なおそれそともし笛。（其角）

●行く春の是を潜るか笛の孔。（蕪樂）

●稚古笛田は黍く青みけり。（一茶）

●小夜時雨按摩小笛の遠音哉。（畝波）

●秋の夜やひゞき協へし笛の孔。（曉台）

●牛も笛もなき草刈の暑さ哉。（也有）

●須磨寺や鐘かね笛きく木下闇。（芭蕉）

●笛の音や盤出て散る水の上。（北枝）

●碁は笛も吹くべし貴妃ざくら。（蓼太）

●芝居事のがれても又かしましや松が琴ひく竹が笛ふく。（列翻）

●笛竹のならふことなし秋の夜の月はふけずにぬてくれよかし。（夏風）

●賤の男が枯野に出でゝもつかまのねをば殘せし草かりのふえ。（明輔）

●樂よりしんにをすますしん農のいろ〳〵にねをわける草笛。（下高）

●笛竹のあな待ち久し久かたの空だのめなる夜のふけ宗。（季弘）

●とりたての魚もはねだの午祭涙のつゞみに背の葉の笛。（赤良）

●わびて住む身すらしばしは笛竹の音にうさふしを忘れはてけり。（明題）

●下駄のはの笛によるてふ鹿の音はきのへろ程に哀なりけり。（伊志丸）

●ねながらに涼めば風の手にそへてふきごゝろよき夏の横笛。（杉村）

●松かげに笛吹きすさぶ童は琴にしらべをあはせこゝろか。（梅香庵）

●あしの葉の笛とはきげん上戸なり。（川柳）

●日笛で土蘭の内を見てあるき。（同）

●どうどうといつて仲國笛を出し。（同）

●總領は尺八を吹く面に出來。（同）

●袴引する保昌が月の笛。（同）

●笛の音は垣根ごしから問ふ藥。（同）

●聞きがひのないは哀な野田の笛。（同）

●唐人はあくびのやうなふえをふき。（同）

●御祭りに墓で笛ふく持參嫁。（同）

●君がよすがは白竹の、笛を合圖の一ふしに心のたけを吹さこむ簾の、ひまもる風もしみ〴〵と。（俗謠）

●孫は笛吹く。（俚諺）

●君不レ聞胡笳聲最悲。紫髯綠眼胡人吹。吹レ之一曲猶未了。愁殺樓蘭征戍兒。涼秋八月蓬關道。北風吹斷天山草。崑崙山南月欲レ斜。胡人向レ月吹二胡笳一。胡笳怨兮將レ送レ君。秦山遙望隴山雲。邊城夜々多二愁夢一。向レ月胡笳誰忍聞。（岑參）

●客有レ吹二洞簫一者。倚レ歌而和レ之。其聲嗚々然。如レ怨如レ慕。如レ泣如レ訴。餘音嫋々。不レ絕如レ縷。舞二幽壑之潛蛟一。泣二孤舟之嫠婦一。（蘇東坡）

●吹レ笛秋山風月清。誰家巧作斷腸聲。風飄二律呂一相和切。月傍二關山幾處明。胡騎中宵堪北走。武陵一曲想南征。胡園柳今搖落。何得愁中却盡生。（杜甫）

●入レ夜思歸切。笛聲爽更哀。愁人不レ願レ聽。自到二枕邊一來。風起無雲處。夜深聞月開。平明獨惆悵。落盡一庭梅。（戒昱）

●翠楊陰薄白沙隄。輕霧千山夜影低。一道川波金漾々。笛聲秋動月明西。（江陽）

●一爲送客去二長沙一。西望二長安一不レ見レ家。黃鶴樓中吹二玉笛一。江城五月落梅花。（李白）

●響淨胡天牧レ馬還。月明羌笛戍樓間。借問梅花何處落。風吹一夜滿二關山一。（常建）

●雨後閑庭暑氣收。倚レ欄花竹暗香浮。誰家玉笛凌レ雲起。吹動長安萬戶秋。（張偉）

●紫烟衣上積春雲。清隱山背小篠文。明月在レ天將二鳳管一。夜深吹向二玉晨君一。（鮑溶）

●星霧江欲曙。寂々入雲流。惟此一聲笛。一聲碧白頭。（星巖）

〔ふぐ〕河豚

噴魚。鯸鮐。鯸鰣。吹吐魚。氣包魚。

ふぐ汁。

●怒るものは内むなし。河豚に嬲すくなきが如し。（馬琴）

●ムヽ酒呑ますか。うそぢやないかよ、コレ殿様そんならマア酒の方を先へせうかい。イヤ〳〵〳〵、あの上飲ますと本たわいになります。サヽサコリヤ六とやら、おほゝせた跡では、飲食ひはわが望次第、酒は伊丹の鳶かぶり、ナツト逆合ひ云はるな。ムヽこりや酔相、者は河豚汁、夫も逆合ひ、河豚はおれが同行中ちやと、横にふくれた腹鼓、咽を鳴らして別れ行く。（浄瑠璃、安達原）

●迫付け新しい女房がまゐる。イヤ又其器量のよさ、雪と墨との替德、古女房のお谷めは、不器量の上に、因果と早う子を孕んで、正眞の河豚の横飛、飽いたこと無理とは思召すなと、あいそづかしを立ち聞きの、隙子に腹形も入る計り、登る階へな折しもあれ、嫁御様早是へ、チヽ待兼ねた早う通せ。（浄瑠璃、伊賀越）

●あら何ともな昨日は過ぎて鰒汁。（芭蕉）

●ふくと程鰒の様なる物はなし。（鬼貫）

●鰒汁はいかな坊主もおそれ発。（馬櫻）

●鰒ひとつ捕へかねたる網引哉。（其角）

●鰒賣の詩合ふて行く命哉。（永吟）

●河豚の面世上の人を白眼む哉。（蕪村）

●死ぬやうに人はいふなり鰒の汁。（太祇）

●鰒洗ふいつもの男まぬりたり。（召波）

●誰やらが腥より白し洗ひ鰒。（大江丸）

●河豚好む家や猫まで河豚の汁。（几董）

●つね〳〵はさぞ女房にあんかうとうまくくはせし雪のふぐじる。（湖鯉鮒）

●人参も腹にたるほどのむ時は河豚にまさりて後のくるしき。（まや輔）

●ふぐ食うて身はなきものとなるとても雪の降る日はあつくこそなれ。（奎和）

●我命あふにはよしやかへずとも河豚にしかへばさもあらばあれ。（菅江）

●命こそ鶏毛に似たれなんのそのいき藏くひにゆきのふるまひ。（樹洲）

●かけありく犬なもいとふ庭の雪にまたるゝものは河豚の横飛び。（貞顔）

●湯たんぽも妓王が愛もさめつべしふぐくうて寢しほとほりけには。（稻葉）

●ぬくからん母の膝より河豚汁を西施がちゝとすうてねた夜は。（三笑）

●つく〴〵と思へば長き命かなふぐくうて寢た夜も五十年。（眠）

●佛にはとてもなられぬ身にしあれば飲酒もやぶれ五躰ふぐ汁。（猫丸）

●片棒をかつぐ夕べの鰒仲間。（川柳）

●ふぐ汁を一つはちすとしやれて喰ひ。（同）

●王公貴人も漢まん雪のふぐ。（同）

●寂寞として先生は鰒を喰ひ。（同）

●もう外に死人なしかと鰒をかひ。（同）

●ながらへば又此ごろはふぐをくふ。（同）

●鰒買つて餘所の流れへ持つて行き。（同）

●鐵砲の皮をくれろと三杯目。（同）

●鰒も喰ひますと花嫁酒落たもの。（同）

●たかな内にぬて蛤くゆるよの。もはや河豚時、やんや今年の河豚はへ、それ〳〵〳〵、かいてお見しやれ、どぶろく〳〵や、しるすい〳〵のすい。（俗謡）

●河豚は食ひたし命は惜し。（俚諺）

●河豚は惡女で鯨の味。（同）

●春洲生二荻芽一。春岸飛二楊花一。河豚當二是時一。賤不レ敢二魚叉一。（梅堯臣）

●哲婦能傾レ城。由二君逃二蛾眉一。魚冥能雪レ物。由二君溺二美顏一。歎息口中蜜。殺レ人人不レ知。（茶山）

〔ふじ〕富士

芙蓉。白扇。千秋。雲表。逢萊。無雙。姑射。積雪。

ふじのね。ふじのたかね。ふりつむゆき。くもかゝる。國のしづめ。ならぶ山なき。きえぬが上につもる雪。白雲もいゆきはばかる。

●浮雲もやう〳〵晴れ渡りて、四方の山々名殘なく見ゆるに、富士の嶺やいづらと見放くれば、思ひかけぬうち空に、頂のみ見えて、なからは雲ぞ立ち隔てたりける。色濃ききぬに、白き帽きたらむやうに見えてと云へるも、かやうの時なりけらし。みな月の望も近けれど、今も雪の消えやらで、天より降えたる、我が大御國の寶とも鎮とも云ふべきものは、この御山をおきて何かは。愛鷹の思ひあがれるも、麓根のいかめしきも、遥に麓にて、二子の山の二並立てるは、兒の遊べるやうにぞ見ゆめる。（葛満）

●そも〳〵この山、孝靈のむかし生れ出でしより、若白髮の雪つもり〳〵て、子とせの末はも衰げず、廿一代の千言萬句も、赤人の田子の浦に打消され、五山の俤の抹香臭き詩も、丈山が白扇にあふぎ伏せられぬ。されど泰山は塵土をゆづらず。河海は化粧水をいとはず。ふじのしら雪朝日でとけてと唄へば、三國一の甘酒の看板にも、惜氣なく書きちらすは、また勿體なき事ならずや。むかしより此山を愛でし人幾許ぞや。在五はまだらに、雪舟はしろし。その中にまつ黑々の墨衣、西行といへばふじを思ひ、ふじといへば西行と氣のつくは、此山此人古今一對なるべし。嗚呼さくや姫また出るとも、わが言をかへじかし。（蜀山人）

●富士山は、この國なり。わが生ひ出でし國にては、四面に見えし山なり。その山のさま、いと世に見えぬさまなり。さまことなる山のすがたの、こんじやうをぬりたるやうに、雪の消ゆる世もなく積りたれば、色濃き衣に、白き帽きたらんやうに見えて、山の裾のすこし平ぎたるより、煙はたちのぼる。（孝標女）

●うきしまが原より富士の山ちかく見ゆ。いたさきには雲のたなびきて、かたのほとりより雪いと白うかゝり、裾はなべてみどりに見ゆめり。今めきたるすそごの几帳などたてたらんさまの、筆にも言葉にもいひつくしがたきけしきなり。（武女）

●今日見る富士の景色ないはんに、すべてはくもり日なれど、中々あざやかに見えわたれるが、やう〳〵にたなびく雲の、つひにうづみはてゝ、はつかに麓をのこせり。ひつじの頃より又たえ〴〵に、かつ見えかつかくれて、木の間もりくる月よりも、心づくしの空なり。（景樹）

●凡富士の嶺は年に高さや増るらん。消えぬが上に積る雪の、見れば冨山の、高嶺々々を傳ひ來て、富士の裾野にかゝる雲の上は晴れて青山たり。いづくより降るやらん、

雲より上の白雲は。然れば此山は、仙郷に隱れ里の、人間に異なる、其瑞驗もまのあたり、竹林のおほひとして、皇女に備はりて、鏡に不死の藥を添へつゝ、別るゝ天の羽衣の、雲路に立ち歸つて、神と成り給へり。帝その後、かぐや姫の教に隨つて、富士の高嶺の上にして、不死の藥を燒き給へば、煙は萬天に立ち登つて、雲霞風に薫じつゝ、日月星宿しながら、あらぬ光をなすとかや。扨こそ唐土の方士も、此山に登り不死の藥を、求め得て歸るなり。これ我朝の名のみかは、四天唐土扶桑にも、ならぶ山なしと名を得たる、富士の紐ひ誠に上なかりけり。（謠曲、富士山）

●三保の松原、田子の浦、何れも青水無月なるに、高嶺は白きふじの雪を、實にも時知らぬ、山とよみしも理や。實にや天地の、開けし時よ神さびて、高くたふとき駿河の富士、實も妙なる山とかや。（同）

●源家正統武將の白旗、神明を頭に戴く義兵の旗上げ。謙信親子只今より、此勘助が麾下につけと、立歸つて云ひ聞かせよと、一つの眼に天が下、見下す富士の山本勘助、三國無双の弓取なり。（淨瑠璃、廿四孝）

●大磯の燈火もはや、更け渡る短夜に、雪の光の皚々と、山の名に負ふ紐坂、富士は白粉朝比奈が、顏は夜深き曉方の、閨に忍びて歸りけり。（淨瑠璃、曾我虎が磨）

●あめつちの、わかれしときゆ、かみさびて、たかくたふときするがなる、ふじのたかねをあまの原、ふりさけみれば、わたるのかげもかくろひ、てる月の、ひかりも見えず、白雲も、いゆきはゞかり、ときじくぞ、ゆきはふりける、かたりつぎ、いひつぎゆかん、ふじのたかねは。（赤人）

●田子の浦ゆうちいでゝ見ればましろにぞ富士の高根にゆきはふりける。（同）

●風になびくふじの煙の空にきえてゆくへもしらぬ我思哉。（西行）

●時しらぬ山は富士のねいつとてか鹿の子まだらに雪のふるらん。（業平）

●天の原てるヒに近さふじのねに今も神代のゆきはのこれり。（枝直）

●ふじのねにのぼりて見れば天地はまだいくほどもわかれざりけり。（長流）

●天津ヒのてらせるよもの國中にたぐひなしてふ山はふじのねし。（蓍踐）

●たぐひなき山はふじのね神世よりかたりつぐ名といづれ高けん。（成章）

●風の上にたつちりよりや秡りけん空にはなれし富士の高ねは。（景樹）

●心あてに見し白雲はふもとにて思はぬ方にはるゝ富士のね。（春海）

●神代よりふりつぎにけん白雪を玄となせるふじの芝山。（千蔭）

●富士をいざ山の端にせんけふの月。（支考）

●笠取よ富士の霧笠時雨笠。（其角）

●目にかゝる時や殊更五月富士。（芭蕉）

●其夜降る風の鹽や不二の雪。（旨原）

●初夢に猫も富士見る寢やう哉。（一茶）

●元日の見るものにせん富士の山。（宗鑑）

●其夜ふる宿の浴衣や富士詣。（蓼太）

●富士に添うて富士見ぬ驛ぞ雪の原。（几董）

●によつぽりと秋の空なる富士の山。（鬼貫）

●六月や雲くれなゐにまだら富士。（閑更）

●つゝたゝば天にのぼらふふんのぼす足高山やふじのねすがた。（信海翁）

●おふじさん雲の衣をわがしやんせ雪のは

だへが見たうござんす。（よみ人しらず）

●東路にふじと名高きお山こそゆきゝの人のみとれぬはなし。（闕月）

●むかし誰たごにこばいくみし鹽をやきてやふじの山となしけん。（鬼守）

●春秋にとむさぶらひの山なればいつもはたちの心地こそすれ。（赤良）

●武藏野の原の雪見に富士の裾をはしをりかけて足高の下駄。（雪丸）

●三國にならぶものなき富士山のあたまをおすは雪ばかりなり。（池月）

●水海のぬけしものならふじの根のけぶるあたりや辛崎の松。（笛成）

●ふじの山ぜくらべさせん山もなし五番もわづか六合のうち。（来人）

●初夢に見て嬉しさを正眞の霞の紬に包む富士の根。（三駄）

●立て者は大日本の富士の山。（川柳）

●富士山は江戸の眼で見える所。（同）

●寛永四年あれを見ろあれを見ろ。（同）

●富士を見ぬやつが作りし實語教。（同）

●春の班富士を折々かくすなり。（同）

●和らかな國にむつくり芙蓉峰。（同）

●ふじ山に初雪の降る暑い事。（同）

●まり唄のほこりに霞む床の不二。（同）

●高い事五十四五里と通辭いひ。（同）

●あの山に不老不死あり穴賢。（同）

●琵琶を出た山も四すぢの登り口。（同）

●きのふはそでにつゝみけり、けふ九重にの旅のそら、ふりさけ見れば、鹿の子まだらにちら〳〵〳〵と、ゆき間に見ゆる富士の山。（俗謠）

●三保の松風ふきたてゝ、沖つ波もあらじな。水にうつるふ月ともに、ながめにつゞく富士の山。（同）

●雲の帶して空色小袖、はでなするがの富士の山。（同）

●一富士二鷹三茄子、四扇五多波姑六座頭。（俚諺）

●富士ほど願ふて摺餘ほど叶ふ。（同）

●富士の山を蟻がせゝる。（同）

●此山高極二雲表一、不レ知二幾丈一。頂上有二平地一、廣一畝里、其頂中央、窪下體如二炊甑一。甑底有二神池一、池中有二大石一、石體奇、恰如二蹲虎一。亦其甑中、常有レ氣蒸出、其色純青、窺二其甑底一、如湯沸騰。其在レ遠望者、常見二煙火一。亦其頂上、匝レ池生レ竹、背紺柔懋、宿雲春夏不レ消。山腹以下生二小松一、腹以上無二復生木一、白沙成レ山。其攀登者、止腹下、不レ得レ登レ上、以二白沙流下一也。（貫香）

●已不レ見二富士一、抑何緣故。班荊喫レ烟而望。忽見二眉睫於雲間一、似レ聞レ我者矣。神飛心駭、纏綿之意愈切、彷徨路側一、不レ能レ行。豈風伯憐レ我耶。一陣欻颯二雲幌一、則驪姿穆如、絕世之美、果天下無雙哉。俄頃雲幌復垂。豈恐レ傷二盛德一耶。慇懃哦二一詩一而行。（元愷）

●誰將二東海水一。濯出玉芙蓉。蟠レ地三州盡。捧レ天八葉重。雲霞蒸二大麓一。日月避二中峰一。獨立原無レ競。自爲二衆嶽宗一。（栗山）

●何物芙蓉落日突。闕中紫逸繞雲端。背天一柱峰巒出。白雪千秋突兀看。誰指仙衣懸二縹緲一。自疑玉女剖二琅玕一。于レ今石跡山陰地。喚二取驪駒一問二大舟一。（徂徠）

●頑然戮レ白一峰高。群嶽欽レ冠又拂レ髦。知是丈人開二濤宴一。當將二東海一釀二葡萄一。（山陽）

●上帝高居白玉臺。千秋積雪擁二蓬萊一。金雞唳曙人寰夜。海底紅輪飛レ影來。（鳩巢）

●仙客來游雲外嶺。神龍栖老洞中淵。雪如二紈素一。煙如レ柄。白扇倒懸東海天。（丈山）

●騎蹇四指玉茨菪。爛々朝暉蓋。雲羅。丈夫心事須如此。不效紅粉作治粧。（東湖）

●玉帛輸來從百蠻。天邊先認好容顏。溫然自與其人似。君子國中君子山。（佛山）

〔ぶし〕武士

武人。猛士。驍勇。勇猛。戰士。護國。武將。將軍。將帥。

ものゝふ。たけきものゝふ。あだまもる。弓矢とる身。國のまもり。

●猛き武士のおこりをたづねれば、いにしへ田村などいひけん將軍どもの事は、耳遠ければさしおきぬ。そのかみより今まで源平の二流は、時により折にしたがひて、大やけの御まもりとはなりにける。恒武天皇と聞えし御門なれば、柏原の御門とも申しけり。その御子に武部親の御子と聞えしより、五代の末に平將軍貞盛といふ人、維衡維時とて二人の子をもたりけり。間近く榮えし四八條の清盛のおとゞは、かの太郎維衡より六代の末なりき。その一門亡びしかば、このころは僅にあるかなきかに、さまよふめる。さてかの維時が名殘は、ひたすらに民となりて、平四郎時政といふものゝみぞ、伊豆の國北條の郡とかやにあめる。それも維時には六代の末なるべし。又源氏武者といふも、清和の御門、或は宇多の院などの御後どもなり。二條の院の御時、平治のみだれに、伊豆の國蛭が小島へ流されし兵衛のすけ頼朝は、清和の御門より八代のながれにて、六條の判官爲義といひしものゝ孫なり。左馬頭義朝が三男になんありける。四八條の入道おとゞ、やう〳〵榮花衰へんとて、後白川院をなやまし奉りしかば、安からずおぼされて、かの頼朝を召しいでゝ、軍を起し給ひしに、しかるべき時やいたりけん、平家の人々は蓐永の秋の木がらしに散りはてゝ、遂にわたつ海の底のしくづと沈みにし後、いよ〳〵頼朝をほどこして、更に君の御後見を仕うまつる。相模の國鎌倉の里といふ所にゐながら、世を擧の中に思ひき。皆人知り給へることなれば、今更に申すもなか〳〵なれど、院のこの位に卽かせ給ひしはじめより、世のかためとなりて、文治元年四月、二のはしをのぼりしも、八島の内のおとゞ、宗盛をいけどりの賞ときこゆ。建久の初つかた都にのぼる。この勢のいかめしき事、いへば更なり。（中略）その年の十一月九日權大納言になされて、右近大將をかねたり。十二月の朔日ごろよりこび申して、おなじき四日やがてつかさなげ返し奉る。この時ぞ諸國の總追捕使といふ事、うけたまはりて、地頭職に、我家のつはものどもをなし集めけり。この日本國の寅ふるはじめは、これよりなるべし。（增鏡）

●かくてかの身は只一騎、自若として橋の邊にあり。現八この日の打扮は、草綠縅の札よき鎧に、龍頭なる五枚兜の緒をしめて、猪頸に戴き、石黃の故金襴の戰袍姿に黑金裝の太刀、成刀柄の匕首を腰によこたへ、細目くさりの鉾、十王頭の胴衣に、夏曳の上總廂の、重底なる戰靴の締高きをひも短にはきなして、驪馬の太く逞しきに、深緋の厚總垂れて、貝錦の磨鞍に、白と紫を染め分けたる腰鞘して、寬にうちのり、左手に三刃尖の鎗の、丈二柄なるを挾みて、前面を乾と見わたしたる、馬上の居長最高く、其武者態凡庸ならず。臥蠶の眉、丹朱の唇、眼は雙べる星の如く、齒は瓠の

實に似たり、面の色淺黑く、髯の迹蒼かりける。これこの蓋世の大丈夫、南總八犬隨一人、里見氏股肱の俊傑と、いはでもしるき面魂。つゝみのをばな霜に枯れて、招くともなき寒風は、馬の邊をよきてふく、威風正可に凜然たり。（馬琴）

●こゝにて一息休めて、城の中を屹と見あげゝれば、錦の御旗に日月を金銀にて打ちてつけたるが、白日に耀きて光り渡りたる其陰に、透間もなくよろうたる武者三千餘人、甲の星を耀かし、鎧の袖を連ねて、雲霞の如くに並み居たり。其外櫓の上さまの陰には、射手と思しき者ども、弓の弦くひしめし、矢束解きて押くつろげ、中差に鼻油引きて待ちかけたり。この勢決然として、敢てせむべきやうぞなき。（太平記）

●熊谷あまりにいとほしくて、何處に刀をたつべしとも覺えず。目もくれ、心も消え果てゝ、前後不覺に覺えけれども、さてしもあるべき事ならねば、泣く〳〵首をぞ掻きてける。あはれ弓矢取る身ほど口惜しかりけること、はなし。武藝の家に生れずば、何しに唯今かゝる憂き目を見るべき。情なくも討ち奉りたるものかなと、袖を顏におしあてゝ、さめ〴〵とぞなきぬたる。（平家物語）

●其時何とかしたりけん、判官弓を取り落し、涙にゆられて流れしに、其なりしもは引く汐にて、遙に遠く流れゆくを、敵に弓を取られじと、駒を波間におよがせて、敵船ちかくなりし程に、敵はこれを見しより も、船をよせ熊手にかけて、既にあやふく見え給ひしに、されども熊手を切りはらひ、終に弓を取り返し、もとの渚に打ちあがれば、其時無房申すやう、くちなしの御ふるまひやな。渡邊にて其時が申しゝも、是にてこそ候へ。たとひ千金を延べたる弓なりとも、御命には替へ給ふべきかと、涙を流し申しければ、判官これをきこしめし、いやとよ己を惜しむにあらず。義經源平に、弓矢を取つて私なし。然れども姓名は未だ半ならず。されば此弓を、敵に取られ義經は、小兵なりといはれんは、無念の次第なるべし。よしそれ故に討たれんは、力なし、義經が運の極みと思ふべし。さらずば敵に渡さじとて、涙に引かるゝ弓取の、名は末代にあらずやと、語り給へば乘房、さて其外の人までも、皆感涙をながしけり。（平家物語）

●粟津の汀にて、波の打死するまでも、御供申すべかりしを、女とて御最期に、捨てられ參らせし恨めしや。身は愚のため命は義による理、誰か白眞弓取の身の、最期に臨んで功名を、惜まぬものやある。（謠曲、巴）

●都の諸武士並み居る中、若年の某と見込み雜言過言、眞二つにと思へども、御上の仰を憚り、堪忍の胸を押へしは幾度、明日は最早了簡ならず。御前にて恥面かゝせる武士の意地、其上にて討つて捨てる必ず止めるな。日頃某を短慮なりと、奥を始め其方が異見、幾度か胸にとつくと合點なれども、無念重る武士の性根、家の斷絶奥の歎き、思はんにては無けれども、刀の役目弓矢神への恐れ、戰場にて討死はせず共、師直一人討つて捨つれば天下の爲、家の恥辱には替へられぬ。必々短氣故に身を果す若狹助、猪武者よ狼狽者と、世の人口を思ふ故、汝に篤と打明かすと、思ひ込んだる無念の涙、五臟を貫く思ひなる。（淨瑠璃、忠臣藏）

●ものゝふの臣のたけをは大君のまけのま

に〳〵聞くとふ物ぞ。（萬葉）
●ますらをのともの音すなりものゝふの大まへつ君裾立つらしも。（元明天皇）
●ともしする木の下露にものゝふの哀もしらぬ袖やぬるらん。（家隆）
●ものゝふのならすすさびはおびたゞしあけとのしさりかもの入くひ。（西行）
●わが君の命にかはる玉の緒をなにいとふべきものゝふの道。（勝高）
●梓弓おしてはるかに放つ矢の矢筈正しきものゝふの道。（與清）
●かりそめのかり渦のそやにしるす名も惜くやはあらぬ物部のとも。（盛章）
●虎ほゆる國の境ものゝふのまもるかぎりは安けかりけり。（古道）
●武士の矢なみつくろふこての上に露たばしる奈須のたのはら。（實朝）
●もしすれば手ならす征矢のかりまたの二道ならで世をつくさまし。（伴雄）
●武士の大根辛きはなし哉。（芭蕉）
●武士の足で米磨ぐ蕨哉。（風雪）
●侍やさくらあらして行き過ぎる。（白化）
●戀ひわたる鎌倉武士の扇かな。（蕪村）
●雛子ゆきの短き越後武士。（魚崖）
●宮方の武士うつくしや年忘。（召波）
●侍は腹さへ切るに炬燵哉。（支考）
●新蕎麥の信濃の武士はまぶしかな。（去來）
●武士のきゝなぐさまんあられ哉。（白雄）
●武士も見ながら散す花の風。（鬼貫）
●雪見とて出づるや武士の馬に鞍。（太祇）
●武士の思ひつめてはかくならんこゝろの丈をはなつ矢ぶみに。（朝起）
●士になるよりうれしやる文を取り上げられし戀の奴は。（眞金）
●夏もまだ若武者とこそ見えにけれ卯花縅よろふ袖垣。（竹藪）
●蒜武者のおづるも道理瀞の穩入日をまれくほこに似たれば。（貞德）
●歌人とは音に聞えぬ春雨に鬼とりひしぐ渡邊の綱。（梅也）
●驚きし平家の武士はたつ鳥の跡を末世に潤すふじ沼。（弓成）
●鳳凰の住むてふ桐の箱に入りて兵書は出さぬ御代の武士。（友垣）
●二腰の大和魂さすもむべよし野の花にたぐふものゝふ。（魚彦）
●ものゝふの刀も鹿のめぬきにて上毛のほしのひかる貝ざや。（峯高）
●をどし毛の卯の花垣や鎧草むかしわすれぬものゝふの庭。（旭堂）
●さからはぬ柳の木太刀ならへるはげにすなほなる御代の武士。（照住）
●みよしのゝ花にたぐへし武士は學べる道のおくもたづねむ。（枝道）
●美しき木の下かげに忠度は一夜妻とや花をめでけむ。（清玉庵）
●小侍しりの丸いを二本さし。（川柳）
●ゆうぜんとさやをしごいてかどを出る。（同）
●小さぶらひ第一口がさやばしり。（同）
●内兜見ぬいて武士を一人殺せ。（同）
●出すまじき所で淺黄武士を出し。（同）
●毋衣武者はふくれて見たりしなびたり。（同）
●わん箱と一所にかりる小さぶらひ。（同）
●行く先の犬と無意な小さぶらひ。（同）
●それでこそ武士だ〳〵と最明寺。（同）
●こりや喜助身は頼豫に似てゐるか。（同）
●馬のゆく方へ乘りてく戒武士。（同）

●きつい事昨夕までは士分なり。（同）
●奉公すれども身はさむらひぢや、いふた心はかはりやせん。（俗諺）
●二本さしたる武士よりも、矢立さしたる主がよい。（同）
●花は櫻木人は武士。（俚諺）
●武士は食はずと高楊枝。（同）
●武士に二言無し。（同）
●武士は相みたがひ。（同）
●武士の子は響の音で目をさます。（同）
●野猪武者。（同）
●天逸闘。塊迷月。東龍白日西龍雨。撞鐘欲洞愁海翻。發火吹巢雙鷲猫。照天萬古無二烏。殘星破月開天餘。座中有客天子氣。左股七十二子連明珠。軍聲十萬振三屋瓦。拔劍當人面如緒。將軍下馬力拔山。氣卷黃河酒中瀉。劍光上天寒摧殘。明朝獻地分河山。將軍呼龍將客走。石破青天撞玉斗。（楊維禎）
●萬壽山前擂大鼓。緋袍將軍號威武。三邊健兒猛如虎。左提戈右張弩。外廷百之緋袍怒。牙旗四々軍門開。紫茸單甲如雲。排大同來宜府來。（王廷相）
●結髮從軍弓箭雄。八州草木識威風。白旗不動兵馬靜。立馬邊城看亂鴻。（山陽）

〔ふち〕淵

深淵。碧潭。紺碧。幽靜。波靜。千仞。湛々。蛟龍潛。岩ふち。かたふち。ぬまふち。青ふち。うづまく。みどりのふち。霧の淵瀨。みなわさかまく。涙のふち。いはがきふち。

●淵はかしこ淵。いかなる底の心を見えて。さる名をつきけんと、いとをかし。なりそ淵。誰にいかなる人の教へしならん。青色の淵こそまたをかしけれ。藏人などの身にしつべくて。いな淵。かくれの淵のぞきの淵。玉淵。（清少納言）
●むなしく窮谷の埋木として意樹に花たえたり。惜しからぬ命の、さすがにをしければ、投身の淵はむねのそこに殘し、存ずるかひなき心は、なまじひに存じたれば、斷腸の棘はうれひの中にしげる。（光行）
●あすか川の淵瀨常ならぬ世にしあれば、時移り事去り、たのしみかなしびゆきかひて、花やかなりしあたりも、人すまぬ野ちとなり、變らぬ住家は人あらたまりぬ。桃李物いはねば、たれと共にか昔を語らん。（兼好）
●みあぐれは萬仞の青壁刀に削り、みおろせば千丈の碧潭藍に染めり。（太平記）
●此川は飛鳥川にては候はぬか。飛鳥川ぞと知るしめして、昨日の淵は今日の瀨に、替はるをかれて知るしめさぬは、御心なき仰かな。夜の間の雨に水まさり、殊更今日は流れ洲の、渡瀨は定めなき物を、實に隱れなき名所や。さて〳〵此飛鳥川の、分きて淵瀨の定まらぬ、謂は如何なる事やらん。いやそれは唯山川の、末の流れの石多く、淵瀨の常に替る事、いひならはせる心なり。されば獸にも、世の中は何か常なる飛鳥川、昨日の淵は今の瀨に、なるや夜の間の五月雨に、水屑まさりて濁りたる、水の心も知らずして、左右なう渡り給ふなよ。（謠曲、飛鳥川）
●この夕暮をかぎりぞと、思ひ定めて耳無山の池水の、淵にのぞみて影うつる、名も月の桂の、みどりの髮はさながらに、池の玉藻のぬれ衣、身を投げ空しくなりはて

ム、此世にはやみゝなし山、其名をあはれみて、跡垂はせ給へや。（謡曲、三山）

●我宿の菊の白露ふることに、幾世つもりて淵となるらん。よもつきじよもつきじ。

菊の水も泉なれば、くめども〳〵いやましにいづる菊水を、のめば甘露もかくやらんと、心も晴れやかに、飛び立つばかり有明の、よろひるとなきたのしみの、榮花にも榮曜にも、げに此上やあるべき。（謡曲、邯鄲）

●なみ〳〵の世には見えじな片淵の片くるしくも人はいふらん。（春蔭）

●しら玉はありてもたれかかつぐべきこの岩淵のそこひなければ。（春海）

●浪風のさがしきよには住むとてもさわがぬふちを心ともがな。（同）

●淵にのみしづめる身にはあすか川せにかはる世もしらずぞありける。（蘆庵）

●みづちすむ淵をちひろのそこにみて太刀の緒かためゆく山路哉。（諸平）

●みよしのゝたきのいはふちなれをしもいかにふかめてたのみそめけん。（家良）

●みくりひく涙まやいづくぬま淵のふかきも見せにこほる冬哉。（信實）

●涙がはあさきせぞなきみちのくのそでのわたりにふちはあれども。（行家）

●かみなびをうちまふさきのいはふちにかくれてのみや我がこひならん。（讀人不知）

●しばらくもゆきてみてしが神なびの淵は淺びてせにか成るらん。（萬葉）

●白藤や猶さかのぼる淵の鮎。（几董）

●打擬に鱸はねたり淵の色。（其角）

●朝顔や一りん深き淵の色。（蕪村）

●淵の水深きはふかくぬるむ哉。（白雄）

●青淵やなりこむかれも月の隈。（夙也）

●淵背し石に抱きつく山櫻。（几董）

●石垣に尙吸ひ入るや淵の鮎。（去來）

●口風や木葉まきこむ淵の中。（沙明）

●借錢の淵はいつより深けれど年の瀬ぶみはしおほせにけり。（夕風）

●まづしきも富めるもいそぐ師走河淵瀬はあれど渡らぬはなし。（花流）

●たま祭るくどくのためにはなたれて魚迄淵にたどる盆の夜。（六歌園）

●後世しらで現をもつ身は三途川の石ないだきて淵にしづまん。（未得）

●かはづらのあゝき氷と名におちて身うごきならわ借錢の淵。（宍主）

●人知らぬこひし〳〵を袖につみ泪の淵にしづむばかりぞ。（時村）

●筑波根の峯よりはつか立ちそめて流るゝ淵となるらん。（巖栗箱）

●釣人の得ものにさへも淵瀬あり飛鳥の川は浮世なりけり。（五德）

●淵にたが黄金なげしと思ふまでできよらに鯉の鱗光れる。（長樹）

●淵は瀬とかはる飛鳥の川霧にほとりの山は海とこそみめ。（翁屋）

●深淵に行く薄氷を孝子踏み。（川柳）

●魚淵にたどる十日の人だがり。（同）

●白菜のやうに波ちる兒が淵。（同）

●城跡は鴻臚もなき鐘が淵。（同）

●飛鳥から趣向もかはる戀の淵。（同）

●深淵をうめに出て來る國家老。（同）

●承知してゐながらはまる戀の淵。（同）

●傾城のふくぼは人のはまる淵。（同）

●はまりやすきはすゐの淵、沈むものぞと思へばさいな、ほんにぶすゐがましぢやもの。（俗謡）

●山のはに、いかな夜も夜も人こそしらね、闇はなみだの淵となる。（同）

●昨日の淵は今日の瀬。（俚諺）

●石を抱いて淵に入る。（同）

●玉を淵に投げる。（同）

●惡をすれば淵に入る。（同）

●網なくて淵に望みそ。（同）

●機過三峽橋。谿壑駭二聞見一。呼嗟此奇觀。曲壺水之變。石怒不レ受レ水。水怒如二激電一。其勢必斜飛。下與二蛟龍一戰。淵深不二敢窺一。蘚滑試一踐。我有二悠然心一。六盧任二周徧一。對レ之神益閒。頑洞增二餘眷一。高歌扶レ杖歸。瞥々風吹レ面。（図麟嗣）

●鋭旋之潘爲レ淵。止水之潘爲レ淵。流水之潘爲レ淵。瀑水之潘爲レ淵。沃水之潘爲レ淵。汎水之潘爲レ淵。雍水之潘爲レ淵。滸水之潘爲レ淵。肥水之潘爲レ淵。是爲二九淵一焉。（列子）

●積土成レ山風雨興焉。積水成レ淵蛟龍生焉。積善成レ德而神明自得。聖人循焉。（荀子）

●水積而魚聚。木茂而鳥集。爲二魚得一者、非二網而入レ淵也。爲二獲得一者、非二負而上レ木也。（文子）

●柔之勝レ剛、弱之勝レ强、魚不レ可レ脫二於淵一、國之利器不レ可二以示一人。（老子）

●冷風騷々木葉低。洞淵阻深生二怪奇一。（荘成大）

●千金之珠、必在二九重之淵驪龍之頷下一。（莊子）

●藏二金於山一、藏二珠於淵一。（同）

●上有二桂樹林一。下有二清冷淵一。（朱嘉）

●歸途如レ有レ伴。華月上二丹淵一。（米蒂）

●如レ臨二深淵一。如レ履二薄氷一。（詩經）

●鳶飛戾レ天。魚躍二于淵一。（同）

●魚潛在レ淵。或在二於渚一。（同）

〔ふぢ〕藤

紫藤。紫綬。絲藤。柔蔓。縮綿。滋蔓。嫋々。挂レ空。纏レ樹。

藤のかげ。藤なみの花。うへなきいろ。むらさきの糸。水だかくかゝる。むらさきの波。藤さく宿。谷のふじなみ。藤のむらご。紫のゆかりの色。

●いと御人すくなにて、長閑やかなるに、御はいの御手水持ちてまゐりて、見出したるに。女御の立部に、青やかに藤の繁りたるを、今年は花さかで過ぎぬると申せば、このほど咲きたるをいまだ見ずや。うたてと仰せごとあれば、さも侍らずと申せば、さてそれはこなたより見えざりけり。五ふさばかり咲きたりき。いつもの頃にはあらで、今年もをり知りて咲きける、花の心もありがたし。（中務内侍）

●今日は卯月一日、衣更といふ事のあるぞかしとて、各都のことなの給ひ出し、詠めやり給ふ程に、岸に色深き藤の、松の枝にさきかゝりけるを、上皇覽覧ありて、おの花をりにつかはせと仰せければ、大宮の大納言隆季の卿、うけたまはりて、雜掌仲原の安貞が、はし船にのりて、をりふし御前な漕ぎとほりけるを召してをりにつかはす。藤の花を松の枝につけながら、おりて參らせたりければ、心ばせありなど仰せられて、御感ありけり。この花にて歌仕れおの〳〵と仰せければ、隆季の大納言、

千歳へん君がよはひに藤波の松の枝にもかゝりぬるかな。（平家物語）

●七日の夕月夜かげほのかなるに、池の鏡のどかにかすみ渡れり。實にまだほのかなる水ずゐどもの、さう〳〵しきころなるに、いといたう氣色ばみ、横たはれたる松

の、木高きほどにはあらぬに、かゝれる花のさま、世の常ならずおもしろし。（紫式部）

●五葉に、藤のいとおもしろく、咲きかゝりたるを、水のほとりの石に、苔をむしろにて、詠め居たまへり。（同）

●けふは過ぐる道すがら、家々の軒に藤をさし侍り。花をもさし、葉をもさせり。所の人にきけば、佛生會の手向也と云ふ。故郷にて見馴れぬ事也。みちの國に、花かつみふくたぐひにやとめづらし。（也有）

●白鷺なんど一つ二つほど、淺き瀬に魚を求むるさま、つきづきしうをかし。川の岸には、むらさきと白き藤、いとうつくしく咲きて、よる涼しいろにうつらふ計りにみゆ。（遊女大橋）

●せんざいのかげひ、いといたうすさびくて、みぎはには紫の雲かとたな引く、はふきあまたにかゝれる、藤なみさかりなり。（同）

●なつかしき、色のゆかりと思ふにも、心にかゝる藤波の、夜靈わかでいたづらに、送り迎ふる年月の、春の花散りて青葉に、夏樹のにほふにぞ、見ぬ世の人もしのばれ。桐の葉落ちて秋來ぬと、しろくも月影すむや、浦吹く風に小夜ふけて、曉と白波、立ちさわぐ村千鳥、友よぶ聲や霜雲に、冬のけしきの知らるらん。かやうにつるふ四つの時、ことわりなれや夏かけて、さかり久しき藤波の、花に立ち添ふ朝霞、くれゆく春のかたみぞと、惜む心も紫の、深く頼みを松が枝に、かゝる契りぞたのもしき。（謠曲、藤）

●おもしろや、ゆたに吹くなる春風に、誘はれつゝも千代をとなふる、松にかゝりて咲く藤の、薄紫の雲の羽袖を、かへす舞姫、うたへやうたへ折る柳落つる梅、あるひは花の藤生野も、隔てぬ色も匂も深海松の、英遠の濱風多切の浦わに、吹きよする音さゆる、波も綾どる舞の袂、月にひるがへす、影もうつるや紫の、曇にかをりて、だなびく霞に入りにけり。（同）

●幾春の、花の盛を松が枝に、久しくかゝれ宿の藤、咲きぬるときは津の國や、住の江かすむ春もはや、すぎ行く名殘惜まるゝ、落つるや花の名は、薄紫と世にはいふ。（謠曲、藤波）

●草木心なしといへども、花に嘉瑞なあらはすためし、頃は霜月二十日餘り、名は春めきて春日の里、三笠山の松が枝には、一夜が中に藤の花咲き亂れ、紫白色を爭ひ、彌生の空に異ならず。是ぞ藤原氏榮ゆべき驗とて、多武の峯の眞園僧都、天津兒屋根の御神を假に勸請ありければ、貴賤上下の參詣に、明かるゝ藤の花蔭、來る人群集なすとかや。（淨瑠璃、大織冠）

●草木に心なしと、いふ人の心、おだやかならぬ世に、約定たがへず咲く花の、ながめにあかぬ都人、賑ふ中に取分けて、侍從之助の下箭、岡崎に名もはびこりし、藤の盛りはいつとても、やしきの中へ入り込みの、人の群集を皆めれば、花見毛氈茶辨當、櫃に詰めたはおのづから、ふぢ見酒とぞ知られける。（淨瑠璃、菊水之卷）

●わが宿にさける藤波たちかへり過ぎがてにのみ人の見るらん。（躬恒）

●住のえの松にかゝれる藤の花風の便になみやおるらん。（顯季）

●紫の雲とぞ見ゆる藤の花いかなる宿のしるしなるらん。（公任）

●ぬるゝさへうれしかりけり春雨に色ます藤の雫と思へば。（顯仲）

●雨ふれば藤のうら葉に独かけて花にしをるゝ我身と思ほん。（後賴）

●岩かれの松よりすゑにさし出でゝ瀧のいとにもかゝる藤波。（宣長）

●ふぢさくや松の木すゑを高機にたれうま人のみけしなるらん。（千陰）

●高砂の松のふぢなみさきしよりうらむらさきの鼓の毛衣。（長流）

●咲きそめて池のかゞみにみるもかをりうつるもにほふ花の藤浪。（春滿）

●いつしかと藤さく池の水かゞみうつりにけりな春の日數は。（廬庵）

●藤咲いて經くふ日をかぞへけり。（其角）

●中空にこぼれものあり藤の花。（希因）

●白藤やなほさか上る淵の鮎。（几董）

●宿より風吹く藤のくもりかな。（月溪）

●草臥れて宿かる頃や藤の花。（芭蕉）

●影うつる松のみどりや藤のはな。（杉風）

●白藤や月ほのかなる山の見。（白雄）

●池の舟へ藤こぼるゝや此夕。（太祇）

●藤の花あやしき夫婦休みけり。（蕪村）

●あぐらかく岩から下や藤の花。（丈草）

●春雨にぬれて夜風や引きつらんはなより落つる藤の玉水。（貞風）

●天狗でもすみなん杉の梢とてまとひし藤のはな高く見ゆ。（栞人）

●駒ならではや行く春のしりがひは花紫の藤の厚房。（文斗）

●松の木の股もさけぬと見ゆるなり夏へまたざし藤の花房。（光　）

●長さをばくらべ申さん下り藤眺むるわれがよだれ八尺。（元成）

●位有る色としみれば藤の花夏のきざきにぬ直りて咲く。（紫持）

●人ならばとがめやすらん塀越の藤はゆるしの色に咲きけり。（記文）

●教へねどけして上見ぬ藤の花只足ることを知りて咲くらし。（道也）

●秋葉寺三尺坊のさがり藤ふらり〳〵とみめぐりの花。（栗山）

●大小の下緒とみえてむらさきのながみじかなる藤のはなぶさ。（千萬里）

●松がえにはひあがりたる藤の花春と夏とをまたぎてぞさく。（人成）

●ねぢかへり又ねぢかへり〳〵ねぢかへり見るねぢ藤の花。（每雄）

●藤棚へ隠元豆がすゐさんじ。（川柳）

●藤かづら松一生のほねがらみ。（同）

●藤の花側にたどんを出しておき。（同）

●虻が經よむ長房の藤の花。（同）

●藤の棚下から見れば縞の裏。（同）

●たぶ〳〵と只一筋の藤の橫。（同）

●夏の頭に瓔珞のふぢの花。（同）

●二階からみるものでなし藤の花。（同）

●打鍵に下る新場の藤の花。（同）

●物さしを住持からかす藤の花。（同）

●春の色香の名殘も、ふぢのたそがれものわびし。夏は卯の花さみだれ、せめてとぞかし時鳥。（俗謠）

●ぬれて色よし雨の藤。其あだざきも君故と。姿うつろふ水かゞみ、ゆかりの色もなか〳〵に、嬉しい緣ぢやないかいな。（同）

●藤は樹に緣り人は君による。（俚謠）

●藤なもて錦につぐ。（同）

●藤花紫蒙茸。藤葉青扶疎。誰謂好顏色。而爲害有餘。下如蛇屈盤。上如繩縈紆。可憐樹中間樹。束縛成枯株。柔莖不自勝。蹈々桂空虛。豈知纏樹木。千夫力不如。先柔後爲害。有似諛佞徒。附著君權勢。君迷不背誅。又如妖婦人。綢繆蠱其夫。奇邪壞人室。夫惑不能除。

寄レ宜邦興レ家。所レ慎在二其初一。臺末不二早辨一。滋蔓信難レ圖。願以レ藤袴レ戒。銘二之於座隅一。（白居易）

●池畔尋レ春春已空。絲藤挾レ岸一叢々。碧淪不レ定紫臂動。盞日花間水面風。（竹外）

●紫綬垂々照レ影低。游蜂飛蝶鏡中迷。黄昏把レ酒同臨レ水。便是江南梁蒲溪。（星巖）

●紫藤蹊底幾花色。梨竹煙中暮鳥聲。（相觀）

●恨到悲思三月盡。紫藤花落鳥關々。（白居易）

〔ふぢばかま〕藤袴（蘭）

秀蘭。叢蘭。幽蘭。芳蘭。芳香。蘭草。國香。秋佩。芳馥。芬々。露のぬき。たがぬぎかけし。ほころびわたす。ゆかりの色。風に匂ふ。きる人もなし。露のかたみ。野風にほころぶ。

●かゝるついでにとや思ひよりけん、らにの花のいと面白きをもたまへりけるを、みすのつまよりさし入れて、是も御らんずべきゆゑはありけりとて、とみにもゆるさでもたまへれば、うつたへに、思ひもよらでとり給ふ御袖をひきうごかしたり。

おなじ野の露にやつるゝふぢばかまあれはかけよかごとばかりも。（紫式部）

●秋風に、ほころびぬらし藤袴、つゞりさせとて草村に、露打ちはぶき鳴く虫の、聲も弱り行くは、夜寒にや成りぬらん。（謠曲、藤袴）

●嗚立つ澤に日は暮れて、暫し休めん足柄山、關路の犬も關守も、我を咎めそ、待ち待たるゝ人も持たぬに、しなへや撓へ藤枝の、藤の下風々に結るゝ黒髪の、解いて結ふべき友もなし。憂たき道もいとせめて、末の世契れ我中に、比翼の鳥の初音が原、早や秋近く野は媚さて、蘭も紐解く藤袴、桔梗が笑めば芒が招く、一寸と招く、一寸と招く、氏はなけれど白露の、玉の輿にや女郎花、我を澤邊の眞菰草。（浮瑠璃、大磯虎稚物語）

●ぬぎかけし主はしらねど紫の色むつまじき藤袴哉。（貞隆）

●かりにくる人もきまとや藤袴秋の野ごとに鹿のたつらん。（伊通）

●ふちばかまぬしは誰ともしら露のこぼれて匂ふ野べの秋風。（公蔵）

●ぬし知らぬ香こそにほへ秋の野に誰がぬきかけし藤袴ぞも。（素性）

●宿りせし人のかたみかふぢばかま忘られがたき香に匂ひつゝ。（貫之）

●天河あかでわかれしうつりかをしばしとゞむる藤袴哉。（千陸）

●こよひしもたなばたのてにあえよとて誰たちぬへる藤袴ぞも。（春海）

●秋ごとにきてもとまらぬたなばたのかたみに匂ふ藤袴かも。（廬菴）

●つかへにといでたつ道の藤袴きよきその香をわれにかさなん。（有功）

●こしぼそのすがるむれたつ朝風にその香も高きふぢ袴哉。（諸平）

●藤ばかまたが窮風にめでつらん。（芭蕉）

●楽竹の宿と申すや藤袴。（葛三）

●ぬれて干す露の野中や藤袴。（桃里）

●白銀の目貫やさしや藤袴。（珍碩）

●秋涼し蘭のもつれの解くるほど。（野坡）

●蚊遣り火や炷きしの香は藤袴。（蓼太）

●朝露や鶏のふみこむ藤ばかま。（規兆）

●秋の夜の寒なはれや藤ばかま。（都久裳）

●ふぢばかまおぼえた色に咲きにけり。（饒物）

●詩を作る姿もちけり蘭の花。（周竹）

●夜の蘭香にかくれてや色白し。（蕪村）

●香をふんで蘭に驚く山路哉。（月居）

●草冠やはたちの門のかどがまへ村の長ともみんふぢばかま。（石季）

●きうくつにあるく花野はかた〳〵へ兩足いれしふぢばかまかも。（廣住）

●蘭行儀に栽ゑて客を待つ庭は一日はきやめにしつ。（袴成）

●ふぢばかま誰がきなれてやかく斗り一のさらりとほころびぬらん。（伊志丸）

●袴ときし花に其名もにのひだを露のとぢたるふぢ袴かな。（常樹）

●秋の野に折よくきたる藤ばかま待つかげ花は今盛なり。（袴也）

●老のみもけふぞきてみん藤ばかまこしいるやとは思ひながらも。（岡邑）

●風にとき風にぬはるゝふぢばかまひとの〳〵に咲きてにほへる。（安住）

●風の手のほころばしてや蘭一野〳〵にわきて匂へる。（貞齋）

●秋の野にさくらんくわつと匂ふらん見るらんむざと手折り取るらん。（友知）

●咲きいでし花のすがたは我に似たわれに似たとや蛍のめづらん。（繁雄）

●脱ぎ捨てた様に野分の藤袴。（川柳）

●蜘の巣で仕つけなかける藤袴。（同）

●藤袴野分にひだを崩さるゝ。（同）

●蘭の花蛍のとまつたやうに咲き。（同）

●露非に近き我妻の、緑のきれめの藤袴、ゆかりの色や花むらさきの、今は秋も墨ぞめに、そめてかひなきうき身ぞや。（俗謡）

●心はくもる月はすむ、しのぶたもとの藤ばかま、たがぬぎすてし秋の野に、まれく尾花やうらふきかへす。（同）

●秋の野にたがぬぎすてし藤袴、花の紐とく竹の春。（同）

●雲徑倫開淺碧花。氷根亂吐小紅芽。生無桃李春風面。名可山林處士家。政是國香到二朝市一、不レ容二霜節一老二雲霞一。江蘺蕙圃非二吾儕一。付二與騷人一定二爭差一。（楊萬里）

●國香徒自惜。知己逢豈易。幽谷風露清。明月光相媚。寧能與二蘼芜一。爭二彼尺寸地一。（山陽）

●櫻雲蹟々弄春光。蔟二得城中士女一狂。何似幽蘭能冷澹。湘波簾外雨吹レ香。（紅蘭）

●芳根空谷養二幽情一。知己千秋有二獨醒一。只是國香難二自晦一。被二人折去上二金瓶一。（拙堂）

●偶撿二幾蘭一蒲二幾枝一。各標二神韻一背參差。高花飛舞低花笑。同倚二春風一自不レ知。（服船山）

●香祖孤生幽砌陲。寧欣培養傍二軒墀一。風清露白開遲落。一部蘭經不二自知一。（六如）

●露洗レ香逾烈。瑩然逈出レ塵。紫緋香脈汝。友二此素心人一。（星巖）

●扶桑豈無レ影乎。浮雲掩而忽昏。叢蘭豈不レ芳乎。秋風吹而先收。（前中書王）

●凝如二漢女顏施レ粉。滴似二鮫人眼泣レ珠。（良香）

●弧生幽谷裡。豈願二世人知一。時有二清風至一。芬芳難二自持一。（淡窓）

●雪後尋レ梅。霜前訪レ菊。雨際護レ蘭。風外聽レ竹。（劍掃）

●淵松抱レ節。幽蘭以薰。（歐陽詹）

●蘭在二幽林一。亦自香。（劉禹錫）

〔ふで〕筆

象管。兎毫。紫毫。銀管。圓鋒。直管。狸毛。鼠鬚。寫レ鬪。書レ

牘。

とる筆。みづぐき。筆のあと。かきやる。みじかき筆。筆のすさび。花さく筆。松のけぶり。

●人の硯ひきよせて、手習をも文をもかくに、我筆なつかひ給ひそといはれたらんこそ、いとわびしかるべけれ。打置かんも人わろし、猶使ふもあやにくなり。さ覺ゆる事も知りたれば、人のするもいはで見るに、手などよくもあらぬ人の、さすがに物かきまほしうするが、いとよく使ひかためたる筆を、あやしのやうに、水がちにさしぬらして、油瓶のふたなどにかきさらして、横さまになげおきたれば、水にかしらはさし入れて、ふせるもにくき事ぞかし。されどさいはんやは。（清少納言）

●さても八月の十日あまり六日にや、秋霧に侵されさせ給ひて、かくれまし〳〵ぬとぞきこえし。寢るが中なる夢の世、今に始めぬならひとはしりながら、かず〳〵目の前なる心地して、老の涙もかきあへねば、筆のあとさへとゞこほりぬ。昔仲尼は獲麟に筆をたつとあれば、爰にて留りたく侍れど、神皇正統のよこしまなるまじき理を申し述べて、素意の末をも顯さまほしくて、しひて記しつけ侍るなり。（親房）

●蓬戸は閑しく彼の金をとつて、障子の内に走り入り、力なき手に摺り流す、硯の墨も妹と夫も、うすき緣とうちなげき、涙ににじむ紙屋紙の、かひなきことをくりかへし、筆にいはする暇乞ひ、姑のことわが子のこと、かきのこすさへ悲しさの、塞がる胸と共にさく、小刀ならぬ筆の鞘、よしあし知らぬ幼兒の、寢貌もこれがみをさめかと、思へばきるに剪りかぬる、ふみまきこめて封皮して、今朝くひのこす白粥も、今この糊とならんとは、思ひかけねどその人の、思ひかけよとはりておく。（馬琴）

●又の日返り事あり。喜びてなどありて、いと心ようゆるしたり。この語らひける事の筋もそこの文もある。かつは思ひやる心地もいと哀なり。満かき〳〵て霞にたちこめられて、筆の立所も知られねば、怪しとあるも實に覺えたり。（道綱母）

●扨勸學の室に入り、僧正を頼み來り、風月の窓に月を招き、螢を集め夏虫の、心の内も明に、筆の林も枝しげり、言葉の泉盡きもせず。文筆の堪能、上人も悦びおぼしめし、荒き風にもあてじと、御志の今までも、一字千金なり。いかでか忘れ申すべき。（謠曲、箱崎）

●覺明仰せを承り、箙の内よりも、小硯料紙とりいだし、墨すり筆を和しけるが、思ひ案ずるけしきもなく、古書を寫すが如くにて、やがて願書を書き終る。（謠曲、木曾）

●其方義は幼少より、我膝元に奉公し、天性好きたる筆の道、好むにより習ふに覺え、古き弟子共追ひ拔き、あつぱれ手書になるべしと、思ひの外に主從の緣迄切つて其風埒、筆執る事も忘れつらむと、仰に向じ恐れ入り、御返答申すは憚りながら、前髮立の時分より、お傍近う召し仕はれ、手を書く事は藝の司、書けよ習へと御意なされ、御奉公の間に書き覺えたと申も慮外、蚯蚓ののたくつた樣に書く手でも、藝は身を助くるとやら、浪人のすぎはひ、鳴瀧村で子供を集め、手習指南仕り、今日迄夫婦が命も筆先に助けられ、淸書の直し字毎日書くとも上らぬ手跡、御尊に預る程、身の不器用と御勘當、悔やむに詮方なき仕合せと、歎くをつら〳〵聞し召し、子供に指南致すとは、賤しからざる世の習、筆の冥加藝の德、申す所に僞りなくば、手跡も變らじ。（淨瑠璃、菅原傳授）

●つい一筆兄、硯箱取つてやりや、さゝ早う〳〵と母と兄、間にいなも泣顏を、隱す硯の海山と、重なる思ひのべ紙に、筆の立てどの跡や先、涙に墨のにじみがちなる胸の内、書殘すとはつゆしらぬ。（淨瑠璃、河原の達引）

●おのづから心のみゆるわざなれば筆とることのはづかしき哉。（春海）

●いにしへのふでの林を見わたせば手にとるべくもなきわが身哉。（蘆庵）

●とる人の力ぞ筆にあらはるゝふみかく道の是や玉ぼこ。（太平）

●秋萩のにほへるあとをとゞめずば鹿の夏毛も名をや下さん。（英隆）

●とる筆のみじかきつかをはしきりてたゞなほざりに書きちらしつゝ。（春庭）

●月花のみやびをかはす御代なれば心のつかひ長くたのまん。（有功）

●眞弓にも鉾にもかへて筆とれば國ぶりならぬ跡はとゞめじ。（諸平）

●おもふことかきやる筆はつもりこしこゝろの塵のはゝきなりけり。（宏年）

●しな〴〵のきはにもよらず手力もおよばぬ筆よいかにとらまし。（隆子）

●玉づさに心のかぎりかきとりつ筆のおもはんこともわすれて。（りか子）

●露凍つて筆に汲みほすしみづ哉。（芭蕉）

●水莖の馬刀かき寄せん筆の鞘。（嵐雪）

●筆のもの忌日ながらや虫拂。（召波）

●先觸と筆を立てけり夷講。（史邦）

●永き日も持ちては暮るゝ筆と箸。（篤老）

●夕立や筆もかはさず一千言。（蕪村）

●難波女や何から問はん筆初。（園女）

●月雪に集めてかなし筆の物。（几董）

●此紙に筆をぬぐへば柳かな。（也有）

●草の戸の年とるものや墨と筆。（杉風）

●春の日や筆より起る雲煙り。（闌更）

●かたくゆふじんがき筆もおのづから笠をとるのは禮儀なるべし。（萱果多）

●ことかゝぬ身にもせはしき筆のかさよしあしともにきたりぬいだり。（津々丸）

●手ちからのかひなきまゝにかきすさぶ筆の思はん事もはづかし。（綠の門）

●早起の朝ならひにもなら墨のにほひをふくむ鹿の毛の筆。（[illegible]）

●思ふことといひもきけぬに筆はわが心のごとくかきのこしけり。（光村）

●ともし山松のけぶりをねる墨になれてよりくる鹿の毛の筆。（喜多留）

●命毛は絶えての後も筆の道よくまなばずば恥をこそかけ。（是心）

●文書きしあとさへ人に知らせじと筆にも笠をかけて忍びぬ。（守春）

●老の身は浮世に事をかく筆のさきのみじかくなるぞかなしき。（江月住）

●唐大和筆の力をくらべても二王にまさるものなかりけり。（芍樂亭）

●御祐筆人を遊ふも筆の先。（川柳）

●德むきな女房は筆で髮をかき。（同）

●料理場のたばこ無用は味噌が筆。（同）

●すりこ木を持つ場を亭主筆を持ち。（同）

●雨宿り筆の無心は品がよし。（同）

●三郎は筆で毛蟲をはらひのけ。（同）

●返事かく筆の軸にて王を逃げ。（同）

●土間々々隅まで洗ふさゝら筆。（同）

●萱がほの花は式部の筆にもれ。（同）

●筆やなどかりが有らうと時平云ひ。（同）

●筆を噛む昏黒く忘れた字。（同）

●身をうき舟の、なほつながれてとけやらぬ、心のわけは巻筆の、いふにいはれぬ乱髪。（俗謡）

●花の香をたぐへし風もこれかこよ、筆に心の色にほはせて、ひと夜わけねば驚の、ねになくばかり来ぬ人を、さそふしらべにやるせなし。（同）

●忍ぶ涙の淵も瀬も、あすはなき名を白紙に、硯の海のそこはかと、かきおく筆の命毛も、露ときえゆくうき思ひ。（同）

●弘法にも筆の誤り。（俚諺）

●能字筆を選ま不。（同）

●心正しければ筆正し。（同）

●毛頴者、中山人也。其先明眎、佐禹治東方土、養萬物有功、因封於卯地、死爲十二神。昔曰、吾子孫神明之後、不可與物同、當吐而生、已而果然。明眎八世孫瞑、世傳當殷時居中山、得神仙之術、能匿光使物、竊姮娥、騎蟾蜍入月。其後代遂隱不仕云。居東郭者曰毓、狡而善走、與韓盧爭能、盧不及、盧怒、與宗鴟謀而殺之、臠其家。秦始皇時、蒙將軍恬、南伐楚、次中山、將大獵以懼楚、召左史庶長與軍尉、以連山筮之、得天與人交之兆。筮者皆賀曰、今日之獲、不角不牙、衣褐之徒、缺口而長顙、八竅而跌居。獨取其髦、簡賤是貴、天下共同書、秦其遂霸。諸侯遂獵圍毛氏之族、拔其豪、戟頭而踏、獻浮於章臺宮。豪其族而加束縛焉。秦皇帝使括賜之湯沐、而封之管城、號曰管城子、日見親寵、任事。頴爲人強記而便敏、自結繩之代、以及秦、事無不綜錄、陰陽卜筮占相、醫方族氏、山經地誌、字書圖讖、九流百家、天人之書、至浮圖老子外國之說、皆所詳悉。又通於當代之務、官府簿書、市井貨錢註記、惟上所使、自秦皇帝及太子扶蘇胡亥、亟相斯中車府令高、下及國人無不愛重。正直邪曲巧拙、一隨其人。又善隨人意、雖見譖亦時往。累拜洩。惟不喜武士、然見譖亦時往。累拜中書令、與上益狎。上嘗呼爲中書君、上親決事、以衡石自程、雖宮人不得立左右。獨頴與執燭者常侍。上休方罷、頴與絳人陳玄弘農陶泓、及會稽褚先生友善、相推致、其出處必偕。上召頴、三人者不待詔、輒俱往、上未嘗怪焉。後因進見、上將有任使、拂拭之、因免冠謝。上見其髮禿、文所紊、不能稱上意。上嘻笑曰、中書君老而禿、不任吾用、吾嘗謂君中書君、今不中書乎。對曰、臣所謂靈心者。因不復召。歸封邑、終於管城。其子孫甚多、散處中國夷狄、皆冒管城。惟居中山者、能繼父祖之業。

太史公曰、毛氏有兩族、其一姬姓、文王之子封於毛、所謂魯衛毛聃者也。戰國時有毛公毛遂、獨中山之族、不知其本所出、子孫最爲蕃昌。春秋之成、見絕於孔子、而非其興。及蒙將軍拔中山之豪、始皇封之管城、世遂有名。而姬姓之毛無聞。頴始以俘見、卒見任使、秦之滅諸侯、頴與有功、當不酬勞、以老見疎、秦眞少恩哉。（韓愈）

●宣城風蟹不可索。越南雞毛不可得。山中老頴飛上天。九節凝髯化爲石。晴窗無復禿千枝。曉夢有時來五色。一庶老葉播西風。袖手空階看蹟迹。（胡天游）

●神鋒雖缺力能存。梁琢珊瑚欠筆勁。日暮閑窓何所似。潮陵憔悴李將軍。（林逋）

●休言三寸小。千古託斯文。文陣功常最。

紙田身自耘。用時非歯日。揮去氣成雲。南薰殺君歌。那爲後世聞。（東遷）

〔ふね〕船

輕舟。短棹。蘭撓。桂楫。雲帆。風纜。一葉。片帆。扁舟。孤蓬。あは舟。つり舟。千舟。もゝ舟。友舟。うら舟。柴舟。あまを舟。うき舟。さすさほ。みなれ棹。つなで。沖にたゞよふ。波にゆらるゝ。

●去程に先帝は、出雲の三尾の港に十餘日御逗留ありて、順風になりにければ、船人纜をときて、御艤して、兵船三百餘艘、前後左右に漕ぎ並べて、萬里の雲にさかのぼる。時に滄海沈々として、日西北の涙に沒し、雲山遥々として月東南の天に出づれば、漁船のかへる程見えて、一燈柳岸に幽なり。暮るれば蘆岸の煙に船をつなぎ、明くれば松江の風に帆をあげ、遥路に日數を重ねれば、都を御出ありて後廿六日と申すに、御船隠岐の國につきにけり。（太平記）

●七月の末つ方、伊勢に越させ給ひて神宮に事の由を啓して、御船のよそひし、九月の始ともづなをとかれしに、十日あまりの事にや、上總の地近くより、空の景色おどろ〳〵しく、海上荒くなりしかば、又伊豆の崎といふ方にたゞよはれ侍りしに、いとゞ波風夥しくなりて、あまたの船行方しらず侍りけるに、御手の御船はさはりなく伊勢の海につかせ給ふ。頴信朝臣は本より御船にさぶらひけり。同じ風のまざれに、東國をさして常陸國なる内の海につきたる舟侍りき。方々にたゞよひし中に、この二つの舟、同じ風にて東西に吹き分けられる。末の世にはめづらかなるためしにぞ侍るべき。（親房）

●軍敗れにければ、主上を初めまゐらせて、人々皆御船に召して出でさせ給ふこそ悲しけれ。汐に引かれ風に隨ひて、紀伊の地に赴く船もあり。蘆屋の沖に漕ぎ出でゝ、波に搖らるゝ船もあり。或は須磨より明石の浦づたひ、泊定めぬ楫枕、片敷く袖もしほれつゝ、曉にかすむ春の月、心を挫かぬ人ぞなき。或は淡路の迫門を押し渡り、給島が磯に漂へば、涙路遥になぎわたり、友まよはせる小夜千鳥、是も我身のたぐひかな。行末いまだいづくとも、思ひ定めぬかと思しくて、一の谷の沖に休らふ船もあり。かやうに浦々島々に漂へば、い亙の生死も知りがたし。（平家物語）

●うしろなる山のとほかひより海を見れば、せたの長橋も目のまへに、三上の山もほど近く、たゞ一所にたゆたふ舟はつりするにやあらん。ゆきかふは矢走のわたし舟にやあらん。北へゆくもあり、南にさすもあり。まことに、むかしの千枝つねの初といふとも、これをうつせといはゞおもひわづらひぬべし。（貞徳）

●心つくしに落ち鹽の、鳴戸にさして行く船は、片帆は雲に沂り、煙水眼に茫々たり。萬里漂泊の愁、一葉扁舟のうき思。浪馴衣袖朽ちて、涙忘るゝばかりなり。（太平記）

●浦には海人樣々の、漁火の船影數見えて、漁りたく火もかげろふや、嵐も波も須磨の浦、野にも山にも漕ぎ寄する、兵船はさながら、天の島船もかくやらん。（謡曲、鵜）

●いかに是なる舟に便船申さうのう、これは渡し舟にてもなし、御覽候へ、釣船にて候

ふよ。こなたも釣舟と見て候へばこそ便船とは申せ。これは竹生島にはじめて參詣の者なり。僧の舟に乘るべきなり。（謠曲、竹生島）

●春霞、うき立つ浪の沖つ舟、入日の雲も影そひて、其方の空と行くほどに、はるばるなりし舟路へて、八島の浦に着きにけり。（謠曲、八島）

●暗濤月を埋んで清光なし。舟に焚く海士の篝火更け過ぎて、苫よりくゞる夜の雨の、蘆間に通ふ風ならでは、音する物も波枕に、夢か現か御經の聲の、嵐につれて聞ゆるぞや。楫音を靜め唐艫を抑へて、聽聞せばやと思ひ候ふ。（謠曲、通盛）

●露刈り込めて秋草の、葉毎に影宿る、月なや船に乘せつらん。天の川、たなわたりして七夕の、年に一夜は心せよ。秋風吹けば波の音、湊に近き海士小船、水音なしに行く船の、水馴棹をさゝうよ。（謠曲、項羽）

●さる程に御船を初め、一門皆々舟にうかめば、乘後れじと汀に打寄れば、御座舟も兵船も、遙にのび給ふ。無官の大夫敦盛は、道にて敵を見失ひ、御座舟に馳せ付いて、父經盛に身の上を、告げ知らす事ありと、須磨の磯邊へ出られしが、舟一艘もあらざれば、せん方波に駒を乘り入れ、沖の方へぞ打たせ給ふ。（淨瑠璃、一の谷）

●大將の乘つたる舟を覆へせと、日本のてきを一のみの、かうらいちやわんのわれがちに、軍の用意を船よそひ、かくて日本の御先手、大船三千六百艘、中船小せん一萬五千七百艘、ともづな切つて出汐の、波に朝日をすゝがせて、あくであらひしじやのめの印、金銀のへいはくを、此追風にちはやふる、神通丸は加藤がふね。（淨瑠璃、本朝三國誌）

●あを波に袖さへぬれてこぐ舟のかぢふる程にさ夜ふけなんか。（家持）

●あふ事はいまはかたほになる舟の風まつほどはよる方もなし。（忠岑）

●高砂やこぎのくふねもうちむれて風やすげなる浪の上哉。（具親）

●いづかたにこぎはなるらんおきつ舟ほのかに遠く浪ぢへだてゝ。（阿佛尼）

●かつしかのまゝのうらわのおきつまにあけのそぼふねからろおすなり。（俊頼）

●さきだてる浪ほの上を潮のむたいこぎわたらふ浮寢かも。（魚彦）

●こぎいづるおなじみなとのとも舟もはつるとまりやおのが浦々。（成章）

●おきつ風吹きにけらしなむさしの海みともせきまでいづて舟よる。（眞淵）

●夕しほも今やさすらん百舟のほのかにかへるとねの川づら。（千蔭）

●くれゆけばともす火かげもをちこちに數しられぬ浦の釣舟。（涌蓮）

●花見にとさす舟遲し柳原。（芭蕉）

●けふ限の春の行方や帆懸舟。（許六）

●涼み舟いとし若衆の小鼓は。（召波）

●梅が香に腹ふくるゝや帆懸船。（蓼太）

●月見るも杖につなげる小舟哉。（其角）

●大船の岩に恐るゝかすみかな。（太祇）

●朧夜や誰が寢てゆく鹿島舟。（白雄）

●小舟にて僧都送るや春の水。（蕪村）

●放れ鵜が子の鳴く舟に戻りけり。（一茶）

●須磨明石見ぬ寐ごゝろや寶舟。（嵐雪）

●波の上も子の日の野邊に似たり舟ひかばやともに小松しめなは。（東作）

●ながれ行く蠟燭の金がほしいなあ一夜三百兩ごくの船。（同）

●浪は水君もろともに御座船の湊に風をまつかざりせり。（みそかず）

●堅々に御代はめでたの松かざりうたふからろのおし送り船。（椿）

●一歳をこがれ〳〵てけふは又やはりこがるゝ天の川舟。（山彦）

●第一の宮が岡へとつく船のへさきはきしにあたるとぞみる。（好汶）

●夕立の雲もつき地は先はれてしのをつく田にかゝる親船。（季保）

●千早振神田川よりこぎ出でゝすゞむは天津兒屋根舟かな。（白人）

●帆ばしらのしの字もねせてとまり舟かくてはおきにかゝる事なし。（岡持）

●朝なぎにしらべの絲を帆かけ舟千鳥にうつや波の小つゞみ。（春明）

●義經は八艘とんでべかこをし。（川柳）

●平家がた小便もせず舟にのり。（同）

●船頭はまづ口先の舟にのせ。（同）

●湯にはいろやうに陳平船にのり。（同）

●たから船逆櫓にしても同じ歌。（同）

●四十二の灘をのりぬく寶船。（同）

●きやしやな手で室の出舟の綱を引き。（同）

●一生のそんは舟からさやはしり。（同）

●勘當の見ならひに出る舟ゆさん。（同）

●平家ではぼちや〳〵らしい船を出し。（同）

●露も都の春に逢ひたけど、氣は淀川へ登り船、さゝへられたる北風に、身は儘ならぬ丸太船、岸の柳に引きとめられて、歩みならはぬ陸地をも、のぼりつ戻りつ幾度か、一夜をあかす八軒家、雜魚寢をおこす綱島の、告る鶏が寒山寺の、つきぬ話の種となりけん。（俗謠）

●浮世をわたる柴舟の、みなれ〳〵てさす棹の、柴を見ればいつとなく、物思ふ袖もかくばかり。（同）

●難波入江の身は拾小舟、岸にはなれて便なや。（同）

●船は船頭に任せろ。（俚諺）

●船頭多くして船山へ上る。（同）

●乘り掛つた船。（同）

●早船も淀遲船も淀。（同）

●入船の順風は出船の逆風。（同）

●船姿一里帆姿三里。（同）

●翌日夙起、趨水濱求舟。舟人家在前岸樹林中、閉戸未起。阻以灘聲喧歷、累呼不達、唇焦舌燥、久之乃應、與其兒艤舟來迎。日已加辰乃發。舟狹長、蒲板爲之。呼爲飄倒。兒纔十三歲耳。父在柚、兒在艫、各持楫操縱甚習。灘急舟走、兩崖樹巒、一時皆指。當前所見、倏忽在後、唯見岸行山走、而不覺舟移。（拙堂）

●帆影日漸高。間眠猶未起。起問鼓柚人、已行三十里。船頭有行竈。炊稻烹紅鯉。飽食起婆娑、盥漱秋江水。平生滄浪意。一旦來遊此。何況不失家。舟中載妻子。（白居易）

●送客蒼溪縣。山寒雨不開。直愁騎馬滑。故作泛舟回。青惜蜂巒過。黃知橘柚來。江流大自在。坐穩興悠哉。（杜甫）

●一舸下中流。西風兩岸秋。櫓聲搖客夢。帆影持離愁。落日魚蝦市。長煙蘆荻洲。篙人夜相語。明發又嚴州。（眞山民）

●峭帆恰似鵬張翼。四指九州々盡頭。迷燐滅影橫鯨走。避汝長風萬里舟。（竹外）

●人在蓋屏中住。客依明月邊遊。未卜柴桑茲宅。須乘五湖扁舟。（蘇東坡）

●罷釣歸來不繫船。江村月落正堪眠。縱然一夜風吹去。只在蘆花淺水邊。（司空曙）

●朝來勅賜宴琳池。桂檝蘭舟侍水嬉。

渡二蓋雲沙一、凭レ高望。綠楊風外颺二黃旗一。（王子渙）

●華紹張レ座盡公侯。特許調臣與二宴遊一。滿二明金榜一、耿二既醉一。謝二黑齋上木蘭舟一。（袁慎行）

●猿啼洞庭月。人在二木蘭舟一。（馬戴）

●夜笛吹レ霜客。春燈買レ酒樓。（金江聲）

●溪水到レ門客二一舟一。（鮑雅堂）

●放レ舟閑看碧山晴。（厄石明）

〔ぶんがく〕文學

（學問の部參照）

文章。詩歌。叙事。叙情。錦心。綉口。辭鋒。筆力。典雅。縱横。有レ神。無レ敵。大手筆。文章司命。一家機杼。

文のみち。文かくわざ。

●しばらくありて、翁古今の文章を論するに、西漢の文章は奏疏制策の外、賈誼が過秦論、司馬遷が答二任安一書、司馬相如が喻二巴蜀一檄、揚雄が解嘲、此類猶多し。其文大抵雄偉高邁、後人の及ぶ所にあらず。東漢以後、文章衰弊して振はず。六朝に至つて、四六俳偶をもて工とせしかば、規模蕩盡し、氣象蕭瑟して、觀るにたるものなし。唐に至つてその餘習いまだ除かざりしに、韓退之、柳子厚の二子、いづれも超絶の材を以て、一生の功を盡し、古今の言を陶溶して、自、機杼を出したれば、其文上追二西漢一て殆過ぎたりといふべし。東坡が韓文公の碑に、文起二八代之衰一、道濟二天下之溺一といひしが、道濟二天下之溺一はしらず、文起二八代之衰一といへるは異論なき事なり。誰かしからずといふべき。其後五代を歷て漸く衰へしを、歐陽東坡の二子相繼いで出でゝ振起せしかば、文章再び古に復しぬ。其文光明正大、又迫配二韓柳一て蓋ぢざるべし。是をもていふに、韓柳歐蘇は文章家の大宗たり。古今文章においては一人も非難するものあるをきかず。されば明朝に至りて、朝臣文士多く出で、文章世に盛なりしが、劉基、宋濂、李夢陽、何景明が徒、名を一時に壇にし、大家と稱せしかども、韓柳歐蘇が文においては、一言も雌黃を下すことなし。思ふにふかく慕尚して、欽服しけりし。其外文章をもてきこゆるもの、唐順之、王慎中が徒、各一家の言を立つといへども、いづれか韓柳が遺流をくみ、歐蘇が餘波を揚げざる者ある。然るに文章は時運と盛衰する物なれば、明の中葉より以後稍々衰へゆく程に、平易なるは鄙俚となり、簡古なるは剽竊となり、それより天下の文章、科舉帖括の習におちて、是を時文と稱せしかば、古文は見るべからざる事になりにけり。此時に當りて、復古矯俗に急に志ある人世に擢出して、復古矯俗に急なりしも、韓柳歐蘇が文をこそ赤幟とせしか、猶ほ之に愈揚し、句ごとに品藻せざるはなし。しかあれど材識高からず、蘊蓄深からざるによりて、その所作の文を見るに、古に似て古にあらず。雅に似て雅にあらず。最後に李攀龍、王世貞いでゝ、その平易にて唐俗にちかきを厭ひて、相與に奇怪の文を造作し、狂蕩の論を誇張し、洗洋自恣にして、一世を皷動せしかば、四方の文士は靡然として歸依せし程に、號して文章の主盟と稱しき。されば、滄溟風州も、常に韓柳歐蘇が文をは褒稱して、終に非議する事をきかず。風州は晚節に及びて、文友と文を論じて、やゝ後悔して、平生にかへる志ありしかども、及ばざりけるよし、餞

濂金が列朝詩集に見えしと覺え侍る。志かるに今文章をもて自、許す人の、王氏が棄餘を拾ひて、彼が四部稿を師祖とすと見れば、又風州が心にたがひて、反つて韓歐を毀るこそ、いと怠得がたけれ。定めてふかき意じあるにかあらん。翁などが小兒にてしるべき所にあらず。（鳩巢）

●唐の帝の御時は、國に文學さかんなれば、花の色なまし、匂常より增りたり。文學すたれば匂もなく、その色も深からず。扨こそ文を好む樹なりけりとて、梅をば好文木とは名づけられたれ。（謠曲　老松）

●爰に替我の祐信は、文學に身をゆだね、在京の折ふしは、菅家江家に出入し、和朝古實をうけ傳へ、世に許されし有識者なれば、先輩以後の進退狩屋の地割普請等、祐信奉行たるべき旨、いづれも違背あらるなと、仰も重し足おもき、老木に餘る面目と、尋けなつの空ながら、頭に少し殘る雪。（浮瑠璃、替我妻菅士）

●此神いまだ人臣にまします時、菅原の道眞と申奉り、文學に達し筆道の奧儀を極め給へば、才學智德兼ね備はり、右大臣に推任あり。權威に慢る右大臣藤原の時平に座を列ね、菅丞相と敬はれ、君を守護し奉らる、延喜の御代ぞ豐なる。（浮瑠璃、菅原傳授）

●李杜文章在。光燄萬丈長。不レ知群兒愚。那用故謗傷。蚍蜉撼二大樹一。可二笑不二自量一。伊我生二北後一。學レ頸遙相望。夜夢多見二之。豈思反微茫。徒觀斧鑿痕。不レ聞二治水航一。想當二拖レ手時一。巨靈擘二天揚一。垠崖劃崩奔。乾坤權雷碭。惟此兩夫子。家居率荒涼。帝欲レ長二吟哦一。故遣二起且僵一。嗣翎遂籠中。使レ看二百鳥翔一。平生千萬篇。金薤垂二琳琅一。仙官勅二六丁一。雷霆下取將。流落人間者。太山一毫芒。我願生兩翅。捕逐出二八荒一。精誠忽交通。百怪入二我腸一。刺レ手拔二鯨牙一。舉レ瓢酌二天漿一。膀レ身跨二汗漫一。不レ著織女襲。顧語二地上友一。經營無二太忙一。乞二君飛鼇佩一。與レ我高頡頏。（韓愈）

●太塊鑄レ人、縮七尺精神於寸眸之內。嗚呼靈レ之矣。文非二以小爲一尚。以レ短爲一尚。顧小者大之樞、短者長之礎也。若言猶道而不レ及、與二理已至一而思加一、皆非二文之至一也。故言及者無二繁詞一、理至者多二短調一。魂々秦俗、辭而爲二嶙峋沙礫一、則複漏透雜見矣。滔々章河、促而爲二川瀆溪澗一、則清連敞屈生矣。蓋物之散者多淺、而樂者常敏、憑乘粒珠耳。而燭レ物更遠。予取二其遠一而已。匕首寸鐵耳、而剸レ人尤透。予取二其透一而已。大獅搏レ象用二全力一、搏レ兎亦用二全力一。小不レ可レ忽也。奧四有二修蛇一、蟆蛟能制之。短不レ可レ輕也。（愚柴）

●學二古文一者、學二其神一、不レ學二其言語一。斯爲二善學者一矣。今夫古文之絕佳者、莫レ過二孟莊左馬一。而孟非左馬、未二嘗躋二襲前人一。動出二一機軸一。謂二之精神性靈之文一矣。（鶴梁）

●忽而莊語、忽而嘲謔、忽而嬉笑、忽而怒罵、忽而長歎深慨、忽而遊戲三昧、結想千態、而文人之適、未二嘗不レ在二其間一也。（弘庵）

●沈潛怫悅、若二遊魚啣レ鈎而出一重淵之底。浮藻聯翩、若二鳥翼拂一レ而墜二春雲之崖一。（陸士衡）

●言語巧偷二鸚鵡舌一。文章分二得鳳凰毛一。（元稹）

●昨日山中之木材取二諸已一、今日庭前之花詞聚二於人一。（篤茂）